

門真市埋蔵文化財発掘調査報告書 第11集

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第320集

門真市

普賢寺遺跡

門真市幸福東土地地区画整理事業に伴う普賢寺遺跡発掘調査報告書

2022年8月

門真市

公益財団法人 大阪府文化財センター

門真市埋蔵文化財発掘調査報告書 第11集

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第320集

門真市

普賢寺遺跡

門真市幸福東土地地区画整理事業に伴う普賢寺遺跡発掘調査報告書

門真市

公益財団法人 大阪府文化財センター



銅製密教法具（原寸大 径 5.8cm）

序 文

京阪電鉄古川橋駅北側の旧第一中学校跡地付近を含む普賢寺遺跡は、本市で唯一確認されている普賢寺古墳が発見され、また、大阪府指定有形文化財に指定された鎌倉時代の金銅僧形坐像・密教法具が出土するなど、弥生時代前期末から中世までほぼ連続した本市を代表する遺跡のひとつです。

今回の埋蔵文化財発掘調査は、門真市幸福東土地区画整理事業に伴って実施いたしました。本市では当該地域において、多様な学びを通じて人々が出会い、新たな賑わいの中心となる（仮称）市立生涯学習複合施設と交流広場、共同住宅等を一体的に整備する予定としております。

今回の発掘調査でも貴重な遺構・遺物が出土しており、調査成果を収録した本書が市民の皆様にとって、郷土の歴史・文化の関心を高めるきっかけとして、また文化財保護についてのご理解を深めていただくための資料として、お役に立てば幸いです。

最後になりましたが、今回の発掘調査に際し、ご理解ご協力を賜りました門真市幸福東土地区画整理組合の地権者、調査・整理を担われました公益財団法人大阪府文化財センターをはじめ多くの関係者各位に対しまして、心より御礼申し上げます。

令和4年8月

門真市長 宮 本 一 孝

は し が き

京阪古川橋駅周辺には、かつて普賢寺庄と呼ばれた荘園が広がっており、その中心にはその名の由来となった普賢寺が墓を並べていたとされています。駅の北側で実施されたこれまでの発掘調査でも、多くの瓦をはじめ金銅製の僧形坐像や密教法具、また柿経や絵馬など、中世寺院に関わるさまざまな遺物が出土しており、その存在が裏付けられています。

このたび、この古川橋駅北側の旧市立第一中学校跡地を中心としたエリアに、(仮称)市立生涯学習複合施設や交流広場の建設など、市の中心拠点となる新たなまちづくりが計画され、当センターは門真市と合同で事前の発掘調査を実施することとなりました。

調査の結果、これまで市内唯一の古墳とされていた普賢寺古墳に近接して、さらにもう1基新たな古墳が発見され、多くの埴輪が出土しました。また平安時代末期に開発が始まる集落跡が検出され、館と呼ぶにふさわしい大型の掘立柱建物やそれを囲む溝、また遺物では、以前の調査でみつかった金銅密教法具と同種の銅製蓋が出土するなど、大きな成果をあげることができました。今回の成果は、淀川左岸の低湿地に点在する古墳のあり方やその築造集団を考える上でも、また普賢寺庄の中に築かれた館や寺院など、中世の村の景観やその成立過程を復原する上でもたいへん有用な資料となります。

これらの成果を収めた本書が多くの方々に活用され、当地域の歴史解明に少しでも役立てていただければと切に願っております。新たなまちができ、周辺一帯はますます栄えていきますが、ふとその足元に眠る門真の歴史に思いを馳せていただくきっかけとなれば幸いです。

最後になりましたが、今回の事業主である門真市および門真市幸福東土地区画整理組合をはじめ、ご指導とご協力を賜った大阪府教育庁、並びに地元関係各位に深く感謝するとともに、今後とも当センターの事業につきまして、より一層のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和4年8月

公益財団法人 大阪府文化財センター
理事長 坂 井 秀 弥

例 言

1. 本書は、大阪府門真市幸福町 11 番地 他 地内所在の普賢寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、門真市の委託を受けた公益財団法人大阪府文化財センターが、門真市と合同で行なった。整理作業及び本書の編集も公益財団法人大阪府文化財センターが行ない、令和 4 年 8 月 31 日の本書刊行、及び門真市への資料の移管をもって一連の事業を完了した。
調査名・契約名称・契約期間等については以下のとおりである。
【調査名】 普賢寺遺跡 20 - 1
【委託事業名称（発掘）】 門真市幸福東土地区画整理事業に伴う普賢寺遺跡発掘調査
【委託契約期間】 令和 2 年 6 月 1 日～令和 3 年 3 月 31 日
【委託事業名称（整理）】 門真市幸福東土地区画整理事業に伴う普賢寺遺跡発掘調査に係る整理作業及び報告書作成業務
【委託契約期間】 令和 3 年 4 月 1 日～令和 4 年 3 月 31 日
【印刷製本期間】 令和 4 年 4 月 1 日～令和 4 年 8 月 31 日
3. 現地調査及び整理作業は以下の体制で実施した。
【門真市】
〔令和 2・3 年度〕 市民文化部生涯学習課長 隈元 実、同 課長補佐 兼 歴史資料館長 森井康喜
同 主任 常松隆嗣、同 係員 浅井達也
同 会計年度任用職員 宇治原靖泰（令和 2 年 9 月 30 日まで）
【公益財団法人 大阪府文化財センター】
〔令和 2 年度〕 事務局次長 兼 調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀、同 課長補佐 佐伯博光
同 主査 伊藤 武、同 副主査 若林幸子
〔令和 3 年度〕 総務企画課長 亀井 聡、調査課長 岡戸哲紀、同 課長補佐 佐伯博光
同 主査 伊藤 武
4. 遺構の写真撮影は伊藤・若林が、遺物の写真撮影は中部調査事務所写真室が行なった。
5. 出土木製品のうち、漆器や下駄・毬・男根形木製品など脆弱なもの 36 点については、株式会社 古環境研究所に保存処理を委託した。また出土した柱根・木製品のうちの 3 点について、株式会社 パレオ・ラボに委託して放射性炭素年代測定を実施し、その成果を第 5 章に掲載した。
6. 報告書の作成にあたって、以下の方々よりご指導を賜った。記して謝意を表したい。（敬称略）
一瀬和夫（京都橘大学）、井原 稔（羽曳野市教育委員会）
7. 本書の執筆・編集は伊藤が行なった。ただし第 1 章の第 1・2 節については門真市浅井・宇治原の原稿に伊藤が加筆・修正したものを使用した。第 6 章の放射性年代測定の成果についても、納められた報告書を伊藤が編集し直して掲載した。
8. 本調査に関わる遺物及び写真・実測図等の記録類は全て門真市が保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構図及び断面図に示した標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準にしている。単位は全てメートルである。
2. 発掘調査での使用測地系は世界測地系（測地成果 2000）である。遺構図に記載した座標値の単位は全てメートルである。
3. 本書で用いた北はいずれも平面直角座標系第Ⅵ系の座標北を示す。
4. 現地調査及び整理作業は、門真市と協議のうえ、公益財団法人大阪府文財センターが平成 22 年度に作成した『遺跡調査基本マニュアル』に準拠して進めた。
5. 土層断面図で使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
なおその記載順は、記号・土色・土質とした。 例：10YR5/6 黄褐 粘土質シルト
6. 遺構番号は、遺構の種類や調査区に関わらず 1 から通しで付した。その場合「溝」や「土坑」などの遺構種類の前に番号を振った。複数の遺構の集合体である掘立柱建物については、各遺構番号とは別に集合体独自の遺構番号を付した。この場合は混乱を避けるため「掘立柱建物」の後に番号を振った。 例：「1 溝」・「2 土坑」・「3 ピット」、「掘立柱建物 1」
本書中の遺構番号は、基本的には現地調査段階で振ったものをそのまま使用したが、遺構種類に明らかな間違いがあったものについては、整理の段階で修正し、また遺構番号が漏れていたものについては新たに番号を付した。
7. 遺構図における断面位置は、図面上に「ㄣ」形によってその位置を示した。縮尺は各図のスケールバーを参照されたい。
8. 遺物実測図の縮尺は、土器・漆器・五輪塔以外の石製品は 3 分の 1、瓦・埴輪・五輪塔・漆器以外の木製品は 4 分の 1、銭貨は 3 分の 2、銭貨以外の金属製品は 2 分の 1 を基本としたが、雁振瓦や大型の形象埴輪などについては遺物に即して異なる縮尺としており必ずしもこの限りではない。各々の縮尺については、スケールバーに明示しているのでそちらを参照されたい。
9. 遺物実測図の断面については、土師器・埴輪・漆器は白抜きとし、それ以外の瓦器・瓦質土器・須恵器・陶磁器類は黒塗り、瓦・石製品・金属製品はグレーとしている。また漆器以外の木製品の木口側断面は木取り位置がわかるように模式的な年輪を表現しており、実際の年輪とは異なる。
土器表面に施されたヘラミガキについては、単位が明瞭な瓦器碗・皿のみ太線で表現した。
漆器表面の漆は、黒漆をグレーで、赤漆を朱で表現し、複雑な文様については写真を添付した。
10. 写真図版中の遺物番号は挿図の遺物番号と対応する。また遺物写真のうち、俯瞰撮影を行ない縮尺率が判明しているものについては、写真の隅に縮尺率を記したが、カメラ（レンズ）の特性上正確な縮尺にはなっていない。
11. 遺構埋土については、本文中では何層もあるものを簡潔にまとめて説明しているため、挿図記載の土色とは表現が微妙に異なっている。詳細については挿図を参照されたい。

目 次

巻頭原色図版

序文・はしがき・例言・凡例

第 1 章	調査の経緯と経過	1
第 1 節	調査に至る経緯	1
第 2 節	調査地周辺の既往調査	2
第 3 節	調査の経過	4
第 2 章	位置と環境	6
第 1 節	地理的環境	6
第 2 節	歴史的環境	6
第 3 章	調査の方法	10
第 1 節	現地調査	10
第 2 節	整理作業	13
第 4 章	調査の成果	15
第 1 節	基本層序	15
第 2 節	1 区の成果	25
第 3 節	2 区の成果	27
第 4 節	3 区の成果	45
第 5 節	4 区の成果	89
第 6 節	5 区の成果	116
第 7 節	6 区の成果	129
第 8 節	7～9 区の成果	142
第 5 章	自然科学分析	149
第 1 節	分析の目的	149
第 2 節	試料の測定と分析方法	150
第 3 節	測定結果	150
第 6 章	総 括	152

写真図版

報告書抄録

巻頭原色図版目次

銅製密教法具（原寸大 径 5.8cm）

挿入写真目次

写真1 調査公開風景……………4	写真4 瓦参考資料……………88
写真2 昭和23年の普賢寺遺跡周辺の状況……6	写真5 造出部参考資料……………152
写真3 調査地周辺の遺跡……………8	発掘作業風景（3区1溝掘削中）……………148

挿表目次

表1 現地調査期間・立会日等一覧……………5	表3 放射性炭素年代測定及び 暦年較正の結果……………151
表2 測定試料及び処理……………150	

挿図目次

図1 調査地位置……………1	図25 2区 井戸出土遺物……………37
図2 調査地周辺の既往調査……………3	図26 2区 土坑平面・断面（1）……………38
図3 門真市周辺の遺跡分布……………7	図27 2区 土坑平面・断面（2）……………39
図4 地区割り方法……………11	図28 2区 南半部検出遺構平面・断面……………41
図5 調査区配置と地区割り……………12	図29 2区 土坑出土遺物……………42
図6 基本層序柱状断面（1）……………16	図30 2区 ピット平面・断面……………43
図7 基本層序柱状断面（2）……………17	図31 2区 495 落込み断面……………43
図8 1・2区 遺物包含層出土遺物……………19	図32 2区 414 溝誤掘削の状況と 地層堆積状況の解釈……………44
図9 2区 遺物包含層出土遺物……………20	図33 3区 検出遺構全体平面……………45
図10 3・4区 遺物包含層出土遺物……………21	図34 掘立柱建物1平面・断面……………47
図11 5・6区 遺物包含層出土遺物……………22	図35 掘立柱建物3平面・断面……………49
図12 調査区全体遺構平面……………24	図36 掘立柱建物3柱穴断面……………50
図13 1区 検出遺構全体平面及び溝断面……………25	図37 掘立柱建物4・塀1・塀2 及び周辺遺構平面・断面……………51
図14 1区 溝出土遺物……………26	図38 3区 1溝埴輪出土状況……………52
図15 2区 検出遺構全体平面……………27	図39 3区 1溝断面……………53
図16 2区 方形区画周辺遺構平面・断面……………28	図40 3区 1溝出土遺物（1）……………55
図17 2区 454・482 溝屈曲部平面・断面 及び木杭検出状況……………29	図41 3区 1溝出土遺物（2）……………56
図18 2区 溝出土遺物……………30	図42 3区 1溝出土遺物（3）……………57
図19 2区 溝断面……………31	図43 3区 1溝出土遺物（4）……………59
図20 2区 414 溝南肩部土器出土状況……………32	図44 3区 1溝出土遺物（5）……………60
図21 2区 414 溝及び 414 溝南肩部出土遺物……………33	図45 3区 1溝出土遺物（6）……………61
図22 2区 442 溝出土遺物……………34	図46 3区 1溝出土遺物（7）……………62
図23 2区 420・453 井戸平面・断面……………35	図47 3区 溝断面……………63
図24 2区 448・449 井戸平面・断面……………36	図48 3区 140 溝出土遺物（1）……………64

図 49	3区 140 溝出土遺物 (2)……………65	図 89	4区 土坑平面・断面 (3)……………111
図 50	3区 140 溝出土遺物 (3)……………66	図 90	4区 溝・土坑平面・断面……………113
図 51	3区 140 溝出土遺物 (4)……………67	図 91	4区 ピット平面・断面……………114
図 52	3区 140 溝出土遺物 (5)……………68	図 92	4区 ピット出土遺物……………115
図 53	3区 160 溝出土遺物……………70	図 93	5区 検出遺構全体平面……………117
図 54	3区 溝出土遺物……………71	図 94	5区 溝断面 (1)……………118
図 55	3区 井戸・土坑平面・断面 (1)……………73	図 95	5区 溝断面 (2)……………119
図 56	3区 井戸・土坑平面・断面 (2)……………74	図 96	5区 511 溝出土遺物 (1)……………120
図 57	3区 井戸平面・断面……………75	図 97	5区 511 溝出土遺物 (2)……………121
図 58	3区 井戸・土坑平面・断面 (3)……………76	図 98	5区 520 溝出土遺物 (1)……………122
図 59	3区 井戸出土遺物……………77	図 99	5区 520 溝出土遺物 (2)……………123
図 60	3区 土坑平面・断面……………78	図 100	5区 井戸平面・断面 及び 出土遺物…124
図 61	3区 土坑出土遺物……………79	図 101	5区 土坑平面・断面 (1)……………125
図 62	3区 中央部土坑群平面・断面……………80	図 102	5区 土坑平面・断面 (2)……………126
図 63	3区 176 土坑・359 井戸 断面……………81	図 103	5区 土坑出土遺物……………127
図 64	3区 176 土坑出土遺物 (1)……………82	図 104	5区 ピット平面・断面……………128
図 65	3区 176 土坑出土遺物 (2)……………83	図 105	6区 検出遺構全体平面……………129
図 66	3区 土坑出土遺物……………84	図 106	6区 溝・土坑平面・断面……………130
図 67	3区 162 土器溜り平面・断面 及び 出土遺物……………85	図 107	6区 11 溝出土遺物……………131
図 68	3区 ピット平面・断面……………87	図 108	6区 511 溝出土遺物……………132
図 69	3区 ピット出土遺物……………88	図 109	6区 520 溝出土遺物……………134
図 70	4区 検出遺構全体平面……………89	図 110	6区 溝平面・断面……………135
図 71	4区 溝断面……………90	図 111	6区 溝出土遺物……………136
図 72	4区 1 溝須恵器・埴輪出土状況……………91	図 112	6区 井戸・土坑平面・断面 及び 出土遺物……………137
図 73	4区 1 溝出土遺物 (1)……………92	図 113	6区 土坑平面・断面 (1)……………138
図 74	4区 1 溝出土遺物 (2)……………94	図 114	6区 土坑平面・断面 (2)……………139
図 75	4区 1 溝出土遺物 (3)……………95	図 115	6区 土坑出土遺物……………140
図 76	4区 1 溝出土遺物 (4)……………96	図 116	6区 ピット平面・断面……………141
図 77	4区 1 溝出土遺物 (5)……………97	図 117	7～9区 検出遺構全体平面……………142
図 78	4区 1 溝出土遺物 (6)……………98	図 118	掘立柱建物 2・溝平面・断面……………143
図 79	4区 溝出土遺物 (1)……………99	図 119	8・9区 溝・ピット出土遺物……………144
図 80	4区 溝出土遺物 (2)……………101	図 120	9区 溝・土坑平面・断面……………145
図 81	4区 8 井戸平面・断面……………102	図 121	8区 土坑平面・断面……………146
図 82	4区 8 井戸出土遺物……………104	図 122	8・9区 土坑出土遺物……………147
図 83	4区 井戸平面・断面……………105	図 123	分析試料と出土位置……………149
図 84	4区 井戸出土遺物……………106	図 124	暦年較正結果……………151
図 85	4区 土坑平面・断面 (1)……………107	図 125	古墳の規模……………152
図 86	4区 土坑出土遺物 (1)……………108	図 126	埴輪の出土分布……………153
図 87	4区 土坑平面・断面 (2)……………109	図 127	普賢寺遺跡検出遺構全体平面……………154
図 88	4区 土坑出土遺物 (2)……………110	図 128	普賢寺遺跡と願得寺……………157

写真図版目次

写真図版1 1区 遺構

1. 1区 全景〔西から〕
2. 501溝 西端部横断面
3. 502溝 縦断面
4. 501溝(奥)・502溝(手前)

写真図版2 2区 遺構

1. 2区 全景〔北西から〕
2. 2区 東半部方形区画〔北東から〕

写真図版3 2区 遺構

1. 415土坑
2. 418溝
3. 419土坑
4. 429土坑
5. 414溝
6. 414溝
7. 414溝 南肩部土器出土状況

写真図版4 2区 遺構

1. 420井戸〔南から〕
2. 420井戸 井戸枠検出状況
3. 420井戸 漆器出土状況
4. 431土坑

写真図版5 2区 遺構

1. 432土坑
2. 436土坑
3. 437土坑
4. 442溝(中)・444溝(右)・445溝(左)
5. 448井戸
6. 449井戸
7. 450土坑(左)・445溝(右)
8. 451土坑

写真図版6 2区 遺構

1. 452土坑
2. 453井戸
3. 482溝(中央)・454溝(左下)
4. 482・454溝 屈曲部杭列
5. 2区 北西隅部下層調査全景〔西から〕

写真図版7 3区 遺構

1. 3区 全景〔南から〕
2. 3区 全景〔南西から〕

写真図版8 3区 遺構

1. 1溝(奥)・140溝(手前)〔南東から〕
2. 1溝 杭列
3. 131土坑
4. 137土坑
5. 140溝

写真図版9 3区 遺構

1. 1溝 埴輪出土状況〔南東から〕
2. 148土坑
3. 155井戸
4. 159土坑(奥)・161井戸(手前)
5. 167土坑(奥)・168井戸(手前)

写真図版10 3区 遺構

1. 160溝
2. 171溝 東端部土器出土状況
3. 201土坑(左)・202土坑(右)
4. 162土器溜まり 土器出土状況〔南東から〕

写真図版11 3区 遺構

1. 282土坑(手前)・177土坑(中)・176土坑(奥)〔南西から〕
2. 163溝・170溝 屈曲部土器出土状況
3. 177土坑
4. 176土坑
5. 176土坑北端 359井戸

写真図版12 3区 遺構

1. 掘立柱建物1〔西から〕
2. 181ピット
3. 186ピット
4. 189ピット
5. 193ピット

写真図版 13 3区 遺構

1. 203 ピット
2. 204 ピット
3. 220 ピット
4. 222 ピット
5. 254 井戸
6. 257 ピット
7. 263 ピット
8. 267 ピット

写真図版 14 3区 遺構

1. 271 土坑
2. 272 ピット
3. 273 井戸
4. 275 井戸
5. 280 ピット
6. 291 井戸
7. 315 井戸
8. 334 ピット

写真図版 15 4区 遺構

1. 4区 全景〔南東から〕
2. 4区 東半部全景〔南西から〕

写真図版 16 4区 遺構

1. 1 溝
2. 1 溝 土器出土状況
3. 2 土坑
4. 4 土坑
5. 1 溝 埴輪・須恵器出土状況〔南西から〕

写真図版 17 4区 遺構

1. 8 井戸 井戸枠検出状況〔南から〕
2. 6 土坑
3. 7 土坑
4. 8 井戸 井戸枠外側検出状況
5. 8 井戸 底部桶検出状況

写真図版 18 4区 遺構

1. 9 土坑
2. 14 井戸
3. 16 井戸
4. 17 土坑
5. 19 溝
6. 19 溝
7. 21 土坑
8. 23 土坑

写真図版 19 4区 遺構

1. 24 井戸 上面土器出土状況
2. 24 井戸
3. 29 井戸
4. 30 土坑 (左)・36 土坑 (右)
5. 34 土坑
6. 59 土坑
7. 60 土坑
8. 62 ピット

写真図版 20 4区 遺構

1. 68 土坑
2. 78 ピット
3. 91 ピット
4. 95 土坑
5. 97 ピット
6. 99 土坑
7. 100 ピット
8. 105 溝

写真図版 21 5区・6区 遺構

1. 5区・6区 全景〔西から〕
2. 5区・6区 溝群〔南から〕

写真図版 22 5区 遺構

1. 511 溝〔東から〕
2. 514 井戸
3. 514 井戸 底部曲物検出状況
4. 528 井戸
5. 528 井戸 底部曲物検出状況

写真図版 23 5区 遺構

1. 520 溝
2. 520 溝 底面漆器出土状況
3. 512 土坑 (右)・513 土坑 (左)
4. 521 土坑
5. 520 溝 [南から]

写真図版 24 5区 遺構

1. 520 溝 上面五輪塔出土状況 [東から]
2. 526 土坑
3. 529 土坑
4. 533 土坑
5. 536 井戸

写真図版 25 6区 遺構

1. 11 溝 [南から]
2. 511 溝 (左)・552 溝 (右) [東から]

写真図版 26 6区 遺構

1. 555 溝 土器出土状況
2. 558 土坑
3. 559 溝
4. 560 井戸
5. 569 土坑
6. 570 土坑
7. 577 ピット
8. 579 ピット

写真図版 27 6区 遺構

1. 585 土坑
2. 588 土坑 (左)・587 土坑 (右)
3. 596 井戸
4. 600 土坑
5. 618 井戸
6. 619 土坑
7. 581 ピット (左奥)・583 ピット (右奥)・620 土坑 (手前)
8. 調査区北東隅部 ピット群

写真図版 28 7区・8区 遺構

1. 7区 全景 [東から]
2. 8区 全景 [西から]

写真図版 29 7区・8区 遺構

1. 掘立柱建物 2 [南から]
2. 301 溝
3. 393 土坑
4. 394 土坑
5. 402 ピット 石鍋出土状況

写真図版 30 9区 遺構

1. 9区 全景 [南から]
2. 381 溝 土器出土状況
3. 382 溝
4. 387 土坑
5. 388 土坑

写真図版 31 各調査区 遺物包含層出土遺物

写真図版 32 2区・3区 出土遺物

写真図版 33 2区 出土遺物

写真図版 34 3区 出土遺物

写真図版 35 3区 出土遺物

写真図版 36 3区 出土遺物

写真図版 37 3区 出土遺物

写真図版 38 3区・4区 出土遺物

写真図版 39 4区 出土遺物

写真図版 40 4区 出土遺物

写真図版 41 5区 出土遺物

写真図版 42 5区・6区 出土遺物

写真図版 43 6区 出土遺物

写真図版 44 6区・8区・9区 出土遺物

写真図版 45 軒丸瓦

写真図版 46 軒丸瓦

写真図版 47 軒平瓦

写真図版 48 瓦・道具瓦

写真図版 49 瓦・道具瓦

写真図版 50 埴輪

写真図版 51 埴輪

写真図版 52 埴輪

写真図版 53 木製品

写真図版 54 石製品

写真図版 55 石製品・金属製品

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成20年（2008）度に、京阪電鉄古川橋駅北側の旧市立第一中学校跡地を中心とした地域への住宅市街地総合整備事業による公共施設の整備や、宅地の整形化を目的とした土地区画整理事業が計画され、翌年より老朽建築物などの除却が始まることとなった。

この事業予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「普賢寺遺跡」にあたっており、予定地周辺からは平成17年（2005）に府の指定有形文化財となった金銅僧形坐像及び金銅密教法具をはじめ、瓦や絵馬、柿経など中世寺院の存在を示すさまざまな遺物が出土している。また事業予定地の北東部分に接して市内唯一の古墳である「普賢寺古墳」があり、盾持人埴輪や円筒埴輪が出土していることなどから、門真市教育委員会（以下「市教委」）は、事業に先立ち発掘調査が必要と判断した。

まず平成24年（2012）度には、廃校となった市立第一中学校の校舎などの徐却工事が予定されたことから、市教委は平成24年（2012）5月14日から16日まで、グラウンド部分の23箇所で、発掘調査範

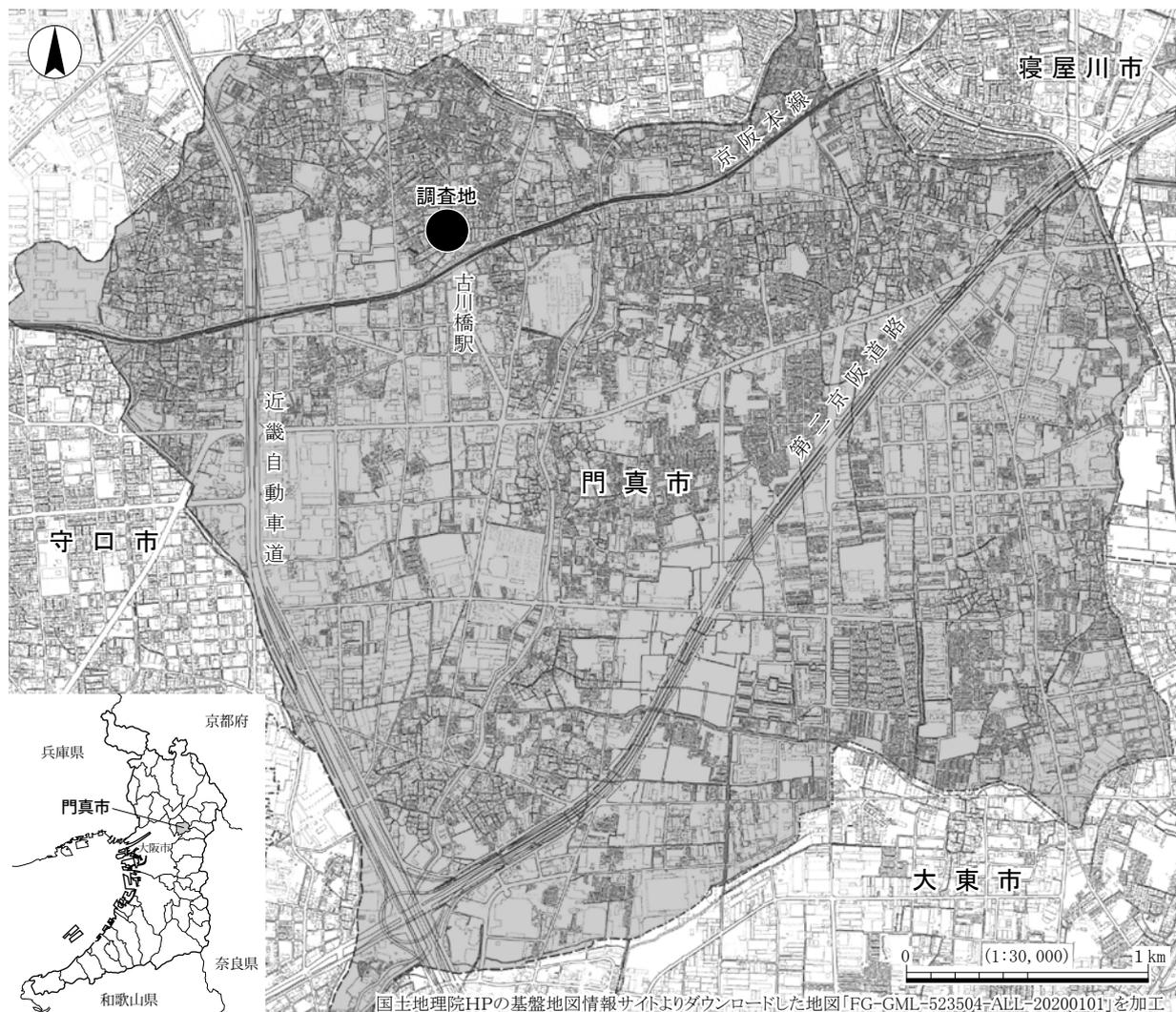


図1 調査地位置

囲や深度の確定を目的とした試掘調査を実施した。調査の結果、グラウンドの東半部から円筒埴輪、中世土器、瓦などが出土することを確認した。

その後の平成 29 年（2017）には、事業予定地全体の試掘調査が可能になったことから、市教委は同年 12 月 4 日から 12 月 20 日まで、事業予定地内の 24 箇所でも再度試掘調査を実施。その結果、平成 24 年の調査と同様に埴輪片や中世土器、瓦が出土し、おおよその遺物分布状況が判明した。これにより発掘調査が必要な範囲を確定した。

令和 2 年（2020）度には、門真市幸福東土地画整理組合が設立され、土地利用計画が決定するなど事業が大きく進展する。それに伴い本格的な埋蔵文化財発掘調査も開始される。

令和 2 年（2020）4 月には、門真市長より提出された文化財保護法第 94 条第 1 項に基づく埋蔵文化財の発掘通知が、市の文化財担当部局経由で要発掘調査の意見を添えて大阪府教育委員会（以下「府教委」）に提出された（門市生第 3037 号）。これに対して府教委は門真市に発掘調査の実施を通知（教文第 1－838 号）。市は、当時の体制では発掘調査の実施が困難であったため、府教委に調査の協力を依頼（門市生第 3038 号）。府教委は、公益財団法人大阪府文化財センター（以下「センター」）が協力する旨回答した（教文第 1340 号）。これにより門真市とセンターは、同年 5 月 18 日、調査の実施に関して必要な事項を定め、適正且つ円滑な発掘調査を図ることを目的とした協定書を交わし、5 月 26 日に委託契約を締結した。

以上を経て、文化財保護法第 99 条に基づく発掘調査が令和 2 年（2020）6 月から開始され、門真市は直ちに府教委に埋蔵文化財発掘着手の報告を行なった（門市生第 3113 号）。

調査期間は、令和 2 年 6 月 1 日から令和 3 年 3 月 31 日まで。調査面積は 6,106㎡である。

なお令和 2 年度より、文化財保護法及び地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部改正に伴い、門真市は門真市事務分掌条例を改正し、文化財の保護にかかる業務を市教委から市長部局に移管している。

第 2 節 調査地周辺の既往調査

本遺跡は、昭和 58 年（1983）6 月に門真市立第一中学校給食棟の工事の際に大量の瓦が出土したことによって発見された。その大量の瓦が中世の時期のものであったこと、またこの一帯がかつて「普賢寺庄」と呼ばれ、記録に登場する「普賢寺」という寺院が存在していたと推測されることから、「普賢寺遺跡」と命名されることとなった。

以後、周辺ではこれまでに本格的な発掘調査が 4 回実施されている（図 2）。

まず昭和 59 年（1984）には、今回の調査地の道路を挟んで東側近接地で、府教委が実施している。門真市古川橋駅北区画整理事業に伴う道路部分の狭い調査であったが、寺域を区画すると考えられる溝が検出され、焼けた壁土が出土したことから、周辺に焼失した寺院の存在がうかがえた。その寺院は出土した瓦の年代から平安時代後期に創建され室町時代まで存続していたと考えられている。剣頭文の軒平瓦を含む大量の瓦や土器のほか、金銅僧形坐像や密教寺院で使用する金銅密教法具が出土しており、これらは鎌倉時代に製作された優品で、非常に保存状態もよく、平成 17 年（2005）1 月 21 日付で大阪府の指定有形文化財に指定されている。さらにこの調査では弥生時代の石庖丁や古墳時代の土師器・須恵器が出土し、弥生時代から中世にかけての複合遺跡であることも判明し、隣接する古川遺跡と共通する様相を示すことも明らかとなった。

続く昭和 60 年（1985）には、店舗付共同住宅の建設に伴い、上記調査地の北側隣接地を市教委が調査した。弥生時代の土坑及び中世の溝が検出され、弥生時代前期の壺、古墳時代の円筒埴輪、中世の土器や

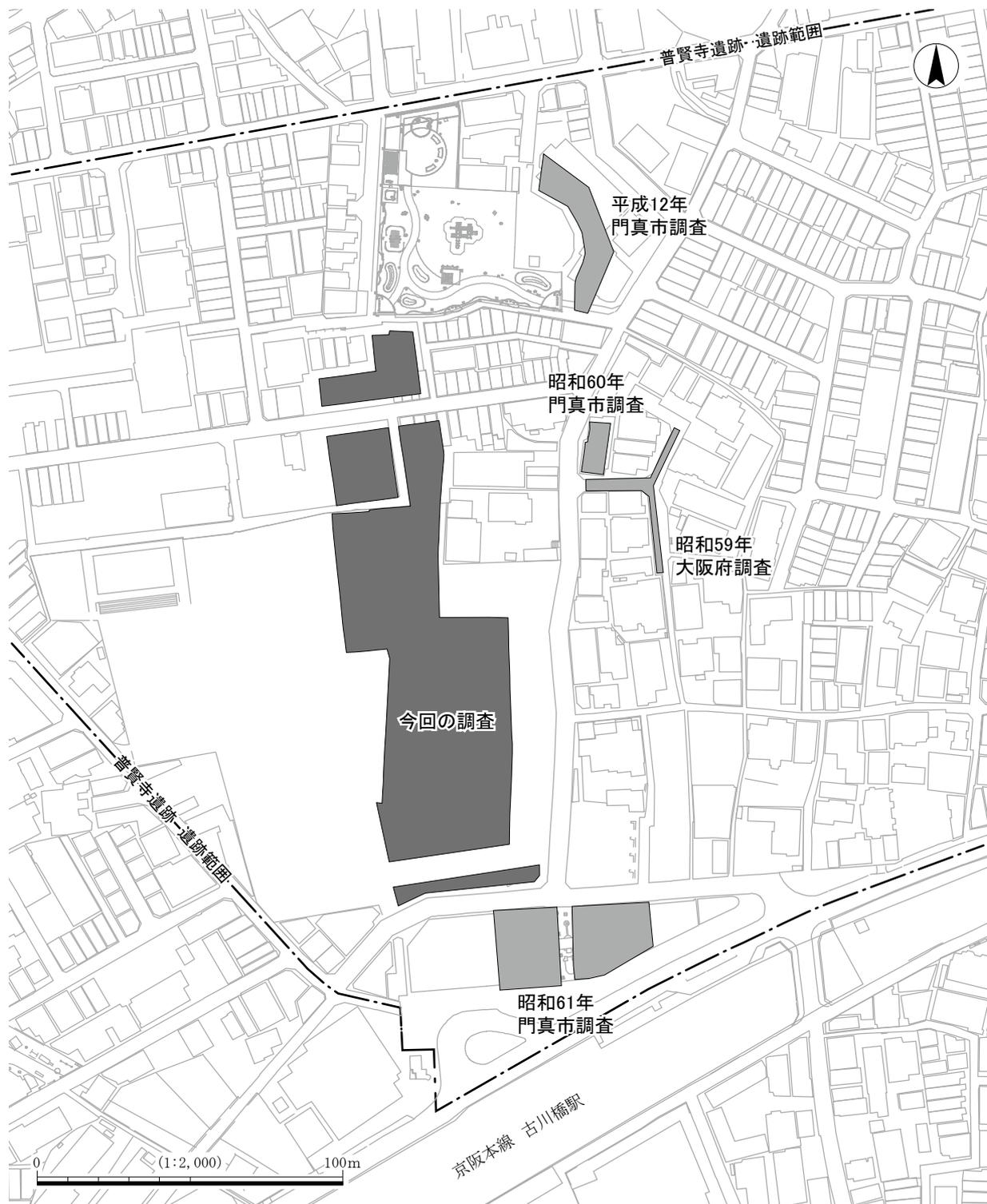


図2 調査地周辺の既往調査

瓦などが出土している。中世の土器や瓦は前年の調査成果同様に寺院に伴う遺物と考えられるが、円筒埴輪の出土は付近に古墳の存在をうかがわせるものであった。また弥生時代前期末の遺構が検出されたことから、市内でもっともはやい時期の集落が広がっていたことも明らかとなった。

翌昭和61年（1986）には、今回の調査地の道路を挟んですぐ南側で、門真市古川橋駅北土地区画整理事業に伴う市教委の調査が実施されている。調査面積は約1,000㎡で、その全域で縄文時代から弥生時代に形成された河内潟の北岸を示すと考えられる砂礫層が確認された。さらに寺院の南端を画するとみられ

る溝が検出され、溝の中からは土器や瓦のほか、柿経・絵馬・櫛・毬・箸・漆器など様々な木製品や、銭貨・釘隠・刀子などの金属製品など内容・量ともに豊富な遺物が出土した。また土器の中には人面墨書土器なども含まれていた。

以上の調査によって、遺跡の範囲は京阪古川橋駅の北側一帯の、門真市垣内町・幸福町にわたることがわかってきた。

続いて平成12年（2000）には、門真市石原東・幸福北土地区画整理事業に伴い、今回の調査地の北東側近接地で市教委が調査を実施している。この前年に実施した2度にわたる試掘調査によって遺構の存在が確認され、埴輪片も出土したことから、本格的な調査に移ったものである。調査の結果、古墳の東辺にあたる周溝を検出し、西側調査区外に位置する現存墓地が墳丘にあたっていることが判明した。古墳は直径約30mに復原できる円墳で、周溝の中からは多数の円筒埴輪や朝顔形埴輪のほか、盾持人埴輪などの形象埴輪、須恵器が出土している。古墳の発見は門真市内でははじめてであり、普賢寺遺跡内で確認されたことから「普賢寺古墳」と命名された。

旧第一中学校跡地で実施した今回の調査は、5回目となる本格的な発掘調査であり、これまでで最大規模、且つ遺跡の中心部にあたる重要な調査である。

第3節 調査の経過

事前の協議や場内への搬入口設置などの準備に時間がかかり、実際に現地の掘削作業に取りかかったのは6月24日からである。調査は排土置き場や一度に行なえる空中写真測量の範囲などを考慮し、全体を9分割して実施した。各調査区の詳細な機械・人力掘削期間、空中写真測量や全景斜め写真撮影日、門真市の最終立会日などは一覧表のとおりである（表1）。

なお、調査期間中の令和2年（2020）8月7日には、小中学生を対象とした門真市主催の「夏休み発掘探検ツアー」を開催した。猛暑の中、関係者も含め26名の参加があり、室内では出土した遺物を実際に手に触れていただき、屋外では発掘現場に降りて遺物が出土している状況を見学しながら調査の進め方について説明を受けるなど、実際の発掘調査について体感していただいた。また、3区で銅製仏具が出土し、大型掘立柱建物を検出したことから、11月18日には地元の事業関係者を対象とした現地説明会を行なった。本来であれば広く一般の方々に公開するところであるが、今回は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、人数を絞らざるをえなかった。52名の方々に参加いただき、出土遺物や、遺物が出土した状態の遺構のほか、実際の発掘作業の様子も見学していただいた。今回の発掘調査は、これまで門真市内で実施した中で



発掘体験ツアー



現地説明会

写真1 調査公開風景

表1 現地調査期間・立会日等一覧

調査区	機械掘削	人力掘削	空中写真測量 全景斜め写真撮影	門真市最終立会	埋戻し
1区	令和2年12月8日 ～ 令和2年12月9日	令和2年12月10日 ～ 令和2年12月16日	(斜) 令和2年12月17日 (空) 令和2年12月24日	令和2年12月18日	令和2年12月24日
2区	令和2年9月18日 ～ 令和2年10月26日	令和2年9月30日 ～ 令和2年12月2日	(斜) 令和2年12月4日 (空) 令和2年12月8日	令和2年12月8日	令和3年1月5日 ～ 令和3年1月26日
2区 下層		令和2年12月9日 ～ 令和2年12月16日	(斜) 令和2年12月17日 (空) 令和2年12月24日	令和2年12月18日	
3区	令和2年7月27日 ～ 令和2年8月7日	令和2年8月20日 ～ 令和2年10月20日	令和2年10月15日	令和2年10月20日	令和2年10月20日 ～ 令和3年10月30日 (2区との境は残)
4区	令和2年6月24日 ～ 令和2年7月16日	令和2年6月29日 ～ 令和2年8月21日	令和2年8月20日	令和2年8月25日	令和2年8月25日 ～ 令和2年8月31日 (3区との境は残)
5区	令和2年11月30日 ～ 令和2年12月1日	令和2年12月2日 ～ 令和3年2月3日	令和3年3月4日	令和3年3月8日	令和3年3月8日 ～ 令和3年3月12日
6区	令和2年12月21日	令和3年2月1日 ～ 令和3年3月9日			
7区	令和2年9月9日 ～ 令和2年9月10日	令和2年9月11日 ～ 令和2年9月16日	令和2年9月23日	令和2年9月23日	令和2年9月24日
8区	令和2年10月22日	令和2年10月22日 ～ 令和2年10月30日	令和2年11月6日	令和2年11月9日	令和2年11月9日
9区	令和2年9月28日 ～ 令和2年9月29日	令和2年9月29日 ～ 令和2年10月16日	令和2年10月15日	令和2年10月20日	令和2年10月21日

※(空)は空中写真測量、(斜)は高所作業車からの全景斜め写真撮影

も最大規模であり、市民の関心も高いことから、令和3年(2021)5月に門真市立歴史資料館において出土遺物や写真パネルを展示した調査速報展を開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の発出により急遽取り止めとなった。これに代わり、市では遺跡に関する動画撮影を行ない、配信サイトを利用した公開を行なった。

参考文献

- ・門真市史編纂委員会 1992『門真市史』第2巻
- ・門真市教育委員会 2006『門真市文化財ガイドブック』
- ・門真市教育委員会 1990・1991『普賢寺遺跡発掘調査概要・I』
- ・門真市教育委員会 1991『普賢寺遺跡発掘調査概要・II』
- ・門真市教育委員会 2000『普賢寺古墳』
- ・門真市市民文化部生涯学習課・公益財団法人大阪府文化財センター 2020『普賢寺遺跡発掘調査現地公開資料』

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

遺跡が所在する門真市は、大阪府北東部の北河内と呼ばれる地域に位置し、周囲には大阪市・守口市・大東市・寝屋川市が接する。市の規模は東西 4.9km、南北 4.3km で、面積は 12.30km²である。

市域は淀川左岸に広がる「寝屋川低地」と呼ばれる低湿地上にあり、標高はどこも 4 m以下と低く起伏に乏しい。市内には大きな河川は少なく、淀川は北接する寝屋川市・守口市の北西側を南西に流れる。市域北東縁に接して寝屋川が北西から南東方向に流れ、中央西寄りには古川が市域を縦断する。これらの河川に沿って自然堤防が形成され、その自然堤防と自然堤防との間には排水不良の後背湿地が広がる。この環境を利用し、『延喜式』にも載る「河内蓮根」やクワイが古くから栽培され、市の特産品となっている。この蓮田には網目状に小河川や水路がめぐっており、そのうちの三ツ島地区に設けられていた砂子水路は、現在春になると田舟を利用した観桜舟が運行され、観光に活かされている。

第2節 歴史的環境

門真市域の遺跡は、淀川や古川に沿ってできた自然堤防上に分布するものと、市域南端部の低湿地に分布するものの二つのグループがみられる。以下、時代ごとに市域の遺跡を概観する。

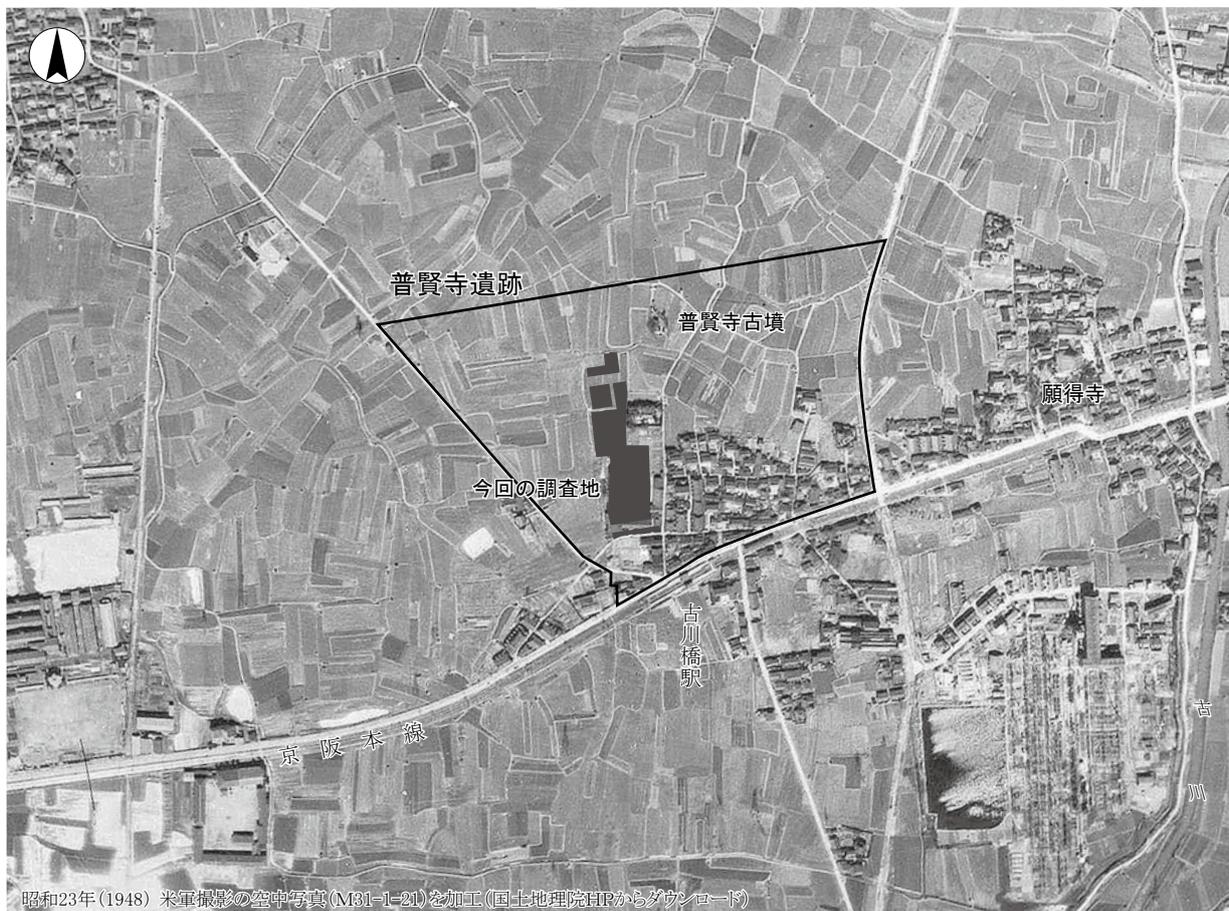


写真2 昭和23年の普賢寺遺跡周辺の状況

旧石器時代・縄文時代

市域では、この時代の遺跡はほとんど知られていない。広大な湿地が広がっており、人々が定住できるような環境ではなかったと考えられる。縄文時代後期になると、ようやく守口市との市境に位置する西三荘遺跡・八雲東遺跡で土器の出土が認められる。北白川上層式Ⅲ期の深鉢と浅鉢の2点で、表面に摩滅が認められないことから、この時期には遺跡周辺に人間の活動が可能な季節的な陸地が出現していたのではないかと考えられている。南方の三ツ島西遺跡からも約50点に及ぶ土器片が出土している。晩期初頭頃の滋賀里ⅠないしはⅡ式のものが主であるが、表面が摩滅しており、調整や文様が判然としないものが多い。

弥生時代

弥生時代になると遺跡は広範囲に広がる。当遺跡からも前期後半から中期の土器や石庖丁が出土しているが、東側に隣接する古川遺跡では、市内で初となる前期から中期の方形周溝墓が密集して検出されている。出土する土器の中には中河内地域の土器も含まれており、他地域との交流もうかがうことができる。西三荘遺跡からは中期から後期の土器が多数出土しており、その量は市内でもっとも多い。大和田遺跡は中期後半の小型銅鐸3個体（門真野口銅鐸）が出土したことで著名である。昭和38年（1963）に京阪大和田駅の工事中に、地下2mの砂層中から発見されたもので、いずれも扁平鈕式の四区袈裟櫛文に分類されるものである。これらの銅鐸を祀っていたムラがどこにあったのか今後の調査が期待される。銅鐸は現在国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）に所蔵されている。このほか、昭和37年（1962）に市南部の水郷地帯

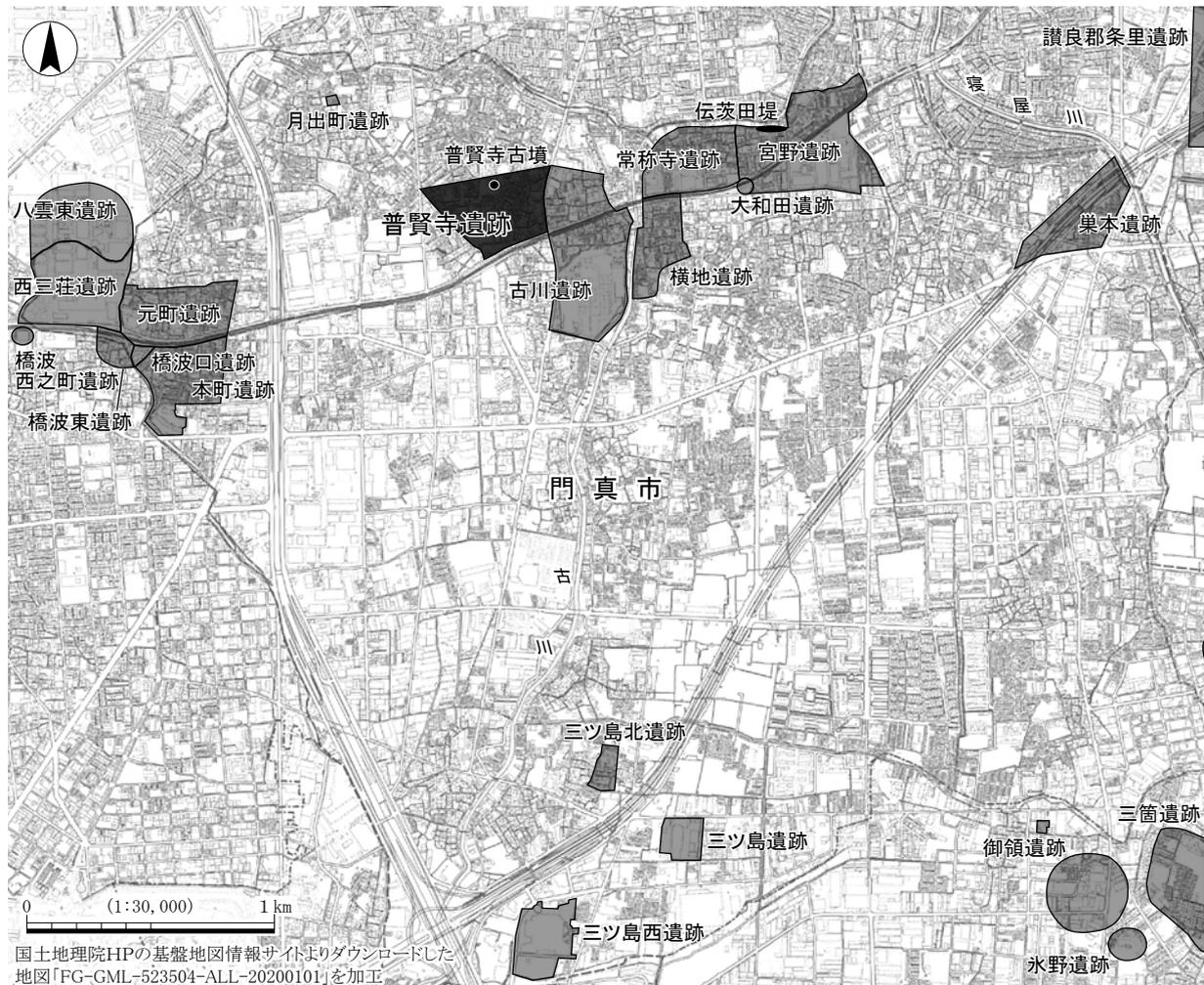


図3 門真市周辺の遺跡分布



伝茨田堤(大阪府指定史跡)



普賢寺古墳

(撮影 伊藤)

写真3 調査地周辺の遺跡

に位置する三ツ島遺跡から、弥生時代のものと考えられる刳舟の未成品が発見されている。材は樺で、全長は 17 m、刳り抜き部分は 12 m あり、焼きながら加工している状況を示していた。不明な点が多いが、船体内部からは弥生土器片が出土している。

古墳時代

『古事記』・『日本書紀』には、仁徳天皇の時代（5 世紀前半）に淀川左岸に「茨田堤」と呼ばれる堤防を築き、「茨田屯倉」を設置したことが記されており、市域の治水や農地開発を考える上で注目される。門真市北端部には現在も式内社堤根神社が鎮座しており、その境内には堤の盛土とされる高まりが遺存している。高まりは「伝茨田堤」として昭和 49 年（1974）に大阪府の史跡に指定（昭和 58 年（1983）に追加指定）されている（写真 3）。宮野遺跡はこの堤根神社の周辺に広がる遺跡で、昭和 55 年（1980）に伝茨田堤の隣接地で調査が実施され、古墳時代中期から後期の土器や有孔円板などが出土している。

普賢寺古墳は、当遺跡内で平成 12 年（2000）に発見された市内で唯一の古墳である（写真 3）。6 世紀前半に築造された直径約 30 m の円墳で、墳丘周囲には幅約 4 m の周溝がめぐる。墳丘は調査区外のため埋葬施設などの詳細は不明。円筒埴輪や朝顔形埴輪など多くの埴輪が出土したが、蓋や鶏などの形象埴輪や盾持人埴輪も出土している。盾持人埴輪の頭部には三角形の透孔があり、顔面には線刻で入れ墨が表現されている。このほか、元町遺跡からは中期の製塩土器が大量に出土している。

古代～中世

門真市域は古代には河内国茨田郡に属していた。門真市北西部に位置する橋波口遺跡からは、奈良時代の須恵器の甕を使用した甕棺墓が発見されているが、この時期の遺跡は少ない。平安時代後半以降になると、橋波口遺跡をはじめ市内各所に遺跡が展開する。橋波口遺跡では、奈良時代の遺構以外に 12 世紀代の土坑や溝が検出されている。土坑は直径 4 m、深さ 1.2 m で、内部には灰や焼土が詰まっており、大量の土師器や瓦器、瓦質鍋・羽釜などとともに桃の核がみついている。火を使う祭祀の後に埋められたものと考えられている。縄文土器が出土したことで知られる西三荘遺跡からは、中世の大量の土器とともに、保存状態の極めてよい鉄製の鎌やヤス・小刀のほか、応永 17 年（1410）の銘のある卒塔婆や柿経、牛馬の骨などがみつかり、集落や墓域として土地利用されていたことが明らかとなった。なお西三荘遺跡の北東側に隣接する黄梅寺は、天文 15 年（1546）に室町幕府 13 代将軍足利義輝が創建したと伝えられる寺院であるが、その周辺には、伊勢神宮に奉仕した斎宮が任を解かれ京へ帰る際の宿所とした「茨田真手御宿所」があったとされている。

伝茨田堤隣接地で調査された前記宮野遺跡では、堤とされる高まりの南に沿う位置で室町時代前半の木組みが検出されている。木組みは杭と横材・枝葉で構成されており、「茨田堤」との関連が注目される。これによく似た堤の跡は、寝屋川沿いの巢本遺跡でもみつかっている。12世紀代のもので、竹組みや敷葉によって構築されており、当時の土木技術の高さを垣間みることができる。遺跡からは多くの土器や木製品ほか、周辺に寺院が存在していたことを示す瓦や墨書土器、木簡なども出土している。

今回調査を実施する普賢寺遺跡は、平安時代後期に創建され中世末期頃には焼失したとされる「普賢寺」に関わる遺跡で、市内を代表する遺跡の一つである。普賢寺は『河内國小松寺縁起』の勸進奉加帳にはじめて登場し、遺跡の東側に所在する願得寺の門徒に伝来した阿弥陀如来絵像裏書にもその名が記されている。京阪本線古川橋駅北側で実施されたこれまでの調査で、寺域を画すると考えられる溝が検出され、大量の土器や瓦のほか、柿経、絵馬、漆器、人面墨書土器、銅銭、金銅密教法具、金銅僧形坐像など寺院に関係するさまざまな遺物が出土していることから、今回の調査地周辺に普賢寺があったと推定されているが、正確な所在地は未だ特定されていない。出土した人面墨書土器は三重県の斎宮跡出土品と酷似した人物の顔が描かれており、上記茨田真手御宿所との関係が注目される。金銅密教法具は密教寺院の修法に用いる壇上に備えられた仏具で、昭和59年(1984)の調査で火舎香炉1口、蓋1枚、椀5口、台皿6枚が出土している。金銅僧形坐像は弘法大師像と考えられる小像で、高さは僅か1.2cm。右腕をねじり胸の前で金剛杵を持ち、左手は念珠を膝前で執る。両者は鎌倉時代に製作された優品で保存状態もよく、平成17年(2005)に大阪府の指定有形文化財に登録されている。

なお上記願得寺は、15世紀末に普賢寺の一部を譲り受けて成立した寺院と伝えられる。16世紀中頃にはその一部、あるいは周辺が「古橋城」として城郭化するが、元亀元年(1570)8月には、野田城・福島城から攻め入った三好三人衆方と織田方の三好義継・畠山昭高らによる戦いにより落城する。

参考文献

- ・門真市史編纂委員会 1988・1992・2000・2003『門真市史』第一・二・四・別巻
- ・門真市教育委員会 2006『門真市文化財ガイドブック』
- ・門真市教育委員会 1982『宮野遺跡発掘調査概要』
- ・門真市教育委員会 1990・1991『普賢寺遺跡発掘調査概要・Ⅰ』・『普賢寺遺跡発掘調査概要・Ⅱ』
- ・門真市教育委員会 1992『門真市橋波口遺跡発掘調査概要』
- ・門真市教育委員会・守口市教育委員会 1993『西三荘・八雲東遺跡発掘調査概要』
- ・門真市教育委員会 1999『古川遺跡』
- ・門真市教育委員会 2000『普賢寺古墳』
- ・大阪府教育委員会 1992『三ツ島西遺跡発掘調査概要・Ⅰ』
- ・大阪府教育委員会 2001『宮野遺跡』
- ・財団法人大阪府文化財調査研究センター 1997『三ツ島遺跡』
- ・財団法人大阪府文化財センター 2004『讃良郡条里遺跡(その3)』
- ・財団法人大阪府文化財センター 2006『讃良郡条里遺跡Ⅳ』
- ・財団法人大阪府文化財センター 2007『讃良郡条里遺跡Ⅴ』
- ・財団法人大阪府文化財センター 2008『巢本遺跡Ⅰ』
- ・財団法人大阪府文化財センター 2008『巢本遺跡Ⅱ』
- ・公益財団法人大阪府文化財センター・門真市教委委員会 2016『西三荘遺跡』

第3章 調査の方法

第1節 現地調査

現地での発掘調査は、公益財団法人大阪府文化財センターが平成22年に定めた『遺跡調査基本マニュアル』¹⁾に準拠して行なった。

調査名 当センターの調査台帳に登録する調査名は、調査年次がわかるよう「普賢寺遺跡 20-1」とした。今回のように市町村と合同で調査を行なった場合、その自治体独自の調査番号を付けることがあるが、事前の協議により、今回の調査では遺物取り上げラベルや写真撮影用ラベル・遺構図面、また遺物への注記など、すべてこの調査名を用いることとした。

調査区割り 排土置き場や一度に行なえる空中写真測量の範囲などを考慮し、調査区を9分割した。調査順ではなく、南から順に1区から9区までの調査区名を付けた(図5)。

調査は4区→3区→2区→1区→5区・6区の順で行ない、3区・2区の調査と並行して7区→9区→8区の順で、道路で隔てられた北端部の調査を進めた。

地区割り 遺物の取り上げに用いる大阪府内全域に共通する区画割りである。世界測地系に則った平面直角座標系第VI系を基準とし、I～Vの大小5段階の区画を設定した。第I区画は大阪府の南西部を通るX=-192,000 m・Y=-88,000 mを起点に、府域を東西9区画(0～8)、南北15区画(A～O)に分割したもので、一区画は東西8 km、南北6 kmとなる。第II区画は第I区画を東西、南北各4分割の、計16区画(1～16)に分けたもので、一区画は東西2.0 km、南北1.5 kmとなる。第III区画は第II区画を東西20分割(1～20)、南北15分割(A～O)する一辺100 mの区画である。第IV区画は第III区画をさらに東西、南北ともに10分割(東西1～10、南北a～j)した一辺10 mの区画で、出土遺物については、基本的にこの区画ごとに取り上げることとした。第V区画は第IV区画をさらに「田」の字状に4分割(I～IV)した一辺5 mの区画であるが、今回の調査では使用しなかった。

上記の方法で区画した場合、この調査の第I区画は「I 6」、第II区画は「10・14」となり、第III区画は「14 O・15 O・14 A・15 A・14 B・15 B」の6区画に分かれる(図4・5)。なお遺物取り上げ用ラベルや遺物登録台帳への記入は、煩雑となるため第I・II区画は省略し、「15 A-9 f」のように第III区画以降のみとした。

掘削・記録・埋戻し 事前に実施した試掘調査の成果を踏まえて、機械掘削により現代の盛土から旧表土などを除去し、中世の遺物包含層である1層からスコップや鋤簾、また粘土が固まってスコップでは掘削ができないような場合には電動ハンマーも併用しながら人力掘削を行ない、1層下面で遺構を検出した。掘削で生じた土砂はベルトコンベヤーを使用して調査区外へと搬出した。検出した遺構については、柱穴などの小さなものは片手用草削りや移植ゴテなどを用いて、井戸などの大型のものはスコップを併用しながら慎重に掘り下げた。埋土の堆積状況など観察が必要な遺構については、2分割するなど断面を残して掘削し、順次遺構平面や埋土堆積状況などの図面作成と写真撮影を行なった。

発掘調査完了時には、すべての調査区において門真市の最終確認を受け、埋戻し作業へと移った(表1)。

写真撮影 遺構写真については、以前は35mmカメラを使用していたモノクロフィルムとリバーサルフィルムの撮影を、完全にデジタルカメラによる撮影に切り替えた。使用したデジタルカメラは「Nikon D3500」で、

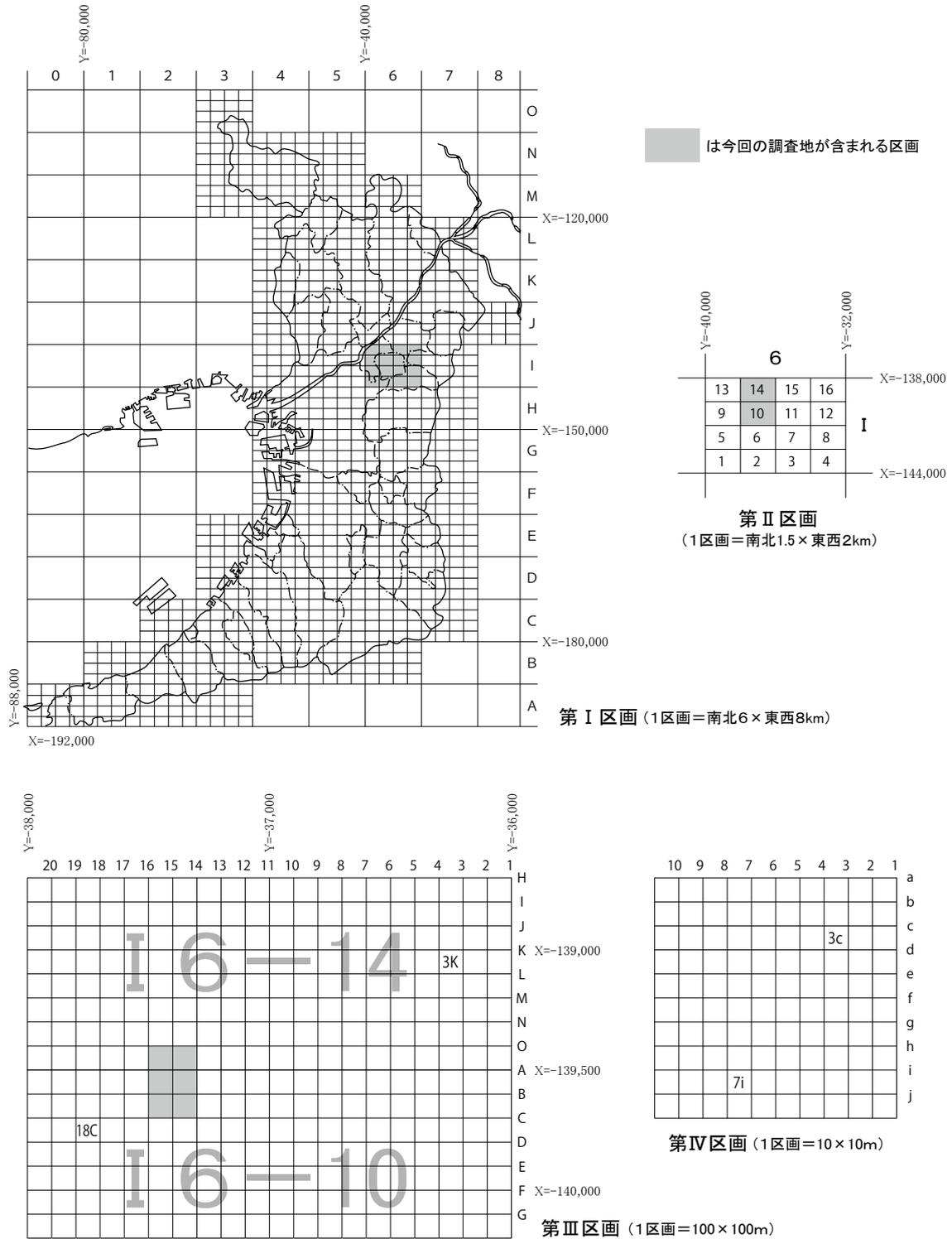


図4 地区割り方法

RAW データと JPEG データを記録した。その際のファイル名は「普賢寺遺跡」の写真であることが分かるように「FGJ-〇〇」と設定した。また調査区の全景写真や重要な遺構など必要に応じて6×7フィルムカメラを併用し、モノクロフィルムとリバーサルフィルムによる写真撮影を行なった。調査区の全景写真を撮影する場合には、高所作業車を利用して高位置からの撮影を行なった。その撮影は調査担当者が行なっている。

遺構図 調査区全体の遺構平面測量は、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量を計7回行ない、50分の1の全体平面図とそれを縮小編集した100分の1の平面図を作成した。また各遺構の断面や遺物

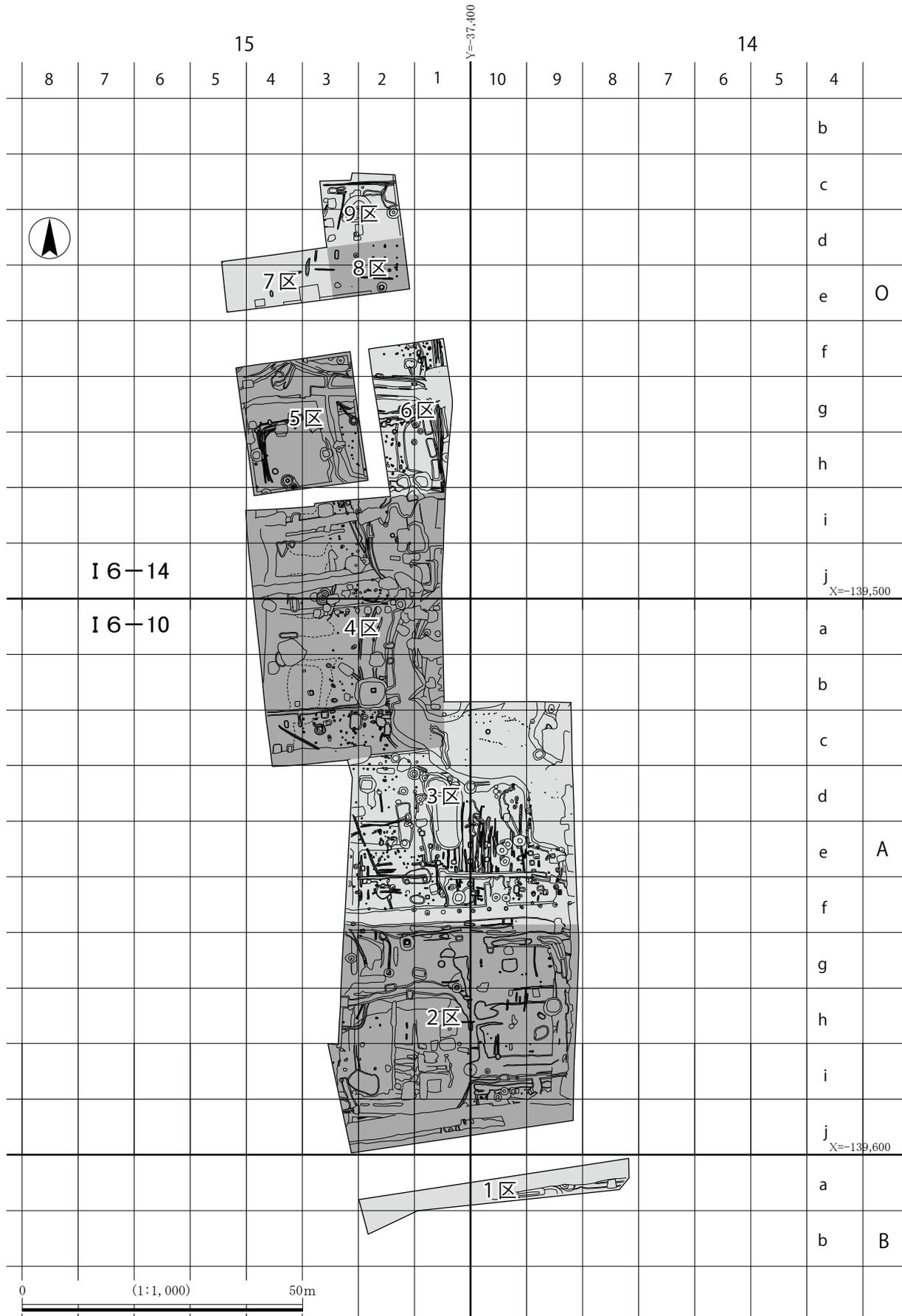


図5 調査区配置と地区割り

出土状況、調査区全体の地層断面などについては、オートレベルや巻尺、コンベックスなどを用いて、随時20分の1や10分の1の図面を作成した。これらの遺構図面はすべて世界測地系に準拠して作成している。

方位は座標北を使用し、水準はすべて東京湾平均海面（T.P.）を用いた。

遺構名 遺構番号は遺構の種類や調査区などに関わらず1から通して振り、遺構の種類は遺構番号の後ろに付した。「1土坑」・「2溝」・「3ピット」という具合である。つまり今回調査を実施した範囲内には、「20溝」と「20土坑」のような同じ番号をもつ遺構は存在しない。ただし複数の柱穴の集合体である掘立柱建物については、上記の遺構番号とは別に集合体の遺構番号を付した。この場合「掘立柱建物1」のように、遺構名称の後に1から番号を付けた。

なお遺物が出土しなかったため、現地で遺構番号を振っていない遺構もある。整理の段階で新たに遺構番号を振る必要が生じた場合に、あまり番号がかけ離れないよう、また複数調査区を同時進行で調査することがあったことから、番号の重複を避けるためにも、事前に各調査区にある程度のまとまりで遺構番号を割り当てた。このため番号が続かずに大きく飛んでいる箇所がある。各調査区に割り当てた遺構番号の開始番号は以下のとおりである。

1区：501～	4区：1～	7区：301～
2区：411～	5区：511～	8区：391～
3区：131～・311～	6区：551～	9区：381～

第2節 整理作業

整理作業についても、公益財団法人大阪府文化財センターが定めた『遺跡調査基本マニュアル』に準拠して行なった。

現地調査期間中は、現場詰所において出土遺物の洗浄や注記、現地にて作成した遺構実測図や撮影した写真の整理など、基礎的な整理作業を現場作業と並行しながら実施し、現地調査終了後の令和3年4月から令和4年1月までは、東大阪市所在の公益財団法人大阪府文化財センター中部調査事務所において、本格的な遺物整理作業及び報告書の作成を進めた。

遺物 整理作業の対象となった遺物は、古墳時代から中世に属するものが中心である。現場撤収時の遺物量は収納コンテナに205箱で、内容は須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器・国産陶器・輸入磁器などの土器、瓦、埴輪、骨や貝、漆器や下駄・毬・男根形木製品・井戸杵などの木製品、五輪塔や宝篋印塔・硯・石鍋などの石製品、仏具や銭貨などの金属製品などである。

出土遺物には原則出土した日付順に登録番号を付し、ブラシやハケを用いて洗浄し、乾燥後は遺物登録台帳と照合できるよう注記作業を行なった。ただし木製品や金属製品、一部の石製品には注記していない。注記は面相筆を用いて遺物の端に小さな文字で登録番号を墨書したが、黒い瓦など墨では目立たない場合には白インクを使用した。なおその注記には調査名も入れ「フゲンジ20-1-遺物登録番号」とした。注記後は遺物の内容が分かるよう登録番号ごとにデジタルカメラで撮影して、調査区・地区割り・出土遺構面/層位・遺構番号・出土年月日・遺物内容などを記入した出土遺物台帳を作成した。また本格的な整理作業が始まった段階で、遺構ごとに広げて接合作業を行ない、出土した遺物の内容を確認しながら、実測可能な遺物を抽出した。抽出したものは必要に応じて石膏を用いた復元作業を行ないながら順次実測作業を行なった。

その際、五輪塔などの石製品や立体的な形象埴輪などについては、三次元写真計測ソフト（Metashape）を使ったデジタル写真測量により図面を作成した。また瓦や土器の文様、銭貨などについては拓本をとった。

上記の手順で作成した手描きの遺物実測図は、スキャナーで原図を取り込み、描画ソフト（Adobe Illustrator）を用いてトレースし、必要に応じてデジタル化した拓本などのデータを貼り込み、挿図を作成した。本書に掲載した遺物は最終的に 754 点となった。掲載遺物については、出土遺物台帳とは別に実測遺物台帳も作成した。

遺構 調査地全体の遺構平面図については、既に空中写真測量によってデジタル化されていたため、調査区ごとの全体平面図や個々の遺構平面図の多くは、これを加工して作成した。現地で実測した個々の遺構断面や遺物出土状況、調査区の地層断面などについては、遺物同様の手順でデジタルトレースし、挿図を作成した。

このように報告書掲載の挿図は、遺物・遺構ともにすべてデジタル化したものを用いた。

写真 現地で撮影したモノクロ・リバーサルフィルムについては、その都度現像・焼き付けに出し、直ちにアルバムへの収納及び台帳登録を進めた。遺構写真台帳へはデジタルカメラで撮影した写真を用い、調査区・地区割り・遺構番号・遺構種類・撮影内容・撮影方向・撮影日・撮影者などとともに、全景写真などフィルム撮影も行なったものについては、収納したフィルムを検索できるよう、アルバム・フィルム番号も記入した。

報告書写真図版のうちの遺構写真については、6×7フィルムからの引き伸ばしではなく、デジタルカメラで撮影した RAW データを色調補正して使用した。使用した写真については、遺構写真台帳にその旨明記している。遺物写真については、挿図のレイアウトがほぼ決まった段階で、大まかに図版レイアウトを組み、中部調査事務所の写真室へ遺物を搬入して撮影を行なった。

報告書編集 これらの作業が進み、挿図や写真図版が大まかに出来上がってきた段階から、並行して本文の執筆に取りかかった。また文章量と調整しながら挿図の組み換えや遺物番号の入れ替えなどを行ない、写真図版と併せて報告書の編集作業も進めた。

収納・保管 整理作業を終えた遺物は、報告書掲載遺物とそれ以外の未掲載遺物に分け、マニュアルにしたがってコンテナに内訳を記したラベルを貼って収納した。収納には内寸が 55×34×15cm のコンテナを主に使用したが、復元して大型化したものや井戸枠などの長大なものについては、内寸 55×34×25cm や 97×30×18cm の異形コンテナ、あるいはダンボール箱を用いた。最終的なコンテナ数は、掲載遺物 83 箱、未掲載遺物 141 箱となった。

図面のうち遺構実測図については、調査区ごとに分けて左上隅に通しの図面番号を赤鉛筆で記入し、調査区・記録内容・縮尺などを明記した遺構図面台帳を作成した後、A2 サイズのファイルに収納した。遺物実測図の収納には A3 サイズのファイルを用いた。

各種台帳やデジタルカメラで撮影した遺構写真、報告書原稿などのデジタルデータは外付けハードディスクに格納した。

これらの出土遺物や実測図面・写真・台帳などの記録類は、報告書刊行後にすべて公益財団法人大阪府文化財センターから門真市に返却し、保管している。

註

1) 財団法人 大阪府文化財センター 2010 『遺跡調査基本マニュアル』

このマニュアル策定後、フィルムカメラ本体やフィルムの製造中止、またフィルム現像所の減少などが相次いだことにより、遺構の撮影がフィルムカメラからデジタルカメラへと移行が進んだ。また整理作業時に作成する各種台帳も、自治体に返却した時の汎用性や簡便性を重視し、ファイルメーカーで作成するものからエクセルの台帳へと変わってきた。これらに伴いマニュアルもその都度こまめに更新している。

第4章 調査の成果

第1節 基本層序

市立第一中学校跡地の調査であるため、校舎解体時の攪乱が多い。特に調査区の周囲は遺構面まで大きく削られており、通常の調査のような調査区壁面での地層堆積状況の観察が困難であった。

攪乱が及んでいないグラウンドにあたる箇所については、全体に0.5 mほどの厚さの盛土が施されており、その下には学校が建設される直前の旧表土層が観察できる。この旧表土層直下が遺構面となる箇所もあるが、広範囲で「1層」とした遺物包含層が認められた。

以下、調査区ごとに詳細を記す。

【1区】

校舎の攪乱により調査区の西半や北半は完全に遺構面が失われていた。断面観察できた壁面は南東隅の一部だけである。

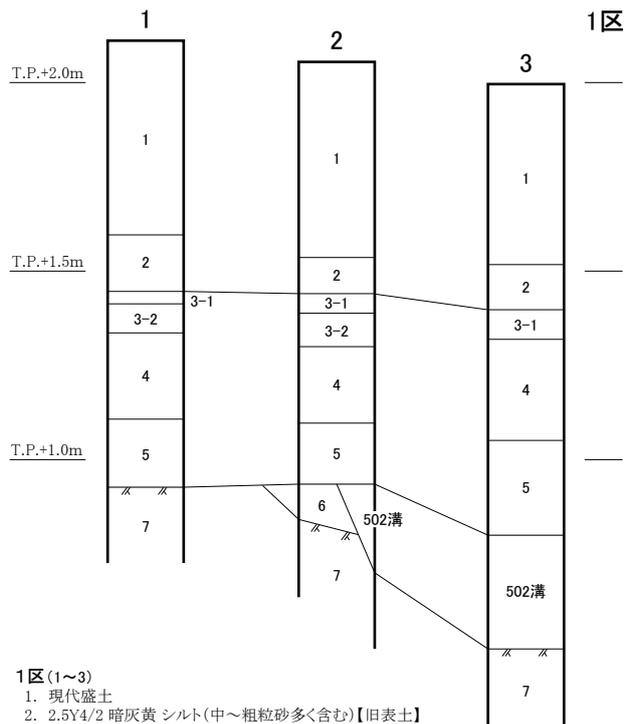
現地盤は T.P. + 2.0 ~ 2.15 m 前後で、旧表土層下面是 T.P. + 1.40 ~ 1.45 m である。この下に3層に分層できる遺物包含層が堆積する。1層は中粒砂~中礫を多く含む褐色、あるいは黒褐~暗褐色の粘土質シルト、2層は細粒砂~中礫や黄褐色の粘土質シルト偽礫が混じるにぶい黄褐色の粘土質シルト、3層は中~粗粒砂や中礫が僅かに混じる黄灰色のシルト質粘土である。これらが計0.5 ~ 0.6 mの厚さあり、遺構面となる。遺構面は T.P. + 0.8 ~ 0.9 m である。

1~3層からは瓦(1~5)が多く出土している。図示した瓦以外に、土器では土師器皿・羽釜、瓦器碗、瓦質土器火鉢、東播系須恵器片口鉢、陶器挿鉢、白磁などが僅かに出土している。いずれも12世紀から15世紀のもので、時期幅がある。1~3の巴文軒丸瓦のうち2・3は左巻きである。15世紀代か。1は小片であるが13世紀代のもと思われる。4の唐草文軒平瓦は顎貼り付け技法により瓦当を接合する。13世紀後半から14世紀前半。

【2区】

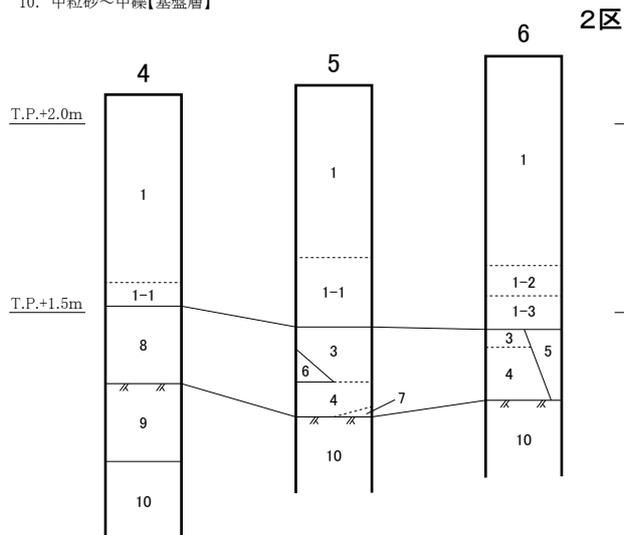
調査区の南辺と東辺が校舎の攪乱により大きく削られていたため、断面観察できたのは調査区西辺の壁面だけである。

現地盤は T.P. + 2.1 ~ 2.2 m である。何層にもなる現代の盛土が0.5 ~ 0.75 mの厚さで広がっており、旧表土層はあまり残っていない。その盛土の下に1層とした灰黄褐~にぶい黄褐色粘土質シルトが0.2 ~ 0.25 mの厚さで堆積し、その下面が遺構面となる。調査区東半部では部分的に1層が厚い箇所もあったことから、適宜上下に分層して遺物を取り上げている。遺構面の高さは西半が高く T.P. + 1.2 ~ 1.3 m であるが、東に向かって緩やかに下がっており、東半部の低い箇所では T.P. + 1.1 m 前後となる。遺構面以下は、南西部では細~中粒砂が僅かに混じるにぶい黄褐~褐色粘土質シルトが約0.2 m堆積し、砂礫層となるが、北西部では遺構面直下が砂礫層となる。東半部では砂礫層の上に中~粗粒砂、また下部には細~中礫も混じる灰黄褐~にぶい黄褐色粘土質シルトが約0.2 mの厚さで認められる。調査区北西部(図15 一点鎖線部)は、基盤の砂礫層が若干窪んでおり、その窪みに古墳時代の遺物包含層と2層とした中粒砂~細礫が混じる黒褐色粘土質シルトが薄く認められる。調査では古墳時代の遺物包含層を溝と誤認して掘削してしまい、窪み内の2層とも分離ができていない。これについては第3節で報告する。

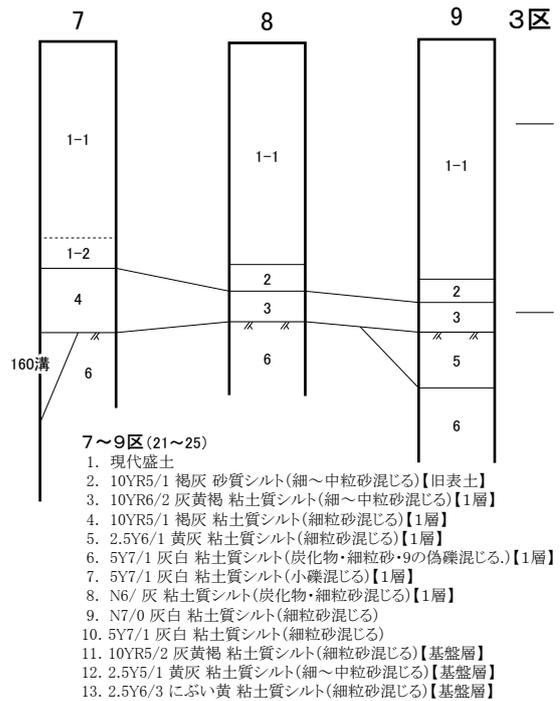
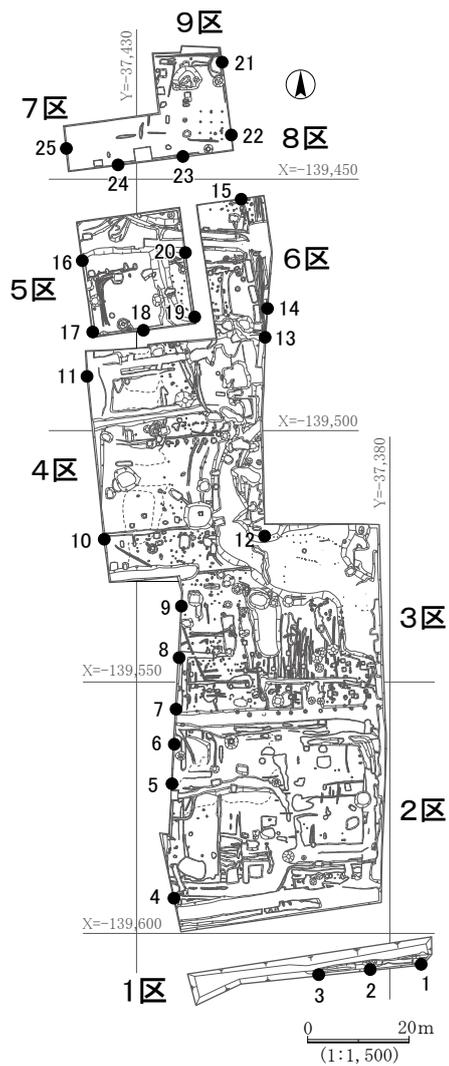


- 1区(1~3)**
1. 現代盛土
 2. 2.5Y4/2 暗灰黄シルト(中~粗粒砂多く含む)【旧表土】
 - 3-1. 10YR4/4 褐粘土質シルト(中粒砂~細礫多く含む)【1層】
 - 3-2. 10YR3/2~3/3 黒褐~暗褐粘土質シルト(中粒砂~中礫多く含む)【1層】
 4. 10YR4/3 にぶい黄褐粘土質シルト(10YR5/6 黄褐粘土質シルト偽礫混じる(下部に特に多い). 細粒砂~細礫多く含む. 中礫混じる)【2層】
 5. 2.5Y5/1~4/1 黄灰シルト質粘土(中~粗粒砂や中礫わずかに混じる)【3層】
 6. 7.5YR4/1~10YR4/2 灰~灰黄褐粘土質シルト(中粒砂~中礫多く含む. 瓦含む)
 7. 上層は2.5Y6/2 灰黄粘土. 下層は2.5Y6/2 灰黄 細粒砂~中礫

- 2区(4~6)**
- 1-1. 現代盛土
 - 1-2. 現代盛土
 - 1-3. 現代盛土
 3. 10YR4/2 灰黄褐粘土質シルト【1層】
 4. 10YR4/3 にぶい黄褐粘土質シルト(1より粘土質)【1層】
 5. 10YR4/1~4/2 褐灰~灰黄褐粘土質シルト(中粒砂~細礫多く含む)【1層】
 6. 10YR4/2 灰黄褐粘土質シルト(中粒砂~細礫非常に多く含む. 炭混じる)【1層】
 7. 10YR4/1 褐灰粘土質シルト(中粒砂~細礫多く含む)【1層】
 8. 10YR5/2~4/3 灰黄褐~にぶい黄褐粘土質シルト(2.5Y6/4 にぶい黄シルト偽礫混じる)【1層】
 9. 10YR4/3~4/4 にぶい黄褐~褐粘土質シルト(細~中粒砂わずかに混じる)【基盤層】
 10. 中粒砂~中礫【基盤層】

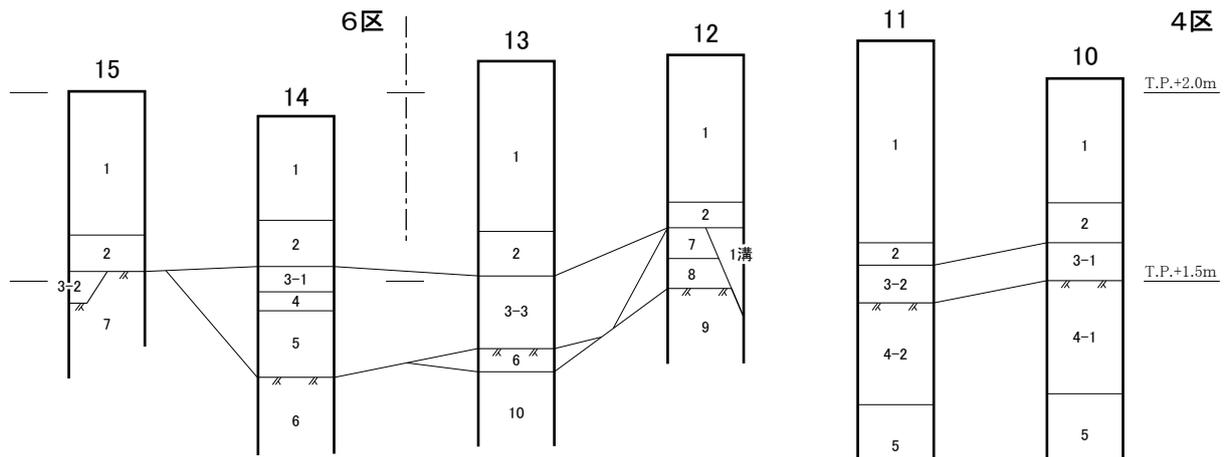


- 3区(7~9)**
- 1-1. 現代盛土
 - 1-2. 現代盛土
 2. 2.5Y5/2~4/2 暗灰黄シルト(細~中粒砂混じる)【旧表土】
 3. 10YR4/3~3/3 にぶい黄褐~暗褐粘土質シルト(中粒砂~細礫多く含む)【1層】
 4. 10YR4/2 灰黄褐粘土質シルト(中粒砂~小礫非常に多く含む)【1層】
 5. 10YR4/3~3/3 にぶい黄褐~暗褐粘土質シルト(中粒砂~細礫少量混じる)【基盤層】
 6. 10YR4/3~2.5Y4/3 にぶい黄褐~オリブ褐 中粒砂~大礫(粘土質シルト混じる)【基盤層】



- 7~9区(21~25)**
1. 現代盛土
 2. 10YR5/1 褐灰 砂質シルト(細~中粒砂混じる)【旧表土】
 3. 10YR6/2 灰黄褐粘土質シルト(細~中粒砂混じる)【1層】
 4. 10YR5/1 褐灰粘土質シルト(細粒砂混じる)【1層】
 5. 2.5Y6/1 黄灰粘土質シルト(細粒砂混じる)【1層】
 6. 5Y7/1 灰白粘土質シルト(炭化物・細粒砂・9の偽礫混じる)【1層】
 7. 5Y7/1 灰白粘土質シルト(小礫混じる)【1層】
 8. N6/ 灰粘土質シルト(炭化物・細粒砂混じる)【1層】
 9. N7/0 灰白粘土質シルト(細粒砂混じる)
 10. 5Y7/1 灰白粘土質シルト(細粒砂混じる)
 11. 10YR5/2 灰黄褐粘土質シルト(細粒砂混じる)【基盤層】
 12. 2.5Y5/1 黄灰粘土質シルト(細~中粒砂混じる)【基盤層】
 13. 2.5Y6/3 にぶい黄粘土質シルト(細粒砂混じる)【基盤層】

図6 基本層序柱状断面(1)

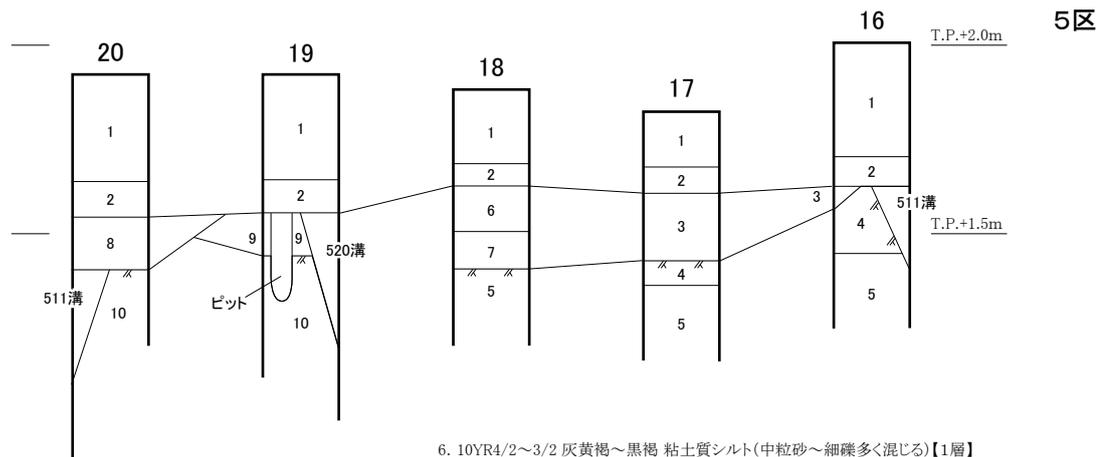


6区 (14~15)

1. 現代盛土
2. 2.5Y4/2 暗灰黄 砂質シルト(中粒砂~細礫多く含む)【旧表土】
- 3-1. 10YR5/2~4/2 灰黄褐 シルト(中粒砂~細礫多く含む)【1層】
- 3-2. 2.5Y4/2~4/3 暗灰黄~オリーブ褐 粘土質シルト(中~粗粒砂混じる)【1層】
4. 10YR5/3 にぶい黄褐 砂質シルト(中粒砂~細礫非常に多く含む)【1層】
5. 10YR4/2~4/3 灰黄褐~にぶい黄褐 シルト(中~粗粒砂混じる)【1層】
6. 10YR5/2~10YR5/3 灰黄褐~にぶい黄褐 粘土質シルト(細~中粒砂混じる。縮りあり)【基盤層】
7. 5Y4/2~3/2 灰オリーブ~オリーブ黒 シルト質粘土(縮りあり)【基盤層】

4区 (10~13)

1. 現代盛土
2. 2.5Y4/1 黄灰 砂質シルト(細~粗粒砂混じる)【旧表土】
- 3-1. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト質粘土(中粒砂~細礫含む)【1層】
- 3-2. 10YR5/2~5/3 灰黄褐~にぶい黄褐 粘土【1層】
- 3-3. 10YR5/2~4/2 灰黄褐 粘土質シルト(中粒砂~小礫少量混じる)【1層】
- 4-1. 10YR4/1 褐灰 粘土【基盤層】
- 4-2. 10YR4/2~3/2 灰黄褐~黒褐 シルト質粘土(粗粒砂~細礫混じる)【基盤層】
5. 砂礫(礫はφ5cm大が多い)【基盤層】
6. 中粒砂~小礫(10YR4/1 褐灰 粘土混じり)【基盤層】
7. 10YR5/2~4/6 灰黄褐~褐 粘土質シルト(粘性強い、中粒砂~小礫混じる)【古墳盛土か】
8. 中粒砂~小礫(10YR4/1 褐灰 粘土混じる)【古墳盛土か】
9. 2.5Y6/4 にぶい黄 細~粗粒砂(細礫~小礫多く混じる)【基盤層】
10. 10YR5/6~2.5Y6/2 黄褐~灰黄 細~中粒砂(極粗粒砂~細礫混じる)



5区 (16~20)

1. 現代盛土
2. 2.5Y4/2 暗灰黄 砂質シルト(細~粗粒砂多く含む)【旧表土】
3. 10YR4/3~5/3 にぶい黄褐 粘土質シルト(細~中粒砂混じる)【1層】
4. 10YR4/3~3/3 にぶい黄褐~暗褐 シルト(細~粗粒砂多く含む)【基盤層】
5. 中粒砂~中礫【基盤層】

6. 10YR4/2~3/2 灰黄褐~黒褐 粘土質シルト(中粒砂~細礫多く混じる)【1層】
7. 10YR4/3~3/2 にぶい黄褐~黒褐 粘土質シルト(中粒砂~細礫多く含む)【1層】
8. 10YR4/2~4/3 灰黄褐~にぶい黄褐 シルト(中粒砂~細礫多く含む)【1層】
9. 10YR4/2~2.5Y4/2 灰黄褐~暗灰黄 シルト質粘土(2.5Y6/3~6/4 にぶい黄 シルト~細粒砂あるいは粘土の大型偽礫非常に多く混じる)【整地層】
10. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト質粘土(縮りあり。細~中粒砂わずかに混じる)【基盤層】

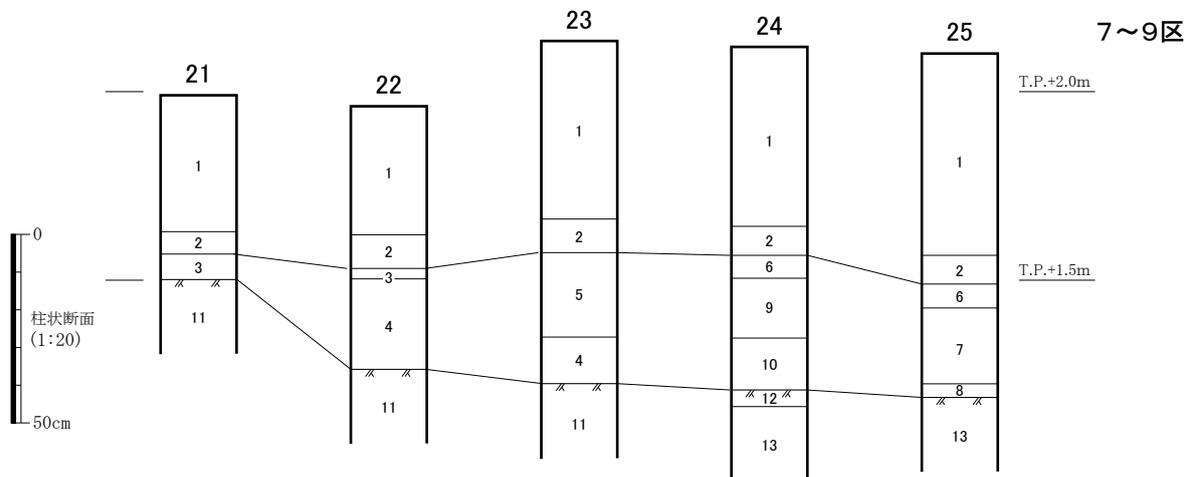


図7 基本層序柱状断面(2)

部分的に1層を上下に分けて遺物を取り上げたが、時期差は認められない。土師器皿（8～11・27～29）・羽釜（25）、瓦器椀（12）、瓦質土器羽釜・播鉢・火鉢（19・20）、東播系須恵器片口鉢（17）、陶器碗（16・31）・片口（30）・甕・壺・播鉢（18・26）、白磁皿（32）、瓦（6・7・15・33）、石鍋（34）のほか、古墳時代の須恵器（13・14・21～24）など時期幅のある遺物が多く出土している。土師器皿は15世紀代のものが大半を占める。18・26は14世紀後半から15世紀前半の備前焼播鉢で、26がやや古い。20は方形を呈する。16・30・31は瀬戸美濃系灰釉陶器である。16は14世紀後半から15世紀前半、31は14世紀の所産。30も14世紀代の把手付片口で、把手部に細工を施す。6は14世紀前半の巴文軒丸瓦で、46と同範。7は14世紀の幾何学文軒平瓦。今回の調査で同範瓦が数点出土している。15は12世紀後半から13世紀前半の剣頭文軒平瓦。顎は折り曲げ技法による。33は外区に珠文、内区に「大」の字を連ねた13世紀の幾何学文軒平瓦である。405と同範。古墳時代の須恵器には蓋（13）、高杯（14・21・22）、甕（23）、甕（24）などがある。いずれも6世紀後半のもので、その多くは後述する414溝の南肩部周辺から出土している。溝肩部に広がっていたものが、後世の攪拌、あるいは調査時の掘り過ぎによって1層中に混入したものと考えられる。

2層には、ほかではあまり出土しない8世紀代の須恵器（35～37）が数点含まれていた。35は杯蓋、36は壺、37は杯である。このことから、8世紀の堆積であった可能性も考えたが、13世紀から14世紀前半頃の遺物も確実に含まれている。1層の遺物が混入したのも多いと考えられるが、排除できる数ではないことから、中世の整地層と考えておきたい。なお上記のとおり、誤認により2層と古墳時代の遺物包含層とを厳密に分離できていなかったため、6世紀後半の須恵器や埴輪片も混じっている。

【3区】

調査区の東辺が校舎の攪乱により大きく削られていたため、断面観察できたのは調査区西辺と北辺の壁面だけであるが、北壁の断面についてはその大半が1溝にあたっている。

現地盤はT.P. + 2.0～2.2 mで、旧表土層の下面はT.P. + 1.55～1.6 mである。この下に中粒砂～小礫を非常に多く含む灰黄褐色粘土質シルト、あるいは中粒砂～細礫を多く含むにぶい黄褐～暗褐色粘土質シルトの1層が0.08～0.15 mの厚さで堆積し遺構面となる。遺構面の高さは西半が高くT.P. + 1.45 m前後であるが、東に向かって緩やかに下がっており、東半部ではT.P. + 1.3 mとなる。遺構面より下は、直ちに砂礫層となる箇所もあるが、4区寄りでは、砂礫層の上に中粒砂～細礫が少量混じるにぶい黄褐～暗褐色粘土質シルトが、また東半部では、2区と同様の中～粗粒砂が混じる灰黄褐～にぶい黄褐色粘土質シルトが0.1～0.2 mの厚さで認められる。

1層からは、土師器皿、瓦器椀（39）、瓦質土器羽釜・火鉢、陶器甕、瓦、古墳時代の須恵器・埴輪片（38）など時期幅のある遺物が多く出土している。瓦器椀や土師器皿は12世紀後半から14世紀代のものまで含んでいる。39は14世紀前半の和泉型である。38は形象埴輪の一部であるが、全体の形状は不明。粘土板を張り合わせて、その表面を刺突して文様を刻む。草の文様を表現したものと思われる。その装飾箇所下部が丸く湾曲しており、鞍褥など馬具の一部と考えられる。よく似た鞍褥の表現は、京都府上人ヶ平遺跡出土の馬形埴輪¹⁾などにもみられる。

【4区】

調査区の北東隅が校舎の攪乱により大きく削られており、西辺と南辺も壁面に沿って攪乱が重なっていたため、断面観察できた壁面は東辺・北辺・西辺の一部のみである。

現地盤はT.P. + 2.0～2.15 mで、旧表土層の下面はT.P. + 1.5～1.6 mである。この下に灰黄褐～に

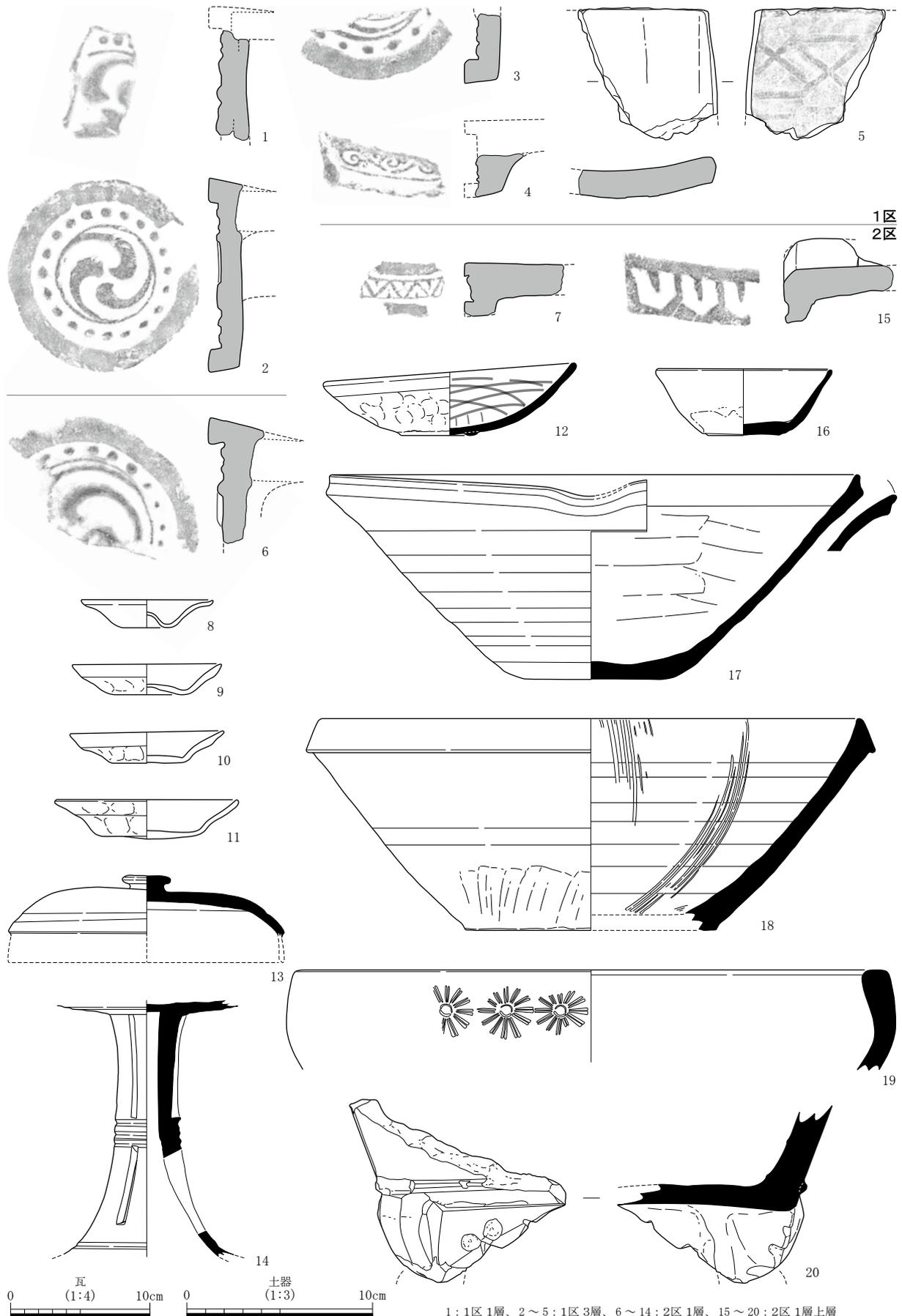


图8 1·2区 遺物包含層出土遺物

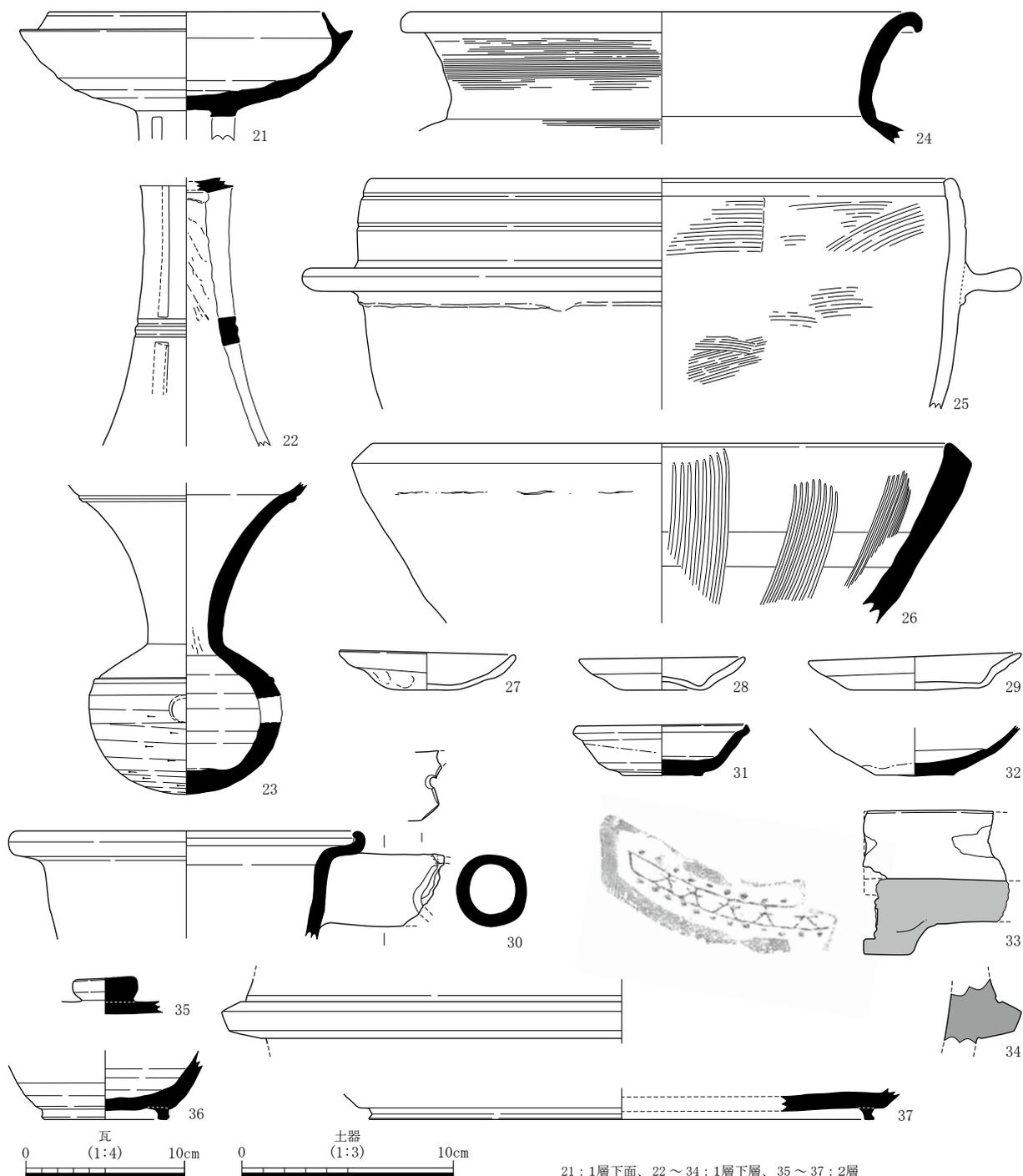


図9 2区 遺物包含層出土遺物

ぶい黄褐色粘土や中粒砂～細礫を含む暗灰黄色シルト質粘土、あるいは中粒砂～小礫が少量混じる灰黄褐色粘土質シルトなどの1層が0.1～0.2 mの厚さで堆積し、遺構面となる。遺構面の高さはT.P. + 1.3～1.5 m前後である。遺構面以下は、西部部では粗粒砂～細礫が混じる灰黄褐～黒褐色のシルト質粘土や褐灰色粘土が厚い箇所0.3 mほど堆積し、砂礫層となるが、この層は遺構検出段階で溝状に検出できたことから、遺構と誤認して掘削してしまった。これについては第5節で報告する。

1溝で囲まれた東壁際では、旧表土層の下に中粒砂～小礫が混じる粘性の強い灰黄褐～褐色粘土質シルトと、その下に褐灰色の粘土が混じる中粒砂～小礫があり、それを除去した面が安定した細礫～小礫が多く混じる細～粗粒砂となるが、表土層下の二つの地層については1溝よりも古い堆積であり、古墳の盛土で

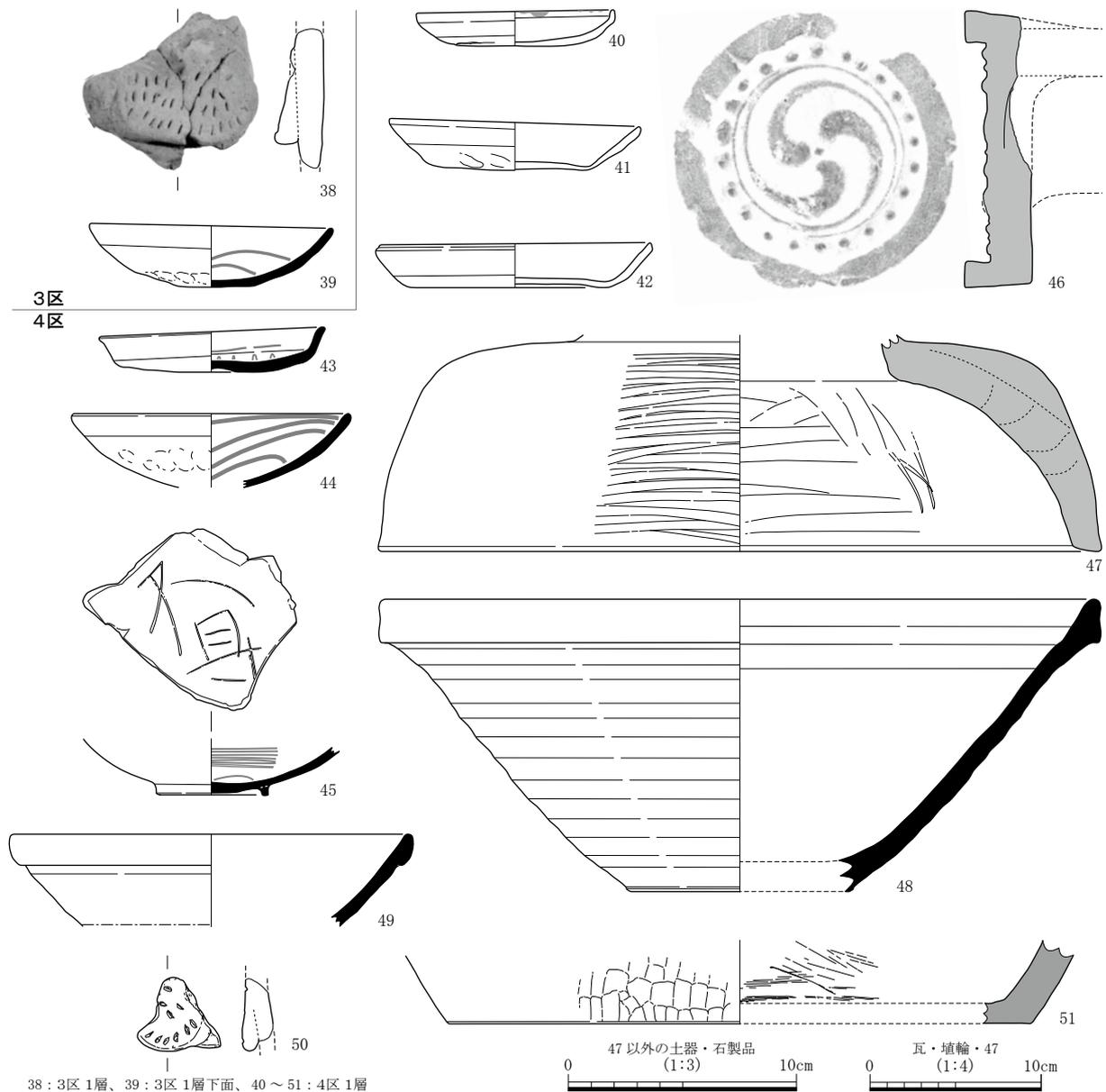


図10 3・4区 遺物包含層出土遺物

あった可能性が高い。詳細については図39に示した。

1層からは、土師器皿(40~42)・羽釜、瓦器碗(44・45)・皿(43)、瓦質土器足釜・播鉢・火鉢・蓋形土製品(47)、東播系須恵器片口鉢(48)、陶器甕、白磁碗(49)、瓦(46)、石鍋(51)、古墳時代の須恵器・埴輪片(50)など時期幅のある遺物が多く出土している。

土師器皿や瓦器碗は12世紀後半から15世紀代のもまで含んでいる。このうち45は12世紀後半のもので、内面見込みに「不口」の文字を線刻する。40は45と同時期の燈明皿である。46は14世紀前半の巴文軒丸瓦。瓦当中央に文様作成時の中心点が認められることを特徴とする。また瓦当裏面中央には円形の窪みがあり、丸瓦との接合時に充填されていることが観察できる。同範瓦が多く出土していることから、この時期に建物の造営や建て替えが行なわれたことがうかがえる。47は瓦質で、器壁が厚い蓋形を呈する。外面は横位のヘラミガキで、天井部に円窓が開く。宝珠と組む伏鉢の可能性も考えられる(88頁写真4)。50は3区1層出土の38によく似た形象埴輪の一部である。表面を刺突して文様を刻む。これも下部が丸く湾曲しており、馬具の一部を表したものと考えられる。

【5区】

攪乱によって遺構面が破壊されることなく、四方の壁面で地層の堆積状況を確認できた。ただし北辺の大半は511溝内である。

現地盤は T.P. + 1.8 ~ 2.0 m で、旧表土層の下面は T.P. + 1.55 ~ 1.6 m である。これより下の状況は調査区を南北に縦断する 520 溝の東側と西側ではやや異なる。溝の西側は、旧表土層の下に細～中粒砂が混じるにぶい黄褐色粘土質シルトの 1 層が 0.1 ~ 0.2 m の厚さで堆積し、遺構面となる。遺構面の高さは T.P. + 1.4 ~ 1.5 m 前後で、それより下に細～粗粒砂を多く含むにぶい黄褐～暗褐色シルトが 0.1 m 弱の厚さであり、砂礫層となる。溝より東側では、北半に中粒砂～細礫を多く含む灰黄褐～にぶい黄褐色シルトの 1 層が約 0.1 m の厚さでみられ、遺構面となるが、南半には 1 層は認められず、旧表土直下が遺構面となる。遺構面の高さは T.P. + 1.4 ~ 1.55 m である。この遺構面の下にはにぶい黄色のシルト～細粒砂、あるいは粘土の大型偽礫が非常に多く混じる灰黄褐～暗灰黄色のシルト質粘土が 0.1 m から厚い箇所 0.25 m の厚さで認められる。この周辺で検出したピットなどの遺構はこの層の上面から掘り込まれていることから、中世の整地層であったと考えられる。この整地層の下は細～中粒砂が僅かに混じる締りのある暗灰黄色シルト質粘土となる。この 520 溝より東側の堆積状況は、6 区の西辺部も同じである。

1 層からは、土師器皿・羽釜、瓦器椀、瓦質土器火鉢 (54)、陶器播鉢 (55)、青磁碗 (56)、瓦 (52・53) などが出土している。54 は文様帯を軒平瓦の瓦当文様に似た唐草文と 2 個一対の珠文で飾る。15 世紀。55 は 15 世紀末頃の備前焼。52 は 13 世紀の左巻き巴文軒丸瓦。249 と同範と思われる。53 は中心飾りに菱形を配する 14 世紀前半の菱形唐草文軒平瓦である。多くの同範瓦が出土している。

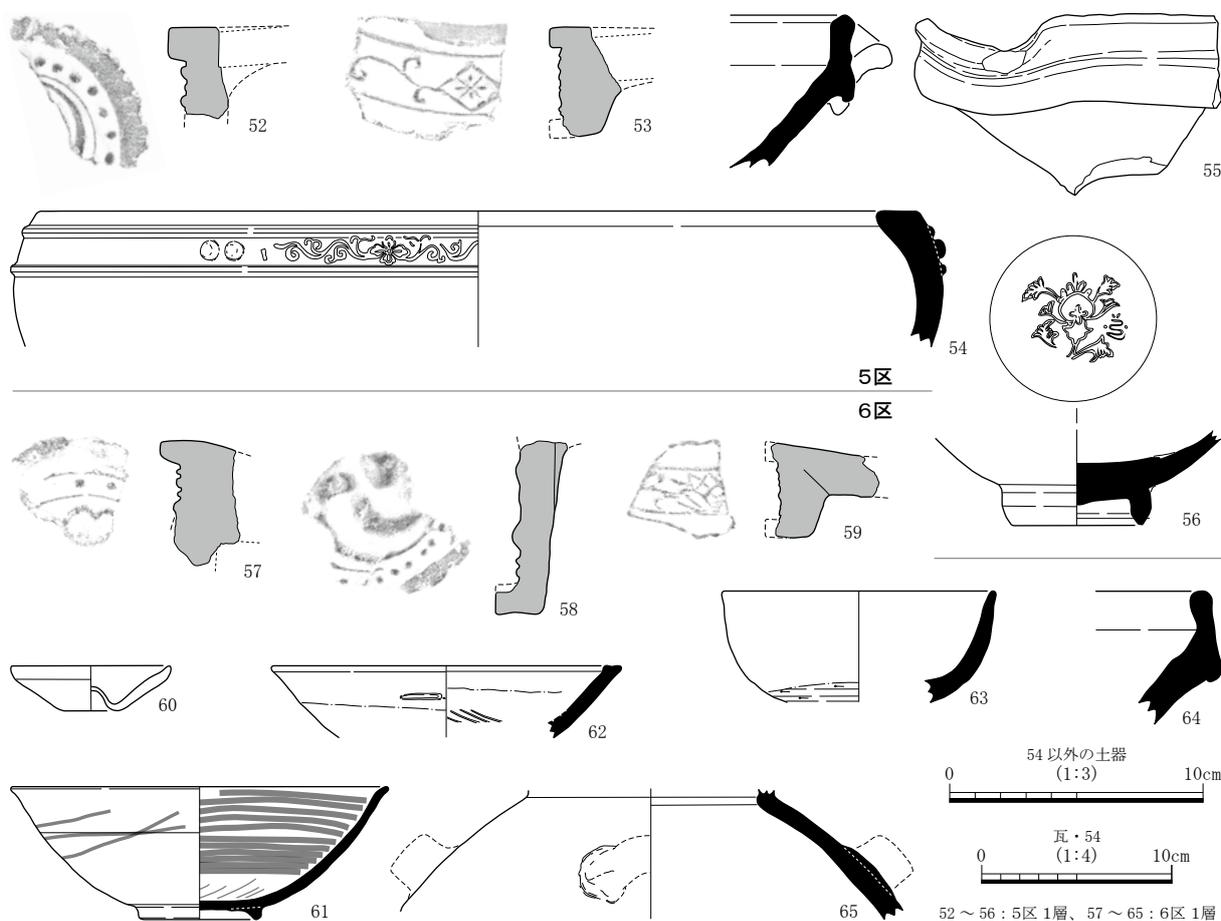


図 11 5・6区 遺物包含層出土遺物

【6区】

攪乱による遺構面の破壊はほとんどないが、大型の遺構と重なっている箇所が多く、基本層序を観察できるのは各壁面の一部分のみである。

現地盤は T.P. + 1.8 ~ 2.0 m で、旧表土層の下面は T.P. + 1.45 ~ 1.55 m である。これより下の状況は、調査区を南北に縦断する 11 溝の東側と西側でやや異なる。溝の西側は 5 区東辺部の状況と全く同じで、現代盛土あるいは旧表土層の下が直ちに整地層となり、この上面でピットなどの遺構が検出できる。遺構面の高さは T.P. + 1.45 m である。11 溝より東側では、旧表土層の下に 3 層に細分できる中～粗粒砂・細礫を含む灰黄褐～にぶい黄褐色のシルトや、砂質シルトなどの 1 層が 0.2 ~ 0.3 m の厚さで堆積し、遺構面となる。遺構面の高さは T.P. + 1.25 ~ 1.3 m で、これより下は細～中粒砂が混じる締りのある灰黄褐～にぶい黄褐色粘土質シルトとなる。北辺部も旧表土層の直下が遺構面で、それより下は締りのある灰オリーブ～オリーブ黒色シルト質粘土となる。

1 層からは、土師器皿 (60)・羽釜、瓦器椀 (61)、瓦質土器足釜、陶器卸皿 (62)・碗 (63)・甕・壺・播鉢 (64)、白磁四耳壺 (65)、瓦 (57 ~ 59) が出土している。瓦器椀や土師器皿は 14 世紀前半のものまで含んでいる。60 は 15 世紀後半のいわゆるへそ皿で、底部が大きく突出する。61 は 12 世紀後半の和泉型で、見込みの暗文は平行線。62 は 14 世紀後半から 15 世紀前半の瀬戸美濃系灰釉陶器、63 は 14 世紀代の天目茶碗である。64 は 15 世紀末頃の備前焼。57 は 12 世紀後半のものと考えられる複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、58 は 13 世紀の左巻き巴文軒丸瓦。59 は 13 世紀後半から 14 世紀前半の蓮華唐草文軒平瓦で、瓦当貼り付け技法により製作されている。多くの同范瓦が出土している。

【7～9区】

商店街を貫く東西道路より北側に位置しており、1～6区とは隔てる。校舎による攪乱もなく、すべての壁面で地層堆積状況を観察できた。

現地盤は T.P. + 2.0 ~ 2.15 m で、旧表土層の下面は T.P. + 1.5 ~ 1.6 m である。これより下の地層は 8・9区では水平方向に同様の堆積がみられるが、7区南半部は地層が乱れていて一定ではない。おそらく 5区で検出した東西方向の溝 (511 溝) の影響と考えられる。8・9区の東辺部では旧表土層の下に、細～中粒砂が混じる灰黄褐色粘土質シルトや、細粒砂が混じる褐灰色粘土質シルトなどの 1 層が、9区北端では 0.05 m、8区南端では 0.3 m ほどの厚さで堆積し、遺構面となる。遺構面の高さは南に向かって緩やかに下がっており、9区北端では T.P. + 1.5 m、8区南端では T.P. + 1.25 m となる。遺構面以下は細粒砂混じりの灰黄褐色粘土質シルトとなる。

8区の南辺部では旧表土層の下に、東方から続く細粒砂混じりの黄灰色や褐灰色の粘土質シルトが 0.3 ~ 0.35 m の厚さで堆積し、遺構面となるが、7区になると上記のとおり 5区検出の溝の影響で地層が乱れる。旧表土層の下は 3層に細分できる細粒砂混じりの灰白色粘土質シルトとなり、遺構面となる。西辺部の北半は溝の影響が及ばず安定する。旧表土層の下に細粒砂や小礫が混じる灰白色粘土質シルトや、炭化物や細粒砂が混じる灰色粘土質シルトが 0.3 m 強の厚さで堆積し、遺構面となる。遺構面の高さは T.P. + 1.2 ~ 1.25 m で、8区側とほとんど変化はない。遺構面以下は細粒砂混じりにぶい黄色粘土質シルトとなる。

1 層からは、土師器皿・羽釜、瓦器椀、瓦質土器火鉢、東播系須恵器片口鉢、陶器碗、瓦など 12 世紀後半から 15 世紀代の遺物が僅かに出土している。

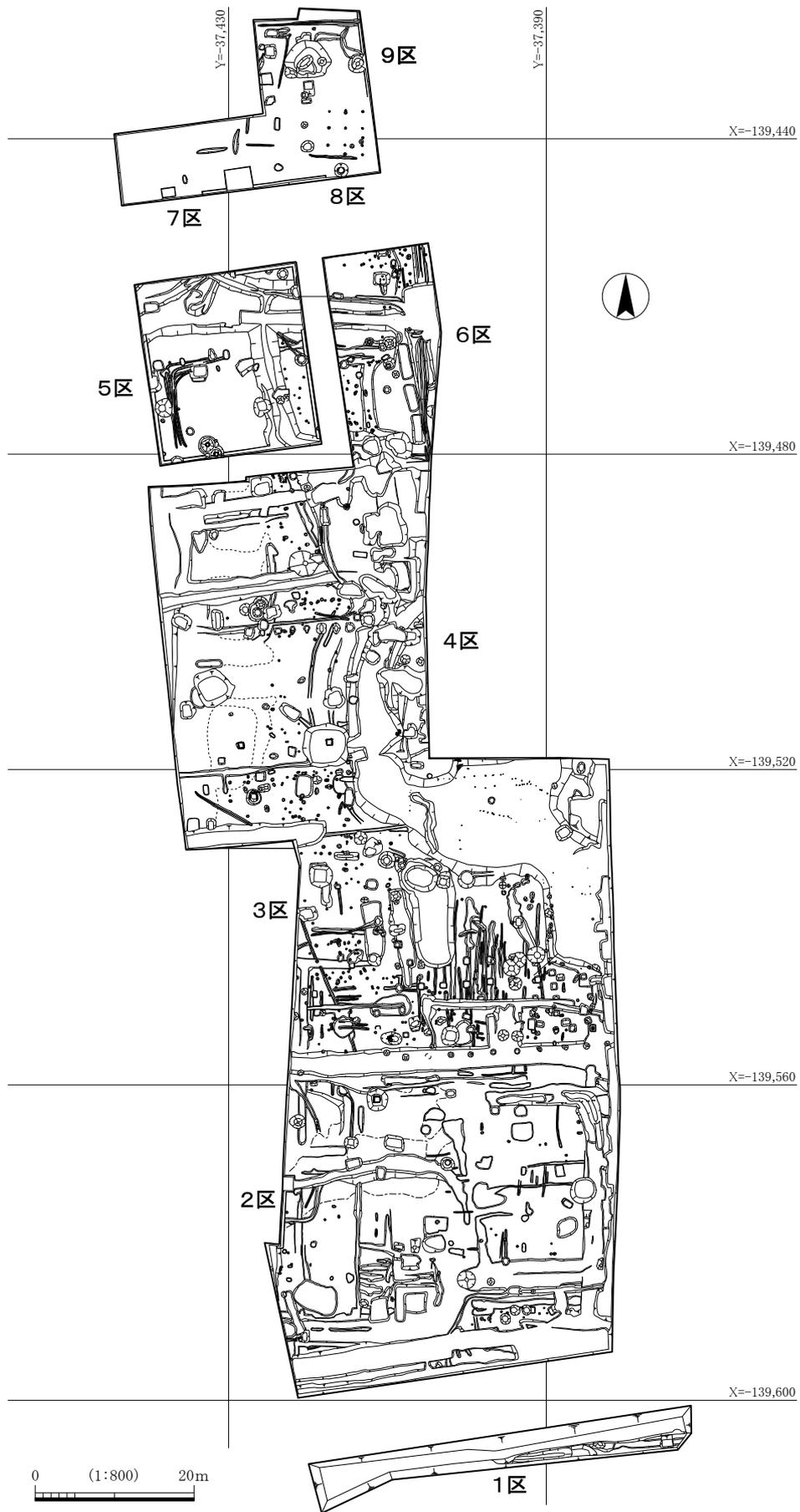


图 12 調査区全体遺構平面

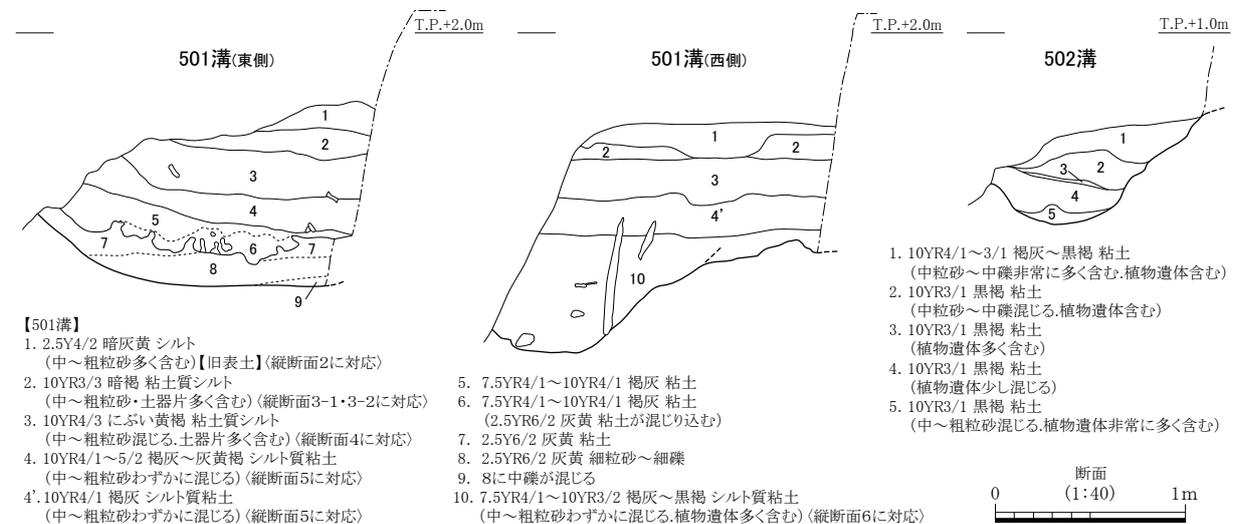
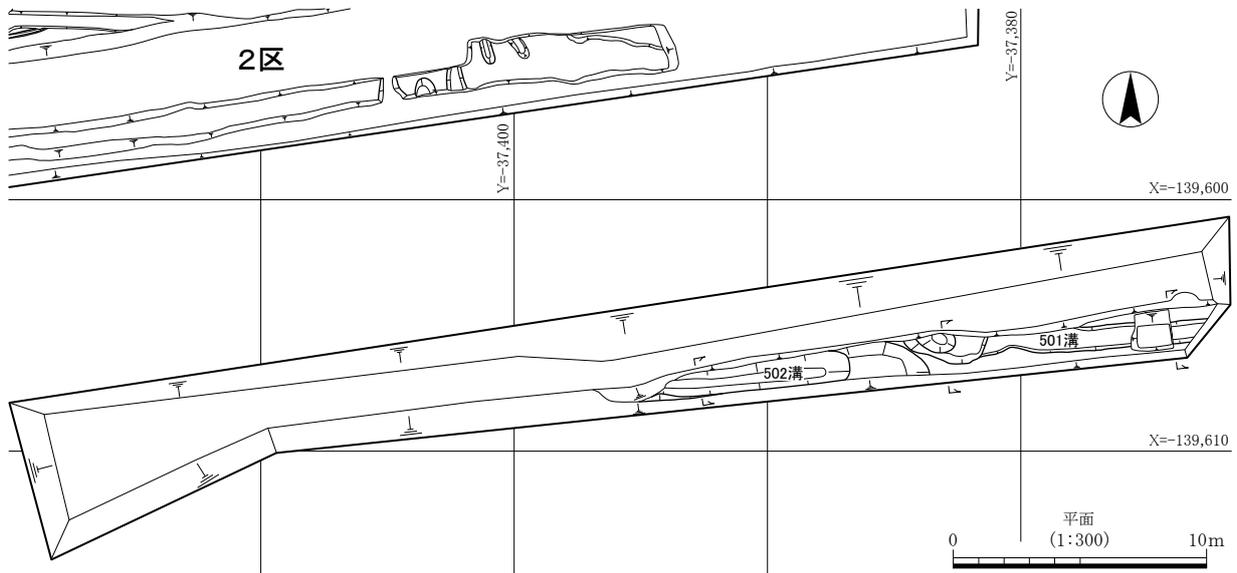
第2節 1区の成果

市立第一中学校跡地の南辺に位置する。幅が狭く東西方向に長い調査区で、調査面積は217㎡である。道路を隔ててこのすぐ南側には、柿経や絵馬、人面墨書土器などが出土した昭和61年（1986）の調査区が接することから、同様の遺構が続くのではないかと期待されたが、校舎の攪乱により調査区の西半と東半北辺は遺構面が大きく削られ、まったく残っていない。南東隅部で僅かに遺構面が残っており、辛うじて溝2条を検出することができた。

501溝 調査区東端に位置する。東西方向の溝で、幅は約0.9～0.95mを測る。深さは0.05～0.1m程度と浅いが、西端は土坑状に0.6mほど深くなる。土坑と重複していたのかもしれない。溝の埋土は灰黄色の粘土が混じり込む褐灰色粘土で、西端の深い箇所は、中～粗粒砂が僅かに混じり、植物遺体を多く含む褐灰～黒褐色のシルト質粘土である。

瓦（76）が出土している。巴文軒丸瓦の小片で、1と同範と思われる。13世紀代のものであろう。

502溝 501溝の西側に位置する。501溝と同様の東西方向の溝であるが、南肩は調査区外で、北肩は



【501溝】

1. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト
(中～粗粒砂多く含む)【旧表土】(縦断面2に対応)
2. 10YR3/3 暗褐 粘土質シルト
(中～粗粒砂・土器片多く含む)(縦断面3-1・3-2に対応)
3. 10YR4/3 にぶい黄褐 粘土質シルト
(中～粗粒砂混じる。土器片多く含む)(縦断面4に対応)
4. 10YR4/1～5/2 褐灰～灰黄褐 シルト質粘土
(中～粗粒砂わずかに混じる)(縦断面5に対応)
- 4'. 10YR4/1 褐灰 シルト質粘土
(中～粗粒砂わずかに混じる)(縦断面5に対応)

5. 7.5YR4/1～10YR4/1 褐灰 粘土
6. 7.5YR4/1～10YR4/1 褐灰 粘土
(2.5YR6/2 灰黄 粘土が混じり込む)
7. 2.5Y6/2 灰黄 粘土
8. 2.5YR6/2 灰黄 細粒砂～細礫
9. 8に中礫が混じる
10. 7.5YR4/1～10YR3/2 褐灰～黒褐 シルト質粘土
(中～粗粒砂わずかに混じる。植物遺体多く含む)(縦断面6に対応)

1. 10YR4/1～3/1 褐灰～黒褐 粘土
(中粒砂～中礫非常に多く含む。植物遺体含む)
2. 10YR3/1 黒褐 粘土
(中粒砂～中礫混じる。植物遺体含む)
3. 10YR3/1 黒褐 粘土
(植物遺体多く含む)
4. 10YR3/1 黒褐 粘土
(植物遺体少し混じる)
5. 10YR3/1 黒褐 粘土
(中～粗粒砂混じる。植物遺体非常に多く含む)

図13 1区 検出遺構全体平面及び溝断面

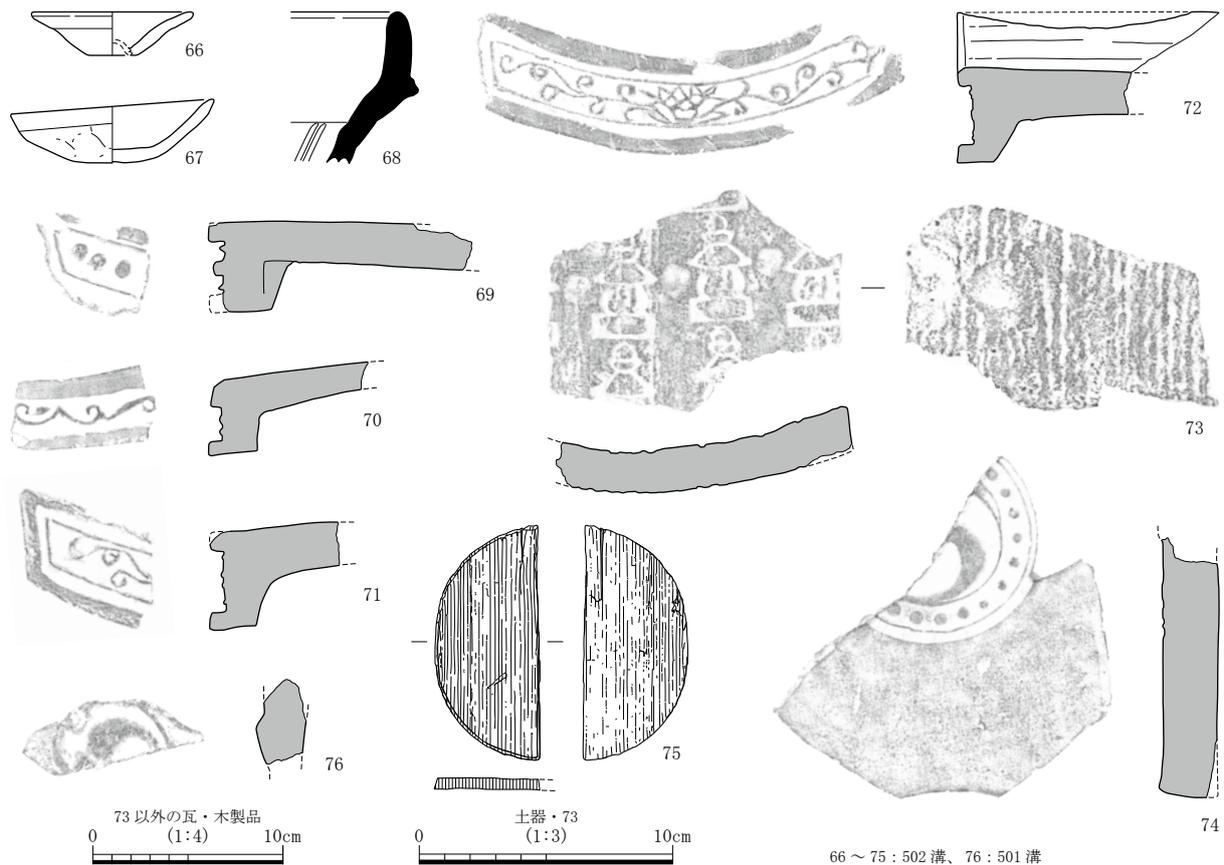


図 14 1区 溝出土遺物

攪乱によって削られているため、正確な規模は明らかでないが、幅は 1.5 m 程度であったと復原できる。また東端部の広がり具合から、東端が南に向かって屈曲していたと考えられる。深さは深い箇所約 0.8 m で、埋土は中粒砂～中礫や植物遺体を多く含む褐灰～黒褐色、あるいは暗オリーブ灰色の粘土やシルト質粘土である。

土師器皿 (66・67)、瓦器椀、瓦質土器足釜・火鉢、陶器播鉢 (68)、須恵器甕、瓦 (69～74)、木製品 (75) などが出土している。12・13 世紀代のものも含まれるが、14・15 世紀代のものが多い。土器は僅かで、大半が瓦である。68 は備前焼播鉢で、66・67 と同じ 15 世紀代のもの。69 は 14 世紀後半の連珠文軒平瓦で、70 は 14 世紀後半から 15 世紀前半頃の唐草文軒平瓦。71 と 72 は 13 世紀後半から 14 世紀前半の蓮華唐草文軒平瓦である。72 と同範の瓦は 59 のようにほかにも多く出土している。71 の唐草文は 72 と酷似しており、一見同範のようにみえるが、唐草文と脇区側の界線との間隔が空いており、同範ではない。73 は凸面に縄タタキを施す 12 世紀後半頃の平瓦。凹面には五輪塔のスタンプを押す。均整がとれた五輪塔で、輪郭を陰刻で、水輪部に表された胎藏界大日如来「**𑖀**」の梵字は陽刻で表現する。五輪塔は縦に 3 段以上、横に 4 列以上が配置されているが、横方向の並びは上下に若干ずれており揃っていない。縦の列については五輪塔間の間隔が一定で、整然と直列していることから、縦 3 段以上がセットとなったスタンプであったと考えられる。同じ形の五輪塔文を押す瓦は、京都市法勝寺跡²⁾や羽曳野市駒ヶ谷地区³⁾から数点出土しており、後者出土品の中にも縦 3 段がセットになったスタンプ文が含まれていることが報告されている。なお駒ヶ谷地区出土品について同範関係を確認した結果、B 類 I 種⁴⁾に分類されている 1 点の五輪塔文が、普賢寺遺跡出土品⁴⁾のものと酷似していることが判明した。強いて言えば空・風輪の重なり方が微妙に異なっているようにもみえたが、大きさ・全体のバランス・水輪の梵字、また縦に数段並べる五輪塔と五

輪塔との隙間の間隔もまったく同じで、同範と言ってもよいものであった。ただし普賢寺遺跡出土品の五輪塔スタンプが、縦に数段並べる五輪塔のうちの中段にあたるものであったのに対して、駒ヶ谷地区出土品は最上段のものであり、同範であったのかを厳密に判断することができなかった。とはいえ、ほぼ同範と言ってもよいほど酷似しており、同一工房で製作されたものであったことはおそらく間違いない。74は13世紀から14世紀のものと考えられる巴文鬼瓦。厚みは3.0cmを測る。75は曲物の底板である。

第3節 2区の成果

市立第一中学校跡地の南東部、校舎が建っていた範囲を隔てて1区の北側に位置する。6区まで連続する広い調査範囲のうちの南端部にあたる。調査面積は1,603㎡であるが、調査区の東辺と南辺の壁際は旧中学校の建物による攪乱により大きく遺構面が削られている。

溝で囲まれた方形区画のほか、溝、井戸、土坑、落込み、ピットなどを検出した。

方形区画（444・454・455・482溝） 調査区の東半に位置する。溝によって囲まれた南北に長い長方形



図15 2区 検出遺構全体平面

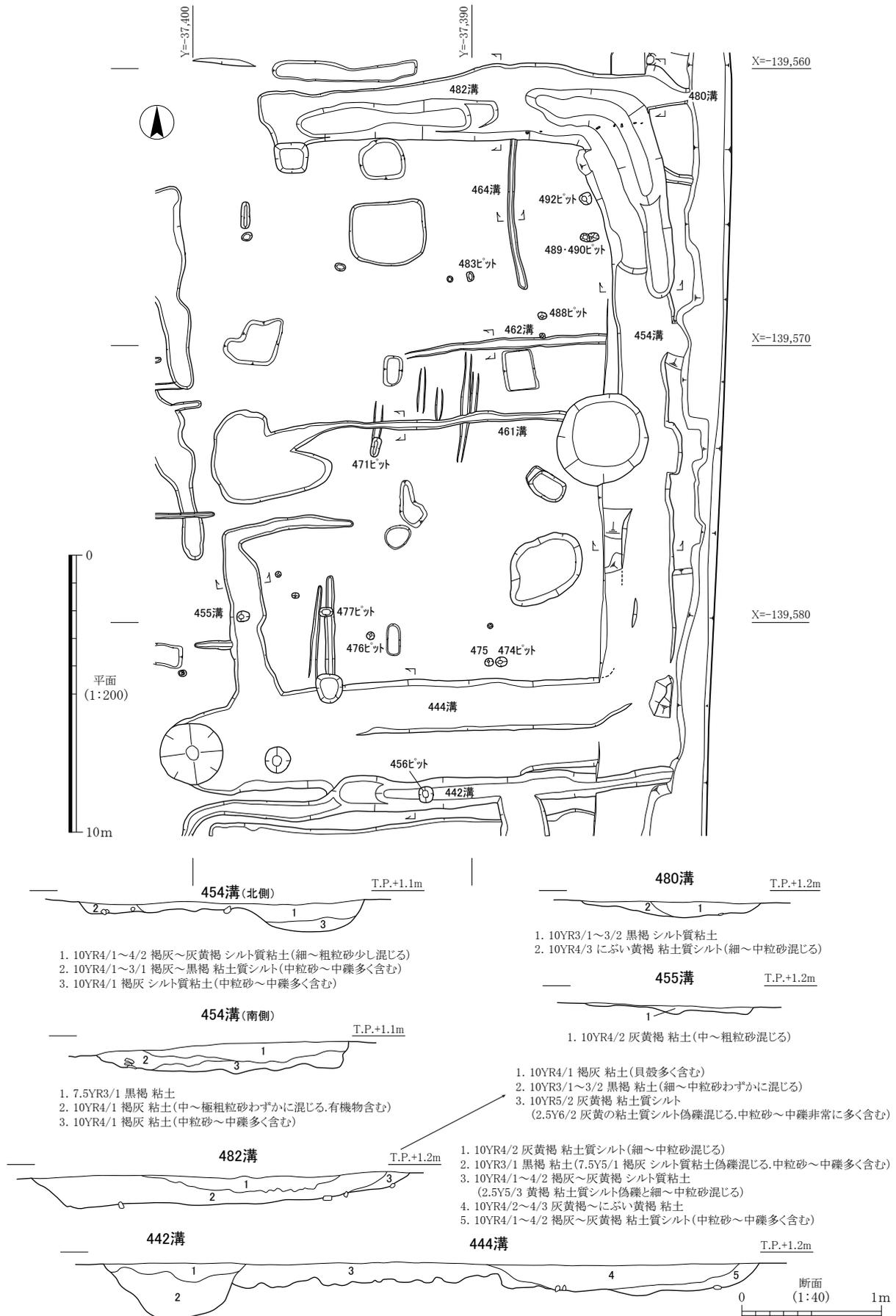


図 16 2区 方形区画周辺遺構平面・断面

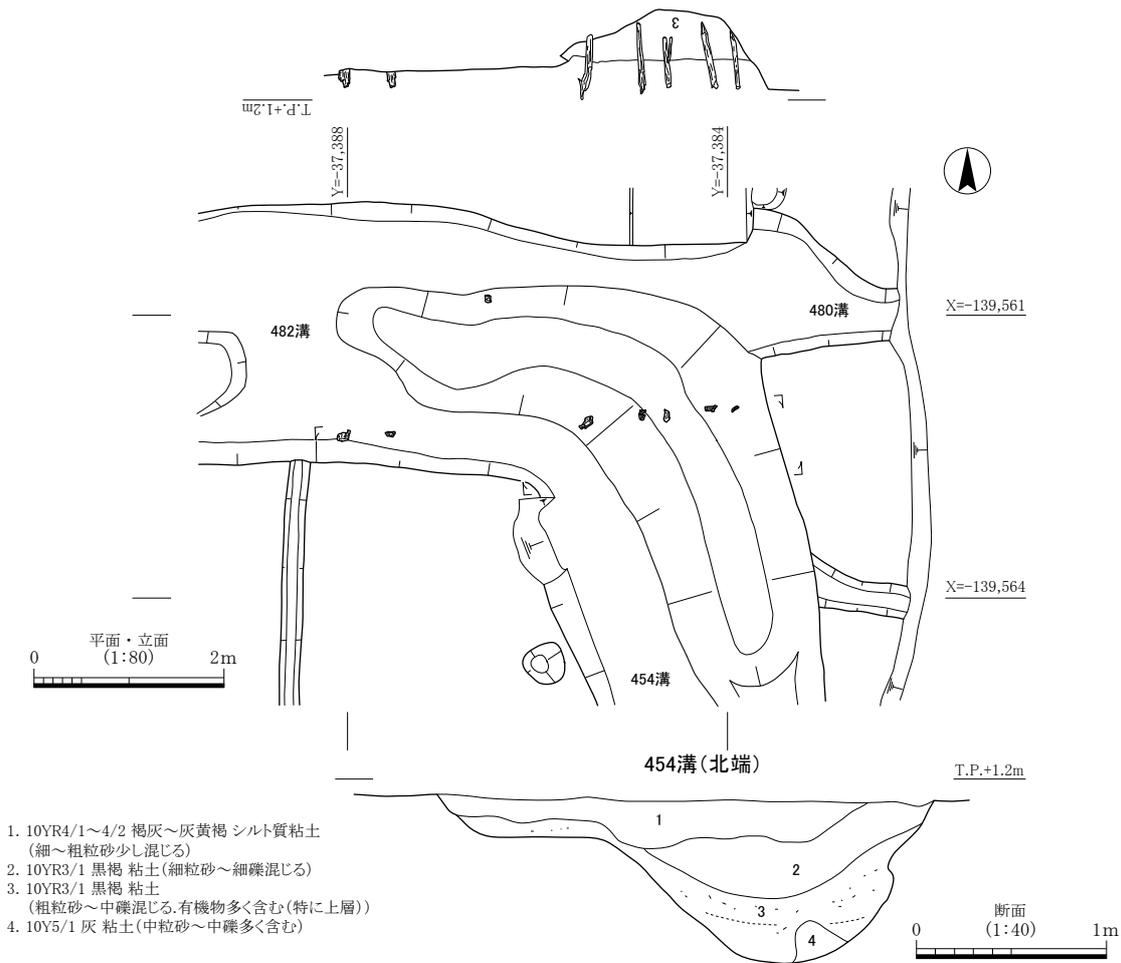


図17 2区454・482溝屈曲部平面・断面及び木杭検出状況

の区画である。区画の南辺を444溝、東辺を454溝、北辺を482溝とする。

南辺444溝は、幅3.2mから、中央部付近の広い箇所では4m弱を測る。深さは約0.15mであるが、北寄りの幅約2mの範囲はさらに一段深くなり、深さ0.2mほどになる。この北寄りの部分は、平面検出時には認識できなかったが、断面観察によって444溝を切る溝が重複していることが判明した。ただし東端部が東辺を画する454溝に向かって屈曲していることから、全く別の溝ではなく、444溝の掘り直しであったと考えられる。西端までの東西長は、北肩部で約16mを測る。埋土は黄褐色粘土質シルト偽礫と細~中粒砂が混じる褐灰~灰黄褐色シルト質粘土や、灰黄褐~にぶい黄褐色粘土、中粒砂~中礫を多く含む褐灰~灰黄褐色粘土質シルトなどである。

東辺454溝は、肩部の各所が校舎の攪乱により失われており、連続しない。幅は2m前後で、深さは南半部では約0.2mあるが、北半部は浅く0.05m程度しかない。長さ、つまり南辺の444溝と北辺の482溝間は19.5mを測る。埋土は中粒砂~中礫・有機物を含む黒褐色や褐灰色の粘土や粘土質シルト、褐灰~灰黄褐色のシルト質粘土などである。北端部は北辺の482溝に向かって急激に深くなっており、その深さはもっとも深い箇所では0.85mを測る。そのちょうど屈曲する箇所には細い木杭が打ち込まれている。

北辺482溝は、幅1.8~2.8mを測る。深さは約0.2mであるが、南寄りの一部や上記のとおり東端部がさらに一段深くなる。溝の東西長は約12mである。埋土は褐灰色や黒褐色の粘土、灰黄色の粘土質シルト偽礫や中粒砂~中礫を多く含む灰黄褐色の粘土質シルトなどで、上面の一部には貝殻が密集している箇所もあった。前記のとおり溝東端部の454溝との境には木杭が打たれている。溝南肩の延長線上に東西方向

に並んでおり、454 溝との流れを分断する意図がうかがえる。溝底に打たれていないことから、溝が設けられた当初からの施設ではなく、ある程度この深みが埋まった段階で打たれたものであることがわかる。機能は明らかでないが、堰き止めた水を 482 溝の東側へと続く浅い 480 溝へ流す役目があったのかもしれない。

方形区画の西辺については、455 溝付近と考えているが、455 溝はほかの三辺の溝に比べ非常に浅く、輪郭も整っていない。人為的に掘削されたような掘り込みはなく、窪みに灰黄褐色粘土が薄く堆積しているような状況であった。また、南辺の 444 溝がこの 455 溝に向かって屈曲しておらず、455 溝との接合部よりもさらに西側にのびていることも注意しておきたい。

455 溝を西辺とした場合、その内側は東西約 12.5 m、南北 19.5 m の約 245 m² となる。西辺がさらに西側であったとしても、東西幅は 14 ~ 15 m 程度に復原できるので、内側の面積は広く見積もっても約 295 m² である。この区画内からは溝や土坑、小規模なピットなどを僅かに検出したが、遺構が密集しているような状況ではなく、散在していた。ピットが建物としてまとまるような状況でもない。これほどの規模をもつ区画であることから、内部に礎石建ちの建物が建っていた可能性が十分考えられるが、この上部の包含層掘削段階でも礎石に使われたような石はみつかっておらず、礎石が座っていた痕跡や基壇が築かれていた痕跡も検出できなかった。

444 溝からは土師器皿 (80)、瓦器碗 (81)、瓦質土器足釜 (82・83)、白磁皿 (79)、瓦、銭貨 (78) などが出土している。13 世紀代のものが中心である。82 は小型の足釜で、口縁部外面の凸部にはヘラミガ

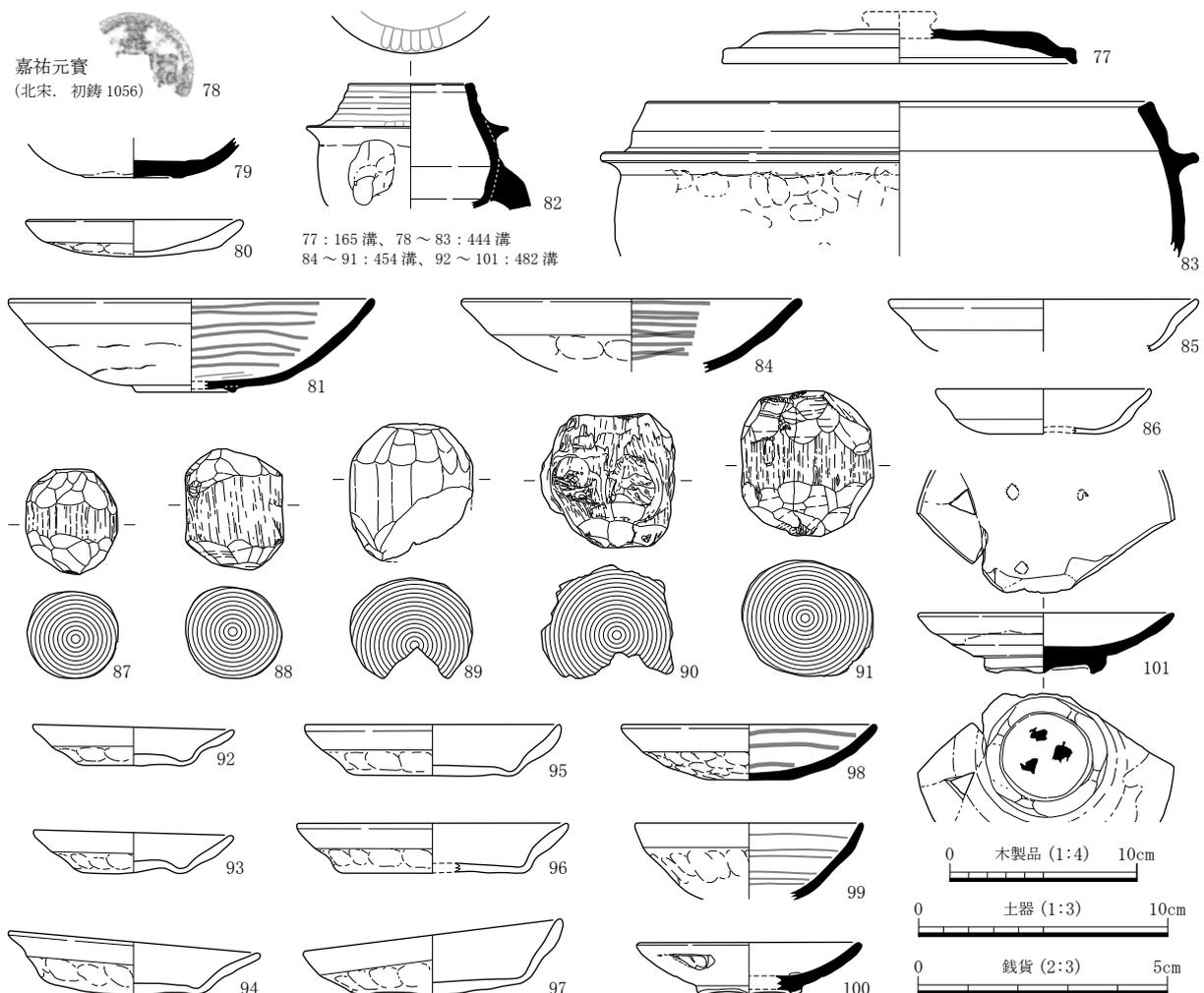


図 18 2 区 溝出土遺物

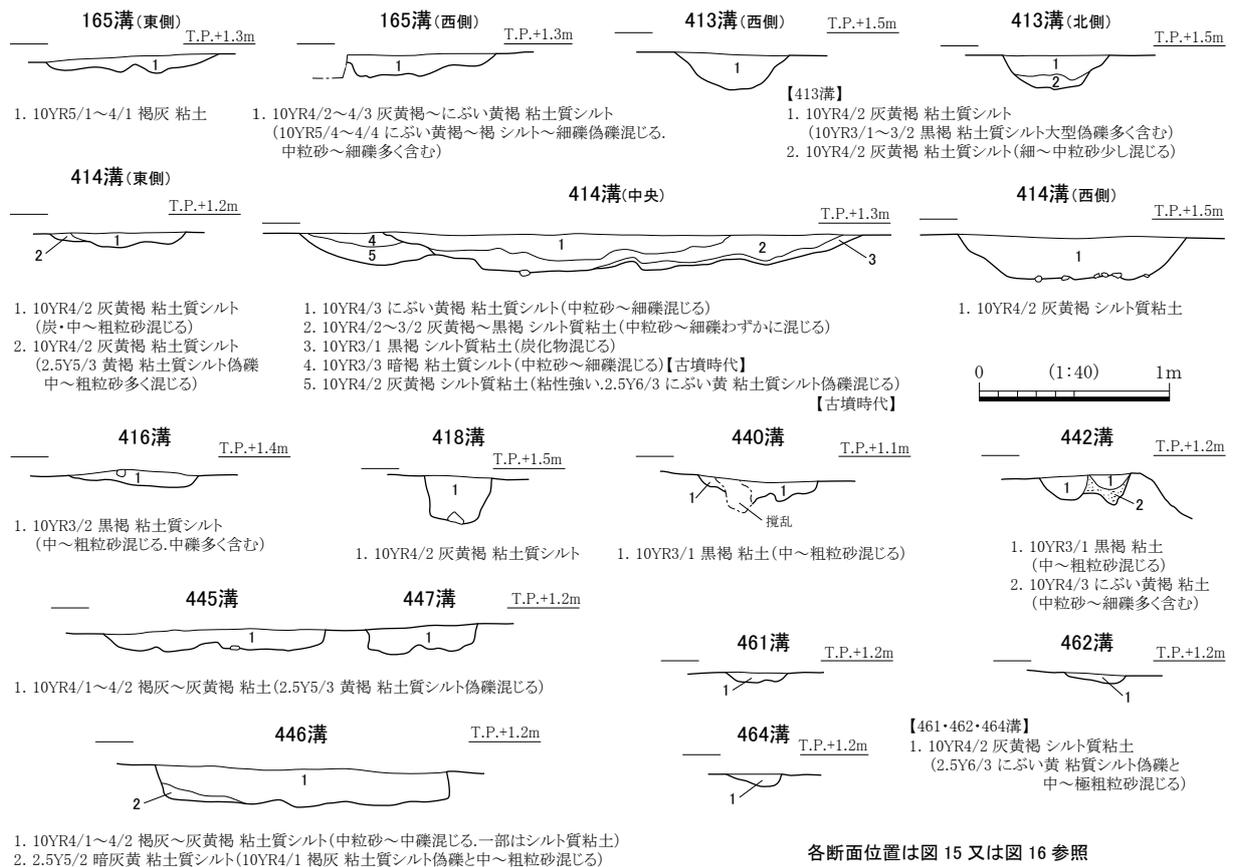


図 19 2区 溝断面

キによる5条の横線をめぐらせ、鐔の上面には花卉状の文様を描く。79は底部が削られて浅い段を成し、碁笥底状になる。体部外面下端から底部外面には施釉されていない。ほかの土器よりも若干古手か。78は1056年が初鑄の北宋銭「嘉祐元寶」である。

454溝からは土師器皿(85・86)、瓦器椀(84)、瓦質土器羽釜、東播系須恵器片口鉢、瓦などのほか、北端部の深みから毬杖の木毬(87~91)が出土している。13世紀後半から14世紀代のもが多い。84は13世紀前半の和泉型であるが、土師器皿は両者ともにやや新しく、14世紀後半から15世紀前半頃のものである。木毬は5点あり、91はその中でも最大で、直径6.2~7.1cm、長さ7.8cmを測る。また89については、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を実施しており、古墳時代との分析結果を得ている。古墳時代に伐採された材の芯材を後世に加工したものと解釈しておきたい。分析結果の詳細については第5章で報告する。瓦には雁振瓦も含まれていた。

482溝からは土師器皿(92~97)、瓦器椀(98・99)、瓦質土器羽釜・火鉢、白磁皿(100・101)、瓦などが出土している。14世紀代から15世紀代のもが多い。瓦器椀は13世紀末から14世紀前半のものであるが、土師器皿はどれも15世紀前半の所産。100・101は15世紀代のもので、両者ともに高台四方に抉りを施し、内面には胎土目状の重ね焼きの痕跡が残る。また101の高台内側には3箇所漆状の付着物がみられる。瓦には雁振瓦もある。

165溝 調査区北辺の3区との調査区境に位置する。3区側でも一部検出しているが、ここでまとめて報告する。東西方向の溝で、幅は0.5~0.9m、深さは約0.1mを測る。埋土は西半部がシルト~細礫の偽礫や中粒砂~細礫を多く含む灰黄褐~にぶい黄褐色の粘土質シルト、3区側の東半部が褐灰色粘土である。途中420井戸と重複し、井戸に切られる。

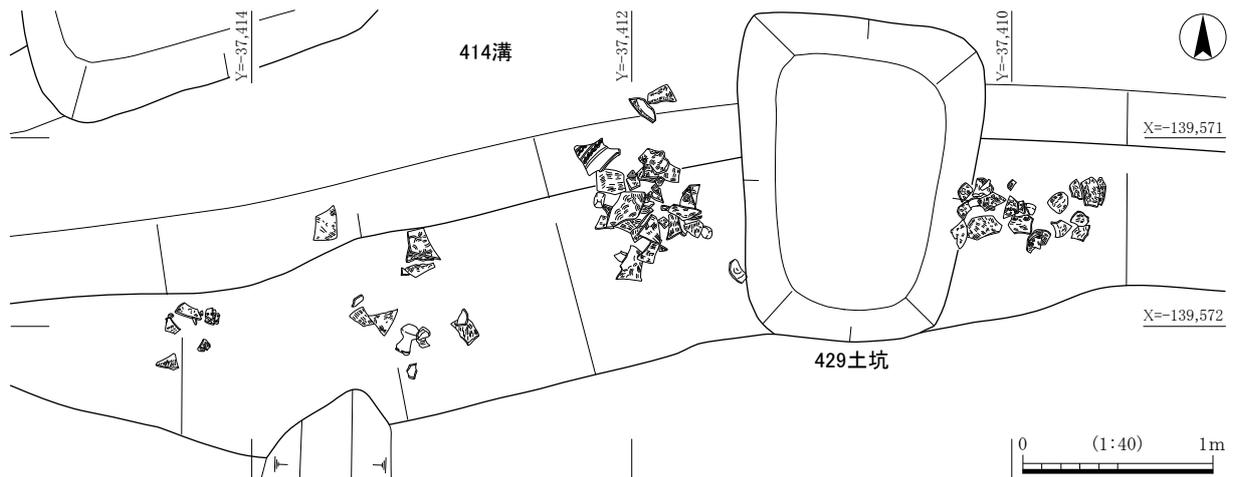


図 20 2区 414 溝南肩部土器出土状況

土師器、須恵器 (77) の小片のほか、瓦が出土している。77 は 8 世紀の杯蓋である。

413 溝 調査区の西壁際中央に位置する。後述する 414 溝の南肩部から調査区西壁に向かって L 字状に曲がる溝で、414 溝に切られる。幅 0.5 ～ 0.6 m、深さは約 0.2 m を測る。埋土は黒褐色の粘土質シルト偽礫や細～中粒砂が混じる灰黄褐色の粘土質シルトである。

土師器皿や瓦質土器、須恵器、瓦の小片が出土している。

414 溝 調査区西半中央に位置する。西壁から調査区の中へ向かってのびる溝で、幅は西側では 1.2 m、東側の広い箇所では 2.5 m を測る。深さは 0.2 m 強である。埋土は中～粗粒砂が混じる灰黄褐色粘土質シルトやにぶい黄褐色粘土質シルト、炭化物が混じる黒褐色シルト質粘土などである。東端部は南に向かって屈曲するが、このあたりは非常に浅く、輪郭が不明瞭である。意図的に曲げていたものかは疑わしい。この溝の南肩部外側から 6 世紀後半の須恵器が多数出土したことから、古墳時代の溝と重複していると誤認して、須恵器を包含する地層を掘削してしまったが、下層調査の結果、古墳時代の溝ではなく、下層の窪み (495 落込み) の肩部であったことが判明した。これについては下層の項で報告する。

土師器皿 (102・103)・羽釜、瓦器椀 (104)、東播系須恵器片口鉢、陶器皿 (105)・播鉢、瓦質土器火鉢 (106)、須恵器杯 (109) などが出土している。104 のような 14 世紀前半の瓦器椀も含まれるが、土師器皿や火鉢など 15 世紀代のものが多い。105 は 15 世紀前半頃の瀬戸美濃系灰釉陶器の折縁小皿で、播鉢は備前焼である。109 については南肩部の土器群からの混入と思われる。107・108・110～112 は 414 溝の南肩部に広がる地層 (図 19 の 414 溝東側断面の地層番号 4・5) に含まれていた遺物である。上記のとおり間違っ 414 溝と同時に掘削したことからここに記載する。107 は有孔円盤で、直径は 3.05cm を測る。須恵器には杯蓋 (108)、甕 (110)、台付壺 (111)、甕 (112) などのほか、長脚二段透かし高杯などが出土している。いずれも 6 世紀後半 (TK 43 型式) の所産。

416 溝 調査区北西隅に位置する。南東～北西方向の溝で、幅は南側では狭く約 0.5 m であるが、北に向かうにしたがい広くなり、1 m 以上となる。深さは 0.1 m 前後で、埋土は中礫を多く含む中～粗粒砂混じりの黒褐色粘土質シルトである。

土師器皿、東播系須恵器片口鉢、瓦などのほか、8 世紀の須恵器蓋の小片も出土している。

418 溝 調査区北西隅、416 溝の東側に位置する。南北方向の溝で、北端部が僅かに西に曲がり、幅を広げて土坑状に窪む。南端は 419 土坑と重複し、419 土坑に切られる。溝の幅は 0.3 ～ 0.35 m で、深さは約 0.25 m を測る。埋土は灰黄褐色粘土質シルトである。

土師器皿の小片が出土している。

442 溝 調査区南東部の、方形区画南辺を限る 444 溝の南側に位置する。東西方向の溝で、一部は北側の 444 溝と重複し、444 溝を切る。西側は南南西方向に屈曲し南壁に向かってのびる。調査区南辺部は校舎の攪乱により遺構面が削られているが、攪乱底で辛うじて検出できた 440 溝につながっていたと考えられる。この屈曲した西側部分は、幅約 0.5 m、深さ約 0.15 m で、埋土は中粒砂～細礫を多く含む黒褐色やにぶい黄褐色の粘土である。東西方向の部分は幅約 1 m、深さ約 0.4 m で、埋土は細粒砂～中礫を含む灰黄褐色粘土質シルトや黒褐色粘土である。

土師器皿 (113)・鍋、瓦器碗 (114・115)、瓦質土器足釜、東播系須恵器片口鉢、瓦などが出土している。13・14 世紀代のものが中心である。114・115 は 13 世紀後半のもので、ヘラミガキは細く、高台

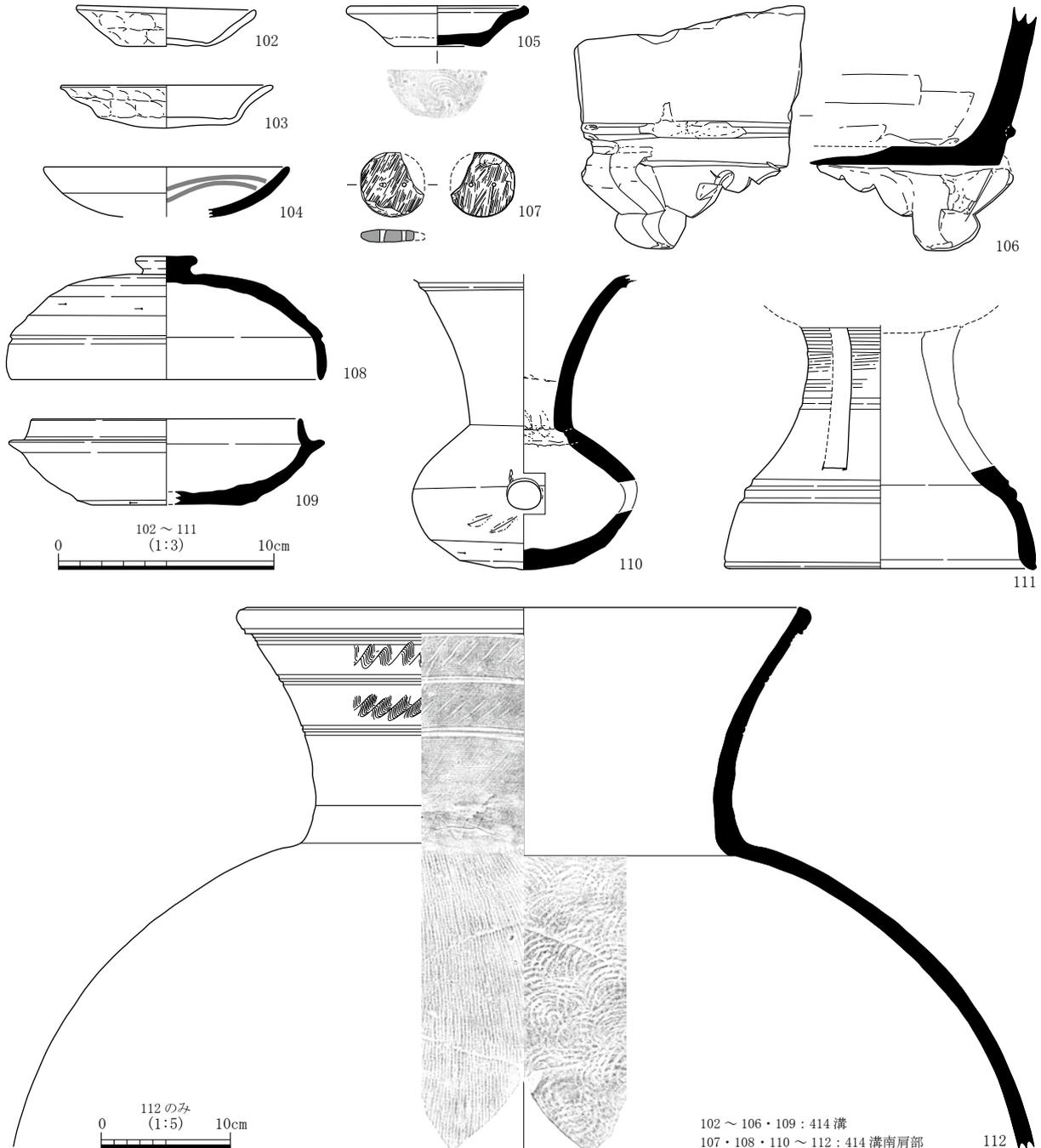


図 21 2区 414 溝 及び 414 溝南肩部出土遺物

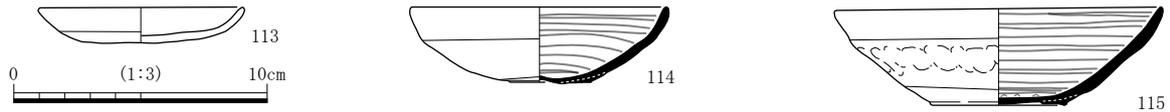


図 22 2区 442 溝出土遺物

が辛うじて残る。115 は圏線ヘラミガキの後、見込みにジグザグ状暗文を施す。

445・447 溝 445 溝は調査区南東隅、442 溝の南側に並行する東西方向の溝である。幅は 0.8 ～ 1.15 m で、深さは約 0.1 m 強である。東端部は攪乱によって完全に削られており、西端部南側には土坑状の 447 溝が接する。埋土は両溝ともに黄褐色の粘土質シルト偽礫が混じる褐灰～灰黄褐色粘土である。

445 溝からは土師器皿・羽釜の小片のほか、6 世紀の須恵器提瓶片が出土している。

446 溝 調査区南東隅に位置する。442 溝と接合して南側にのびる南北方向の溝である。445 溝とも重複し、445 溝を切る。南端部は攪乱によって削られているが、幅が狭まっていることから、溝というよりは土坑状の遺構であったと考えている。幅は 1.55 ～ 1.7 m、深さは約 0.2 m を測る。埋土は主に中粒砂～中礫が混じる褐灰～灰黄褐色の粘土質シルト～シルト質粘土である。

土師器皿、瓦器椀、瓦の小片が出土している。瓦器椀は 13 世紀末から 14 世紀前半のものである。

461 溝 調査区の東半、方形区画内の中央に位置する。東西方向の細い溝で、方形区画内を南北に二分する位置にある。幅は 0.2 ～ 0.35 m、深さ約 0.05 m で、埋土はにぶい黄色の粘質シルト偽礫や中～極粗粒砂が混じる灰黄褐色シルト質粘土である。

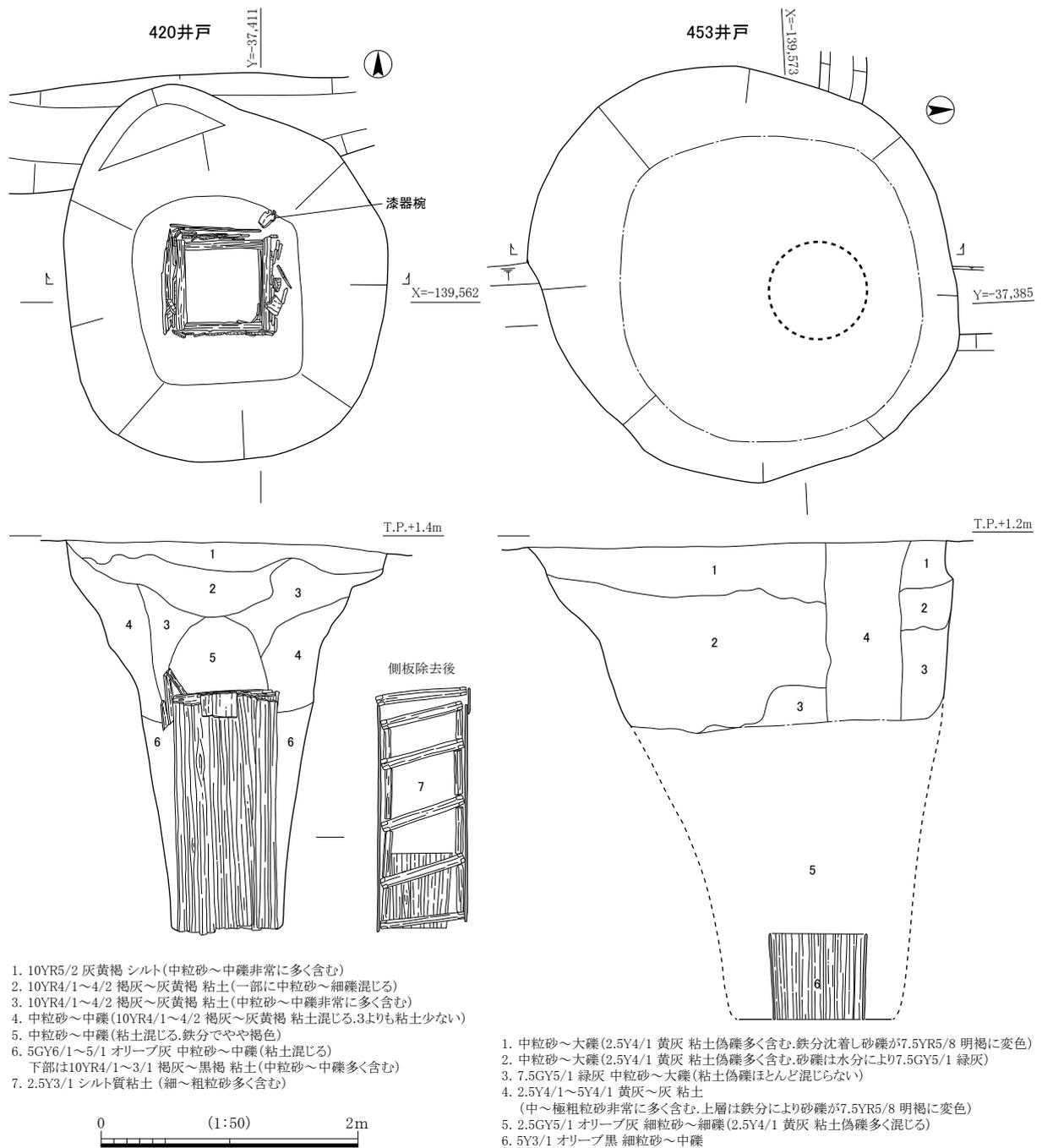
土師器片が 1 点出土している。

462 溝 方形区画内の、上記 461 溝の北側に位置する。461 溝に並行する東西方向の細い溝で、461 溝とは 2.3 m 隔てる。幅は 0.3 ～ 0.35 m、深さ約 0.05 m である。埋土は 461 溝と同じ。

464 溝 方形区画内の、上記 462 溝の北側に位置する。南北方向の細い溝で、幅は 0.2 ～ 0.25 m で、深さは 0.1 m 弱である。埋土は 461 溝と同じである。

420 井戸 調査区西半の北壁際に位置する。掘方の平面形は長径 2.7 m、短径 2.5 m の方形に近い楕円形を呈する。深さは人力掘削で遺構面下 1.4 m まで掘削したが、それ以上の調査は危険なため、底まで確認することができなかった。埋戻しの際に重機で底の高さと井戸枠の構造を確認し、深さ約 3 m であることを確認した。井戸枠は木組みで、遺構面下 1.15 m の地点から下に設けられている。枠の横木は両端を凹形と凸形に細工した角材を交互に組んで一辺約 0.65 m の方形にし、その方形の枠を上下に 5 段重ねる。各段の間には長さ約 0.25 ～ 0.4 m の縦材をはめ込み、総高約 1.7 m の井戸枠の骨格を組む。その骨組みの外側に幅約 0.13 m、長さ 1.8 m 前後の薄板を 2 重から 3 重に貼り付けて井戸枠としたものである。外側の薄板を貼り付ける際には釘を用いていないことから、板材の貼り付けと掘方の裏込めが同時に行なわれたことがうかがえる。上半部の井戸枠全体は検出できていないが、下段側の最上部に、下段の井戸枠構造とは別の、一辺 0.72 m の一組の枠が確認できた。これはおそらく上段側井戸枠の最下段の枠と考えられる。これにより下段側よりもひと回り大きい同様の構造の枠が上半にも設けられていたことが復原できる。また、井戸底に深さ 0.6 m の集水用の桶が埋設されていたことも確認した。ただし通常の井戸の場合は、4 区検出の 8 井戸のように、井戸枠よりもさらに下位に桶や曲物を埋設するが、この井戸の場合は、井戸枠より下に埋まっていた様子が認められないことから、枠内最下部に仕込まれていたと考えられる。

土師器皿、瓦器椀、瓦質土器足釜・播鉢、東播系須恵器片口鉢、漆器椀 (116) のほか、瓦 (117) が多数出土している。東播系須恵器片口鉢や掘方の最下層から出土した瓦器椀片は 13 世紀後半から 14 世紀



1. 10YR5/2 灰黄褐 シルト (中粒砂～中礫非常に多く含む)
2. 10YR4/1～4/2 褐灰～灰黄褐 粘土 (一部に中粒砂～細礫混じる)
3. 10YR4/1～4/2 褐灰～灰黄褐 粘土 (中粒砂～中礫非常に多く含む)
4. 中粒砂～中礫 (10YR4/1～4/2 褐灰～灰黄褐 粘土混じる。3よりも粘土少ない)
5. 中粒砂～中礫 (粘土混じる。鉄分でやや褐色)
6. 5GY6/1～5/1 オリーブ灰 中粒砂～中礫 (粘土混じる)
下部は10YR4/1～3/1 褐灰～黒褐 粘土 (中粒砂～中礫多く含む)
7. 2.5Y3/1 シルト質粘土 (細～粗粒砂多く含む)

1. 中粒砂～大礫 (2.5Y4/1 黄灰 粘土偽礫多く含む。鉄分沈着し砂礫が7.5YR5/8 明褐に変色)
2. 中粒砂～大礫 (2.5Y4/1 黄灰 粘土偽礫多く含む。砂礫は水分により7.5GY5/1 緑灰)
3. 7.5GY5/1 緑灰 中粒砂～大礫 (粘土偽礫ほとんど混じらない)
4. 2.5Y4/1～5Y4/1 黄灰～灰 粘土
(中～極粗粒砂非常に多く含む。上層は鉄分により砂礫が7.5YR5/8 明褐に変色)
5. 2.5GY5/1 オリーブ灰 細粒砂～細礫 (2.5Y4/1 黄灰 粘土偽礫多く混じる)
6. 5Y3/1 オリーブ黒 細粒砂～中礫

図 23 2区 420・453 井戸平面・断面

前半頃のものである。116 は掘方から出土したもので、外面は黒漆、内面は赤漆で仕上げる。文様は描かれていない。117 は 72 と同範の蓮華唐草文軒平瓦。13 世紀後半から 14 世紀前半。瓦当は、瓦当貼り付け技法により接合する。

448 井戸 調査区中央に位置する。一部が 414 溝と重複し、溝を切る。平面形は直径 1.65 ～ 1.7 m の円形を呈する。深さは 1.15 m の地点で狭まる二段掘りとなっており、中心の直径 0.6 m 強の範囲はさらに 0.6 m ほど深い。この下段側の上面から桶に巻かれていたと考えられる竹製の箍が出土した。これにより下段の深い部分には、集水用の桶が埋設されていたことが復原できる。上部についてはおそらく井戸枠が組まれていたと考えられるが、完全に抜き取られており検出できなかった。

土師器皿・羽釜、瓦器椀、瓦質土器播鉢・火鉢 (120)、東播系須恵器片口鉢、陶器皿・播鉢、白磁

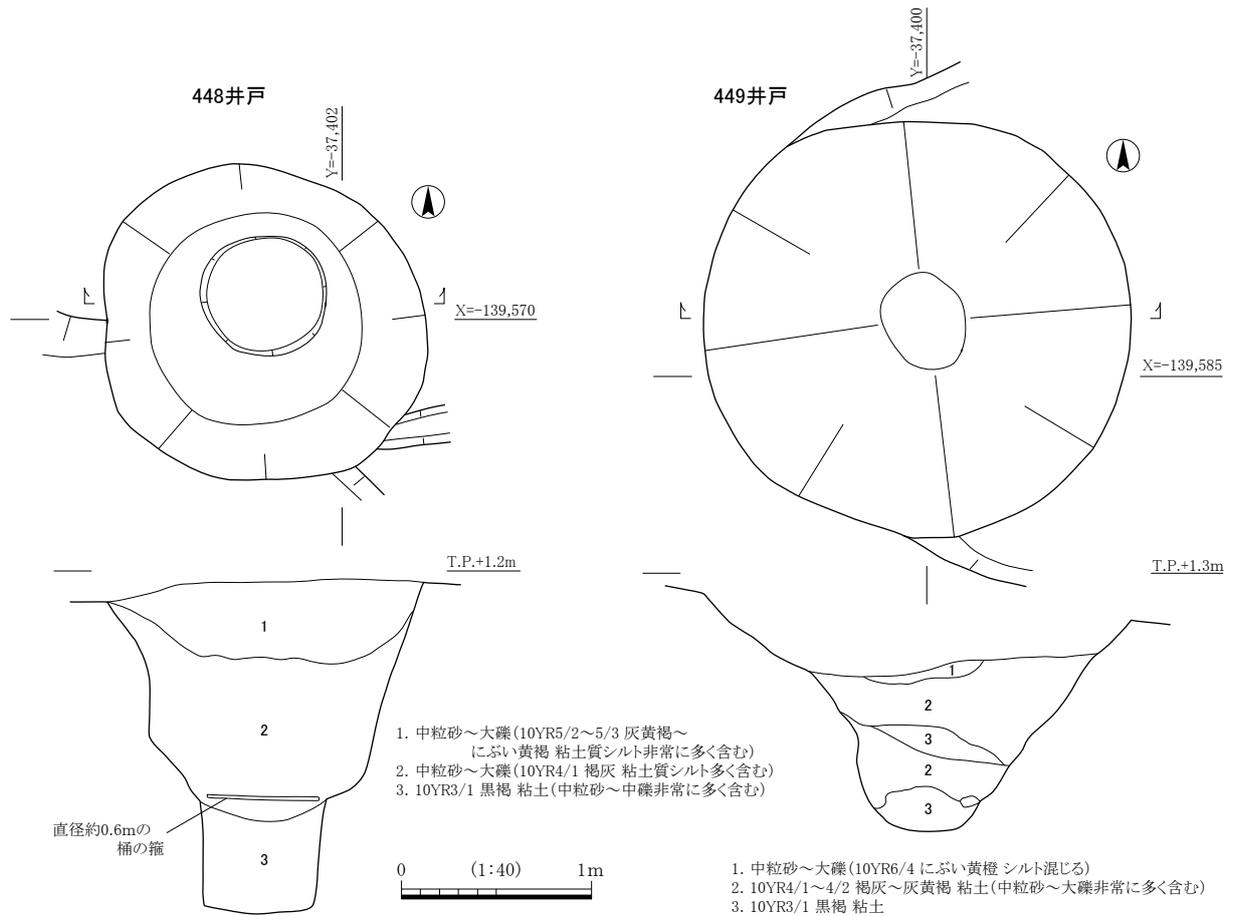


図 24 2区 448・449 井戸平面・断面

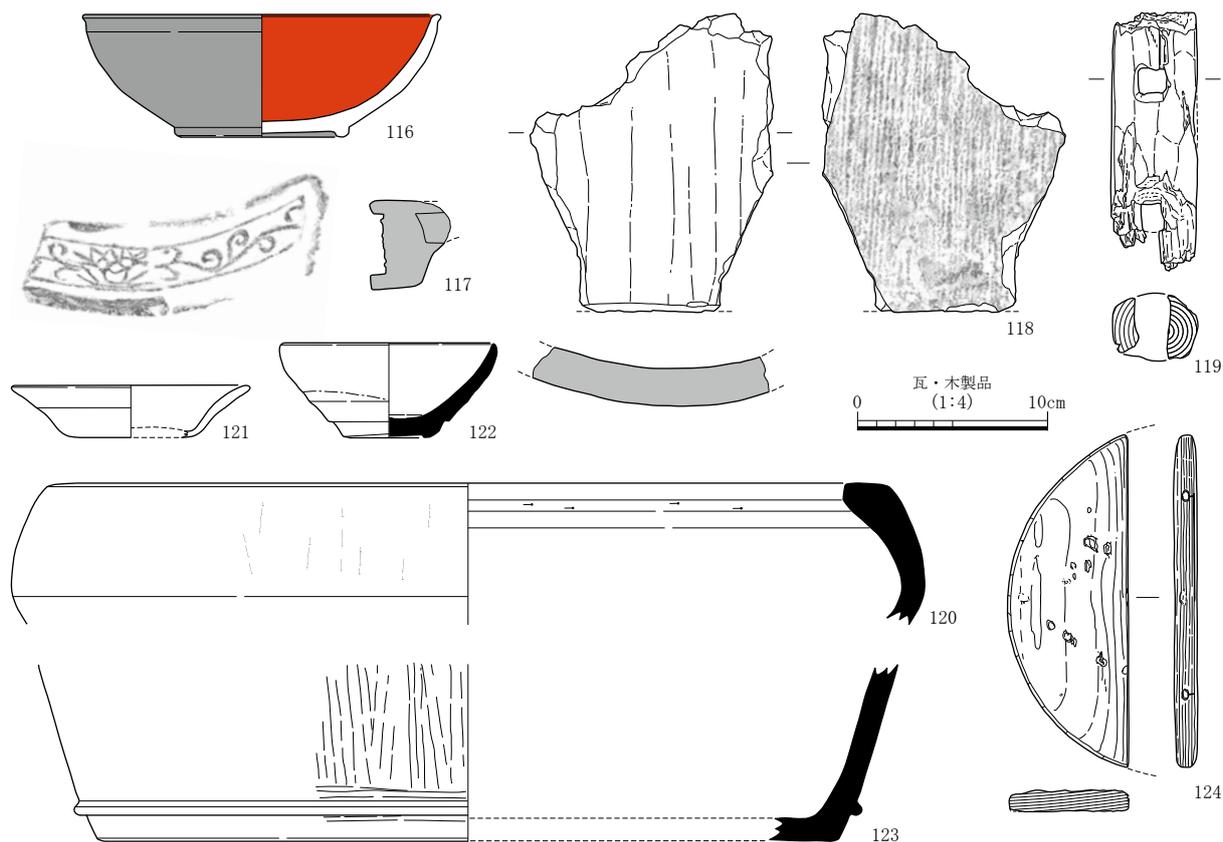
碗、瓦など多くの遺物が出土しているが、図示できるものは少ない。14世紀から15世紀のものが中心である。陶器播鉢は15世紀前半頃の備前焼。瓦には雁振瓦も含まれている。120は外面がヘラミガキにより光沢をもつ。非常に丁寧に磨いており、工具の単位はほとんどわからない。

449 井戸 調査区中央南寄りに位置する。444溝の西先端に重複する。遺構の東肩輪郭は444溝埋土上面では認識できず、溝掘削後に確認できた。したがって溝に切られていたと考えている。平面形は直径約2.2mの円形を呈する。深さは444溝の底から1.1mを測る。井戸枠は検出できなかった。

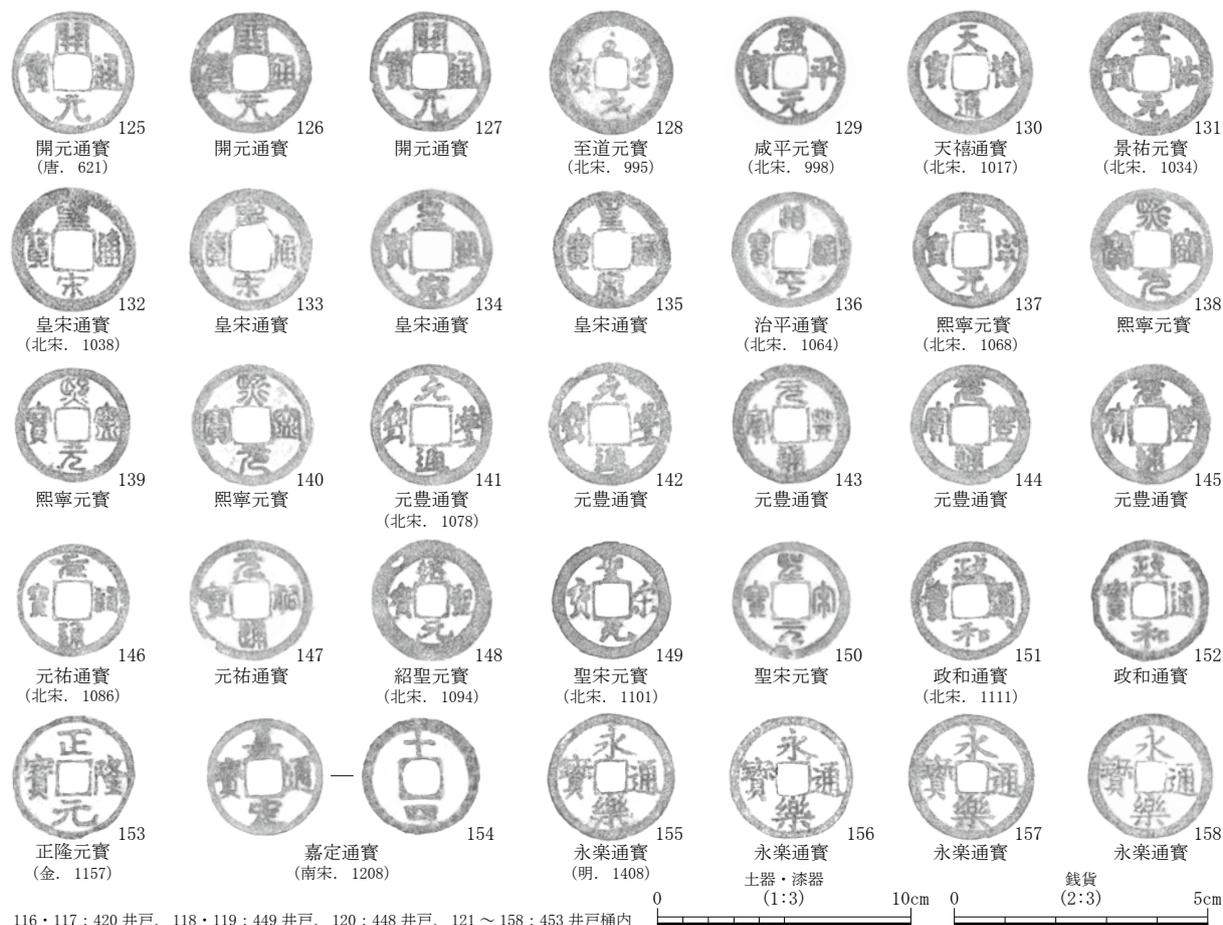
瓦器碗、瓦質土器羽釜、東播系須恵器片口鉢、陶器壺、瓦(118)、木製品(119)などが出土している。瓦器碗は13世紀後半から14世紀前半頃のものである。118は凸面に縄タタキを施す12世紀後半頃の平瓦。119は芯持材に貫通する柄穴を穿つ。建築部材であろうか。

453 井戸 調査区東端中央に位置する。454溝と重複し、溝を切る。平面形は直径3.15～3.4mの円形を呈する。深さは人力掘削で遺構面下1.4mまで掘削したが、危険なため底まで確認することができなかった。埋戻しの際に重機で底の高さを確認し、深さ3.7mの地点に集水用の桶が埋設されていたことを確認した。桶の直径は0.75mで、深さは0.65mであった。桶周辺からの湧水が激しく、また重機の届く限界であったため、それ以下の調査を断念したが、この桶の底が井戸底であったと考えられる。桶以外には井戸枠は確認できなかったが、断面では中央北寄りに垂直にのびる井戸枠の抜き取り穴が検出できた。おそらく本来は420井戸のような井戸枠が組まれていたと考えられる。

最下部桶内から、土師器皿(121)、陶器碗(122)、瓦質土器火鉢(123)、木製品(124)のほか、34枚の銭貨(125～158)が出土している。土器はいずれも15世紀代のものである。122は小型の天目茶



※(国・王朝 初铸年)



116・117：420 井戸、118・119：449 井戸、120：448 井戸、121～158：453 井戸桶内

图 25 2区 井戸出土遺物

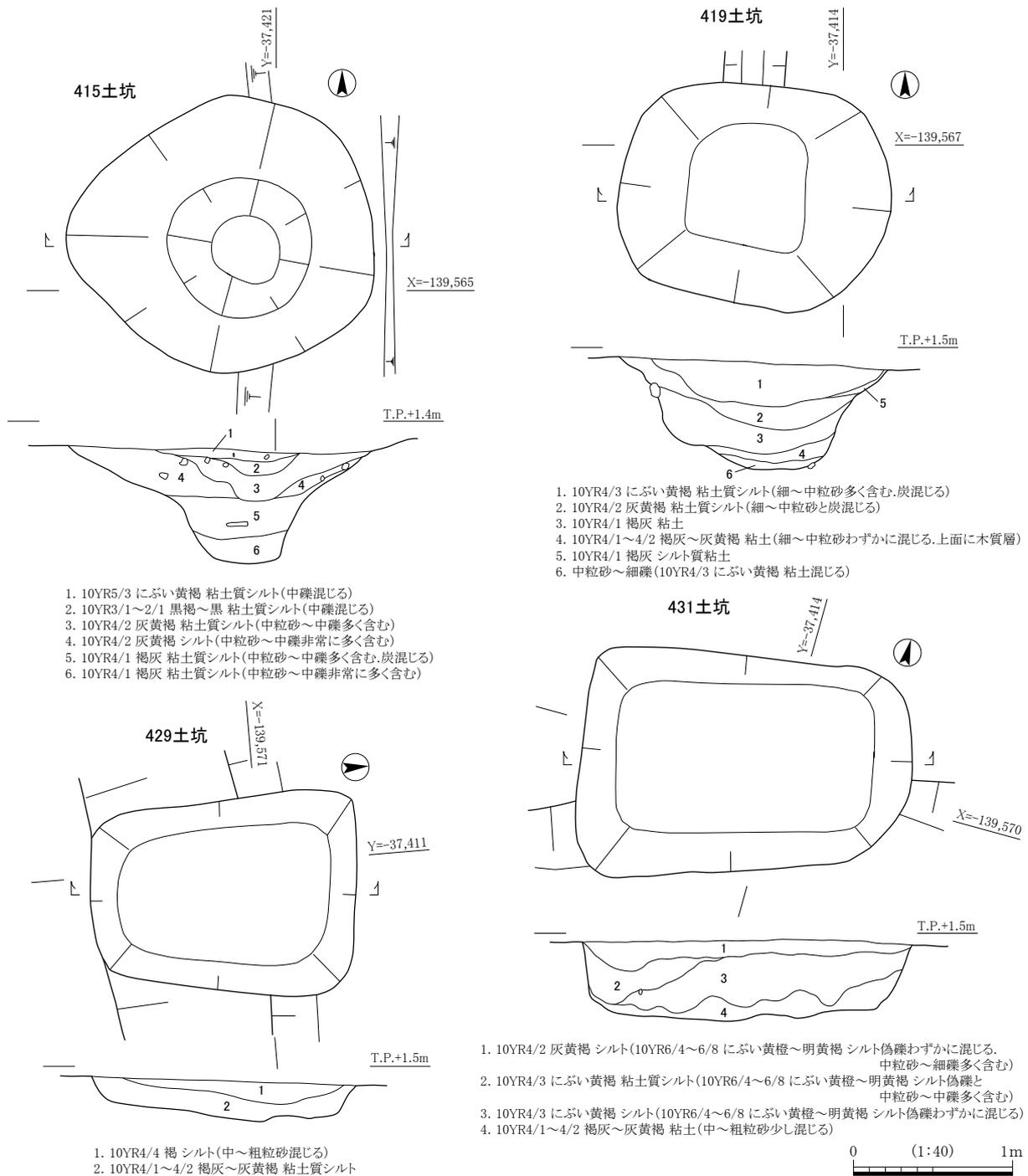


図 26 2区土坑平面・断面(1)

碗である。124 は容器の底板と思われる。材の継ぎ目に杓を設けて接合する。銭貨の中には 621 年初鑄の開元通寶から、1408 年初鑄の永樂通寶までが含まれており、土器の年代とも合致する。

411 土坑 調査区南西隅に位置する。西半が調査区外のため全体規模は不明だが、平面形は南北 2 m、東西 2 m 以上の楕円形であったと復原できる。深さは 0.3 m を測る。上層の褐灰色粘土には礫や瓦が多く含まれていた。

瓦質土器火鉢、陶器甕のほか、瓦(159・160)が多く出土している。甕は 15 世紀代の信楽焼。159 は 72 と同範の蓮華唐草文軒平瓦。13 世紀後半から 14 世紀前半。瓦当は瓦当貼り付け技法により接合する。160 は 13 世紀代のものと思われる巴文軒丸瓦である。

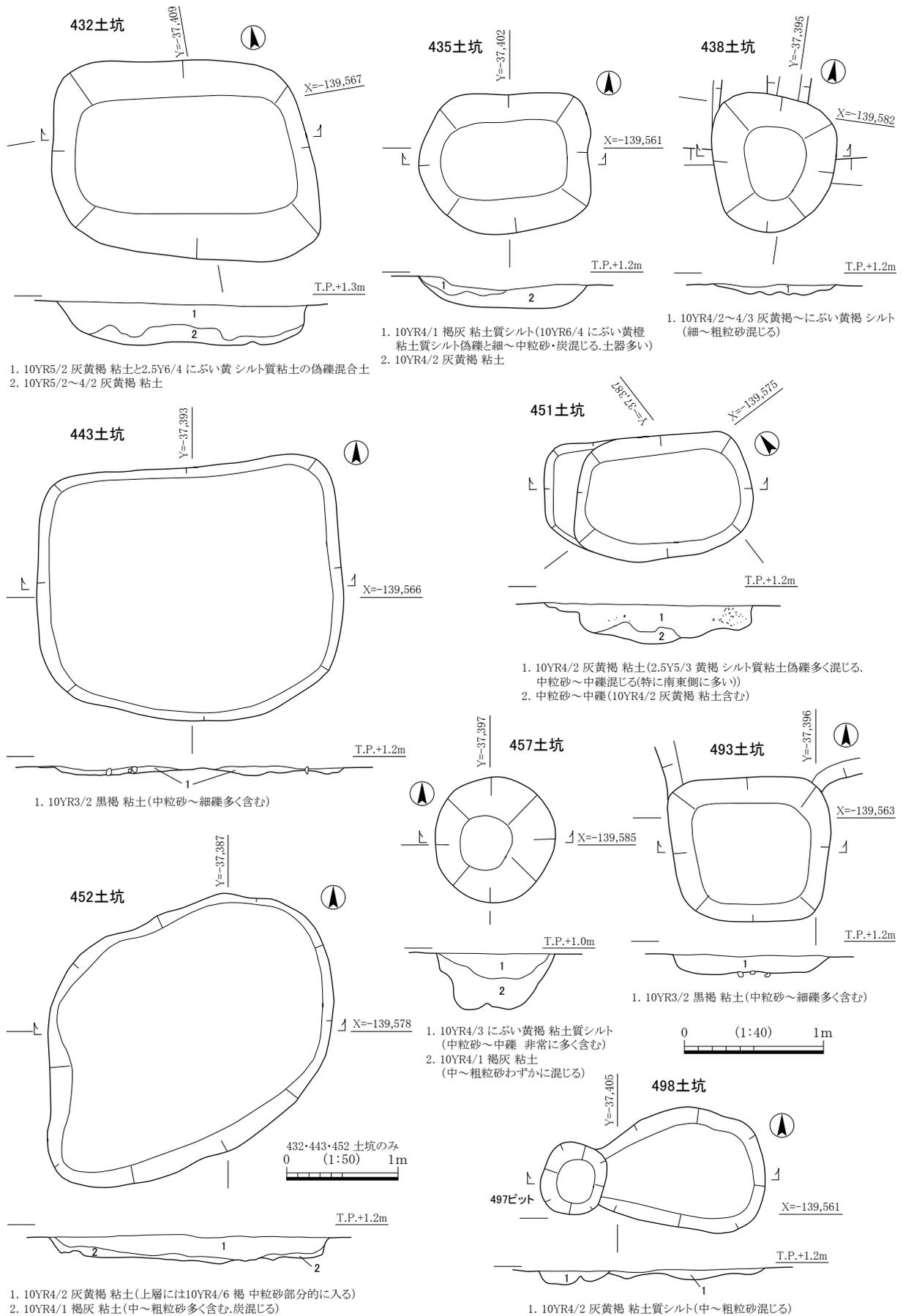


図 27 2区 土坑平面・断面 (2)

415 土坑 古墳時代の遺構である。調査区北西隅に位置する。平面形は長径 1.95 m、短径 1.75 m の菱形に近い楕円形を呈する。中心部が深い二段掘りになっており、その中心で深さ 0.7 m を測る。

上層には土師器皿や瓦が僅かに混入するが、下層には混じらない。6 世紀代と思われる甕や壺が多く出土しているが、どれも体部片で、詳細な時期を特定できない。移動式竈と思われる破片も含まれている。

419 土坑 調査区北西部に位置する。418 溝の南端と重複し、溝を切る。平面形は長辺 1.7 m、短辺 1.4 m の東西に長い長方形を呈する。深さは 0.7 m を測る。

土師器皿、須恵器、瓦の小片が出土している。

429 土坑 調査区北西部、414 溝の南肩部に位置する。414 溝と重複し、溝を切る。平面形は長辺 1.65 m、短辺 1.1 ～ 1.3 m の東西に長い長方形を呈する。深さは約 0.25 m を測る。

431 土坑 調査区北西部、414 溝の北肩部に位置する。414 溝と重複し、溝を切る。平面形は長辺 2.05 m、短辺 1.25 ～ 1.45 m の東西に長い長方形を呈する。深さは 0.5 m を測る。

土師器皿、瓦器椀、須恵器甕、陶器甕などの小片が出土している。

432 土坑 調査区北西部、414 溝の北側に近接する。平面形は長辺 2.2 ～ 2.4 m、短辺 1.7 ～ 1.8 m の東西に長い長方形を呈する。深さは 0.4 m を測る。

土師器皿、瓦器椀、東播系須恵器片口鉢、瓦 (161) などが出土している。瓦器椀は 13 世紀代のものである。161 は凸面に格子と斜格子を組み合わせたタタキ目が認められる。

433・434 土坑 調査区北半、上記 432 土坑の東側に位置する。下層にある窪み (496 落込み) の影響で出来た窪みを、遺構と誤認したものであると判明した。

435 土坑 調査区北辺中央に位置する。1 層下面では見落としていた遺構で、下層調査の段階で確認できた。平面形は長辺 1.2 m、短辺 1.0 m の東西にやや長い長方形を呈する。深さは 2 層下面から 0.2 m を測る。

土師器羽釜、瓦器椀 (167)、瓦質土器足釜 (168) などが出土している。167 は 12 世紀中葉の所産。

436 土坑 調査区南東部、445 溝の南肩部に位置する。445 溝と重複し、溝を切る。平面形は直径 1.2 ～ 1.25 m の円形を呈する。深さは 0.35 m を測る。

土師器皿、瓦器椀 (166)、東播系須恵器片口鉢、瓦などが出土している。166 は 13 世紀中葉の和泉型。

437 土坑 調査区南東部、436 土坑の南西側に近接する。平面形は長径 1.35 m、短径 1.2 m の方形に近い楕円形を呈する。深さは 0.4 m を測る。

438 土坑 調査区南東部、444 溝の北肩部に位置する。444 溝と重複し、溝を切る。平面形は長径 1.0 m、短径 0.9 m の方形に近い楕円形を呈する。深さは 0.05 m 程度で浅い。

443 土坑 方形区画内の北寄りに位置する。平面形は長辺 2.75 m、短辺 2.1 ～ 2.3 m の東西に長い長方形を呈する。平面規模に対して非常に浅く、深さは 0.05 m 程度しかない。

450 土坑 調査区南東部、436 土坑の東側に近接する。445 溝と重複し、溝を切る。平面形は長径 1.3 m、短辺 1.1 m 強の南北にやや長い楕円形を呈する。深さは 0.3 m を測る。

12 世紀後葉から 13 世紀前半の土師器皿 (162・163) が 4 ～ 5 個体分出土している。

451 土坑 方形区画内の中央東寄りに位置する。平面形は長径 1.5 m、短径 0.9 m の南東 - 北西方向に長い長方形を呈する。深さは 0.3 m を測るが、西辺は一段浅くなる。

452 土坑 方形区画内の南寄りに位置する。平面形は長径約 3.2 m、短径約 2.2 m の歪んだ平行四辺形を呈する。平面規模の割に浅く、深さは 0.2 m 程度しかない。

457 土坑 調査区南東部、444 溝内に位置する。遺構の輪郭は 444 溝埋土上面では認識できず、溝掘削

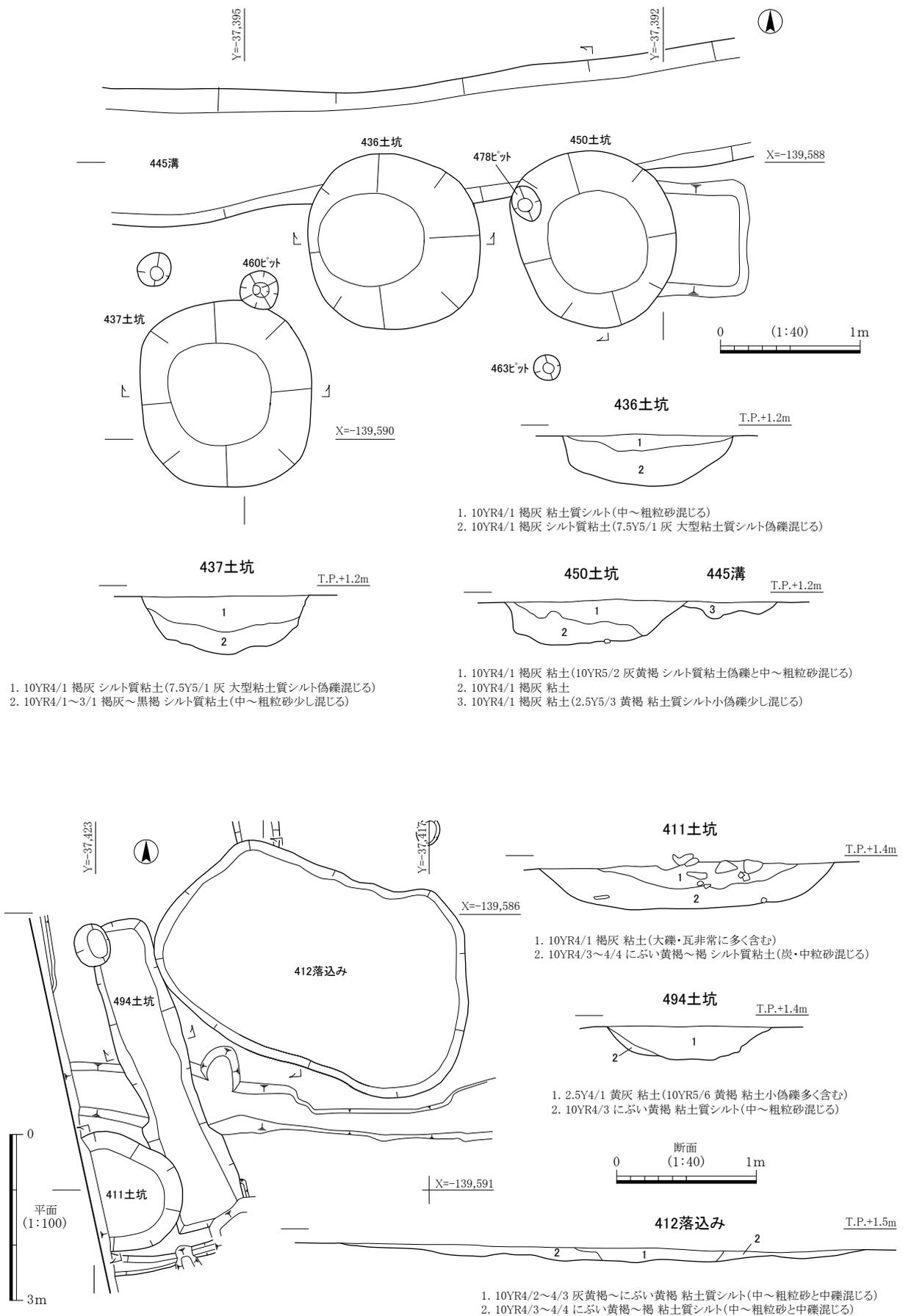


図 28 2区 南半部検出遺構平面・断面

後の溝底で確認した。したがって溝に切られていたと考えている。平面形は直径 0.85 ～ 0.9 m の円形を呈する。深さは 444 溝の底から 0.4 m を測る。

土師器皿 (164・165) と瓦が出土している。450 土坑出土の皿と同時期か。

493 土坑 調査区東半、482 溝の先端に位置する。遺構検出時には 482 溝が南に屈曲していると考えていたが、掘削途中で別の遺構であることが判明した。このため溝との重複関係を検証できていない。平面形は長辺 1.1 m、短辺 1.0 m の方形を呈する。深さは約 0.15 m を測る。

494 土坑 調査区南西隅に位置する。411 土坑と重複し、411 土坑に切られる。平面形は長辺 5.75 m、短辺 1.1 ～ 1.3 m の南北に長い長方形を呈する。深さは約 0.25 m を測る。

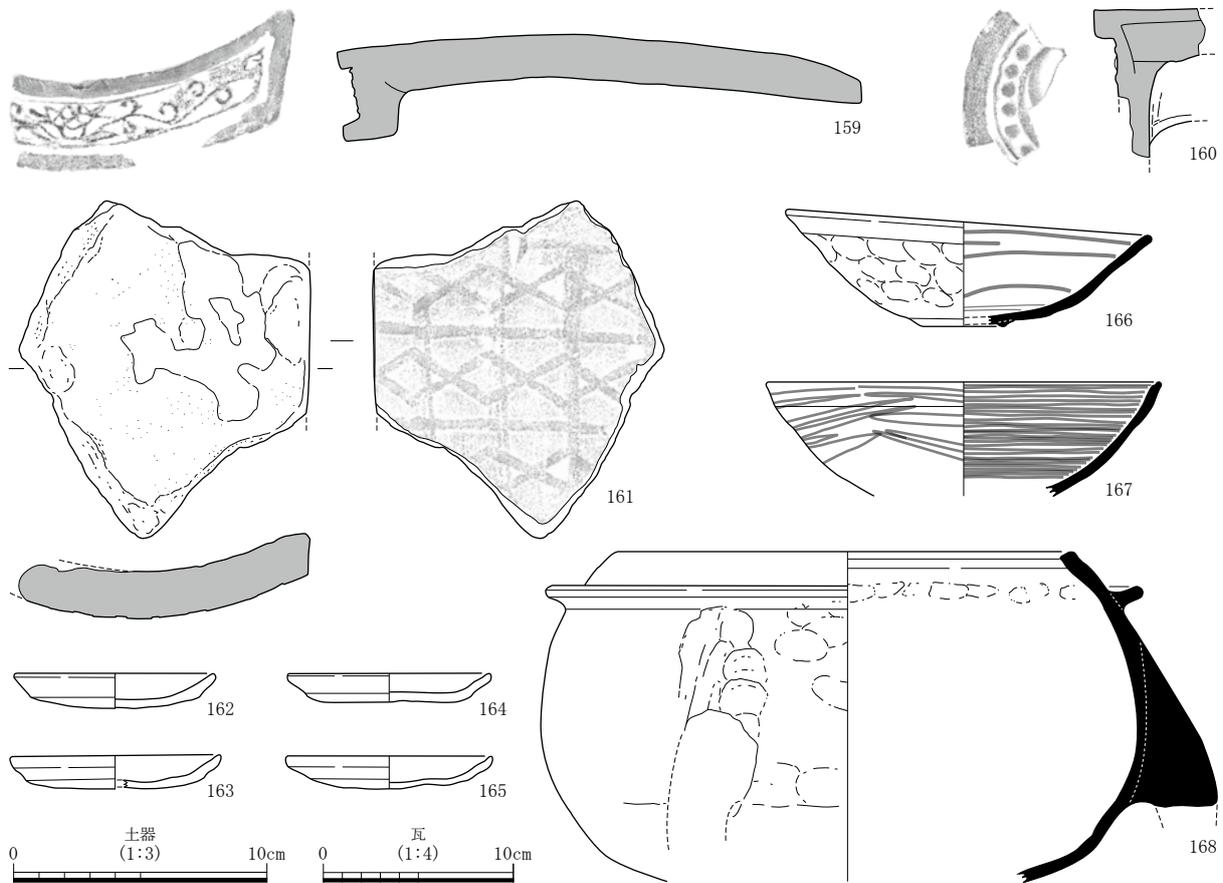
土師器皿、瓦器椀、瓦の小片が出土している。

498 土坑 調査区北辺に位置する。1 層下面では見落としていた遺構で、下層調査の段階で確認できた。平面形は長径 1.2 m 以上、短径 0.85 m の東西に長い楕円形を呈する。深さは 2 層下面から 0.05 m 程度である。

412 落込み 調査区南西隅に位置する。長径 5.8 m、短径約 3.5 m の歪んだ台形を呈する。深さは約 0.1 m と浅く、中～粗粒砂と中礫が混じる灰黄褐～にぶい黄褐色や褐色の粘土質シルトが堆積する。

土師器の小片が出土している。

ピット 調査区西半部にはほとんど広がっていない。方形区画内 (474 ～ 477・489・490・492 ピット) や方形区画の南側 (458 ～ 460 ピット) から数基のピットを検出したが、ほかの調査区に比べてその数は非常に少ない。474 ピットのように礎板をもつものもあるが、建物としてまとまるものもない。



159・160 : 411 土坑、161 : 432 土坑、162・163 : 450 土坑、164・165 : 457 土坑、166 : 436 土坑、167・168 : 435 土坑

図 29 2 区 土坑出土遺物

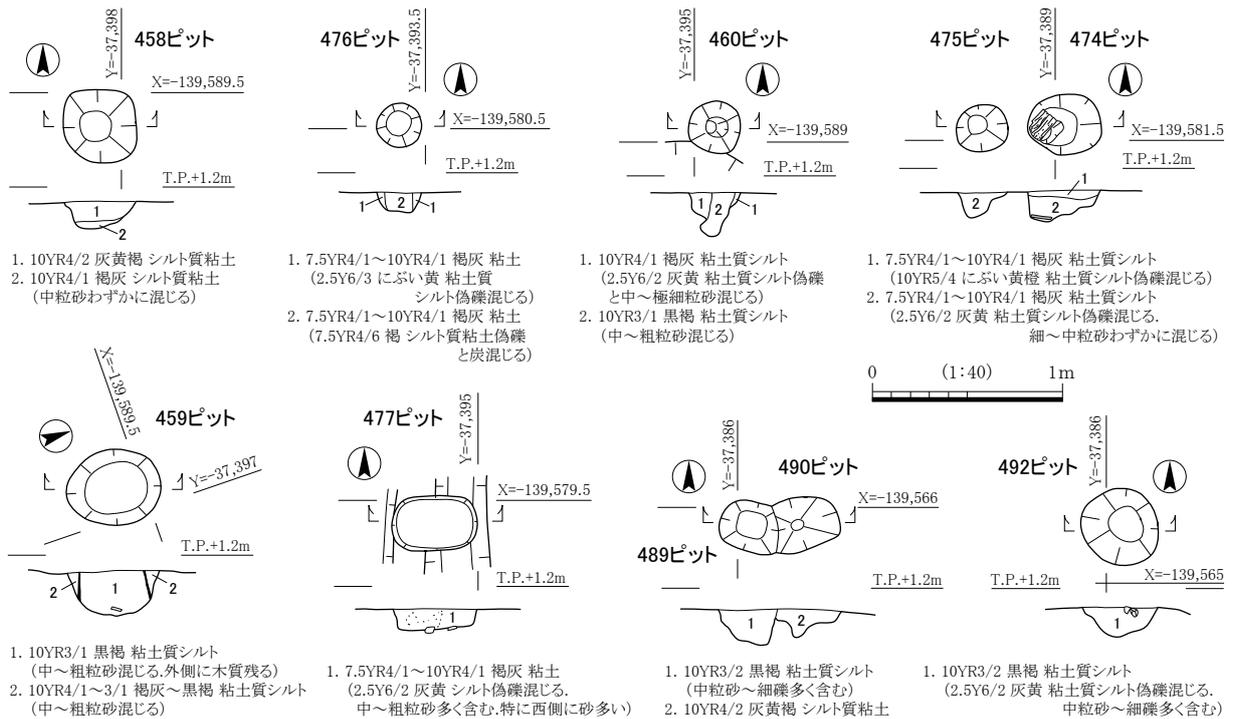


図30 2区ピット平面・断面

方形区画内の471・483ピットからは13世紀代の瓦器碗片が、477ピットからは14世紀代の土師器皿片が出土している。476・488ピットからも時期は特定できないが土師器皿片が出土している。方形区画の南側に分布する459ピットからは13世紀代の瓦器碗片や土師器皿・羽釜の小片が、460・463ピットからは土師器皿片が、478ピットからは13世紀以降の瓦器碗片が出土している。このほか、北西隅の424ピットからはおそらく8世紀のものと思われる土師器杯片が、442溝と重複する456ピットからは13世紀末から14世紀前半頃の和泉型瓦器碗が出土している。

2層下面検出遺構 調査区北西部には、2層下面（基盤層上面）に495・496落込みが認められる。これらは人為的な遺構ではなく、自然に形成された窪みと考えている。前述のとおり、414溝は完掘しているにもかかわらず、さらに南側からも多くの須恵器が出土していたことから、遺構が重複していると誤認して古墳時代の遺物包含層を掘削してしまった。このため空中写真測量時には、本来よりも幅が広い溝として捉えていたが、下層調査によって、414溝南側の須恵器を多く包含する部分については、実際には重複する溝ではなく、この495落込みの南肩部であったことが確認できた。また1層下面で検出した433・434土坑なども、496落込みの影響による窪みを遺構と誤認したものであることが判明した。図32に誤掘削の状況と地層堆積状況の解釈を図示しているので参照されたい。495落込みは東西に長い長方形で、東西10m、南北7m程度の規模である。この落込みの肩部から裾部にかけて、中粒砂~細礫が混じる灰黄褐~暗褐色粘土質シルトや、にぶい黄色粘土質シルトの偽礫が混じる灰黄褐色シルト質粘土などの6世紀後半の地層が堆積し（図19・31）、特に落込みの南肩部には多くの須恵器が混入する（図20）。

図21に示した須恵器以外に、495落込み北半下部からも古墳時代の須恵器甕片が多数出土している。

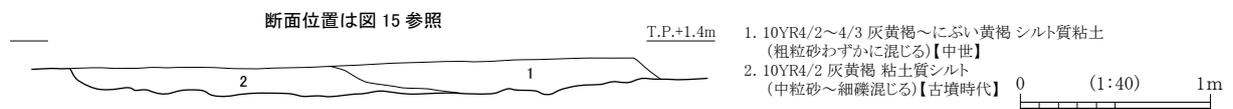


図31 2区495落込み断面

①南側の高い部分と北側の低い部分の傾斜変換部に窪みあり。



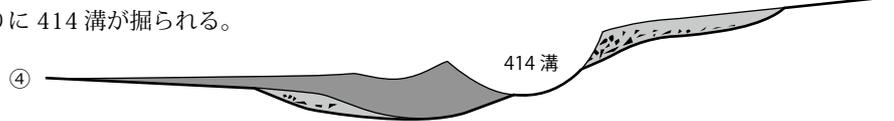
②須恵器を多く含んだ古墳時代の地層が窪み内に堆積する。ただし窪みが完全に埋まるわけではない。



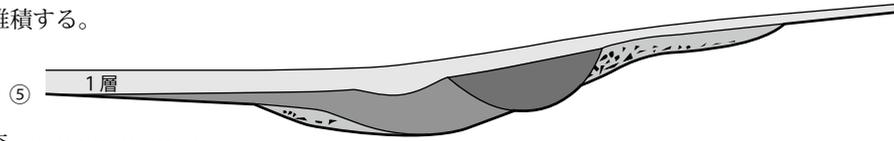
③窪みから周辺にかけて中世の整地層である2層が堆積し、窪みが完全に埋まる。下面の窪みの影響で2層上面が若干窪む。



④中世の時期に、窪み南寄りに414溝が掘られる。



⑤414溝が埋まり、1層が堆積する。



..... 以下 調査

⑥1層を掘削

ただし水平に掘削しようと努めたため、414溝の南側は若干掘り過ぎて古墳時代の遺物包含層も削る。

このため1層中に古墳時代の須恵器が混じる。

414溝の南側には溝と並行するように古墳時代の遺物包含層の輪郭が検出できる。また下面の窪みの影響で

2層上面にできた窪みも遺構のように検出できる。

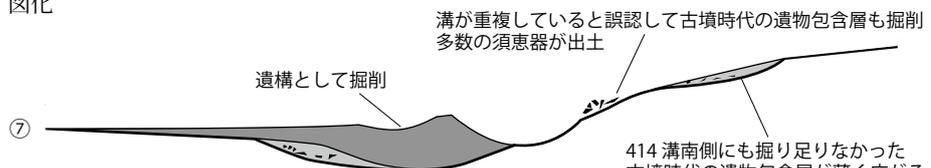


⑦古墳時代の溝が414溝と重複していると誤認して古墳時代の遺物包含層も掘削し、須恵器を取り上げる。

2層上面の窪みも遺構として掘削 (433・434土坑)。

(図19. 414溝中央断面参照)

この状態で空中写真測量・図化



⑧空中写真測量後2層を掘削し下層調査

窪み (495 落込みとする) を検出。

この時、414溝南側のわずかに残った古墳時代の包含層も2層として掘削したため、

2層中に古墳時代の須恵器が混じることになる。

495 落込み内にも古墳時代と中世の地層の両者が堆積したため (図31 参照)、

495 落込みとして取り上げた遺物の中にも2時期の遺物が混在する。

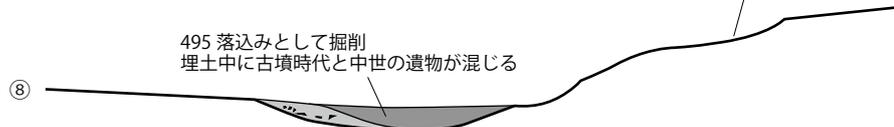


図32 2区414溝誤掘削の状況と地層堆積状況の解釈

第4節 3区の成果

2区の北側に続く調査区である。調査面積は1,458㎡である。調査区の東壁際は旧中学校の建物による攪乱により大きく遺構面が削られている。

掘立柱建物3棟、塀2条のほか、溝、井戸、土坑、ピットなど多数の遺構を検出した。

掘立柱建物1 調査区南東隅、2区で検出した方形区画の北側に位置する。東西9間以上(25.6m以上)、南北4間(11.8m)の、南北2面を廂とする東西棟建物で、軸は僅かに4度西偏する。遺構として検出されたものの中では、門真市内やその周辺地域を含めても最大規模の掘立柱建物である。桁行柱間寸法は揃っておらず、僅かなばらつきがみられる。もっとも東側の柱間は2.6mと若干狭いが、ほかは2.8mから3.0mで、梁間寸法は2.9m等間である。廂の出は南北両面ともに3.0mで、身舎と柱筋を揃える。柱穴の平面形は古代の都城などで検出されるような非常に立派なもので、いずれも一辺0.8～1.0m程度の方角ないしは長方形を呈する。深さは0.3～0.4m程度で、柱痕跡が残っているものも認められた。南面廂の柱穴は後述



図33 3区 検出遺構全体平面

する 160 溝と重複しており、溝完掘後の溝底で辛うじて検出することができた。非常に浅く、僅かな窪み程度しか残っておらず、西から二つ目の柱穴は完全に失われていた。溝の埋土の最上面では柱穴の輪郭が検出できなかったことから、160 溝よりも古い建物であったと考えているが、溝埋土の中層付近での検証はできていない。建物の東の妻については、西から 8 間目に位置する 173 ピットが妻柱である可能性も検討したが、若干東側にずれており柱筋が通らないことから、その可能性は低い。おそらく最低でも桁行 9 間はあったと考えている。この建物周辺では重複する南北方向の溝を多数検出している。これについては後述する。

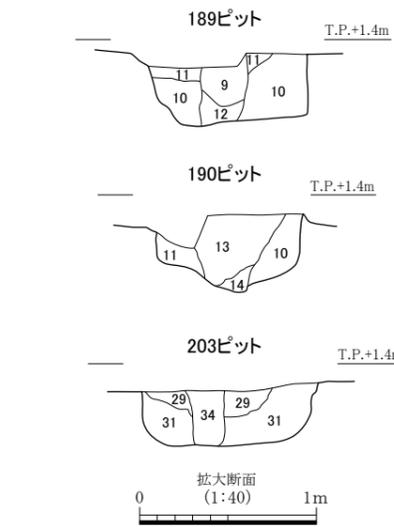
182 ピットから土師器皿、187 ピットから土師器、須恵器、189 ピットから丸瓦 1 点と土師器が、191 ピットから土師器、194 ピットから高台付きの須恵器、あるいは壺と土師器、196 ピットから凸面縄タタキの平瓦と土師器、須恵器が、253 ピットから須恵器が出土しているが、いずれも小片のため建物の時期を特定することはできない。

掘立柱建物 3 調査区の南東部に位置し、掘立柱建物 1 の東端に重複する。ただし掘立柱建物 1 に伴わない大型の柱穴が直線的に並んでおり、建物が建っていたことは認識できるものの、どこまでが 1 棟の建物であったのか、またどのような構造であったのかなど判断が難しい。現時点では少なくとも掘立柱建物が 1 棟あるということで、これらの柱穴群をまとめて「掘立柱建物 3」としておく。

この柱穴群のうち、もっとも西側の柱列（南から 262・277・255・361・156 ピット）は南北に整然と並ぶ。北端は 148 土坑と重複するが、土坑の北側では柱穴が確認できないことから、柱間 4 間の構造であったと考えている。柱間寸法は 2.2 m 等間で、掘立柱建物 1 と同じく 4 度西偏する。柱穴の規模はこれらより東側のものよりはやや小ぶりで、長径 0.6 m 程度の楕円形や、一辺 0.7 m 程度の方形を呈する。深さは約 0.1～0.3 m である。なお、北端の 156 ピットは 148 土坑に切られるが、重複する 144 溝を切っていること、北から二つ目の 361 ピットは、掘立柱建物 1 の柱穴 192 ピットと重複し、192 ピットを切っていること、中央の 255 ピットは 170 溝に切られていることを平面や断面の観察で確認している。掘立柱建物の西廂にあたる柱列とも考えられるが、独立した一本柱塀のような構造であった可能性も考えられる。この西辺の柱列から東側に 2.3 m 隔ててもう 1 条の南北柱列（南から 257・265・256・266～268 ピット）が認められる。南端は西辺の柱列と揃っており、振れも同じくし並行するが、柱間が異なる。257 ピットから 268 ピットまでの 5 間のうち、南側 2 間の柱間は西辺柱列とほぼ揃う 2.2 m だが、北側 3 間は 1.65 m と明らかに柱間が狭い。この北半部については掘立柱建物の一部というよりは、独立した一本柱塀のような構造であったかもしれない。南半部については、南端の 257 ピットから東側に L 字状に折れ曲がる柱穴が続く。2.3 m 間隔で 2 基の柱穴（西から 263・272 ピット）が認められるが、上記のとおり西辺柱列と南端が揃っていることから、南辺は 2.3 m 間隔に 4 基の柱穴が並んでいるように見える。さらに東側の 272 ピットから北に向かって直角に折れ、2.0 m 間隔に 2 基の柱穴（南から 278・173 ピット）が並ぶ。北側の 173 ピットの西側には、263 ピットに対応する位置に柱穴が検出できないことから、柱穴はコの字状の配置となる。このように建物としては不十分な構造であり、ここにどのような建物が建っていたのか復原ができていない。

柱穴は西辺柱列に比べ大型で、一辺 0.8～0.9 m 程度の方形ないしは長方形を呈する。深さは約 0.2～0.3 m で、南辺の 263・272・257 ピットには柱根が残っていた。そのうちの 272 ピット出土の柱根について、建物の年代を明らかにするため加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を実施し、14 世紀以降の伐採であるという分析結果を得た。この成果については第 5 章で報告している。

ピットには土師器皿や瓦器椀、瓦など中世の遺物とともに古代の遺物も数点混入する。156 ピットからは土師器、須恵器蓋、凸面縄タタキの平瓦、255 ピットからは 8 世紀の土師器杯、256 ピットから土師器、257



1. 10YR3/4 暗褐色 粘土質シルト
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト (中粒砂～細礫偽層多く混じる)
3. 10YR4/4 褐色 粘土質シルト (10YR6/4 にぶい黄褐色シルト偽層と中粒砂～細礫混じる)
4. 10YR4/2～4/3 灰黄褐色～にぶい黄褐色シルト (10YR6/4 にぶい黄褐色シルト偽層と中粒砂～細礫非常に多く含む)
5. 10YR3/3 暗褐色シルト(10YR6/4 にぶい黄褐色シルト偽層混じる。中粒砂～細礫多く含む)
6. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (10YR6/4 にぶい黄褐色シルト偽層と中粒砂～細礫非常に多く含む)
7. 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト(中粒砂～細礫多く含む)
8. 10YR6/3 にぶい黄褐色 中粒砂～細礫 (10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト偽層少混じる)
9. 10YR3/2～3/3 黒褐色～暗褐色シルト質粘土 (中～粗粒砂少し混じる)
10. 10YR3/3 暗褐色シルト質粘土偽層と基盤層の砂礫との混合物
11. 10YR3/2～3/3 黒褐色～暗褐色シルト質粘土 (基盤層の砂礫多混じる)
12. 10YR3/2～3/3 黒褐色～暗褐色シルト質粘土 (基盤層の砂礫多く含む)
13. 10YR3/2 黒褐色 粘土 (基盤層の砂礫偽層少し混じる)
14. 基盤層の中粒砂～小礫 (10YR3/1～3/2 黒褐色 粘土質シルト偽層多く含む)
15. 10YR3/2 黒褐色 粘土 (10YR6/3 にぶい黄褐色 砂質シルト偽層混じる)
16. 10YR3/2 黒褐色 粘土
17. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト (中～粗粒砂混じる)【357溝】
18. 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト
19. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土 (10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト偽層と基盤層の中粒砂～細礫多く混じる)
20. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土 (基盤層の中粒砂～細礫少し混じる)
21. 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルト(中粒砂～細礫多く含む)
22. 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルト(中粒砂～小礫と炭混じる)
23. 10YR4/2 灰黄褐色 粘土質シルト
24. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土 (基盤層の粗粒砂～小礫混じる)
25. 10YR4/3～4/4 にぶい黄褐色～褐色シルト質粘土 (基盤層の砂礫～小礫偽層混じる)
26. 10YR4/2～4/3 灰黄褐色～にぶい黄褐色シルト質粘土 (基盤層の粗粒砂～小礫非常に多く含む)
27. 10YR4/2～4/3 灰黄褐色～にぶい黄褐色シルト質粘土
28. 10YR3/1～3/2 黒褐色シルト質粘土(炭混じる)
29. 10YR4/3～4/4 にぶい黄褐色～褐色 粘土質シルト (中～粗粒砂わずかに混じる)
30. 中粒砂～中礫(10YR5/4 にぶい黄褐色 粘土質シルト多く含む)
31. 10YR4/4 褐色 粘土質シルト(中粒砂～中礫偽層混じる)
32. 10YR4/2 灰黄褐色 粘土質シルト(中粒砂～中礫偽層少し混じる)
33. 2.5Y6/3 にぶい黄シルト質粘土(中粒砂～細礫混じる)
34. 10YR3/3 暗褐色シルト質粘土
35. 10YR3/2 黒褐色 粘土(粗粒砂～小礫混じる)
36. 10YR3/2 黒褐色 粘土(粗粒砂～小礫非常に多く含む)
37. 10YR3/2 黒褐色 粘土(中粒砂～小礫多く含む)
38. 中粒砂～小礫(10YR3/1 黒褐色 粘土混じる)

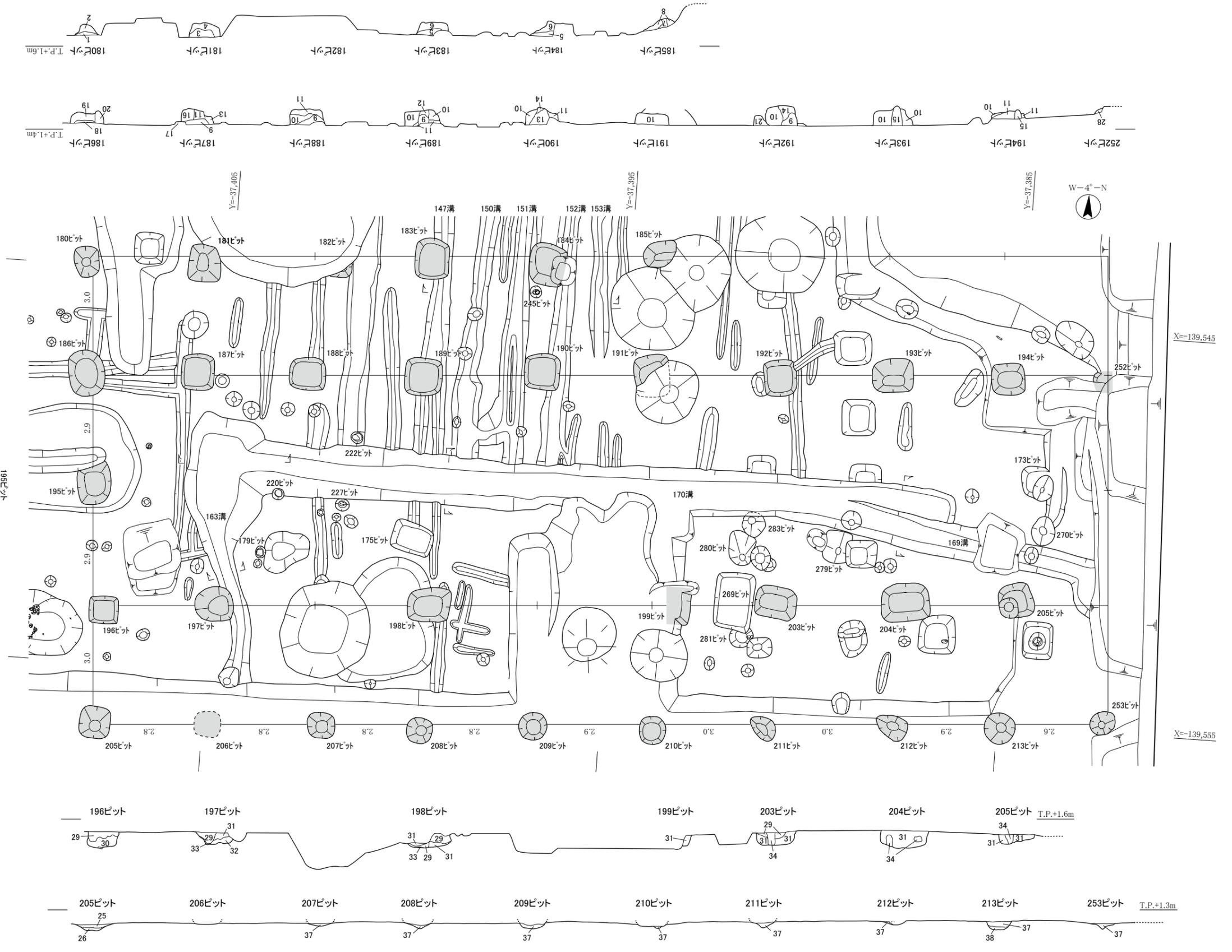


図 34 掘立柱建物 1 平面・断面

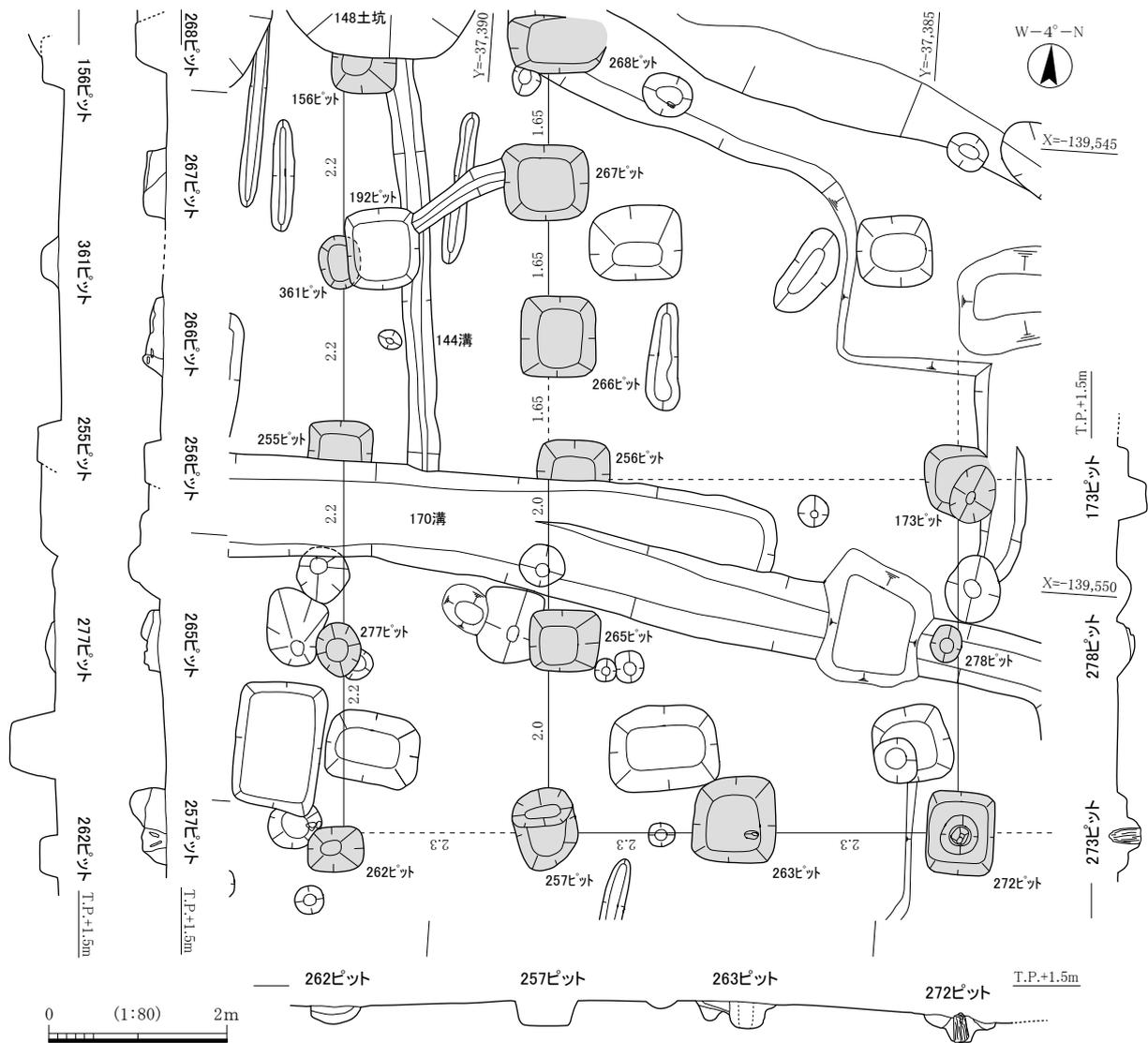


図 35 掘立柱建物 3 平面・断面

ピットから高台付きの須恵器杯と瓦器椀が、265・266・267ピットから凸面縄タタキの平瓦が出土しているが、いずれも小片で建物の時期を特定することはできない。

掘立柱建物 4 調査区の西端、掘立柱建物 1 の北西側に位置する。東西 3 間 (5.4 m)、南北 2 間 (3.7 m) の東西棟建物である。掘立柱建物 1 と同じく 4 度西偏し、南側柱筋は掘立柱建物 1 の北廂の柱筋とほぼ揃う。柱間寸法は揃っておらず、ばらつきがみられる。桁行の柱間寸法は、南側柱筋は西から 1.9 m、2.0 m、1.5 m で、北側柱筋は西から 2.0 m、1.7 m、1.7 m である。梁行の柱間寸法については、西妻側では妻柱が若干南にずれているため、南側が 1.6 m、北側が 2.1 m と等間ではない。なお東妻側については妻柱が検出できていない。柱穴の平面形はいずれも直径 0.25 ～ 0.4 m 程度の円形ないしは楕円形を呈する。深さはもっとも深い 331 ピットが 0.46 m であるが、318・360 ピットのように 0.05 m 程度しかないものもある。

293・331 ピットからは土師器皿、瓦器椀、294 ピットからは 12 世紀後半の瓦器椀が、316 ピットからは土師器皿が、335 ピットからは土師器皿、瓦器椀のほか瓦質土器足釜や瓦も出土している。いずれも小片である。335 ピット出土の瓦器椀は 13 世紀前半のものである。

塀 1 掘立柱建物 4 のすぐ南側に近接する。柱穴 4 基が東西に整然と並んでいることから、東西方向の一本柱塀に復原したが、掘立柱建物 4 とは 0.6 ～ 0.7 m しか隔てておらず、同時併存していたとは考え難い。

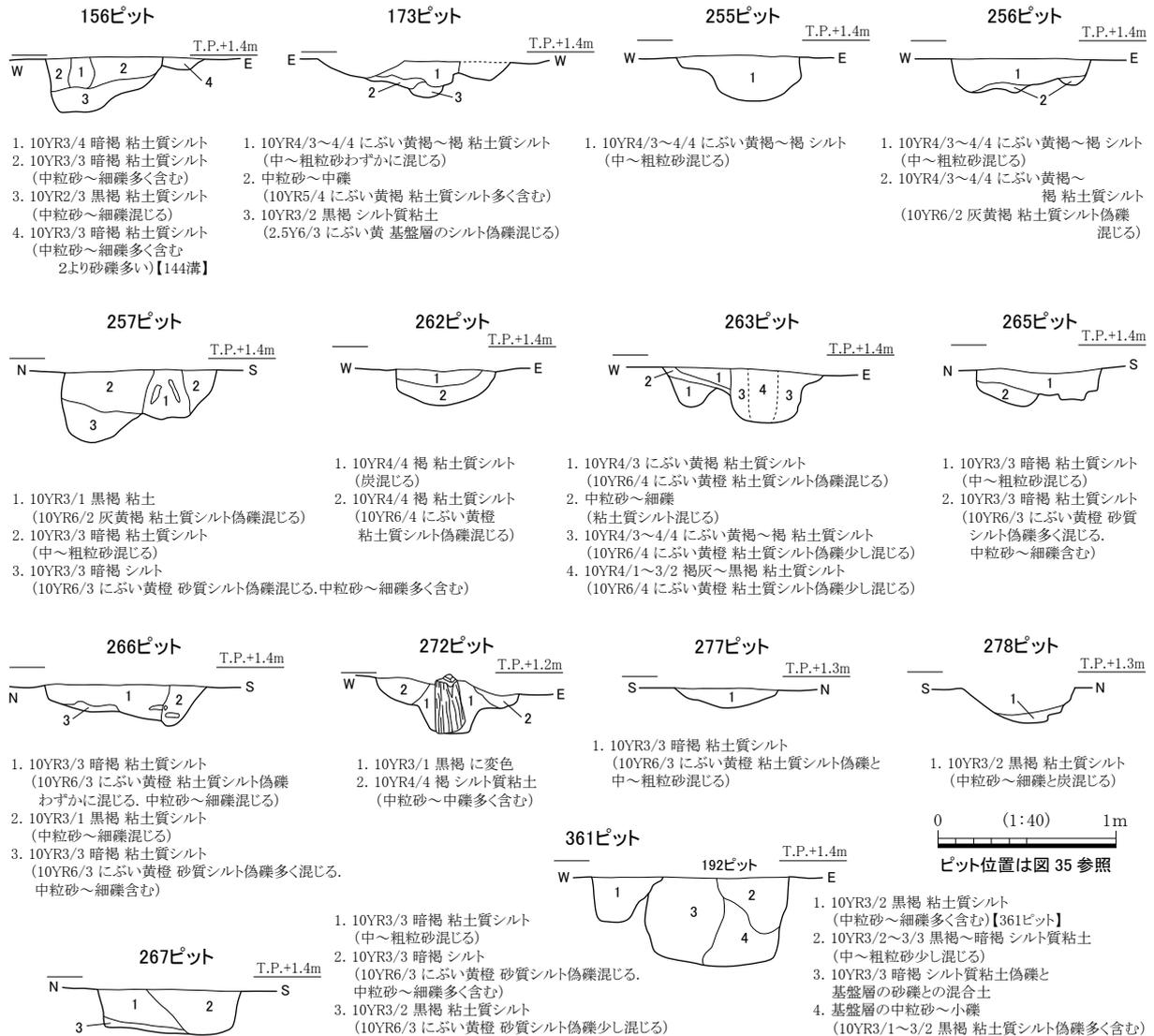


図 36 掘立柱建物 3 柱穴断面

また僅かな差ではあるが、建物の振れとは 1 度異なり 3 度西偏する。柱間は西から 1.5 m、1.4 m、1.2 m と揃っていない。柱穴は直径 0.3 m 程度の円形ないしは楕円形で、深さは約 0.2 ～ 0.35 m である。東から二つ目の柱穴には柱根が残っていた。

各柱穴からは土師器皿や瓦器椀の小片が出土している。336ピット出土の瓦器椀は 13 世紀代のものである。
 塀 2 調査区北西隅、4 区との調査区境に位置する。南北方向の一本柱塀である。柱間は 3 間で、2.1 m 等間である。前述の掘立柱建物や塀が僅かに西偏していたのに対して、この塀は 2 度東偏する。柱穴は短径 0.4 ～ 0.5 m、長径 0.5 ～ 0.65 m 程度の楕円形で、深さは約 0.25 ～ 0.5 m である。

274 ピットからは土師器皿片と 12 世紀中葉の瓦器椀片が、288 ピットからは土師器皿片が出土している。290 ピットは重複する 289 ピットとの遺物を分離できなかったが、土師器皿、瓦器椀 (437)、須恵器片が出土している。437 は 13 世紀中葉の所産。4 区側の 79 ピットからは土師器皿片が 2 点出土している。

1 溝 調査区北端に位置する。北壁側から湾曲しながら南西方向へのび、西側の 4 区へと続く。幅が広く、溝というよりは「流路」あるいは「水路」と呼ぶべき規模の大きな遺構である。4 区まで含めた溝の形状や出土遺物から、もともとは古墳の周溝だったのではないかと考えている。溝の幅は調査区北壁で 15 m を測る。深さは北壁際の東寄りが深く約 0.9 ～ 1.0 m を測るが、西寄りの約半分は比較的浅く、南東方向に向か

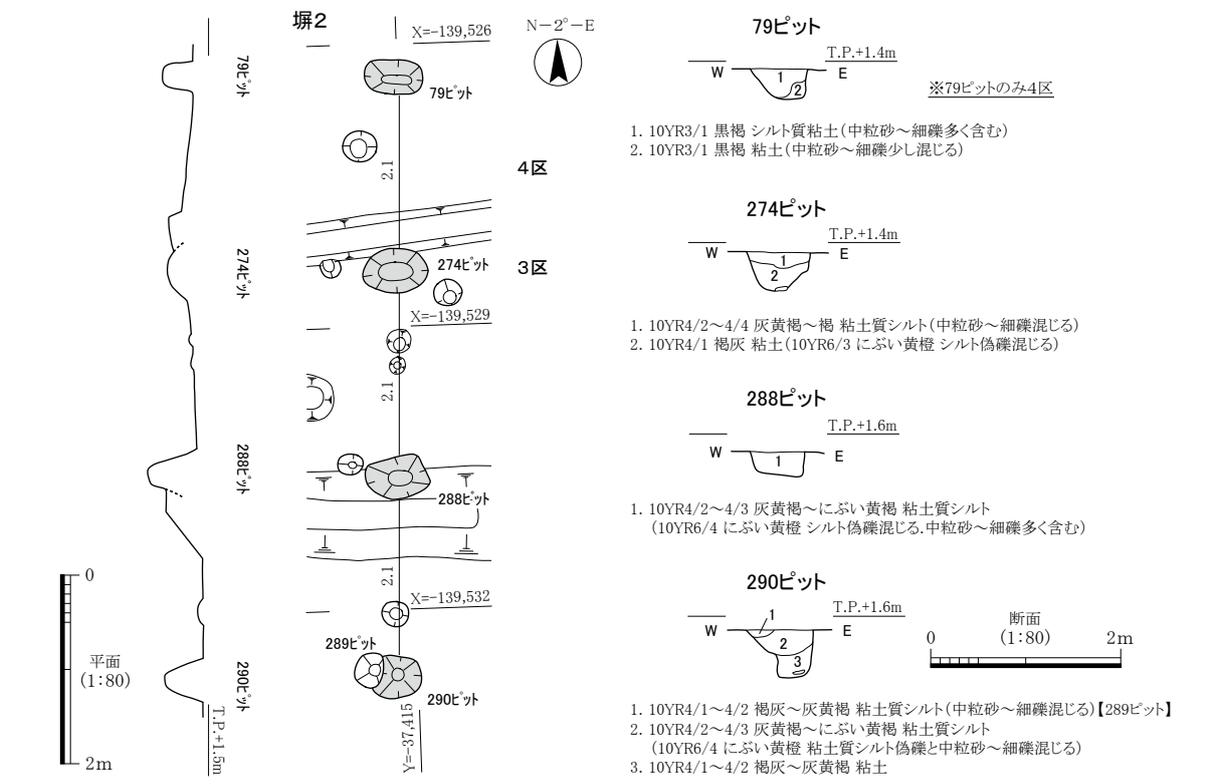
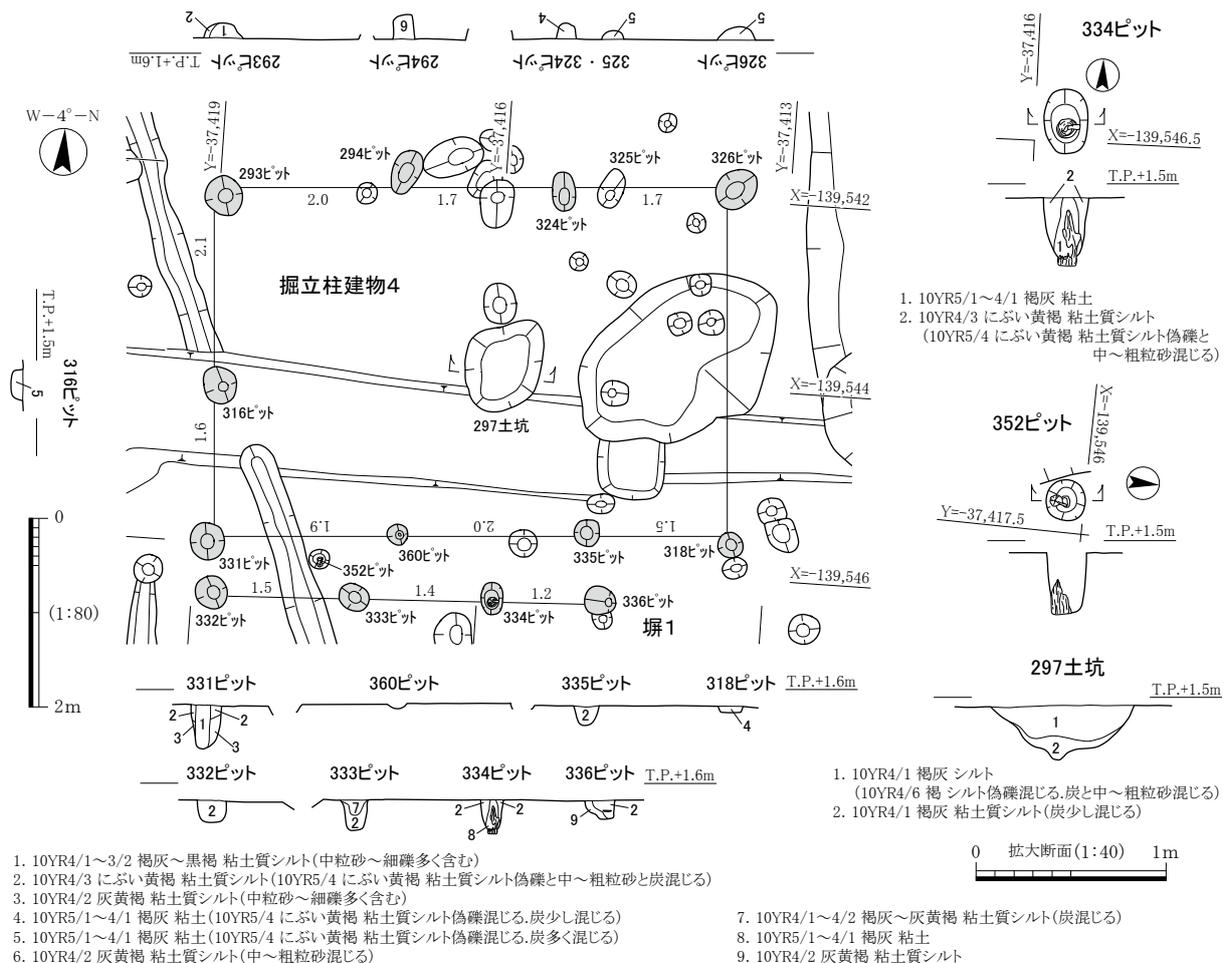


図 37 掘立柱建物4・堀1・堀2 及び周辺遺構平面・断面

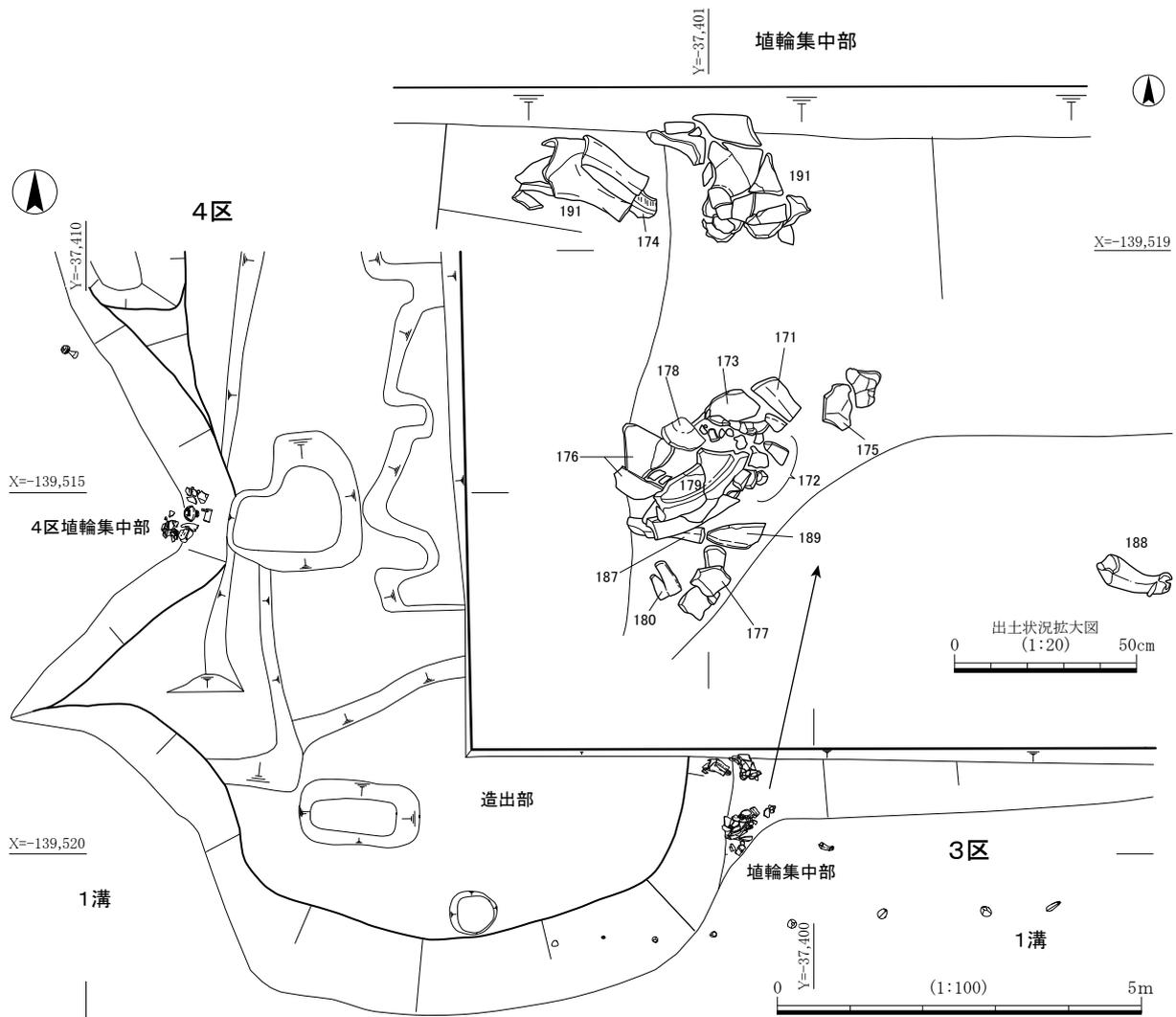


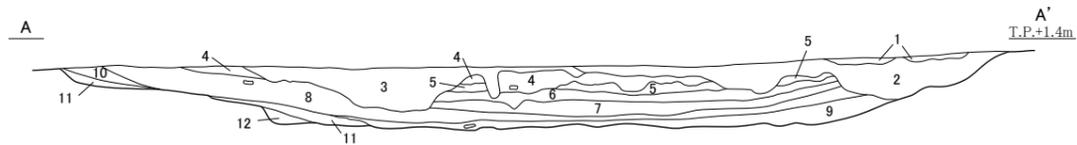
図 38 3区 1溝埴輪出土状況

う緩やかな傾斜となっている。溝の下層には黒褐色の粘土が堆積する。この北壁西端部の4区との境には、溝で囲まれた島状の高まりがみられる。これは墳丘の造出部にあたる可能性が高いと考えている。その裾部に広がる灰黄褐～黒褐色の粘土質シルト層から多くの埴輪が出土した。円筒埴輪以外に、人物や馬などの形象埴輪が多く含まれていた。細片化していない大型片が多く、まとまって出土していることから、墳丘から崩落したままの状態であったことがうかがえる。

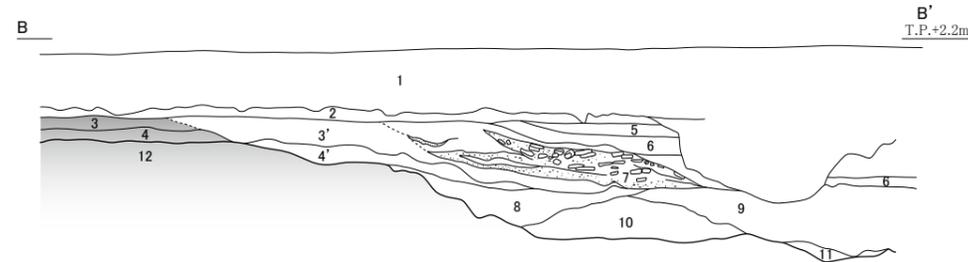
また高まりの南裾部から東に向かって並ぶ木杭列を検出した。部分的に2列に打ち込まれており、水流を制御するためのしがらみのような施設であったと考えている。西の4区側からの流れを北壁北方へ向かわぬように堰き止め、南西方向へ続く140溝へ直線的に流す役割を果たしていたと考えられる。

溝の埋土には古墳時代の遺物だけでなく、中世の遺物も多く包含している。溝底面からも確実に瓦器椀が出土しており、中世に古墳の周溝を改修し、何度も川浚えを行ないながら長い間水路として利用していた様子がうかがえる。

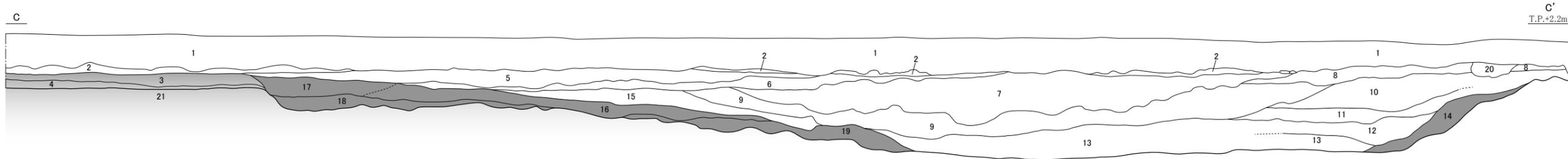
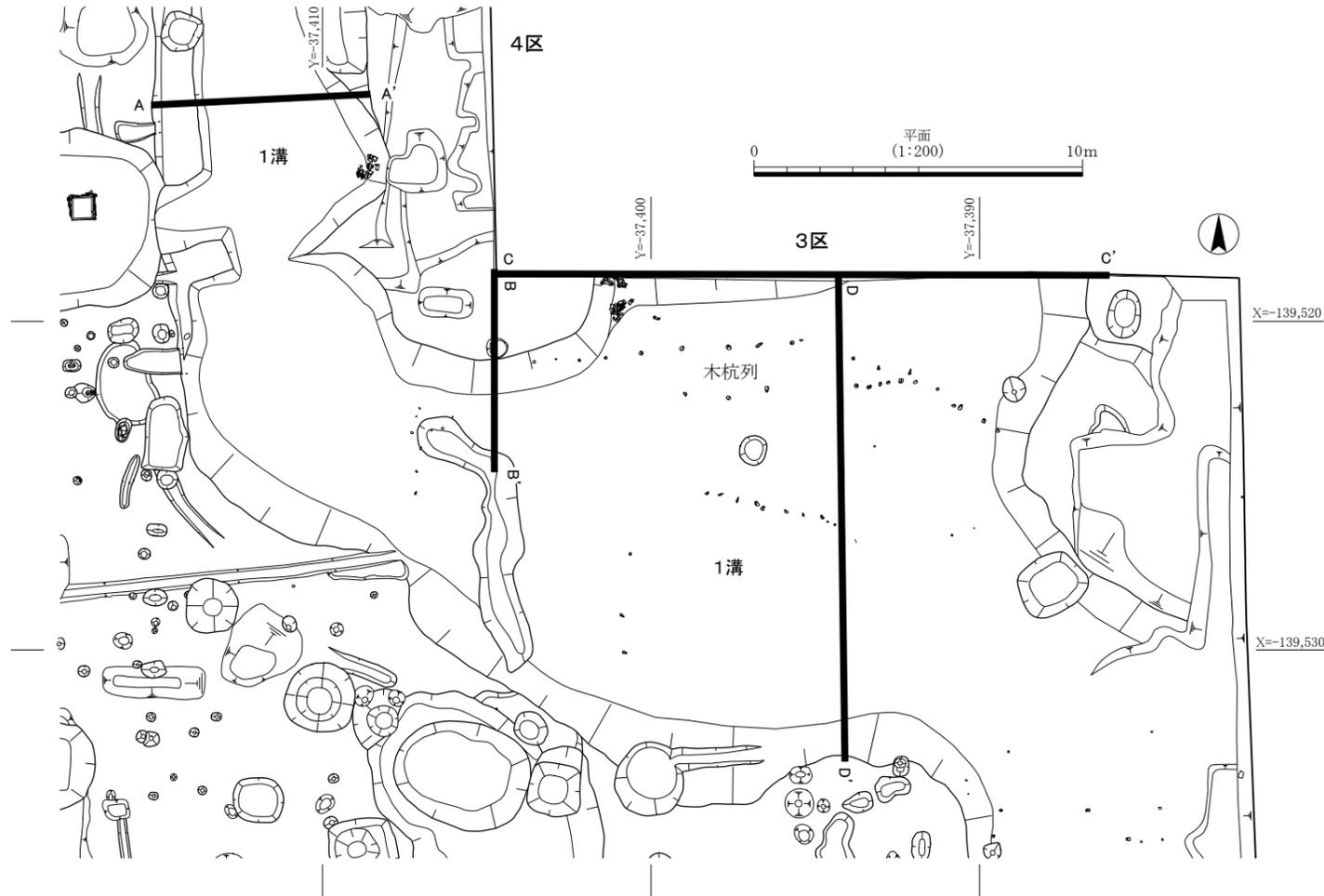
古墳時代と中世の大きく2時期の遺物が出土している。古墳時代の遺物は溝の上層からも数点出土しているが、大半は調査区北壁際の造出部の裾から出土している。須恵器(169・170)と埴輪(171～191)がある。須恵器は埴輪に比べて少ない。埴輪には円筒埴輪のほか、蓋や人物、動物など形象埴輪が多く含まれている。



- 1. 10YR3/1 黒褐 シルト質粘土(粗粒砂～細礫混じる.土器多く含む)
- 2. 10YR4/3～3/3 にぶい黄褐～暗褐 粘土質シルト(粗粒砂～細礫多く含む)
- 3. 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト質粘土(粗粒砂～小礫多く含む)
- 4. 10YR5/2 灰黄褐 粘土
- 5. 10YR6/2～5/2 灰黄褐 粘土
- 6. 10YR3/1 黒褐 粘土(2.5Y6/2 灰黄 粘土偽礫少し混じる)
- 7. 10YR4/1～4/2 褐灰～灰黄褐 粘土
- 8. 6に同じ
- 9. 10YR3/2 黒褐 粘土
- 10. 10YR3/2 黒褐 粗粒砂～細礫(粘土質シルト混じる)
- 11. 7.5YR5/2 灰褐 粗～極粗粒砂
- 12. 10YR4/1 褐灰 粘土(粗～極粗粒砂多く含む)



- 1. 現代盛土
- 2. 2.5Y4/1 黄灰 粘土質シルト【旧表土】
- 3. 10YR5/2～4/6 灰黄褐～褐 粘土質シルト(粘性強い,中粒砂～小礫混じる)
- 3'. 10YR5/2～4/2 灰黄褐 粘土質シルト(中粒砂～小礫混じる. 上面は10YR4/1 褐灰)
- 4. 中粒砂～小礫(10YR4/1 褐灰 粘土混じる)
- 4'. 10YR5/6～2.5Y6/2 黄褐～灰黄 砂質シルト(細～中粒砂多く含む. 細礫混じる)
- 5. 10YR4/2 灰黄褐 粘土(中～粗粒砂多く含む)
- 6. 7.5YR5/2～10YR5/2 灰褐～灰黄褐 粘土
- 7. 10YR4/3 にぶい黄褐 中粒砂～小礫
- 8. 7.5YR4/1 褐灰 粘土(中粒砂～細礫多く含む)
- 9. 10YR4/1 褐灰 粘土(中～極粗粒砂混じる)
- 10. 10YR4/1 褐灰 粘土
- 11. 2.5Y3/1 黒褐 粗粒砂～細礫(粘土混じる)
- 12. 2.5Y6/4 にぶい黄 細～粗粒砂(細～小礫多く混じる)【基盤層】



- 1. 現代盛土
- 2. 旧表土
- 3. 10YR5/2～4/6 灰黄褐～褐 粘土質シルト(粘性強い,中粒砂～小礫混じる)
- 4. 中粒砂～小礫(10YR4/1 褐灰 粘土混じる)
- 5. 10YR5/3～4/3 にぶい黄褐 粘土質シルト(中粒砂～細礫混じる)
- 6. 10YR4/2～5/3 灰黄褐～にぶい黄褐 粘土質シルト(中粒砂～細礫混じる)
- 7. 2.5Y6/2～7.5YR5/6 灰黄～明褐 砂礫偽礫(基盤層と酷似し間違えやすい)
- 8. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質粘土(炭と粗粒砂～細礫混じる)
- 9. 10YR3/1 黒褐 粘土(中粒砂～細礫と5Y6/2 灰オリーブ 基盤層の砂礫偽礫混じる)
- 10. 10YR4/3～3/3 にぶい黄褐～暗褐 シルト質粘土(中粒砂～小礫多く含む)
- 11. 10YR4/2～4/3 灰黄褐～にぶい黄褐 シルト質粘土(東寄りには砂礫多い,中粒砂～小礫多く含む)
- 12. 10YR4/1 褐灰 粘土(中粒砂～小礫多く含む)
- 13. 10YR3/1 黒褐 粘土(中粒砂～細礫混じる)
- 14. 10YR5/3 にぶい黄褐 中粒砂～細礫(シルト混じる)
- 15. 10YR4/2～3/2 灰黄褐～黒褐 粘土(中粒砂～細礫多く含む)
- 16. 10YR4/2～3/2 灰黄褐～黒褐 粘土質シルト(中粒砂～小礫.特に細～小礫多く含む)
- 17. このあたりは10YR3/2～2/2 黒褐で砂礫少ない.埴輪多く含む
- 18. 10YR4/2～4/3 灰黄褐～にぶい黄褐 シルト質粘土(中粒砂～細礫混じる)
- 19. 13iに細～小礫多く含む
- 20. 2.5Y6/4 にぶい黄 シルト質粘土
- 21. 2.5Y6/4 にぶい黄 細～粗粒砂(細～小礫多く混じる)【基盤層】

- 1. 2.5Y4/2 暗灰黄 粘土(中粒砂～細礫混じる)
- 2. 10YR4/2～4/3 灰黄褐～にぶい黄褐 シルト質粘土(粗～極粗粒砂混じる.一部の下面に有機物層)
- 3. 2.5Y7/2～6/4 灰黄～にぶい黄 基盤層の細粒砂～細礫偽礫多く含む(上層は10YR5/2 灰黄褐 細粒砂～細礫.下層は10YR4/1 褐灰 粘土)・・・(C断面7に対応)
- 4. 偽礫混じらない.粘土
- 5. 偽礫混じらない.砂礫
- 6. 2.5Y3/1 黒褐 粘土(粗粒砂～細礫混じる)・・・(C断面13に対応)
- 6'. 2.5Y4/1 黄灰 粘土(粗粒砂～細礫混じるが6よりやや砂礫少なく粘質強い)・・・(C断面9に対応)
- 7. 攪乱
- 8. 攪乱
- 9. 中粒砂～小礫(シルト混じる)
- 10. 7.5Y6/1 灰 粘土(中～粗粒砂混じる)
- 11. 10YR4/1～4/2 褐灰～灰黄褐 シルト(炭混じる,中粒砂～細礫・10YR6/3 にぶい黄橙 シルト偽礫多く含む)
- 12. 10YR5/2 灰黄褐 粘土(下面に細～中粒砂)
- 13. 10YR5/2 灰黄褐 粘土
- 14. 10YR5/3～5/4 にぶい黄褐 シルト質粘土(中粒砂～細礫多く含む)
- 15. 10YR4/1～3/1 褐灰～黒褐 粘土
- 16. 10YR4/1～3/1 褐灰～黒褐 粘土(砂礫・木片多く含む)
- 17. 10YR5/2 灰黄褐 中粒砂～細礫(シルト混じる)

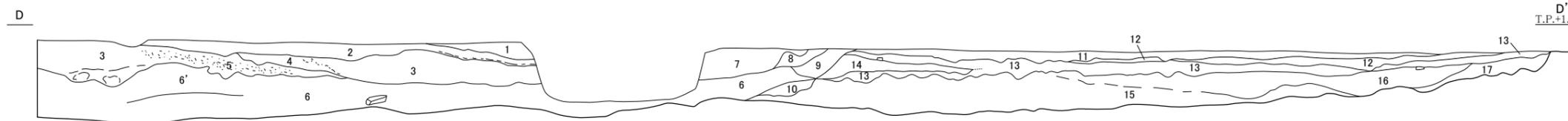


図 39 3区 1溝断面

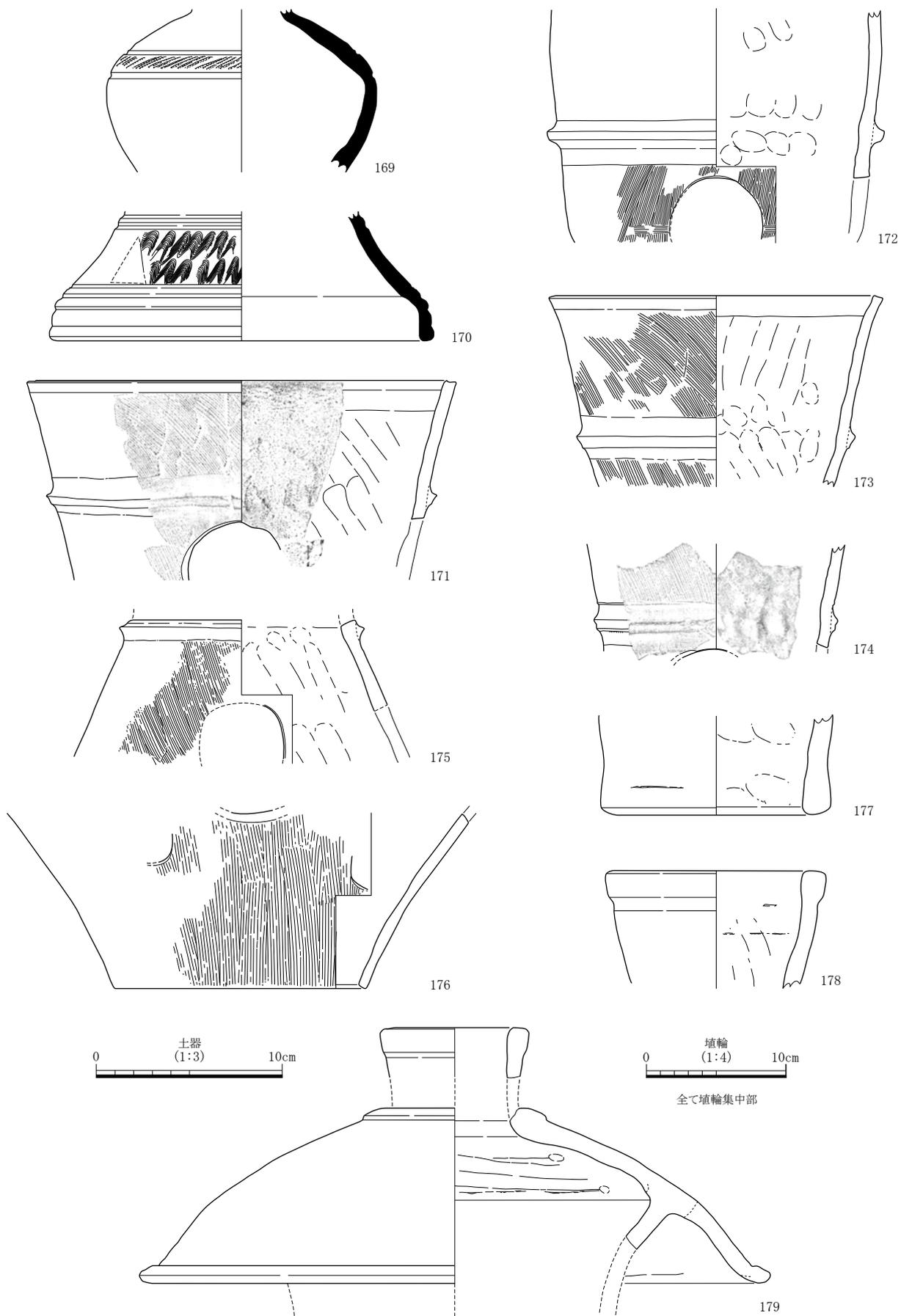


図40 3区1溝出土遺物(1)

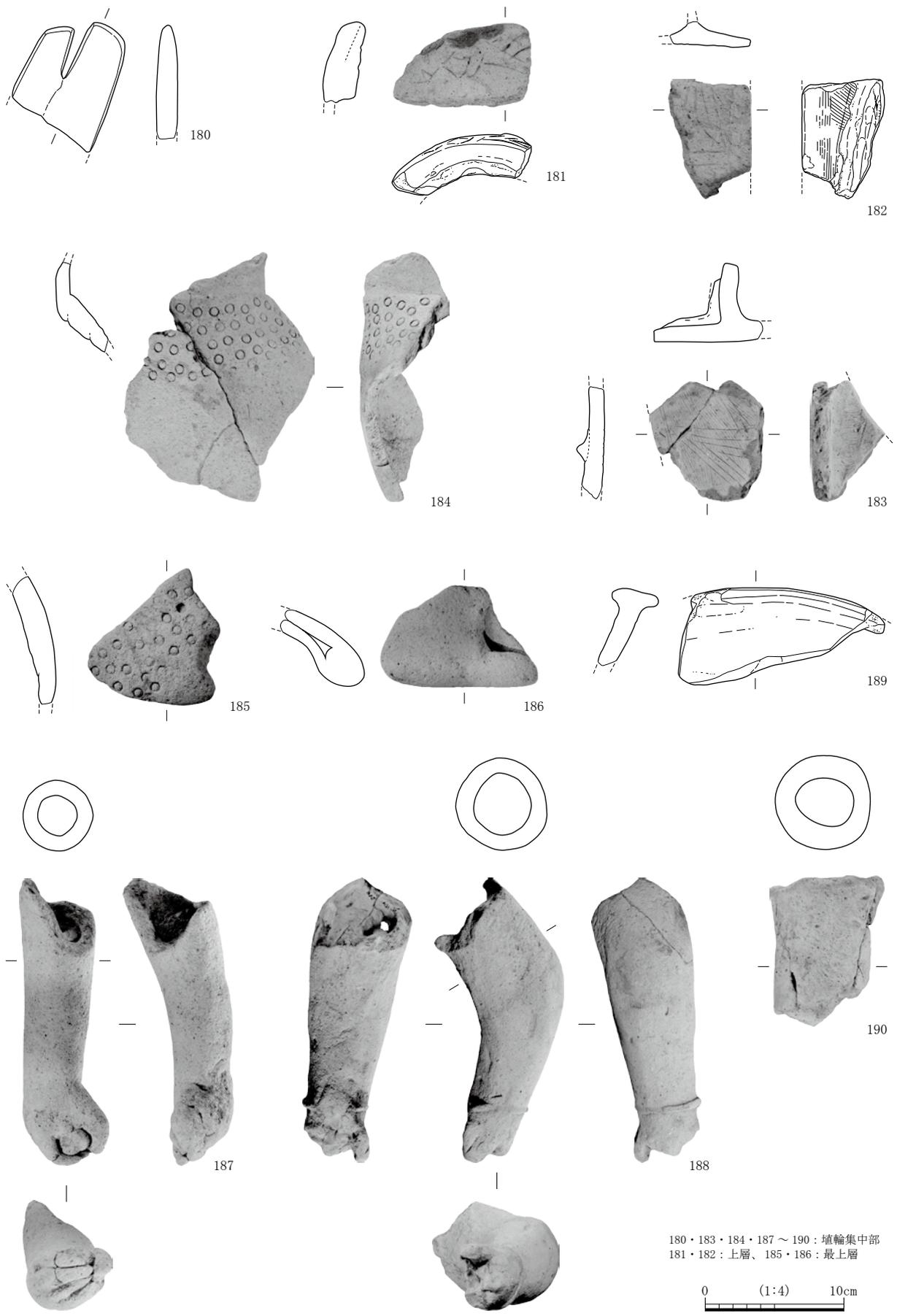


图41 3区1溝出土遺物(2)

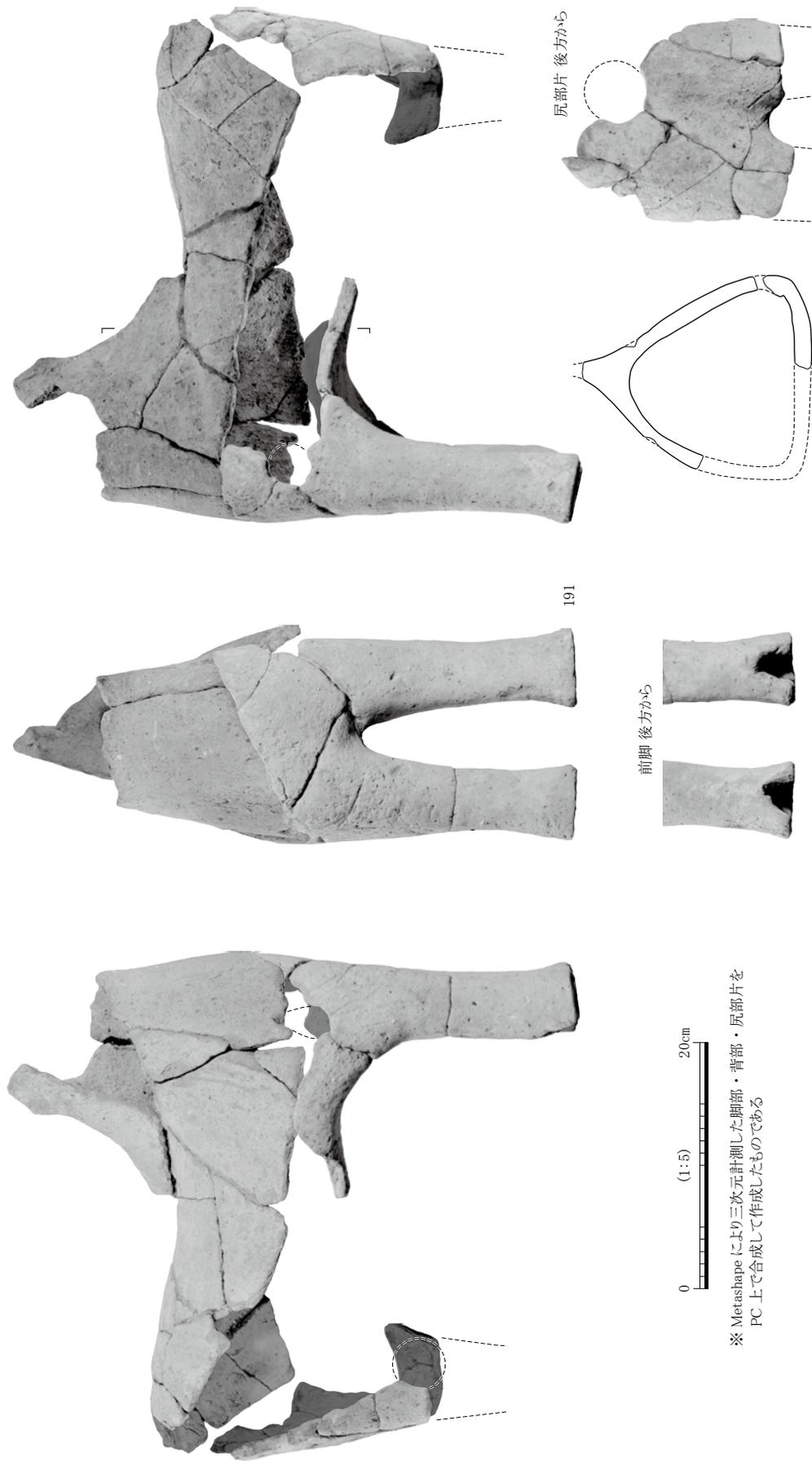


図42 3区1溝出土遺物(3)

169 は壺で、文様帯には櫛描列点文を押す。脚が付くかもしれない。170 は台付壺の脚部である。下段には三角形の透孔を開ける。171 ~ 174 は円筒埴輪である。171 は口縁部まで直線的に開く。外面は粘土を塗り付けたようなナナメハケで、口縁端部をヨコナデする。突帯は片側が潰れた台形で、下段側に透孔を設ける。172 は中位片。外面は細かいタテハケで、内面はナデ。断面台形の突帯を付し、突帯下の段に透孔を設ける。173 は口縁部片である。外面はナナメハケで、内面はナデ。口縁部はやや外反し、端部をヨコナデする。突帯は片側が潰れた台形である。174 も中位片で、外面はナナメハケ。低い台形の突帯を付し、突帯下の段に透孔を設ける。175 は形象埴輪の台部であろうか。天地は図示したものとは逆かもしれないが、突帯接合時のナデが雑で、接合痕が明瞭に残っている側が下になるように復原した。外面はナナメハケで、内面はナデ。突帯は断面三角形で、透孔を設ける。176 も形象埴輪の一部と考えられるが、全体像は不明。当初天地逆の向きに復原していたが、端部内面にヨコナデが認められないことから、上端にはならないと判断し、図示したように下部が細くなる向きとした。端部を水平に据えているため、体部が大きく開いているが、斜めに切られていた箇所であった可能性もある。その場合は体部が大きく起きることになる。外面はタテハケで、狭い範囲に3箇所の透孔を設ける。177 は円筒埴輪、あるいは形象埴輪の基底部片である。外面のハケ調整は認められない。178 ~ 180 は蓋形埴輪である。178 は軸受部の破片で、口縁部外側には低い突帯がめぐる。179 は台部を欠く笠部片で、接合しないが軸受部まで残る。軸受部の口縁部外側には低い突帯がめぐる。ここに収まる立飾の軸径は約7.5cmである。笠部はむくりが付き、先端で僅かに反る。笠端部上面には低い段を作り、玉縁状とする。軸受部下端突帯は低く扁平である。表面は摩滅が著しく、調整は不明。また笠部外面には線刻文様は認められない。

180 は立飾部の飾板先端である。184・185 は人物埴輪で、184 は首から肩部、185 はその付近とみられる。両者には竹管文による装飾がみられる。184 については約5~6cmの幅で首のまわりをめぐっており、衣の襟を表現したものと考えられる。182・183 は全体の形状は不明。盾形埴輪か。183 は形象部の裏に挟りをもつ部位をT字状に接合し、さらにその接合部にL字状に粘土を足して補強する。表面には鋸歯文風の文様を刻むが、文様は一部分であり、直弧文になるのかは不明。その線刻は非常に細い。棒状の工具で線刻した場合、線の両側に滓が残るが、これには全く残っていない。鋭い刃物のような工具で描いた可能性が高い。線刻のある面だけでなく、内側となる各面にもハケ目が残っており、埴輪の種類を特定することが難しい。182 も形象部の裏にT字状に別の部位が接合する。その鱗状に出た箇所の裏面はハケ目が観察できる。表面には線刻がみられるが、183 よりも太く、幅1mm程度の先端が平らな工具が用いられている。181 の形状は丸瓦に似る。外面には直弧文を刻む。大刀形埴輪の柄や鞘の装飾部などが考えられるが、詳細は不明。186 は女子人物埴輪頭部の髻である。折り曲げ、重ねて成形している。189 は飾馬の鞍の後輪と思われる。馬のたてがみの可能性も考えたが、端部がT字状でないことから、鞍と判断した。187・188 は人物埴輪の腕部である。187 は右手で、手首の直径は4.3cmを測る。直径2.0cmの棒状の何かを握っている。折れているが、弓などの可能性が考えられる。188 は左手で、手首の直径は3.9~4.5cmを測る。手首には幅約5mmの粘土紐を付し、腕輪を表現する。その粘土紐の下や肘部にはハケ目が観察できる。190 は動物埴輪の脚部である。中空で、下半部の直径は6.7~6.8cmである。

191 は馬形埴輪である。円筒の脚部に腹部となる水平の板をのせ、その上に横断面が逆U字状の胴部を重ねて成形する。頭部を欠損するが、首はほぼ垂直に起きる。透孔は両脚の付け根付近の4箇所と肛門部の計5箇所に設ける。前脚付け根の透孔は直径約3cmで、肛門部は直径約5cmを測る。透孔は基本的に円形であるが、右足部の透孔のみ上部が尖った滴形を呈する。前脚の長さは正面からみた状態で17.0cm

で、蹄の幅は右脚が 6.0cm、左足が 6.3cm である。腹部までの高さは 18.5 ～ 19.0cm で、胴部の幅は 16.0cm を測る。尾部を除いた胴部の長さは約 41.5cm である。脚部下端は背面側を切り欠いて蹄を表現する。全体に表面の摩滅が著しいが、尻部周辺には僅かにハケ目が認められる。

これら古墳時代の遺物は、いずれも 5 世紀後半 (TK 23 ～ TK 47 型式) の所産である。

中世の遺物には、土師器皿 (193 ～ 209) ・羽釜、瓦器椀 (211 ～ 224 ・ 226) ・皿 (225)、瓦質土器羽釜 ・ 火鉢、東播系須恵器壺 (227 ～ 231 ・ 235) ・ 片口鉢 (232) ・ 甕 (234)、陶器播鉢 (233)、輸入磁器 (192 ・ 210)、金属製品 (236 ・ 237)、石製品 (238) などのほか、多くの瓦 (239 ～ 250) がある。最上層 ・ 上層 ・ 下層 ・ 最下層に分層して遺物を取り上げたが、最下層からも 14 世紀代のもので出土するなど、時期差は認められなかった。12 世紀から 14 ・ 15 世紀代のもものが中心である。

192 は 13 世紀後半から 14 世紀前半の白磁皿。210 は 13 世紀代のものと思われる青白磁の合子蓋である。土師器皿は 12 世紀後半から 13 世紀前半頃のもの、14 世紀後半から 15 世紀前半頃のものに大きく分かれる。前者は 197 ・ 202 ・ 205 ・ 207 ・ 209 で、後者は 193 ～ 196 ・ 198 ～ 201 ・ 203 ・ 204 ・ 206 ・ 208 である。瓦器椀も 12 世紀後半のものから 14 世紀前半のものまで時期幅がある。212 ・ 224 のような小型の椀はヘラミガキが密な 12 世紀後半のものである。ともに口縁部が外反する。見込みの暗文は 224 が螺旋状、212 は摩滅しており不明。211 の小型の椀も、見込みの斜格子状暗文しか施されていないが、作りが丁寧であり同時期のもと思われる。225 は和泉型で、見込みの暗文は平行線。これも 12 世紀後半。上記以外の瓦器椀はどれも 13 世紀後葉から 14 世紀前半の所産である。そのうち 213 ・ 214 ・ 217 ～ 219 ・

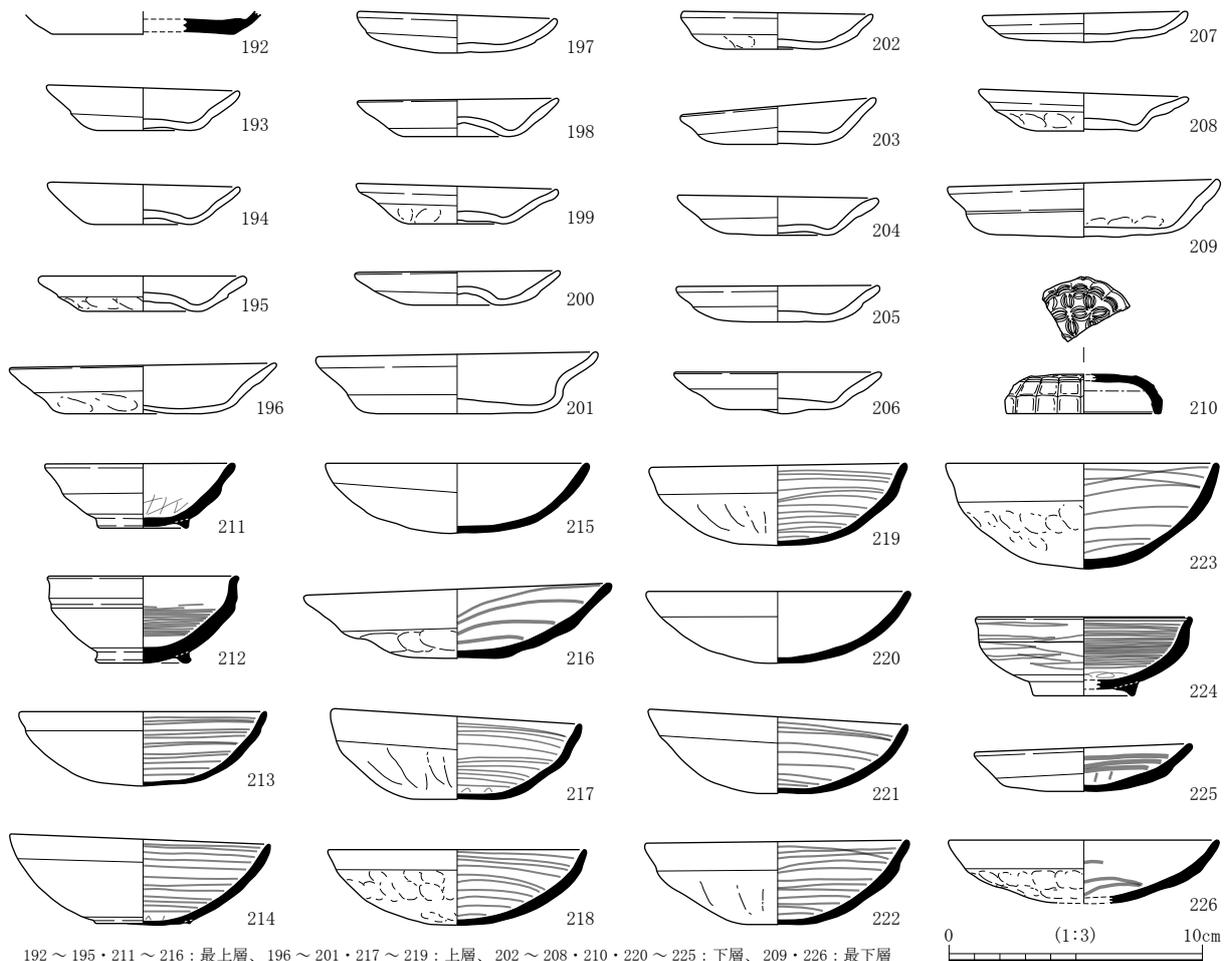


図 43 3 区 1 溝出土遺物 (4)

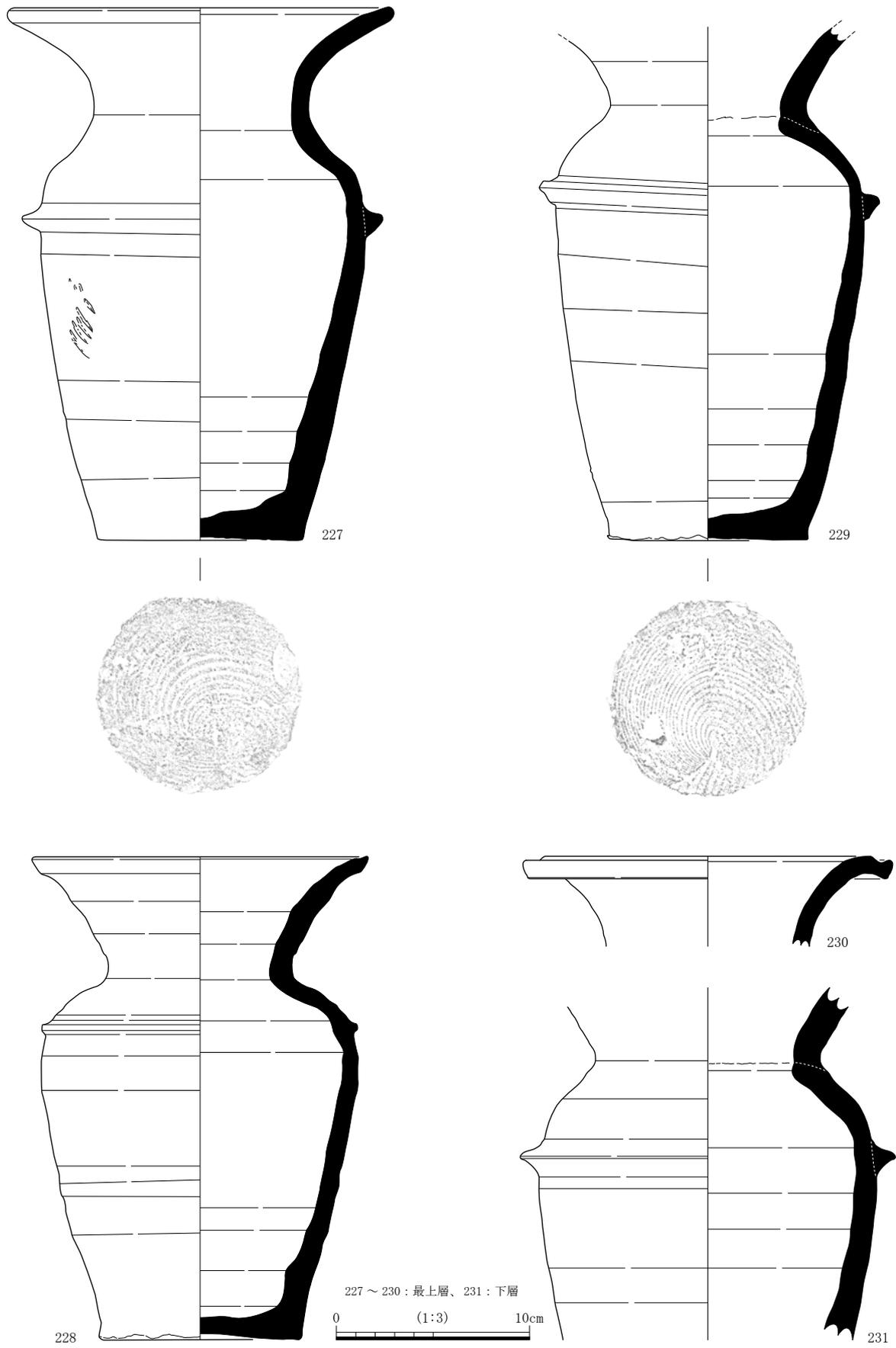


图44 3区1溝出土遺物(5)

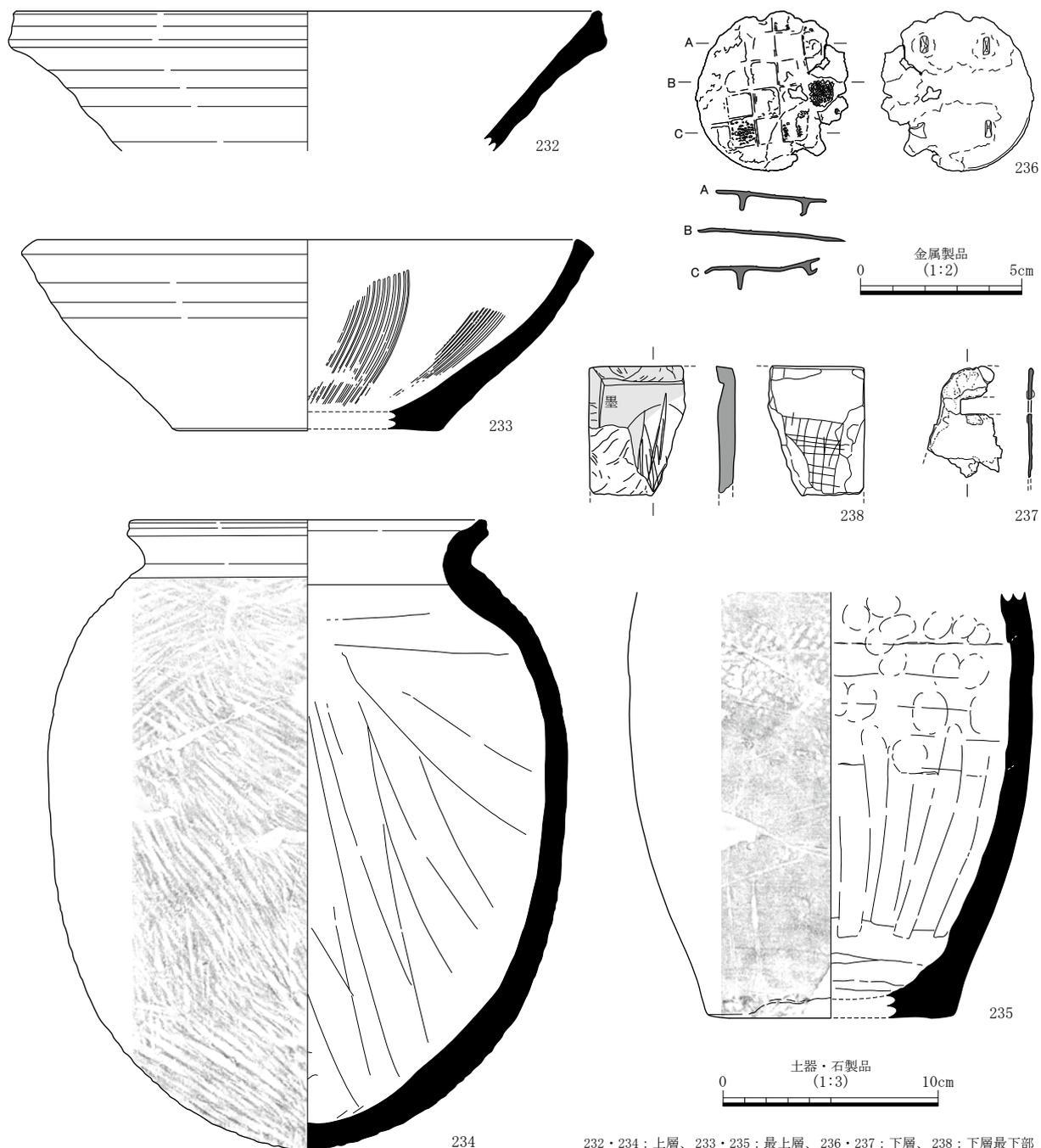


図45 3区1溝出土遺物(6)

221～223は13世紀後葉から14世紀初頭、215・216・220・226はそれよりもやや新しく14世紀前半のものである。215・220はヘラミガキも施されていない。高台が付くものは214の1点のみ。214・217は見込みにジグザグ状の暗文を施す。それ以外は見込みまで連続した圏線ヘラミガキである。216・226は和泉型。東播系須恵器の壺はいずれも11世紀後葉のもので、消費地では出土量の少ない器形である。肩部が張り、断面三角形の突帯が1条めぐる。口縁部は227のように大きく開いて端部を丸く収めるものと、228・230のように端部に面をもち、内側上面に明瞭な窪みをつくるものの2種がみられる。227～231は内外面ともにヨコナデで成形され、227・229は底部を糸切りで切り離す。228は底面未調整であるが、糸切り痕跡は認められない。なお、227には外面上部に平行タタキの痕跡が僅かに認められるが、タタキによって成形された痕跡ではなく、ヨコナデの後に付いたものと思われる。235は外面に横や斜め方向の雑なナデが認められるが、上半には格子目状のタタキが明瞭に残る。内面は底部との接合部が横位、下

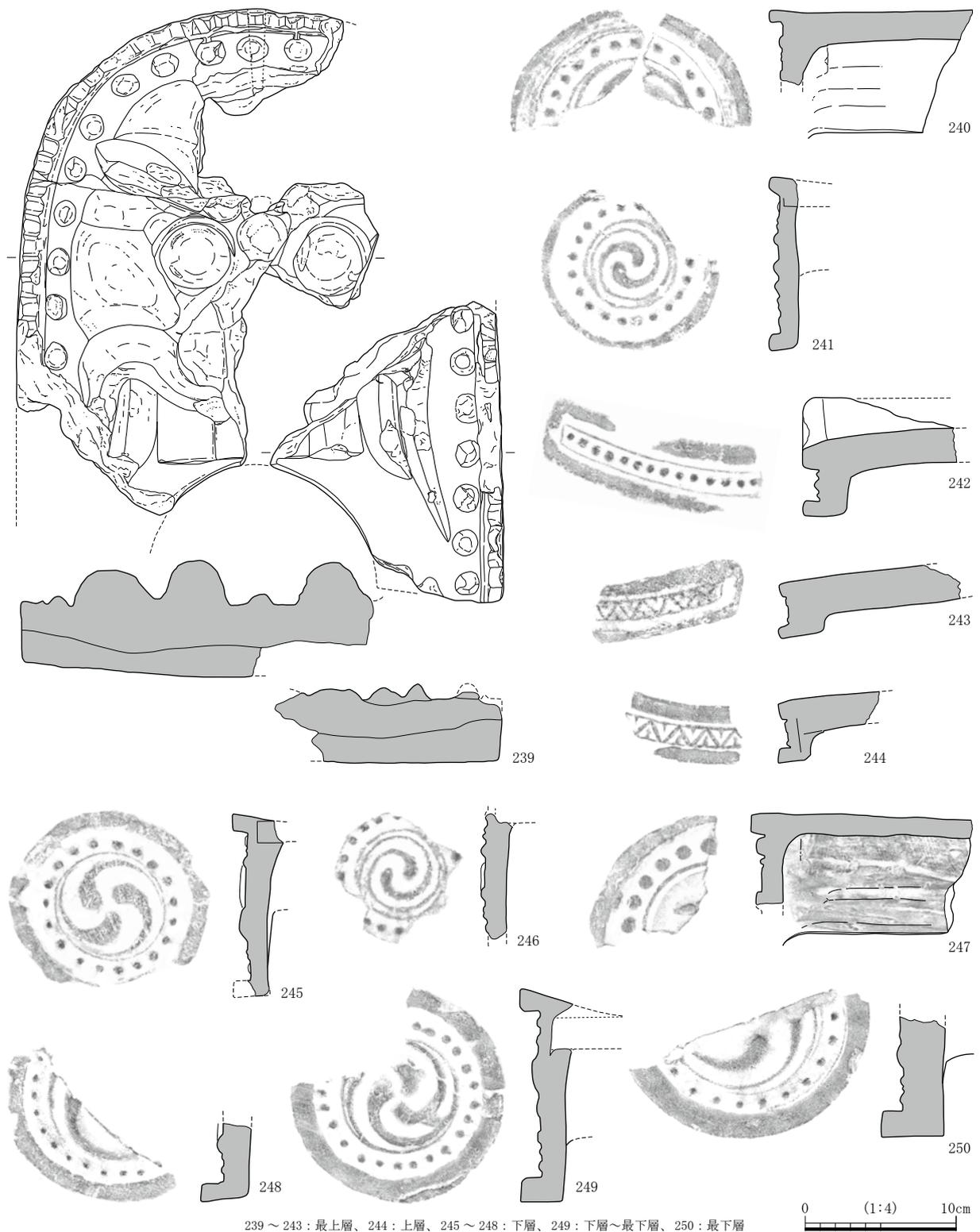


図46 3区1溝出土遺物(7)

半は縦位のナデ。上半は横や斜め方向のナデの下に指頭圧痕が残る。底面は未調整であるが、糸切り痕跡は認められない。227～231とは明らかに異なる製作技法であり、突帯が付かないタイプの壺と考えられる。233は13世紀後半から14世紀前半の備前焼。口縁端部は四角く収まる。播目は12条を1単位とする。234は12世紀後半頃の甕。丸底で、体部外面には彫りの深い平行タタキが規則性なく施され、内面は強いナデによって当て具の痕跡が完全に消されている。口縁部はヨコナデで、口縁部内側上面がやや窪む。

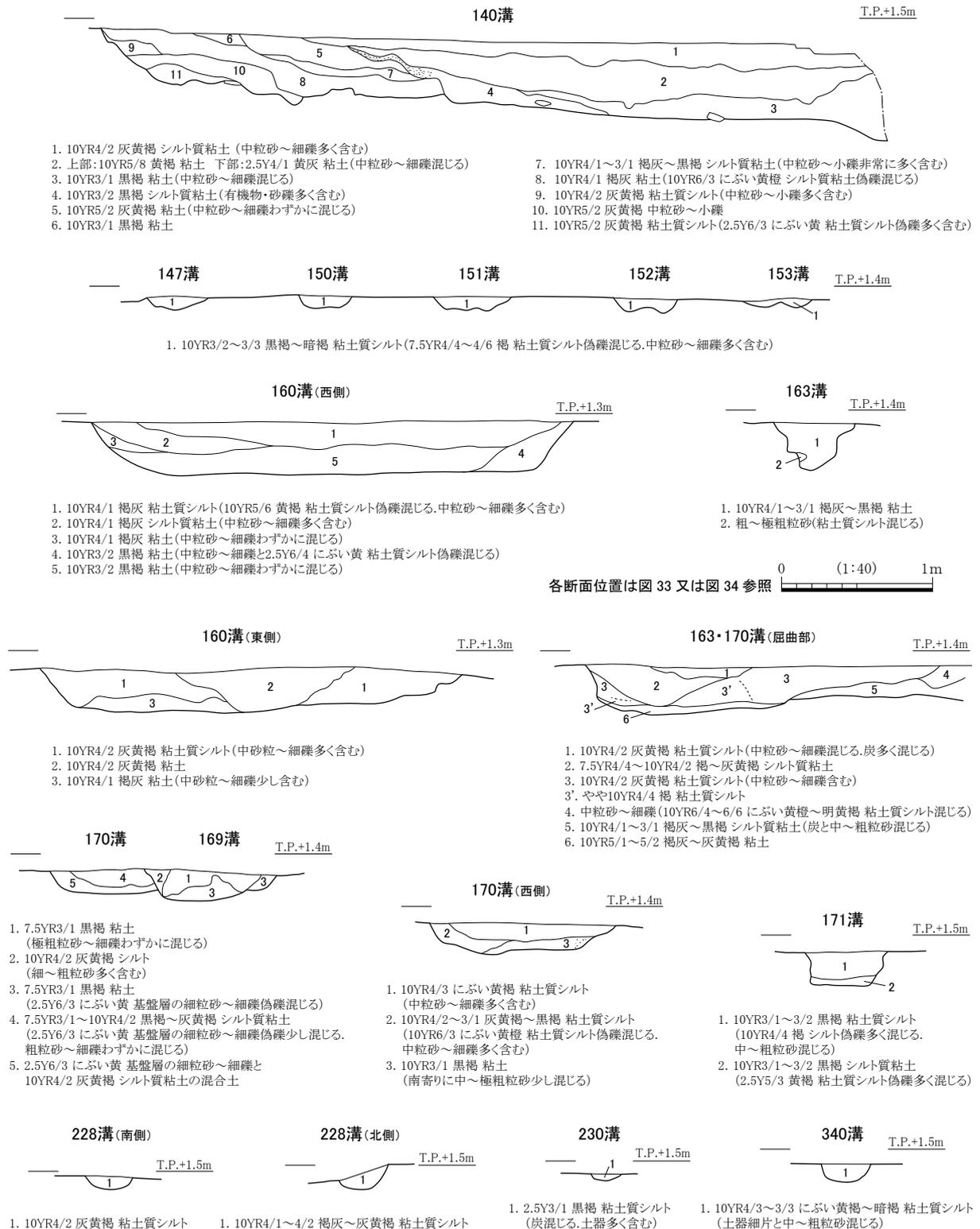


図 47 3区 溝断面

232 もほぼ同時期のものである。236 は銅製の飾り金具である。全体の腐食が著しい。縁の一部を欠損するが、平面形は直径 5.0cm の円形に復原できる。厚みは約 1 mm と薄い。表面は、僅かに盛り上がる細線を縦横に 5 本ずつ 8.5mm 間隔に配して区画し、その碁盤目状にできた区画を市松模様のように交互に装飾する。装飾には鱗状の非常に小さな穴の開いたおそらく金銅と思われる金色の薄板が貼られている。裏面には何かに打ち込んで留めるための三角形に尖った突起が 4 箇所にある。突起の高さは約 5 mm あり、そのう

ちの一つは大きく曲がっているが、ほかはほとんど曲がっていない。おそらく厚さ5mm以上あるものにまっすぐ打ち込まれていたと考えられる。戒体箱や香炉箱などのような仏具を収納する箱の外側を装飾する金具であったと考えているが、詳細は不明。237は厚さ約1mmの薄い銅板片である。平面形は裾広がり釣鐘形に復原でき、上部に長方形の孔を開ける。残存長は3.4cm、残存幅は2.3cmを測る。表面にのみ鍍金が施されている。座金具や蓋開閉部の留金具などが考えられるが、詳細不明。238は硯片で、底面に碁盤目状の線刻がある。

239は南都七大寺式の鬼面文鬼瓦である。外区の内側に珠文、外側に輻状文を配す。目が大きく突出している特徴は東播系の鬼瓦によく似ている。長さ39.6cm、うち脚部長9.2cm、幅32.2cmに復原できる。眉間部に前後の、頂部に上下の釘穴を設ける。12世紀後半頃のものと思われる。241・246は同範の左巻き二巴文。13世紀。240・245も13世紀代のものか。247は珠文が大きい。内区は梵字などの文字であったと思われる。12世紀後半頃のものか。248は左巻きの巴文で、珠文が小さい。140溝出土の274と同範。13世紀。249は13世紀の左巻き三巴文で、52と同範と思われる。250は46と同範瓦だが、巴の間を故意に指で撫でて文様を変形させている。同様の瓦は後述140溝からも出土している(275・279)。242は14世紀の連珠文軒平瓦で、300と同範。243・244も同時期の幾何学文軒平瓦。退化した剣頭文を上下に重ねたような文様である。

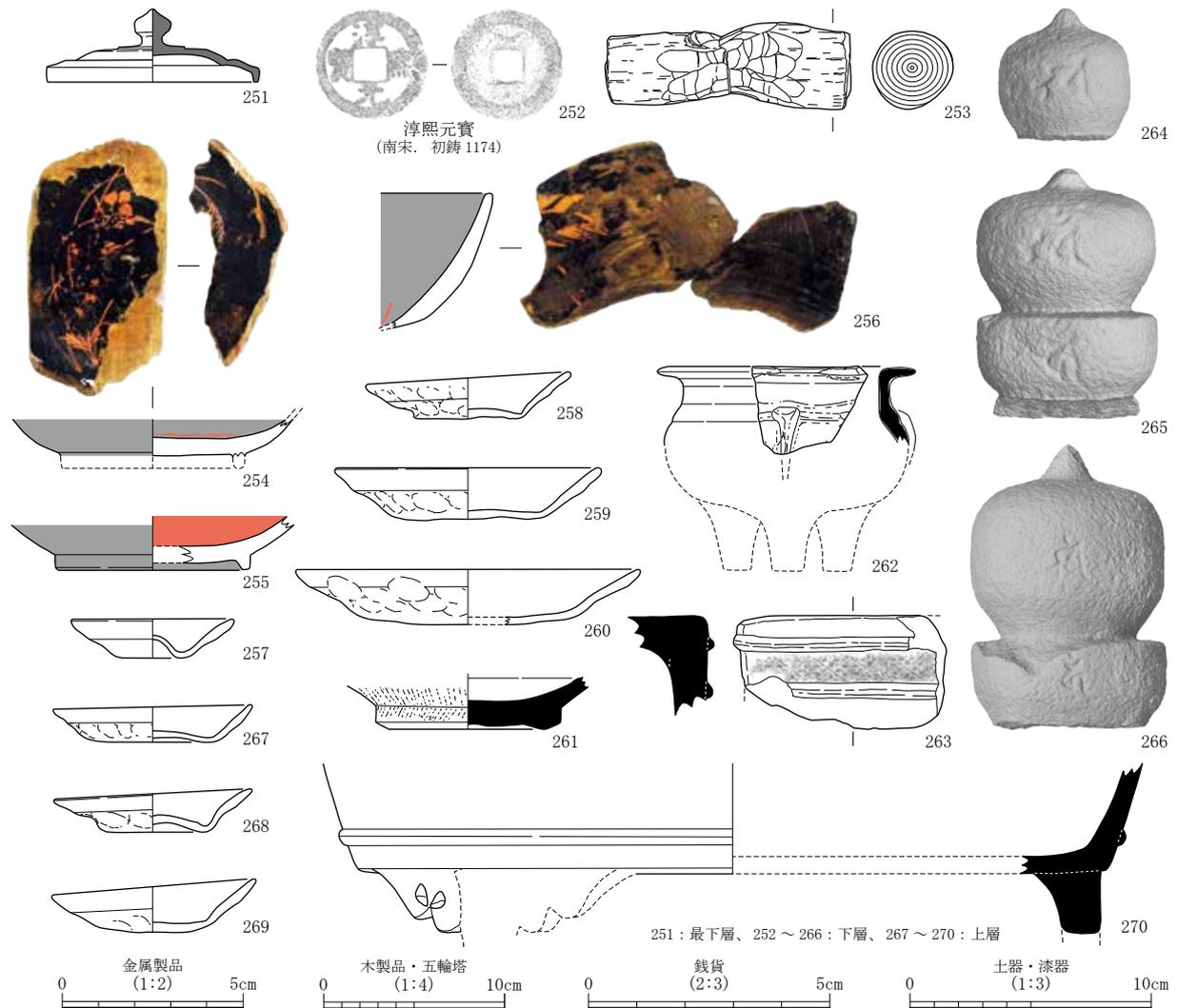
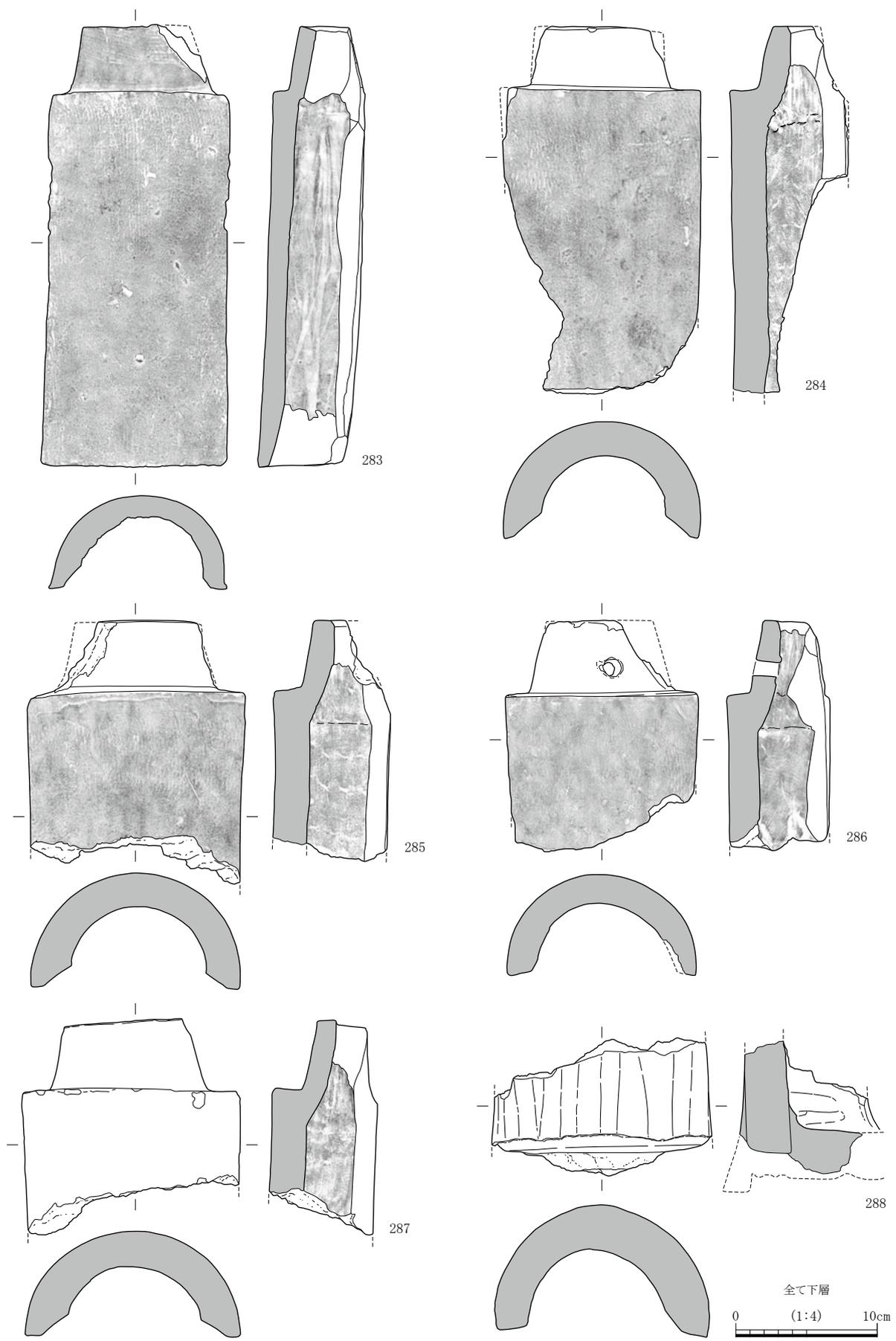


図48 3区140溝出土遺物(1)



图 49 3区 140 溝出土遺物 (2)



全て下層
 (1:4)
 0 10cm

図 50 3区140溝出土遺物(3)

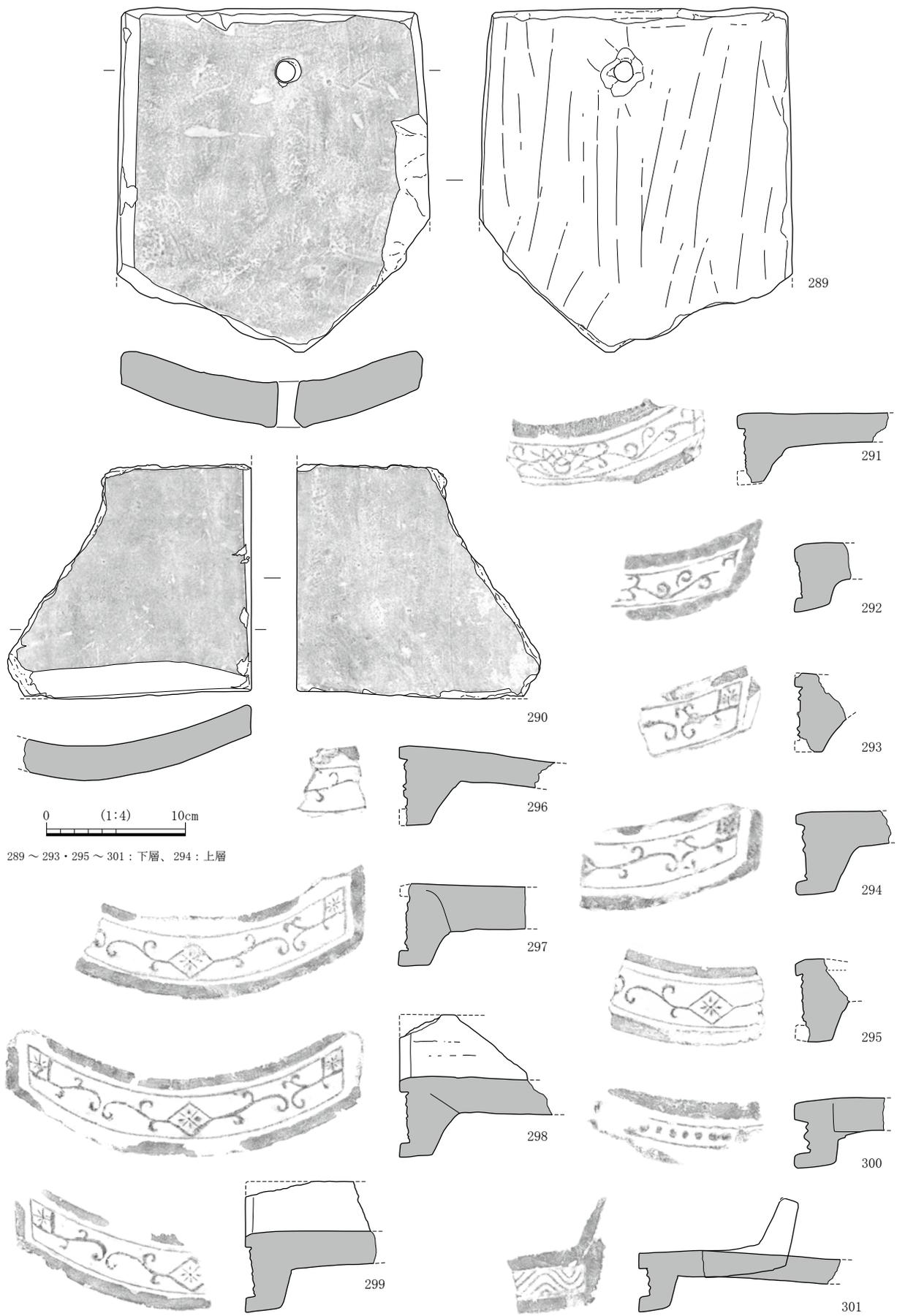


图 51 3区 140 溝出土遺物 (4)

140 溝 調査区北東部に位置する。上記1溝と合流する溝で、1溝の南東部から南東方向に向かってのび、東壁から調査区外へと続く。このため、溝で囲まれた調査区北東隅には島状の高まりが残る。1溝と同じく、溝というよりは「流路」あるいは「水路」と呼ぶべき規模の大きな遺構である。片側の溝肩が調査区外や攪乱により失われているため、溝の全体規模は明らかでないが、1溝との合流部では幅約8m、深さ0.5m、東壁際の東西幅は8m以上、深さは0.6mを測る。溝の下層には黒褐色の粘土やシルト質粘土が堆積する。

分層して遺物を取り上げたが、上層・下層で時期差は認められなかった。各層からは、土師器皿（257～260・267～269）・羽釜、瓦器椀、東播系須恵器壺・甕、瓦質土器足釜・羽釜・播鉢・火鉢（263・270）、陶器播鉢、輸入磁器（261・262）、漆器椀（254～256）、金属製品（251）、木製品（253）、五輪塔（264～266）、銭貨（252）などのほか、多くの瓦（271～306）が出土している。12世紀代のものから14・15世紀のものまで時期幅があるが、14・15世紀代のものが多い。埴輪も僅かに含むが、そ

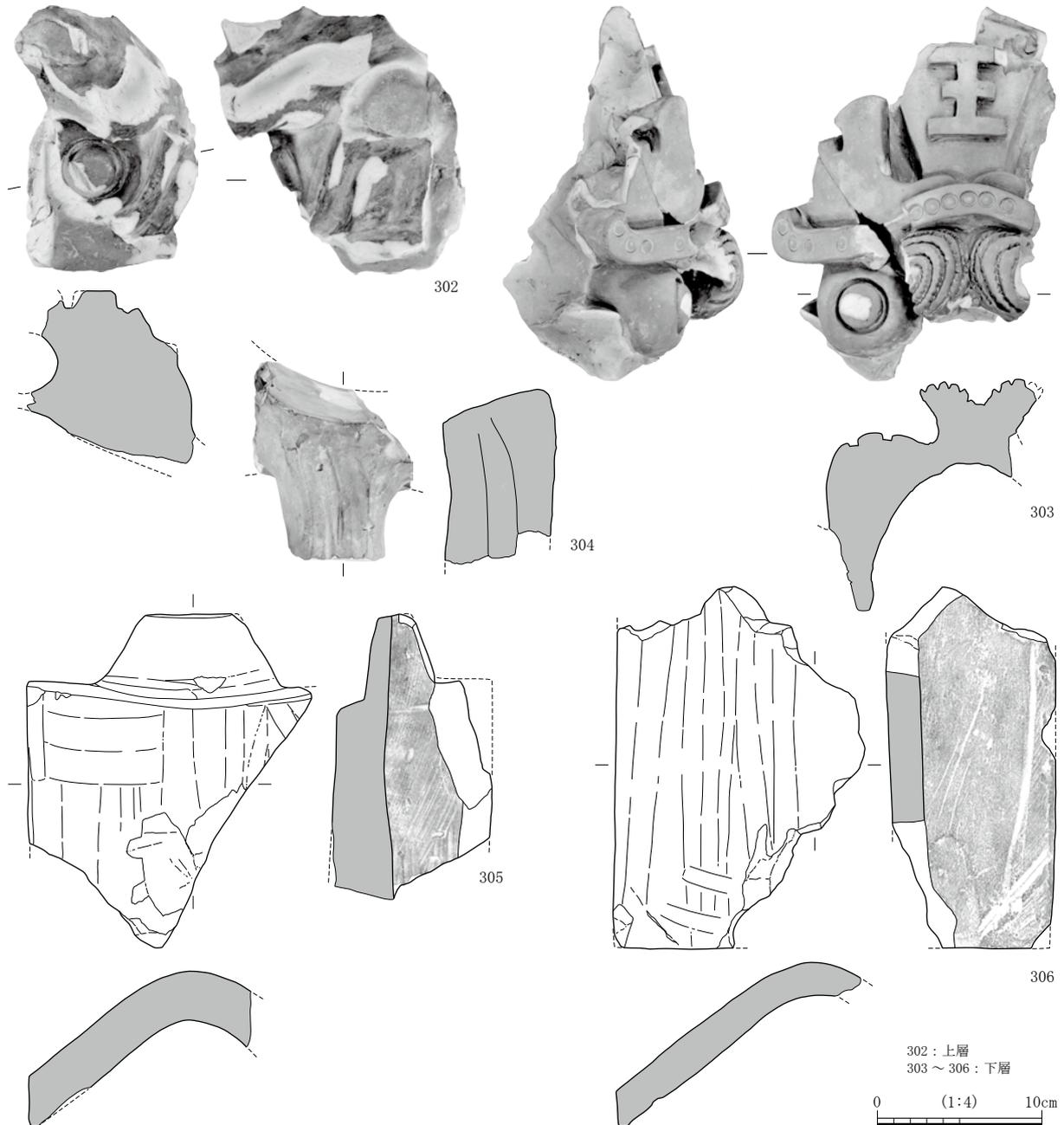


図 52 3区140溝出土遺物（5）

の量は1溝に比べ極端に少ない。251は銅製密教法具の蓋である。素文無装飾で、口縁が僅かに立ち上がり被せ蓋となる。これは昭和59年に、今回の調査地の東側で実施された調査で出土し、現在府の指定文化財に登録されている金銅密教法具⁵⁾と同種のものであり、寺院の存在、またその性格を示す非常に重要な資料である。ただし、以前の出土品とは鈕の形や鈕座の細工、また大きさが異なっておりセットにはならない。表面には同心円状の細かい擦過痕が認められることから轆轤引きによって仕上げられたことがうかがえる。表面は薄く錆びており、鍍金の痕跡は認められない。天井部は半ばが窪む緩やかな二段の甲盛りで、内面にも対応する段がみられる。中央に整った宝珠鈕を造り出す。口径5.8cm、高さ2.1cm、重さ40.1gで、二器の蓋としては小型品。252は南宋銭の淳熙元寶である。253は木錘。編具を構成する道具の一つで、輪切りにした長さ13.6cm、最大径4.8cmの芯持材の側面中央に切り込みを入れてくびれさせている。254～256は漆器椀。254・256は内外面を黒漆で仕上げ、赤漆で文様を描く。254は秋草文である。255は外面黒漆、内面は黒漆の上に赤漆で仕上げる。264～266は一石五輪塔が途中で折れたもので、各輪には梵字が刻まれている。264は左右径7.35cm、前後径6.9cm、265は風輪部左右径10.1cm、前後径9.7cm、266は風輪部左右径11.0cm、前後径10.9cmで、265・266は風輪部から方形気味の平面形となる。土師器の皿はどれも15世紀代のもので、中でも257・260はやや新しい15世紀後半の所産。261は白磁碗で、262は14世紀の青磁香炉である。火鉢はともに15世紀代のもので、263は方形を呈する。

瓦は、丸瓦や平瓦の大型片のほか、軒瓦が多く出土している。271～273は12世紀後半から13世紀前半の巴文軒丸瓦である。通常は巴を陽刻で表現するが、この範はまるで巴が陰刻で、巴と巴の間が陽刻のような、陰陽逆転したような表現となっている。271は瓦当面が摩滅しているためか、その状況が特に顕著である。丸瓦部凹面玉縁側に刺し縫い状の細い吊り紐痕が2条認められる。274は248と同範と思われる。13世紀。275～279はすべて46と同範瓦で、14世紀前半の所産。このうち275・279は巴の間を指で撫でて文様を変形させている。瓦当の接合方法が276・279で観察でき、46と同様に瓦当裏面中央が窪んで、その窪みに厚く粘土が充填されている様子が認められる。280・282は15世紀、281は14世紀の所産。283～288は比較的残りが良い丸瓦である。283はほぼ完形品。凸面はナデで仕上げるが、玉縁側には縄タタキの痕跡が残る。凹面は布目で、L字状に開く紐状の圧痕が認められる。幅は9mm程度で、紐痕には縄目ではなく布目が明瞭に残る。吊り紐痕であったのかは検討を要する。284も凸面はナデで仕上げるが、玉縁側には縄タタキの痕跡が残る。凹面は布目で、玉縁側には刺し縫い状の細い吊り紐痕が7条認められる。13世紀代か。285も284とほぼ同じ位置に同様の細い吊り紐痕が認められる。こちらは割れているために5条までを確認。286は玉縁に釘穴が認められる。凸面にはナデの下に縄タタキ痕が残る。凹面のちょうど割れ部には幅約6mmの吊り紐痕がみられる。波状に垂れており、その垂れ幅は2.8cmを測る。287は凸面の縄タタキ痕を丁寧にナデ消す。凹面には284・285と同様の吊り紐痕が3条認められる。288は瓦当が剥がれた軒丸瓦。瓦当裏面に充填していた粘土が大きく盛り上がっていることから、瓦当裏面中央が窪んでいたことがわかる。この接合方法は上記275～279の同範瓦にみられる技法である。289・290は平瓦。凹凸両面ともにナデで仕上げる。289は狭端幅21.3cmで、狭端寄りに釘穴がみられる。291・292は13世紀後半から14世紀前半の蓮華唐草文軒平瓦である。72と同範。293～299は14世紀前半の菱形唐草文軒平瓦。すべて同範である。293・295・297・298から瓦当は瓦当貼り付け技法により接合していることが観察できる。300は14世紀の連珠文軒平瓦で、242と同範。301は15世紀の虻羽用瓦。瓦当文様は波状文である。302・303は鬼瓦。15世紀のもので、立体的な鬼を表現する。303は頭飾りに閻魔のような「王」の装飾を付す。同じ頭飾りをもつ鬼瓦は、河内長野市観心寺(88頁写

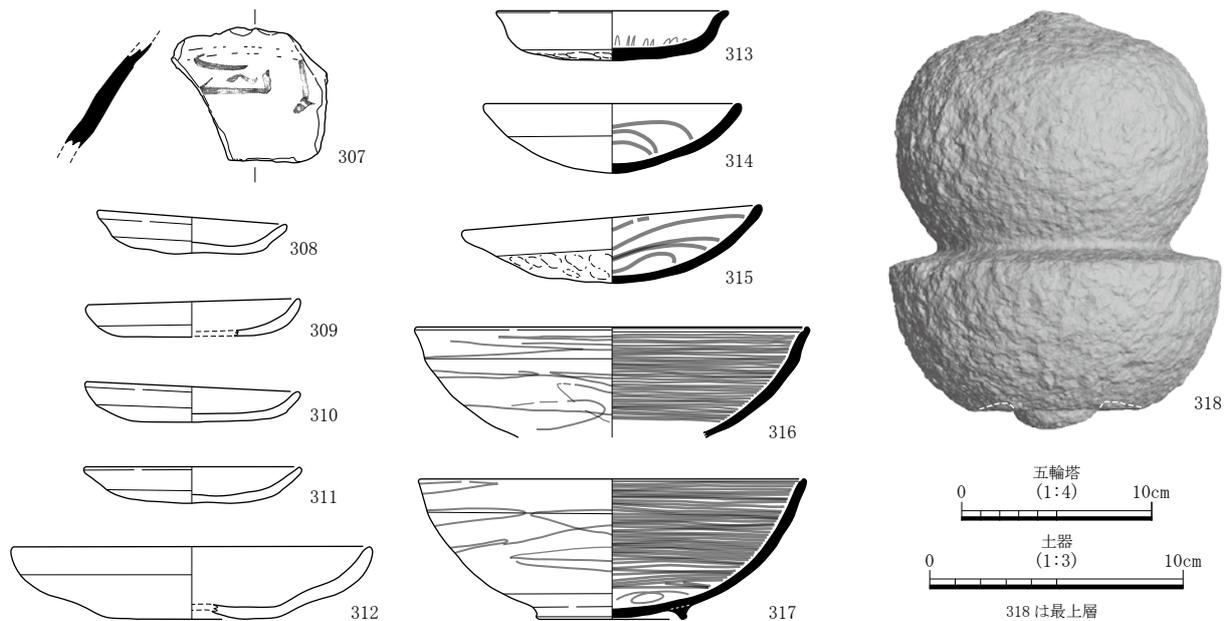


図 53 3区 160 溝出土遺物

真 4) に永享 11 年 (1439) の修理で製作されたとされるものが残されている。304 は瓦質の土製品。厚さ 6.5 ~ 7.0cm を測る。道具瓦の一部と考えているが詳細不明。305・306 は雁振瓦である。凸面はきれいにナデ消されているが、凹面には糸切りの痕跡が明瞭に残る。

160 溝 調査区南辺に位置する。東西方向の幅の広い溝で、幅は 2.8 ~ 3.3 m で、深さは 0.3 ~ 0.35 m を測る。埋土は褐灰~黒褐色や灰黄褐色の粘土や粘土質シルトである。掘立柱建物 1 の南面廂と重複しており、溝完掘後の溝底で柱穴を検出した。この重複する掘立柱建物 1 や 2 区で検出した方形区画と同じ振れをもち、僅かに西偏する。溝の規模も方形区画周囲の溝とほぼ同じであることから、3 者が何らかの関係をもっていたことがうかがえる。掘立柱建物 1 とは重複しているが、方形区画とは同時併存していた可能性が考えられる。その方形区画とは約 3 m 隔てる。上記の 1 溝や 140 溝とは異なり、ほぼ正方位にのる直線的な溝であり、計画的に設けられた溝であったことは間違いない。施設の周囲を囲む、あるいは区画を分ける濠のような役割があったと考えている。

土師器皿 (308 ~ 312)・羽釜、瓦器椀 (314 ~ 317)・皿 (313)、瓦質土器播鉢・火鉢、東播系須恵器片口鉢 (307)、須恵器壺・甕・提瓶、白磁、瓦、五輪塔 (318) などが出土している。遺物の時期は 6 世紀後半の須恵器の提瓶から、15 世紀代の火鉢まで幅がある。土師器皿のほとんどは 13 世紀代のものであるが、瓦器椀には 314・315 のような 14 世紀前半のもの、316・317 のような 12 世紀中葉のものがみられる。前者は和泉型で、後者はおそらく大和型と思われる。⁶⁾ 307 は外面に墨書がある。「一月」と読めるが、「二」または「三」かもしれない。318 は最上層から出土した五輪塔の空風輪で、下面に火輪と組み合わせるための杓を設ける。風輪部の直径は 17.4 ~ 17.6cm である。

170 溝 (163・169 溝) 調査区の南東部に位置する。170 溝は 160 溝の北側に並行する東西方向の溝で、160 溝とは 4.5 ~ 4.7 m 隔てる。幅は 1.1 ~ 1.3 m で、重複する南北方向の細溝群を切る。深さは 0.15 ~ 0.2 m で、埋土は砂粒を含む黒褐~灰黄褐色のシルト質粘土や粘土質シルト、黒褐色粘土などである。

溝の西端は調査区中央付近で南に屈曲し、上記 160 溝に合流する。この屈曲した南北方向の部分を 163 溝とした。幅は 0.5 m 強で、深さは約 0.3 m を測る。埋土は褐灰~黒褐色粘土である。この 170 溝との屈曲部は土坑状に広がっている。平面検出の段階では溝との重複関係が不明瞭であったが、断面観察の結果、

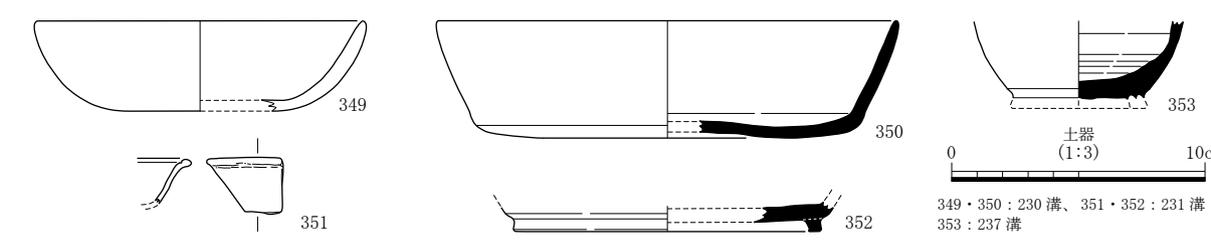
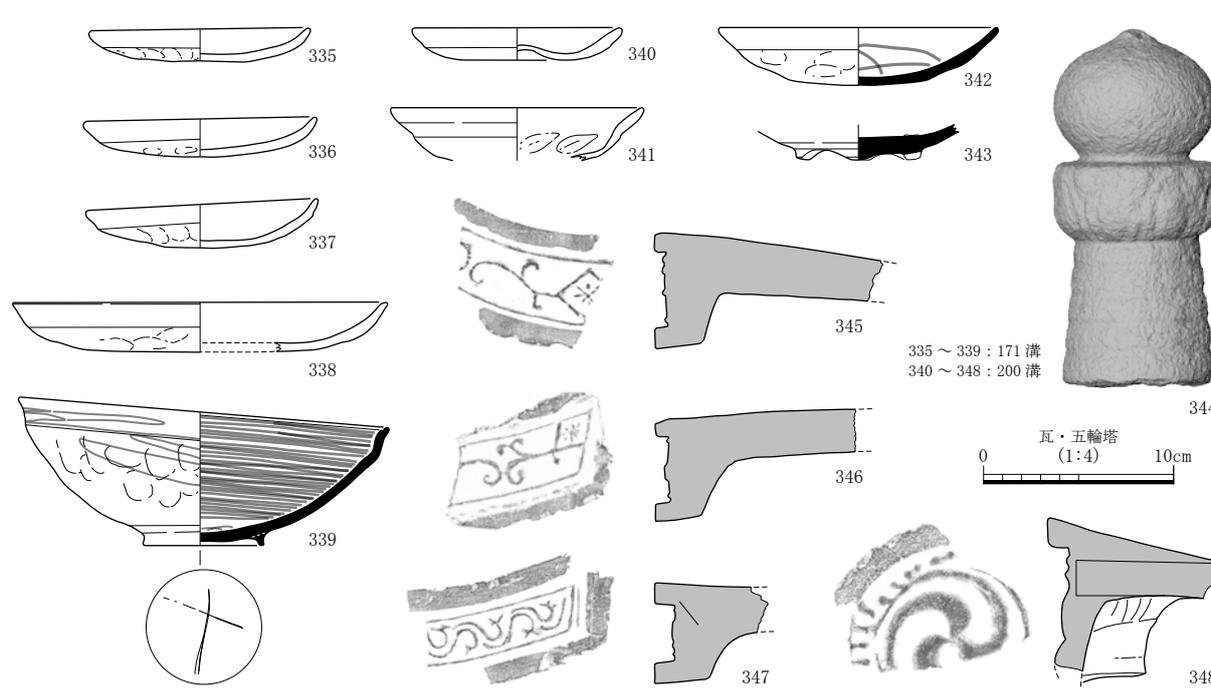
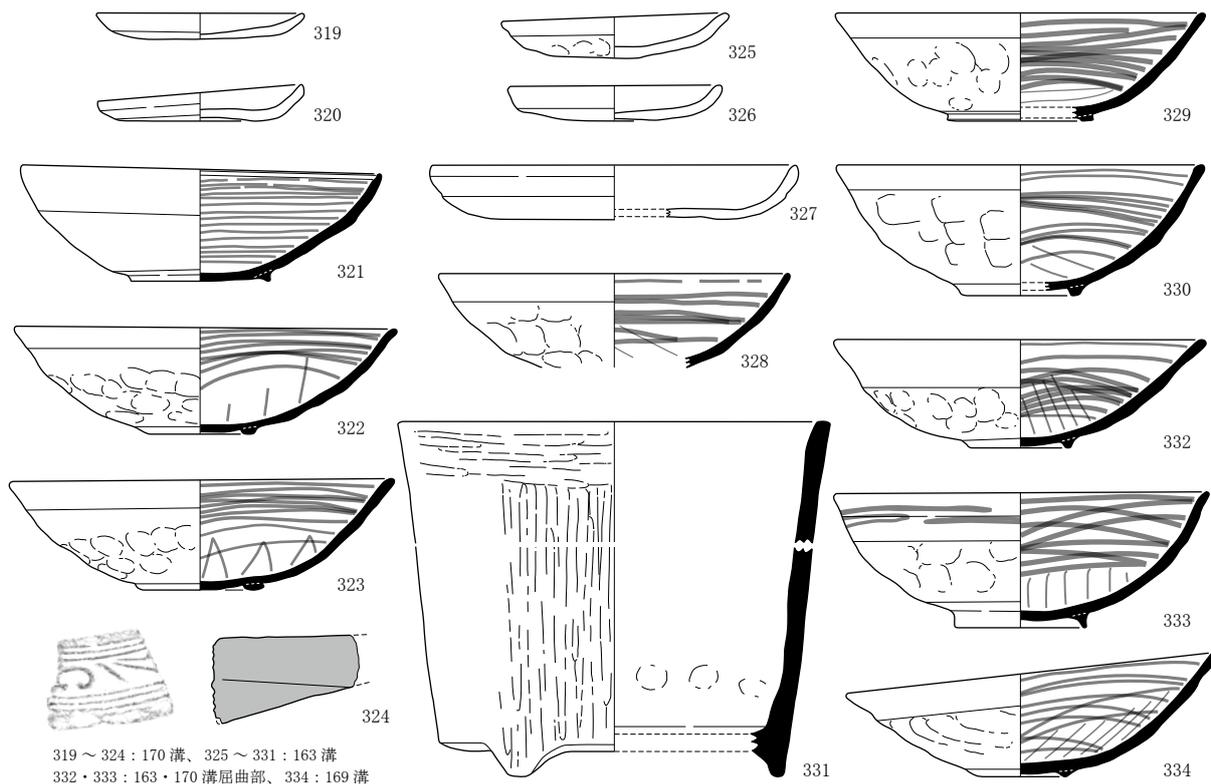


图 54 3区 溝出土遺物

170 溝を切る土坑が重複していたことが判明した。その土坑は、広い箇所では東西が 2.35 m、南北が約 2.5 m の長方形で、深さは 0.3 m を測る。

169 溝は 170 溝の東端部南肩に重複する東西溝で、170 溝とはやや振れを異にし、僅かに南に向きを変える。幅は 0.7 ～ 0.9 m、深さは約 0.2 m で、断面観察の結果、170 溝を切っていることを確認した。170 溝が途中で途切れ、ちょうどそのあたりから 170 溝に代わるように東側にのびていることから、170 溝の向きを若干南に変更して付け替えたものと考えている。埋土は黒褐色粘土が主である。

170 溝からは土師器皿 (319・320)・羽釜、瓦器椀 (321 ～ 323)、瓦 (324) が、163 溝からは土師器皿 (325 ～ 327)、瓦器椀 (328 ～ 330)、瓦質土器火鉢 (331)、東播系須恵器片口鉢、瓦などが出土しており、163 溝と 170 溝との屈曲部からは、土師器皿・羽釜、瓦器椀 (332・333)、瓦が出土している。また 169 溝からは土師器皿、瓦器椀 (334) が出土している。土師器皿や瓦器椀の大半は 13 世紀前半のものである。瓦器椀のうち 321 は、ヘラミガキが細く口縁端部に沈線をもつが、口縁部が外反していないことから楠葉型と判断した。見込みの暗文はない。それ以外は和泉型で、見込みの暗文は 323 がジグザグ状で、それ以外は平行線である。333 にのみ外面の口縁部付近にヘラミガキが認められる。331 はほかの遺物に比べて新しい 15 世紀代のもの。外面下半は縦位の、口縁部は横位のヘラミガキで仕上げる。324 は今回の調査で出土した瓦の中ではもっとも古い平城宮式の軒平瓦である。6681 型式にあたる。163 溝出土の瓦は凸面縄タタキの平瓦である。

171 溝 調査区の南西部の、上記 170 溝の西側延長部にあたる。160 溝の北側に並行する東西方向の溝で、160 溝とは 5.0 ～ 5.3 m 隔てる。170 溝とは一連の溝と考えられるが、170 溝の西端から 171 溝東端までは約 2 m の間隔を空ける。溝の幅は 0.5 ～ 0.6 m で、深さは西側が浅く約 0.15 m、東側は深く 0.3 m 程度となる。埋土は偽礫が多く混じる黒褐色の粘土質シルトやシルト質粘土である。東端部で 164 土坑と重複し、土坑に切られる。

土師器皿 (335 ～ 338)、瓦器椀 (339)、須恵器杯が出土している。須恵器杯は 8 世紀のものであるが、土師器皿や瓦器椀はいずれも 12 世紀後半のものである。339 の見込みの暗文は螺旋状で、高台内に「×」の線刻がある。口縁部が強く外反する大和型。

この 170・171 溝は、160 溝に伴う、施設を区画する溝であった可能性が高い。

200 溝 調査区の南東部に位置する。160 溝と 170 溝とをつなぐ南北方向の溝である。幅は 4.2 ～ 4.4 m、深さは約 0.25 m である。溝底には凹凸があり一定でない。201・202 土坑や掘立柱建物 1 の柱穴 199 ピットと重複し、土坑・柱穴を切る。埋土は細～中粒砂混じりの褐灰～灰黄褐色粘土や中粒砂～細礫を多く含む灰黄褐色のシルト質粘土などである。

土師器皿 (340・341)、瓦器椀 (342)、白磁皿 (343)、瓦 (345 ～ 348) に混じって宝篋印塔の一部 (344) が出土している。土師器皿は時期幅があり、340 は 14 世紀前半、341 は 15 世紀前半のものである。342 は 14 世紀前半の和泉型である。343 は高台に 4 箇所の抉りを入れる。15 世紀。344 は宝篋印塔の相輪部が途中から折れたものである。宝珠部の直径は 8.4 ～ 8.6 cm で、請花に刻まれた連弁が辛うじて確認できる。345・346 は 14 世紀前半の菱形唐草文軒平瓦で、298 と同範。140 溝からはほかにも同範瓦が多く出土している。347 は 13 世紀の唐草文軒平瓦。唐草文の先端が小さく枝分かれしたよく似た文様は、奈良県元興寺⁷⁾などでもみつかっている。瓦当の接合は瓦当貼り付け技法による。348 は 13 世紀の左巻き巴文軒丸瓦。58 と同範と思われる。

228 溝 調査区南西隅に位置する。南東～北西方向に斜行する溝で、南端は 160 溝と、途中 171 溝や

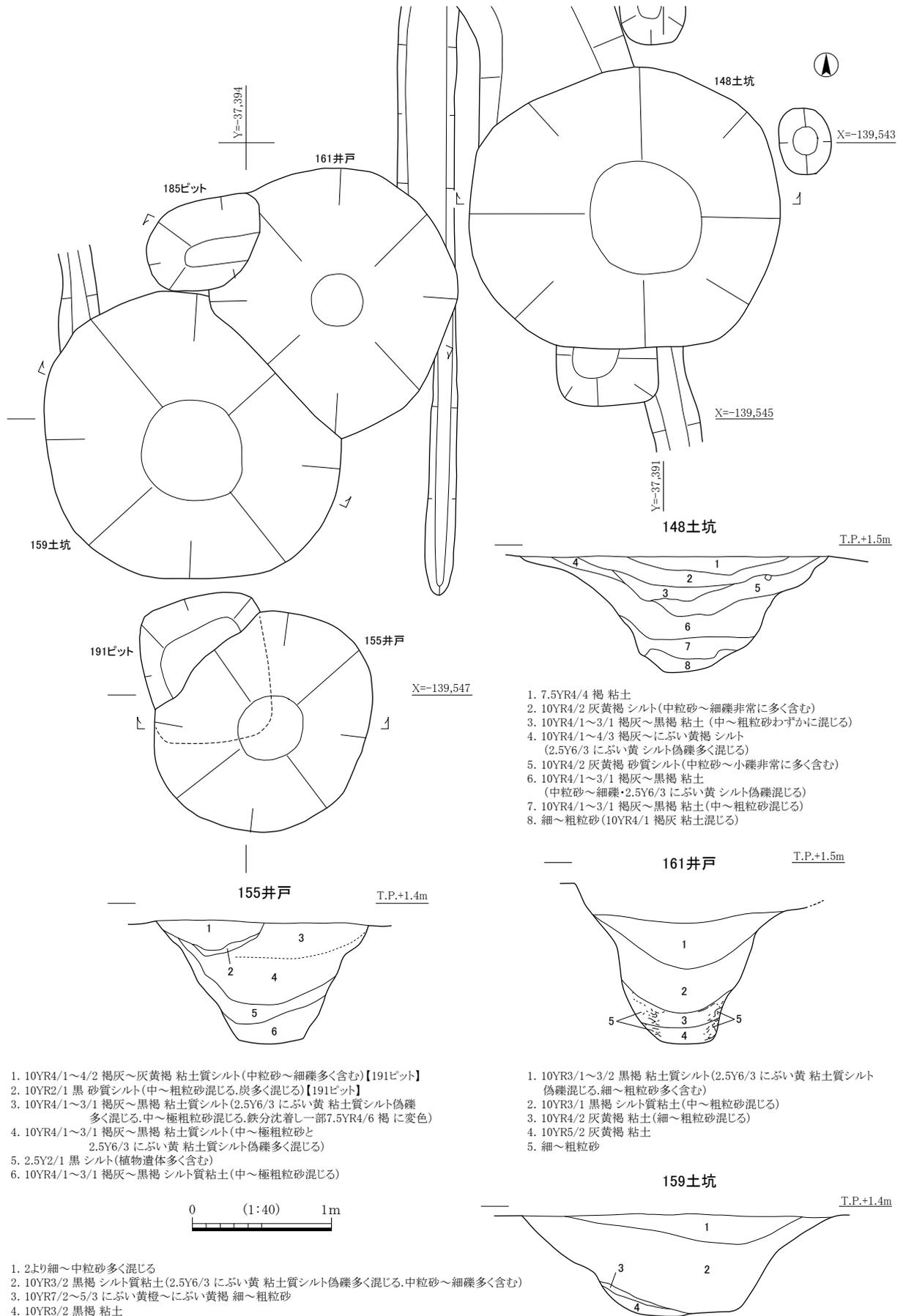


図55 3区井戸・土坑平面・断面(1)

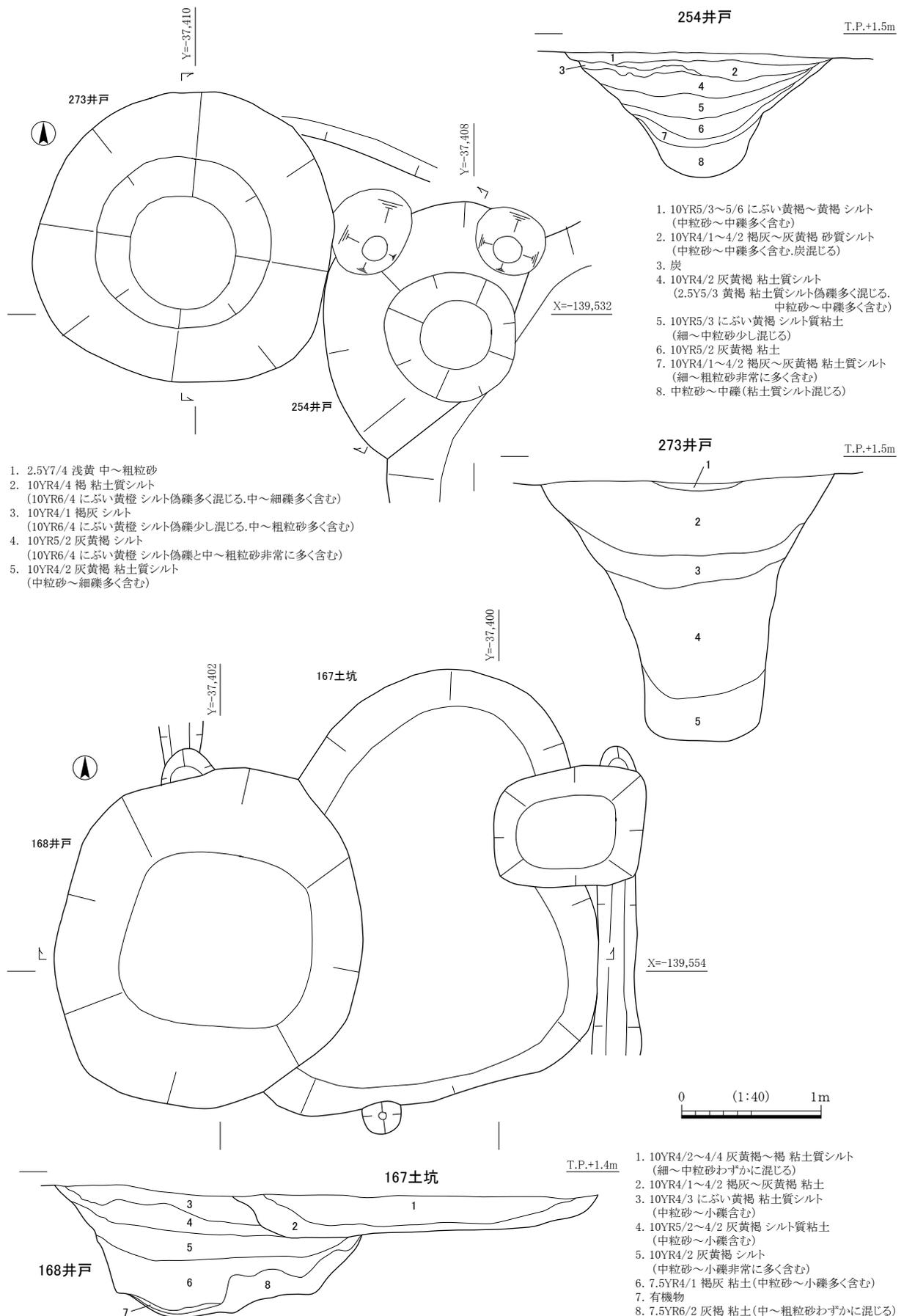


図 56 3区井戸・土坑平面・断面(2)

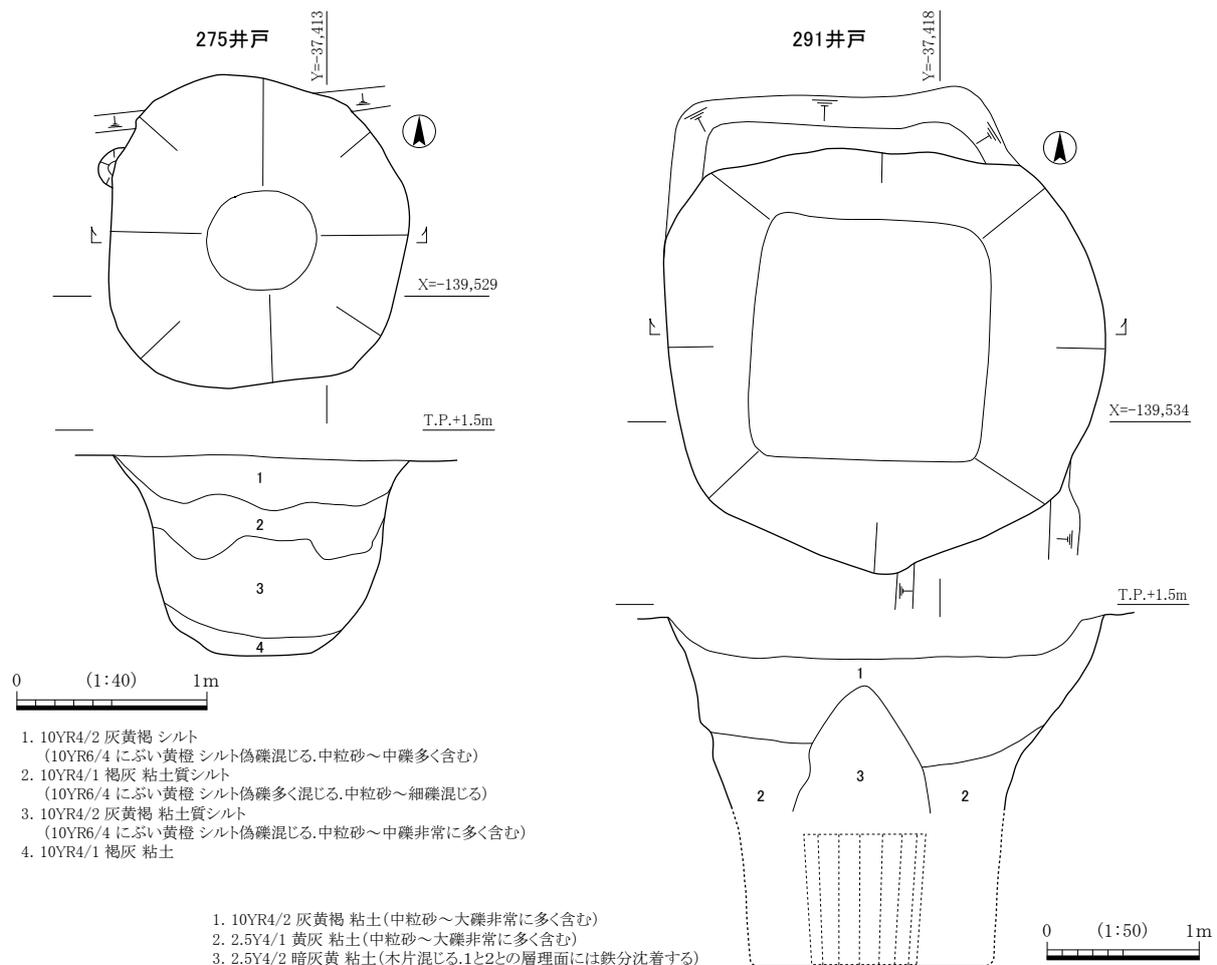


図 57 3区井戸平面・断面

172 土坑と重複し、いずれの遺構にも切られる。幅は約 0.3 m、深さは 0.1 ～ 0.15 m で、埋土は褐灰～灰黄褐色の粘土質シルトである。

土師器皿・杯、瓦器碗、須恵器甕などの小片が出土している。須恵器甕は古墳時代、土師器杯は 8 世紀のものであるが、瓦器碗は 13 世紀末頃のものである。混入品か。

調査区南半の溝 (147・150～153・230・231・237・340 溝ほか) 掘立柱建物 1・3 の周辺に広がる東西・南北方向にのびる細い溝である。畑作に伴う畝間の溝であったと考えられる。南北方向の溝 (147・150～153 溝など) は調査区南東部の掘立柱建物 1 周辺に多く、東西方向の溝 (230・231・237・340 溝など) は掘立柱建物 1 の西側に多く分布する。溝の規模はまちまちで、幅 0.2 ～ 0.3 m 程度のものから、0.5 m 以上のものまでである。深さはいずれも 0.1 m 程度と浅い。埋土は南北方向の溝は偽礫や中粒砂～細礫を多く含む黒褐～暗褐色の粘土質シルトであるが、東西方向の溝は土器片が多く混じる黒褐色粘土質シルトやにぶい黄褐～暗褐色粘土質シルトである。これらの溝は、1 層下面の遺構検出時にすぐに検出でき、輪郭がほぼ確認できたことから、掘立柱建物 1・3 の存在に気付く以前に掘削してしまっていた。このため、特に掘立柱建物 1 の西半部では柱穴との重複関係が検証できていないが、掘立柱建物 3 周辺の、柱穴との重複が明らかであった 156・192 ピットについては、断面観察を行っており、柱穴が溝を切っていることが確認できた。これにより耕作溝群が古く、建物が新しいと判断した。

147 溝からは瓦器碗片が、150 溝からは土師器片、152 溝からは古墳時代の須恵器壺片、153 溝からは土師器羽釜片が出土しているが、掘立柱建物 1 西側に分布する 230・231 溝からは 8 世紀の土師器杯

(349・351)、須恵器杯(350・352)が、237溝からは8世紀の須恵器壺(353)が出土しており、その頃の溝であった可能性を示唆する。

155 井戸 調査区南東部に位置する。掘立柱建物1の身舎の柱穴191ピットと重複し、柱穴に切られる。平面形は直径約1.5～1.6mの円形を呈する。深さは0.85mである。

土師器皿(354・355)、瓦器椀(357～359)・皿(356)のほか、結晶片岩の小片が出土している。いずれも12世紀前半のものである。356・357は和泉型で、見込みの暗文は平行線。358・359は口縁部がわずかに外反する大和型。ヘラミガキは非常に密で、見込みの暗文は螺旋状。外面のヘラミガキは両者ともに3分割である。359の内面には、ヘラミガキ・暗文に先行するハケ目が認められる。

161 井戸 調査区の南東部、155井戸の北側に近接する。平面形は直径約1.8～1.9mの円形に復原できる。深さは1.15mを測る。南西側が159土坑と、西側が掘立柱建物1の北面廂の柱穴185ピットと重

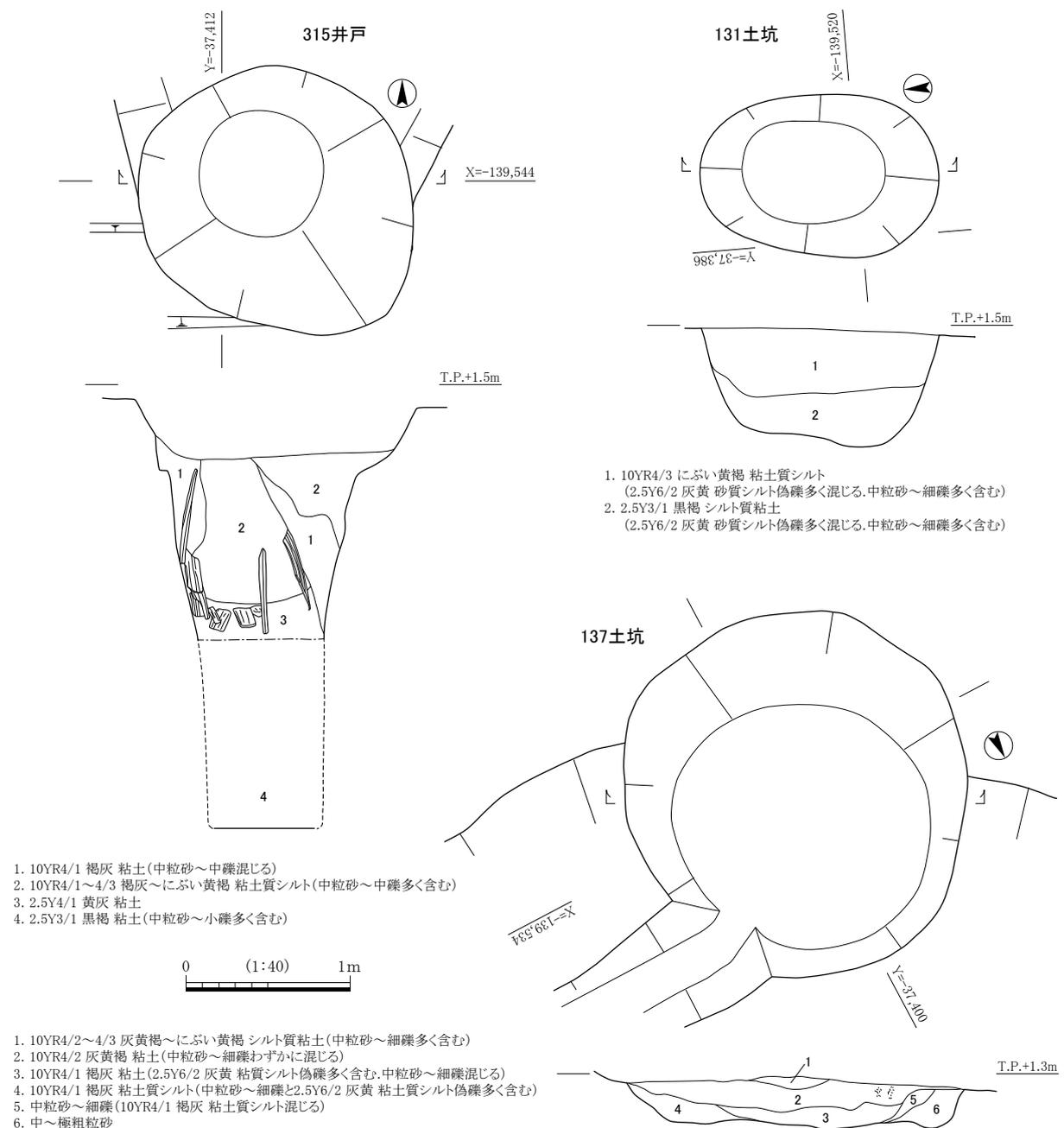


図 58 3区 井戸・土坑平面・断面(3)

複し、土坑を切る。185ピットについては、検出当初は柱穴になるとの認識がなく、井戸の一部と誤認していたため、重複関係を検証できていない。

土師器皿、瓦器椀、凸面縄タタキの平瓦などの小片が出土している。

168 井戸 調査区南辺中央に位置し、東半部が167土坑と重複する。平面図では168井戸が切っているような表現となっているが、実際には土坑に切られている。平面形は楕円形で、南北は2.5 m、東西は約2.3 mに復原できる。深さは0.95 mを測る。

土師器皿（363～365）、瓦器椀（366・367）のほか、瓦質土器羽釜小片が出土している。大半は14世紀前半の所産である。365は燈明皿。366は浅く高台のない14世紀前半のもので、ヘラミガキも3周するのみ。367は若干古い13世紀後葉のもので、やや深く高台を付す。両者ともにヘラミガキは細い。

254 井戸 調査区北西部に位置する。後述する176土坑と重複し、土坑に切られる。東半の肩部が失われ

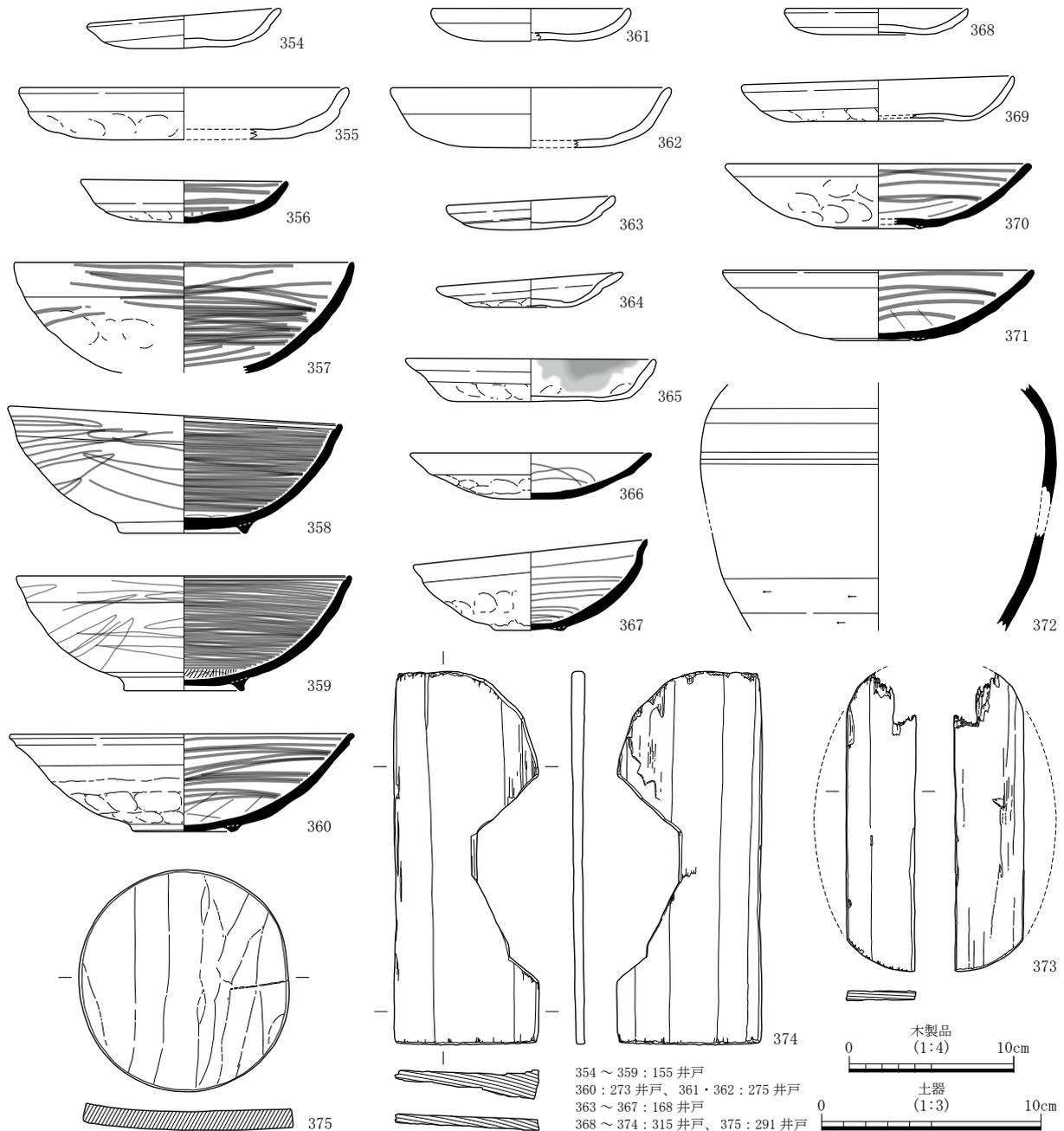


図59 3区井戸出土遺物

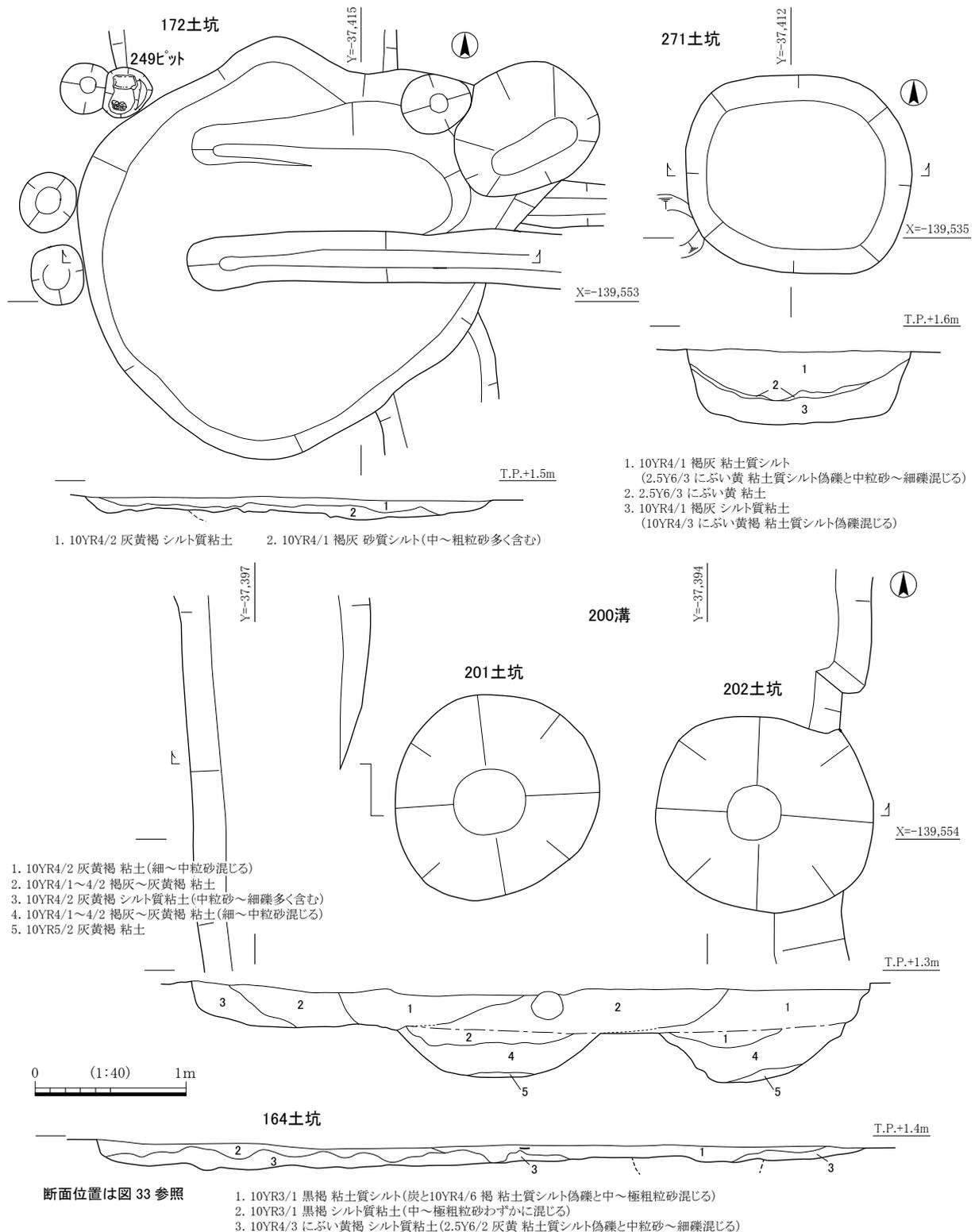


図 60 3区土坑平面・断面

ているが、平面形は直径約 1.9 m の円形に復原できる。井戸の掘削途中で廃棄したような遺構で、深さは 0.9 m しかない。

土師器皿、瓦器椀、瓦などの小片が出土している。瓦器椀は 12 世紀後半のものである。

273 井戸 調査区北西部の上記 254 井戸の西側に近接する。上記のとおり、254 井戸を掘削途中でやめて、西側に位置をずらしてこの井戸を掘ったのではないかと推測している。平面形は直径約 2.1 m の円形で、

深さは 1.45 m を測る。上半の壁面は勾配が付くが、下半の壁面はほぼ垂直となる。

土師器皿、瓦器椀（360）、丸瓦などが出土している。360 は 13 世紀前葉の和泉型で、見込みの暗文は斜格子である。

275 井戸 調査区北西部の上記 273 井戸の北西側に近接する。平面形は直径約 1.55 ～ 1.65 m の方形に近い円形で、深さは 1.05 m を測る。

土師器皿（361・362）、瓦器椀の小片が出土している。土師器皿はともに 12 世紀後半のものである。

291 井戸 調査区北西隅、西壁際に位置する。平面形は直径約 2.85 m の方形に近い円形を呈する。深さは人力掘削で遺構面下 1.3 m まで掘削したが、危険なため底まで確認することができなかった。埋戻しの際に重機で底の高さを確認し、深さ 2.3 m であることを確認した。また井戸底から集水用の桶を確認した。桶の高さは 0.89 m であったが、形を成していなかったため、直径などは不明。

土師器皿、瓦器椀、東播系須恵器片口鉢、平瓦などの小片のほか、小型の曲物底板（375）が出土している。瓦器椀は 12 世紀後半、片口鉢は 13 世紀代のものである。375 は一枚板である。

315 井戸 調査区中央西寄りに位置する。後述する 282 土坑の南端に重複し、土坑に切られる。平面形は直径約 1.65 ～ 1.75 m の楕円形を呈する。深さは人力掘削で遺構面下 1.45 m まで掘削したが、危険なため底まで確認することができなかった。埋戻しの際に重機で底の高さを確認し、深さ 2.6 m であることを確認した。埋土からは多くの板材が出土している。幅は 0.1 m 弱、長さは約 0.8 ～ 0.85 m で、どの板材にも片側に 1 箇所くびれを設けていた。井戸枠の外側に貼り付けられていたものと考えられるが、井戸枠は完全に抜き取られており、構造は不明である。

土師器皿（368・369）、瓦器椀（370・371）・皿、瓦質土器羽釜・甕、東播系須恵器片口鉢、陶器壺または水注（372）、木製品（373・374）などが出土している。13 世紀後半のものが中心である。瓦器椀はともに和泉型で、見込みの暗文は平行線である。372 は外面全体に褐色の釉を施す瀬戸美濃系陶器。373 は小型の曲物底板。374 は側面に切り欠きのある薄板。図示したものは長さ 22.8cm と短いですが、上記のとおり同じ形状の切り欠きをもつ長い板材が多数出土している。

359 井戸 調査区中央に位置する。後述する 176 土坑の北端に重複し、土坑に切られる。平面形は東西にやや長い楕円形で、長径は 4.1 m を測る。短径は断面の観察で本来は 3.3 m 程度あったことが確認できる。深さは人力掘削で遺構面下 1.6 m まで掘削したが、危険なため底まで確認することができなかった。埋戻しの際に重機で底の高さを確認し、深さは 4.05 m であることを確認した。

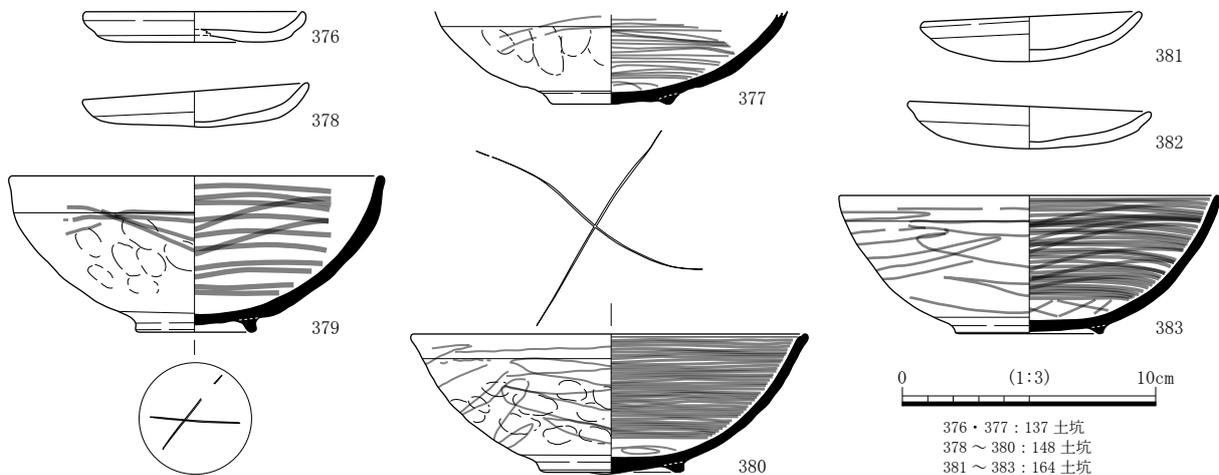
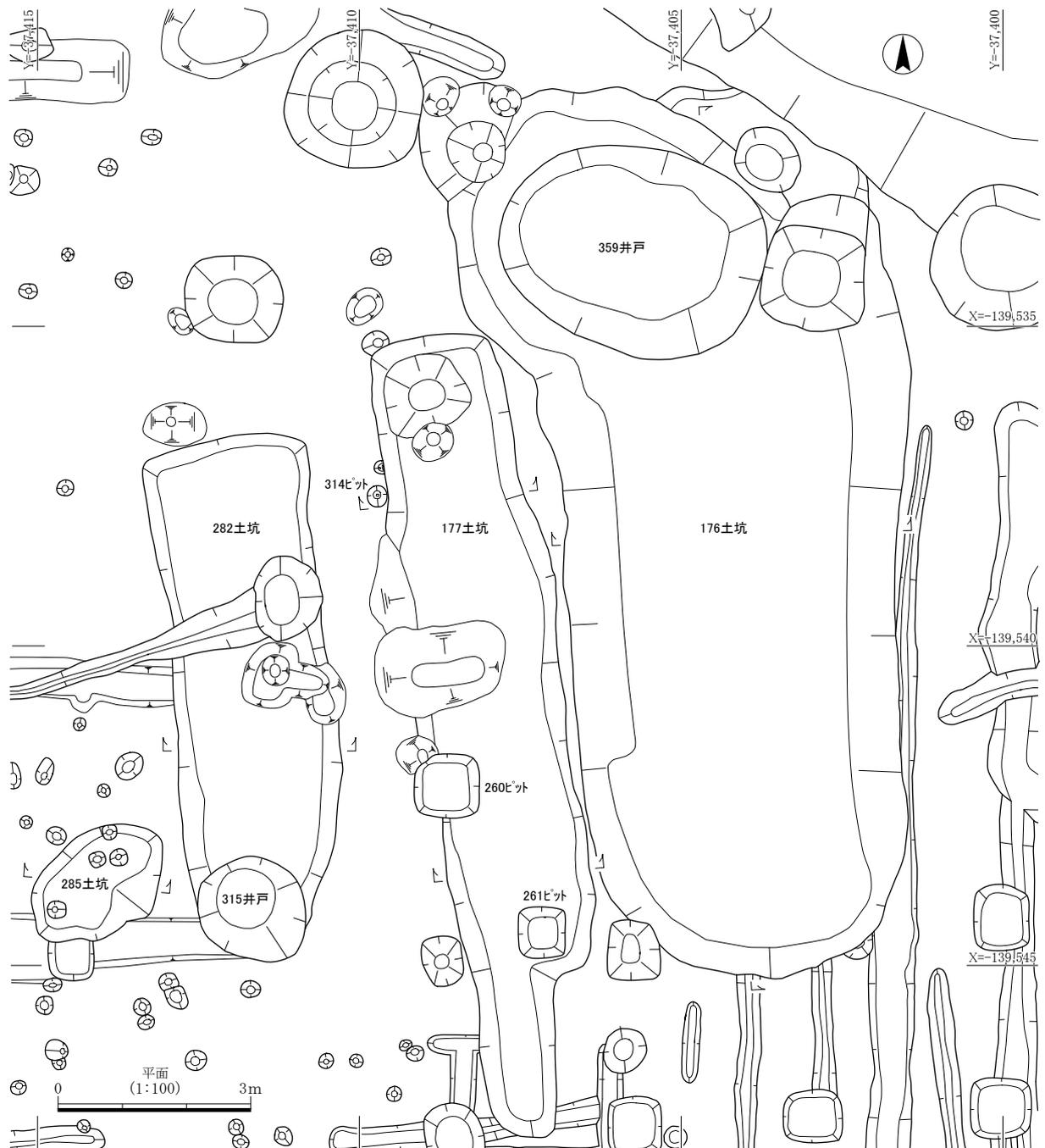


図 61 3 区 土坑出土遺物



177土坑(北側)

T.P.+1.6m

177土坑(南側)

T.P.+1.5m

【177土坑】

1. 10YR4/2 灰黄褐 シルト
(10YR7/3~6/6 にぶい黄橙~明黄褐 砂質シルト偽礫多く混じる.中粒砂~細礫多く含む)
2. 10YR4/2 灰黄褐 粘土質シルト(中砂粒~細礫多く含む)
3. 中粒砂~中礫(10YR4/2 灰黄褐 粘土質シルト偽礫混じり)

4. 10YR4/2~4/3 灰黄褐~にぶい黄褐 シルト質粘土(中砂粒少し混じる)
5. 10YR6/3 にぶい黄橙 砂質シルト(中砂粒~細礫多く含む)
6. 10YR5/2 灰黄褐 粘土質シルト(中粒砂~細礫多く含む)

282土坑

T.P.+1.5m

285土坑

T.P.+1.6m

1. 10YR3/3 暗褐 粘土質シルト
2. 10YR5/3 にぶい黄褐 粘土質シルト
(10YR3/3 暗褐 粘土質シルト偽礫混じる.中粒砂~細礫多く含む)

1. 10YR3/1~3/2 黒褐 シルト
(中~粗粒砂混じる.炭多く含む)
2. 10YR4/1 褐灰 粘土

断面
(1:40)
0 1m

図 62 3区 中央部土坑群平面・断面

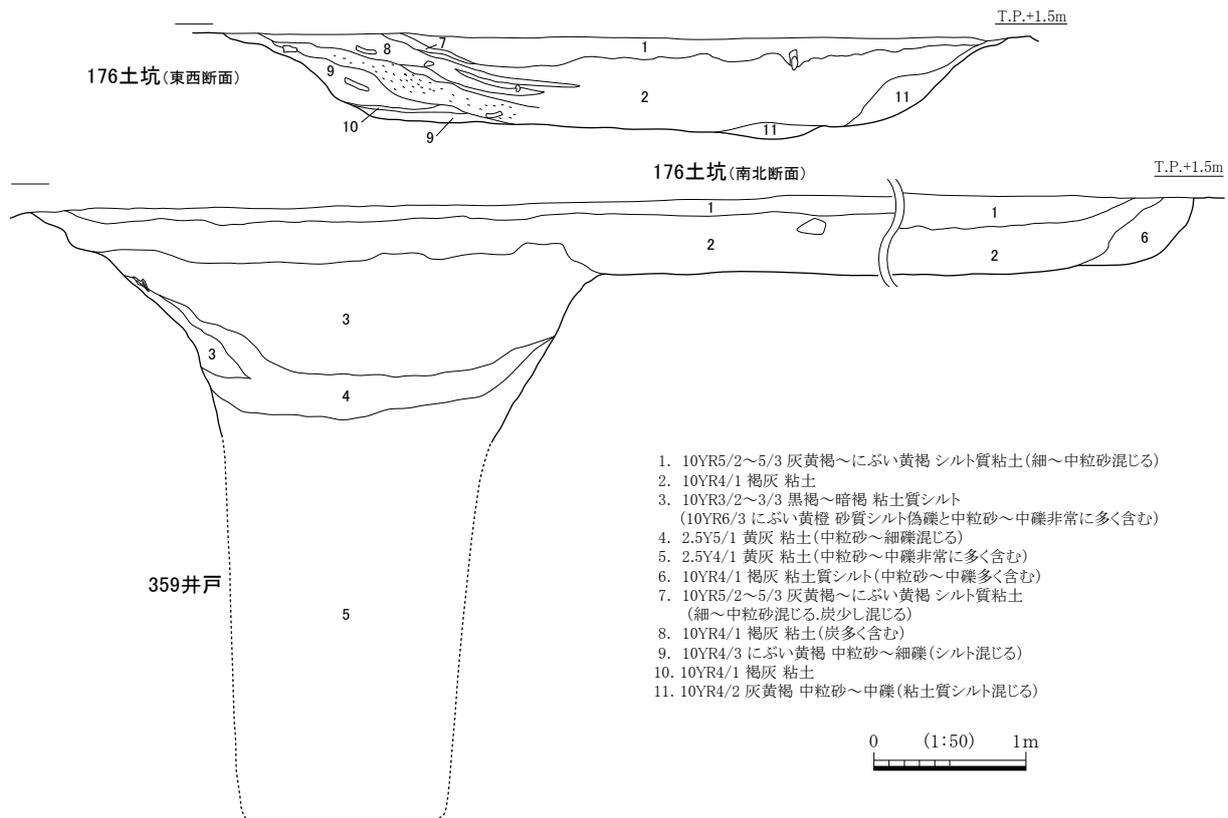


図 63 3区 176 土坑・359 井戸 断面

131 土坑 調査区の北東隅、1 溝と 140 溝によって島状に残った部分に位置する。平面形は長径 1.45 m、短径 1.0 m の南北に長い楕円形を呈する。深さは 0.7 m である。

土師器皿、須恵器、埴輪の小片が出土している。

137 土坑 調査区中央北寄りに位置する。1 溝の南肩部と重複し、溝に切られる。平面形は直径 2.05 ～ 2.2 m の楕円形で、東側に溝状の窪みが続く。深さは 0.3 m を測る。

土師器皿 (376)、瓦器椀 (377)、東播系須恵器片口鉢、瓦が出土している。376・377 は 12 世紀後半のものである。377 はヘラミガキは細く、外面にも認められる。見込みの暗文は螺旋状である。

148 土坑 調査区中央東寄りに位置する。161 井戸の東側に近接する土坑で、平面形は長径 2.2 m、短径 2.0 m の東西にやや長い楕円形を呈する。深さは 0.85 m である。

土師器皿 (378)、瓦器椀 (379・380) のほか、須恵器甕、瓦の小片が出土している。379 は 12 世紀中葉のものである。和泉型で、高台内に「×」の線刻がある。378 も同時期のものと思われる。380 は 12 世紀前半の大和型。内面のヘラミガキはほとんど隙間がなく、外面も高台付近まで 3 分割のヘラミガキが及ぶ。見込みの暗文は螺旋状で、「×」の線刻を施す。

159 土坑 調査区中央東寄りに位置する。161 井戸と重複し、井戸に切られる。平面形は直径 2.1 ～ 2.2 m の円形で、深さは 0.75 m を測る。

土師器皿、瓦器椀、須恵器甕の小片が出土している。瓦器椀は 12 世紀後半のものである。

164 土坑 調査区南西部に位置する。171 溝と重複し、溝に切られる。平面形は長径 5.1 m、短辺 2.7 m の東西に長い楕円形を呈する。深さは 0.1 ～ 0.15 m を測る。

土師器皿 (381・382)、瓦器椀 (383)、瓦が出土している。381・382 は 12 世紀後半の所産。383 は 12 世紀前半の和泉型で、見込みの暗文は斜格子である。外面も高台付近までヘラミガキが及ぶ。

167 土坑 調査区南辺中央に位置し、168 井戸と重複する。平面図では 168 井戸が切っているような表現になっているが、実際には土坑が切っている。平面形は東西 2.6 m、南北約 3 m の歪んだ楕円形を呈する。深さは 0.3 m である。

172 土坑 調査区の南西隅、164 土坑の西側に近接する。228 溝と重複し、溝を切る。平面形は直径約 2.5 m の方形に近い円形を呈する。深さは平面規模の割に浅く、0.1 m 前後である。

土師器皿、瓦器椀、瓦質土器足釜、瓦が出土している。土師器皿、瓦器椀はすべて小片で、13 世紀代のものである。

176 土坑 調査区の中央に位置する。3 区の中ではもっとも新しい時期の遺構である。南北に長い大型の土坑で、南北長約 13.5 m、東西幅約 5.1 m の楕円形を呈する。深さは 0.5 ~ 0.6 m を測る。埋土は大きく 2 層に分かれる。上層は細～中粒砂が混じる灰黄褐～にぶい黄褐色のシルト質粘土、下層が褐灰色粘土である。北端部ではこの埋土掘削後の土坑底で 359 井戸を検出している。

上層・下層・最下層に分けて遺物を取り上げたが、時期的な違いは認められなかった。土師器皿 (386

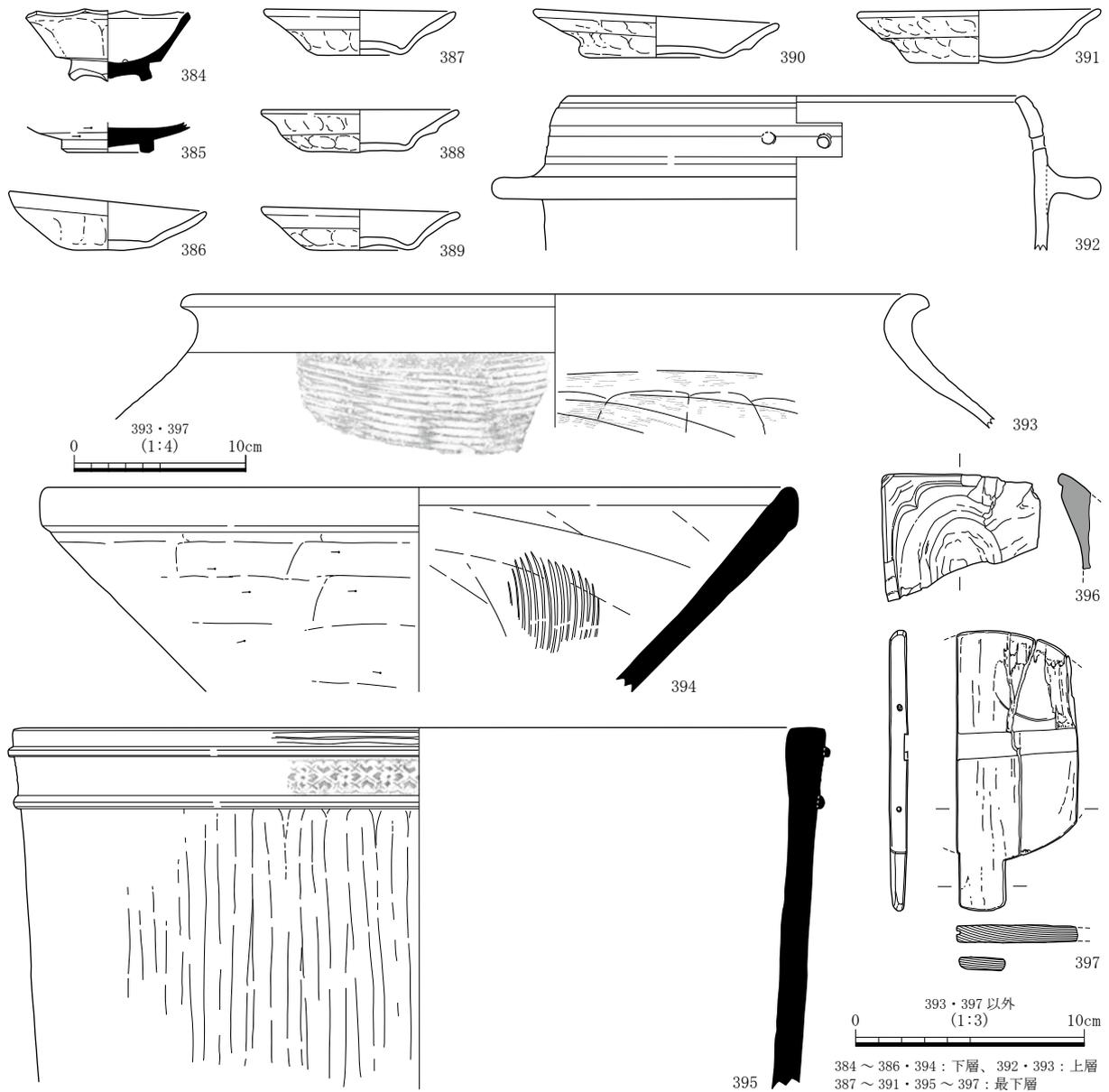


図 64 3 区 176 土坑出土遺物 (1)

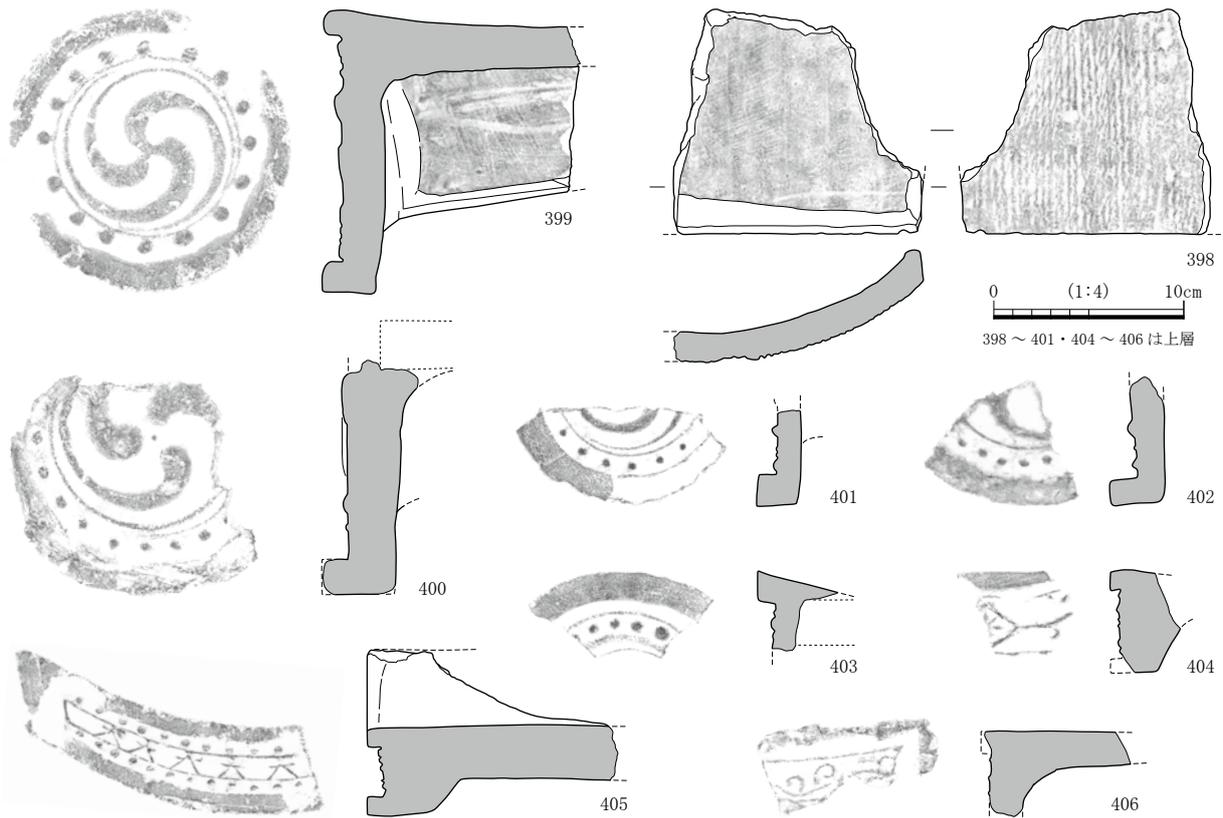


図 65 3区 176 土坑出土遺物 (2)

～ 391)・羽釜 (392)・甕 (393)、瓦器椀、瓦質土器足釜・羽釜・播鉢 (394)・火鉢 (395)、東播系須恵器片口鉢・甕、陶器播鉢、輸入磁器 (384・385)、瓦 (398～406)、硯 (396)、木製品 (397) など 14 世紀から 15 世紀の遺物が多く出土している。土師器皿はいずれも 15 世紀前半頃のもので、外面の指押えの圧痕が明瞭である。393 は内面に当て具痕と、細かい筋が付いた横方向のナデが認められる。15 世紀。394 は外面へラ削り、口縁部ヨコナデで、内面は斜め方向のナデの後、15 条 1 単位の播目を入れる。15 世紀前半の所産。395 は 15 世紀の深鉢。口縁部の上端部から外面にかけては横方向の、体部外面は縦方向のヘラミガキで、光沢をもつ。内面は横方向のナデ。384 は 15 世紀の白磁杯。完形品である。体部は八角で、高台には 4 箇所の袂りを入れる。385 は白磁の皿。施釉は内面のみ。14 世紀後半から 15 世紀前半頃のものか。397 は薄板を柄でつなぎ合わせ、柄鏡形にしたものである。円形部分の中央に横方向の浅い溝を彫る。瓦は 13 世紀代のものが多い。399 は 12 世紀後半から 13 世紀前半の巴文軒丸瓦で、140 溝出土の 271～273 と同範である。400 は 14 世紀前半のもので、46 と同範。401～403 はいずれも 13 世紀代のもので、402 のみ左巻きである。404 は 14 世紀前半の菱形唐草文軒平瓦。298 と同範。405 は「大」の字を並べた特異な文様で、33 と同範。平瓦部凸面はタテ方向のナデで、顎部には凹型台の圧痕が残る。顎下面はヨコナデ。13 世紀。406 は 13 世紀後半から 14 世紀前半の蓮華唐草文軒平瓦で、72 と同範である。

177 土坑 調査区の中央、176 土坑の西側に近接する。数基のピットと重複し、それらを切るが、西肩部の 260 ピットには切られる。176 土坑とよく似た南北に長い大型の土坑で、南北長約 12.5 m を測る。おそらく両者は同じ性格の土坑であったと考えられる。幅は 2.0～2.2 m であるが、南端部はやや狭くなり幅 1.1 m 程度となる。深さは南側が 0.15～0.2 m、北側が 0.3 m を測る。

土師器皿 (408・409)、瓦器椀・皿 (410)、瓦質土器足釜・播鉢・火鉢、東播系須恵器片口鉢、須恵

器壺、白磁碗（411）、瓦などのほか、埴輪の小片が出土している。図示したものはいずれも12世紀後半頃のやや古手のものであるが、瓦質土器播鉢や火鉢など15世紀代のもも確実に含んでいる。火鉢は方形のものである。

201・202 土坑 調査区南東部に位置する。200 溝と完全に重複する土坑で、平面検出時には溝埋土上面では検出できず、溝底面で検出できた。東西に2基並んでおり、西側を201土坑、東側を202土坑とした。平面形は両者ともに直径1.3m前後の円形で、深さは201土坑が0.3m、202土坑が0.35mを測る。

201土坑からは瓦器碗片1点と瓦、砥石が、202土坑からは土師器皿と瓦器碗の小片が1点ずつ出土している。202土坑の瓦器碗は13世紀前半のものである。

271 土坑 調査区北西部、前記177土坑の北西側に近接する。平面形は長径1.5m、短径1.3mの東西にやや長い方形に近い楕円形を呈する。深さは0.5mを測る。

土師器皿、瓦器碗、須恵器、瓦の小片が出土している。瓦器碗は12世紀後半のものである。

282 土坑 調査区中央西寄り、177土坑の西側に位置する。南端部で315井戸と重複し、井戸を切る。176・177土坑と同様の南北に長い大型の土坑で、南北約8m、幅約2.5mを測る。おそらく三者は同じ性格の土坑であったと考えられるが、この土坑の遺物は若干古い。深さは0.2～0.25mで、埋土は上層が暗褐色粘土質シルト、下層が偽礫や中粒砂～細礫を多く含むにぶい黄褐色の粘土質シルトである。

土師器皿（412）・鍋（417）、瓦器碗（414・415）・皿（413）、瓦質土器足釜・甕、東播系須恵器片口鉢（416）、須恵器蓋・杯、瓦などが出土している。177土坑ほど新しい遺物はなく、13世紀代のもものが主である。瓦器碗は2点ともに13世紀後半の和泉型で、見込みの暗文は平行線である。須恵器の蓋や杯は8世紀代のものである。

285 土坑 282土坑の西側に近接する。平面形は長径2.4m、短径1.65mの楕円形を呈する。深さは0.15mを測る。

土師器皿（407）・羽釜、瓦質土器甕・火鉢、瓦などが出土している。土師器皿は15世紀代のものである。

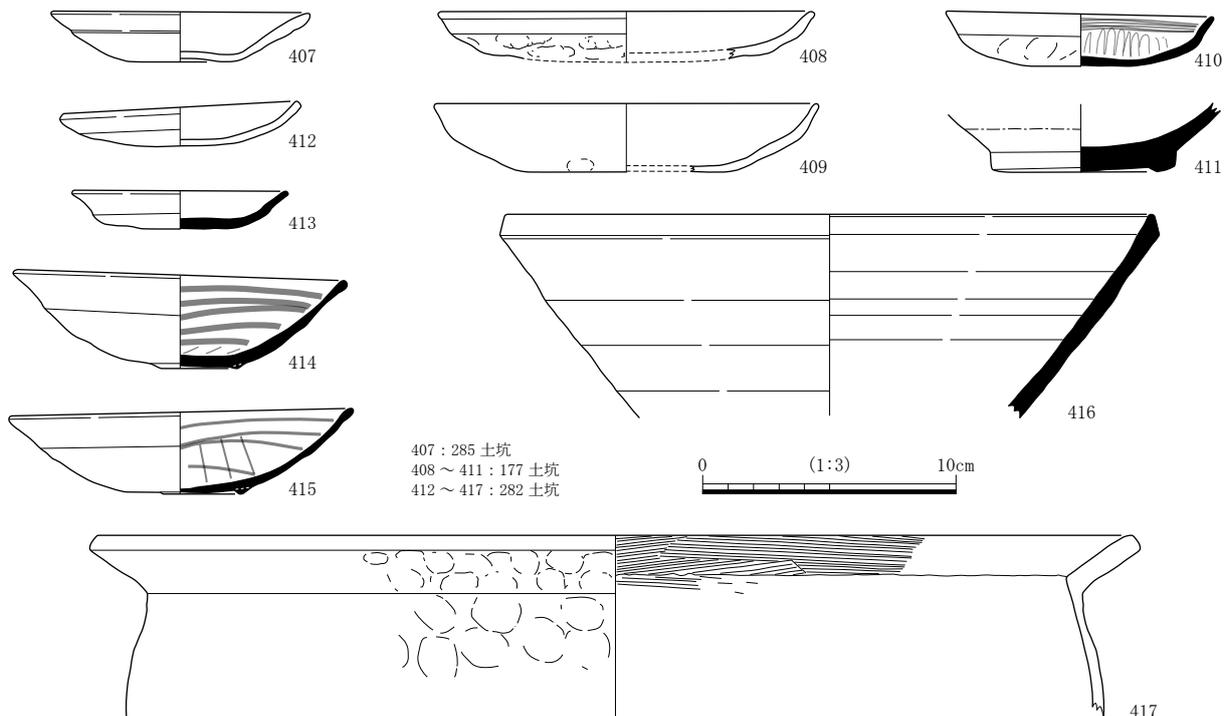
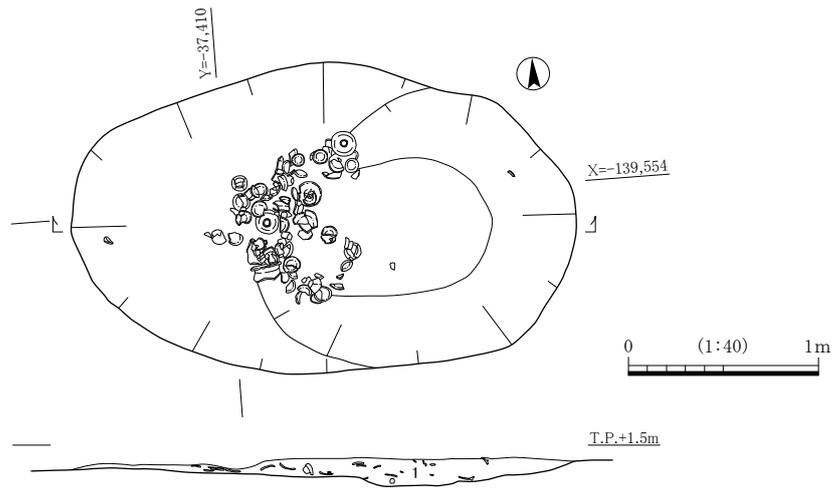


図66 3区土坑出土遺物



1. 10YR3/1~3/2 黒褐色シルト(10YR4/4 褐色粘土質シルト偽礫混じる.中粒砂~小礫多く含む)

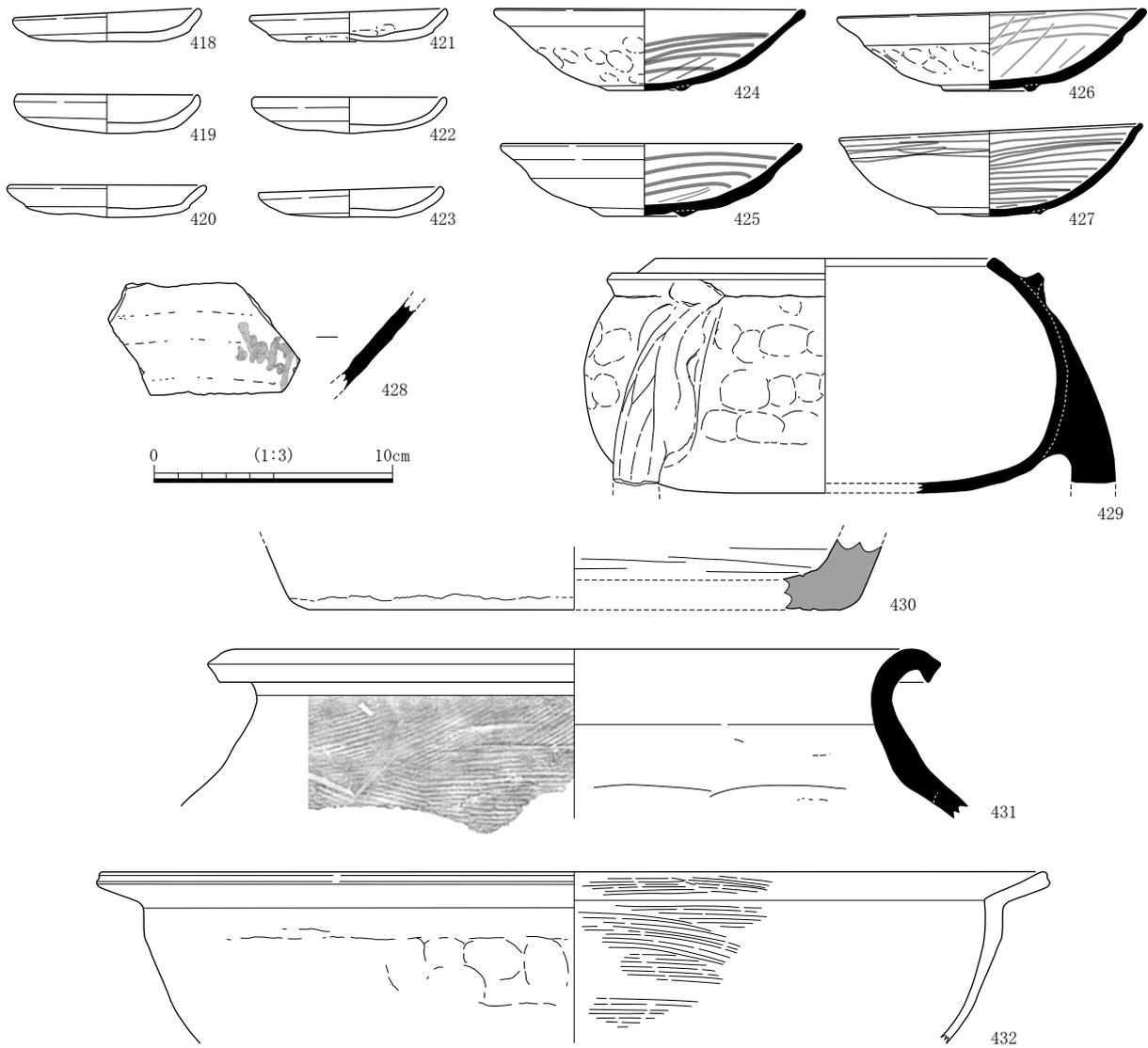


図 67 3区 162 土器溜り平面・断面 及び 出土遺物

297 土坑 調査区の西半、掘立柱建物4のほぼ中央に位置する。平面形は一辺約0.8mの菱形に近い歪んだ方形を呈する。深さ0.3mである。

瓦器椀、瓦質土器足釜、須恵器、瓦の小片が出土している。

162 土器溜り 調査区南辺のやや西寄りに位置する。160溝の北肩部に隣接する遺構で、長径2.65m、短径1.65mの東西に長い楕円形を呈する。意図的に掘り込まれたものではなく、僅かな窪みに土器が廃棄されたような遺構である。窪みには偽礫や砂粒を含む黒褐色シルトが厚い箇所では厚さ約0.15m堆積しており、その中から多くの土器がまとまって出土した。

出土する土器は土師器皿(418～423)がほとんどで、僅かに瓦器椀(424～427)や土師器鍋(432)、瓦質土器足釜(429)・甕(431)、東播系須恵器片口鉢(428)、石鍋(430)、瓦などが混じる。いずれも13世紀後半のものである。土師器皿は口縁端部を面取り気味にココナデする。瓦器椀のうち424～426は和泉型で、いずれも見込みの暗文は平行線である。このうち426の暗文は体部ヘラミガキの後に施している。427は大和型で、外面上部にもヘラミガキが認められる。428には「善」と思われる墨書がある。

前述した掘立柱建物や塀の柱穴以外にも多くのピットを検出している。直径0.3m前後の小さなものから、土坑状の大型のものまであり、平面形も円形から方形のものまで、また柱穴底に柱の沈みを防ぐための礎板や礎石を敷くもの、柱根が残るものまでさまざまである。遺存状態のよいものについて以下に報告する。

175ピット 掘立柱建物1の西半部、167土坑の北側に近接する。平面形は長辺1.0m、短辺0.75mの長方形で、やや東に振れる。深さは0.2mを測る。

土師器皿、瓦器椀の小片が出土している。瓦器椀は13世紀代のものである。

179ピット 掘立柱建物1の西半部、163溝のすぐ東側に位置する。平面形は直径0.26～0.27mの円形で、深さは0.07mを測る。底に礎板を据える。

220ピット 掘立柱建物1の西半部、179ピットの北側に位置する。平面形は直径0.28mの円形で、深さは0.14mを測る。底に礎石を据える。

土師器皿、瓦器椀、須恵器甕の小片が出土している。瓦器椀は12世紀後半のものである。

222ピット 掘立柱建物1の西半部、170溝の北肩部に位置する。平面形は直径0.25mの円形で、深さは0.13mを測る。底に礎石を据える。

227ピット 掘立柱建物1の西半部、220ピットの東側に位置する。平面形は長径0.35m、短径0.3mの楕円形で、深さは0.08mを測る。底に礎板を据える。

245ピット 掘立柱建物1の北廂の柱穴184ピットの南側に近接する。平面形は長径0.28m、短径0.21mの楕円形で、深さは0.08mを測る。柱根が遺存していた。

247ピット 調査区西壁際に位置する。西半が調査区外のため全体規模は明らかでないが、南北0.88mの円形に復原できる。深さは0.5mを測る。

土師器皿(433)、瓦器椀、須恵器の小片が出土している。433は11世紀代のものか。

249ピット 調査区南西隅、172土坑の北西側に近接する。平面形は直径0.35mの円形で、深さは0.25mを測る。底に礎石を据えるが、それとは異なる位置に柱根が遺存していた。

土師器皿と瓦の小片が出土している。

260ピット 177土坑の西肩部に重複し、土坑を切る。平面形は一辺1.0mの方形で、深さは0.65mを測る。

土師器皿・甕、瓦器椀(434)のほか埴輪の小片も出土している。434は12世紀後半の和泉型である。

261ピット 177土坑の南半部に重複する。土坑掘削後の底面で検出した。平面形は長辺0.75m、短辺

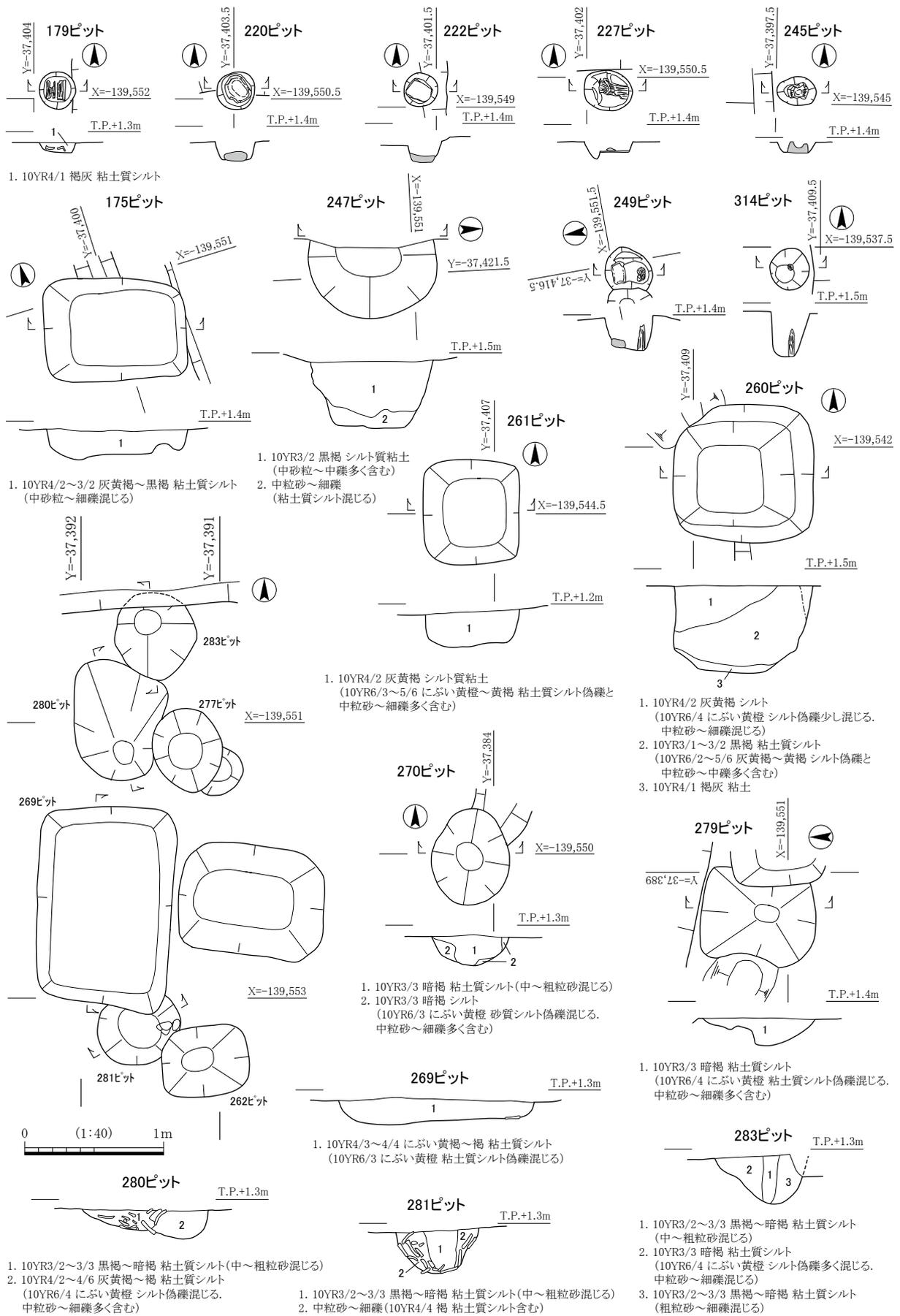


図 68 3区ピット平面・断面

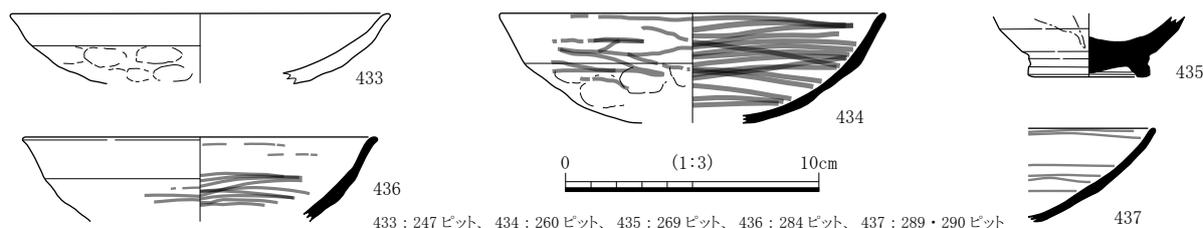


図 69 3区ピット出土遺物

0.67 mの長方形で、深さは 0.25 mを測る。

以下のピットは、掘立柱建物 1 東半部の、掘立柱建物 3 周辺で検出した。両建物に伴わないピットである。

269ピット 掘立柱建物 3 の西辺に位置する。平面形は長辺 1.4 m、短辺 0.9 mの南北に長い長方形を呈する。深さは 0.2 mを測る。輪郭が明瞭で、掘立柱建物の柱穴を検出した当初から検出できていた。掘立柱建物の柱穴と規模が似ていたことから、その一部になるのではないかと検討したが、柱の通りからずれており、建物には伴わないと判断した。

土師器皿片とともに白磁の碗（435）が出土した。435 は陶器質の胎土に灰黄色の釉をかけるが、体部下半から高台を露胎とする。高台は雑な作りである。15 世紀代のものか。

270ピット 掘立柱建物 3 の東辺に位置する。平面形は長径 0.7 m、短径 0.55 mの楕円形で、深さは 0.2 mを測る。

279ピット 269ピットの北東側に位置する。平面形は長辺 0.8 m、短辺 0.65 mの南北に長い長方形を呈する。深さは 0.2 mを測る。

280ピット 269ピットの北側に近接する。平面形は長辺 0.9 m、短辺 0.65 mの歪んだ長方形を呈する。深さは 0.2 mで、埋土には多くの瓦が含まれていた。

多くの瓦に混じって土師器片が 2 点出土している。平瓦はすべて凸面縄タタキである。

281ピット 269ピットの南側に重複する。平面形は長径 0.6 m、短径 0.5 mの楕円形で、深さは 0.3 mを測る。280ピット同様に埋土には多くの瓦が含まれていた。この瓦を含む部分は掘方の埋土で、中心には瓦を含まない柱痕跡が観察できた。

280ピットと同じく、出土した平瓦はすべて凸面縄タタキである。12 世紀後半のものか。

283ピット 280ピットの北側に接する。170 溝と重複し、溝に切られる。平面形は楕円形で、短径は 0.6 m、長径は 0.65 mに復原できる。平面形は直径約 0.4 mの円形で、深さは 0.2 mである。

314ピット 調査区の西半部、177 土坑の西肩部に接する。平面形は直径 0.3 mの円形で、深さは 0.33 mを測る。細い柱根が遺存していた。

352ピット 掘立柱建物 4 と塀 1 との間に位置する。平面形は直径 0.21 mの円形で、深さは 0.32 mを測る。柱根が遺存していた。

このほか、調査区北西隅の 284ピットからは瓦器椀（436）が出土している。12 世紀後半の和泉型である。



写真 4 瓦参考資料

第5節 4区の成果

3区の北西側に接する。調査面積は1,541㎡である。調査区の北東部の広範囲に旧中学校の建物基礎が残っており、大きく遺構面が破壊されていた。攪乱の壁面などから断片的に遺構の存在が確認できたが、本来の規模や形状、周囲の遺構とのつながりなど不明な点が多く、重複関係を検証できていない遺構も多い。

溝、井戸、土坑、ピットなど多くの遺構を検出した。

1溝 調査区南東部に位置する。3区側から続く「流路」あるいは「水路」と呼ぶべき規模の大きな遺構である。調査区南東隅から湾曲しながら北に向かい、弧を描くように北東方向調査区外へと伸びる。この溝



図70 4区 検出遺構全体平面

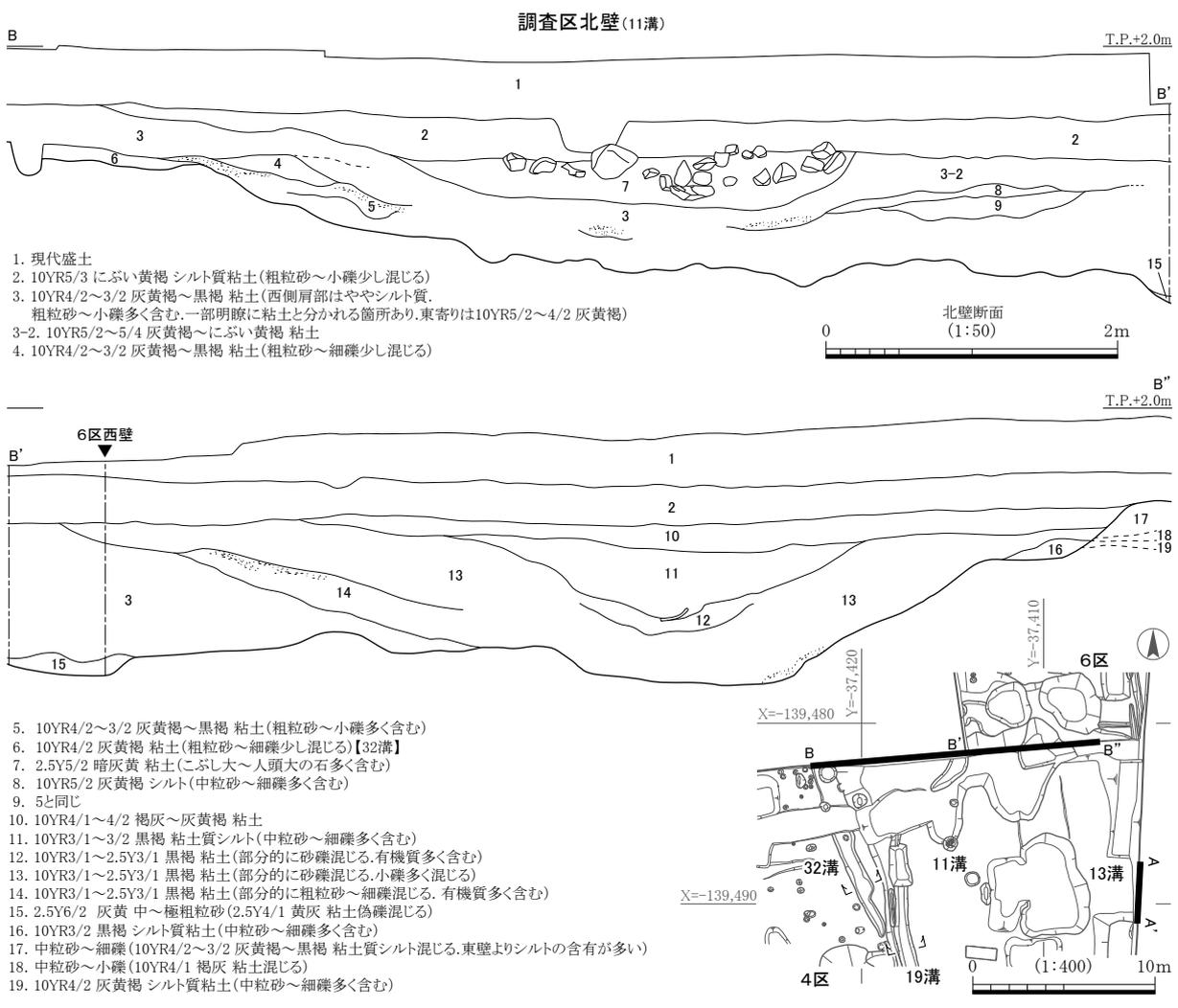
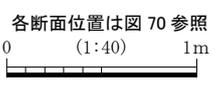
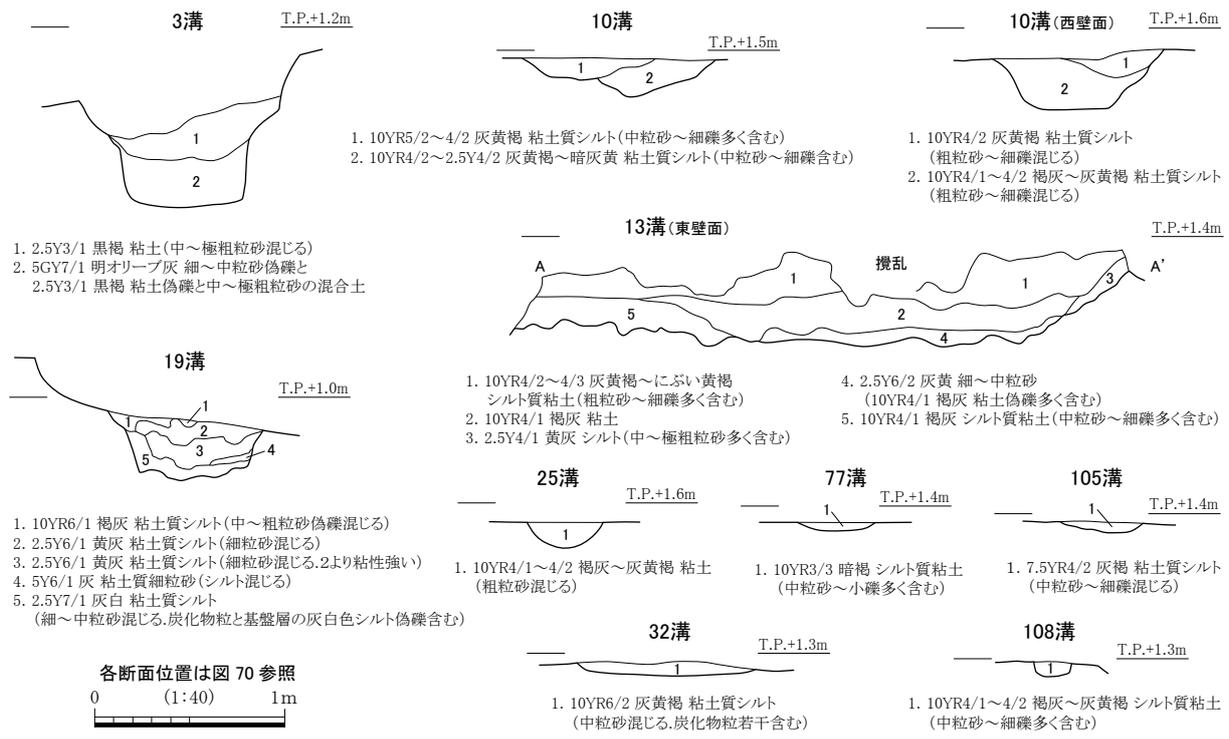


図 71 4区 溝断面

の形状や出土遺物から、ももとは古墳の周溝だったのではないかと考えている。溝の幅は南半では約 6.5 ～ 7 m、北半では約 6 m で、深さは西辺部が約 0.45 m、南端部東壁際で約 0.85 m を測る。北辺部では調査区東壁面の観察によって深さ約 0.7 m であったことを確認したが、攪乱の影響で溝の北肩が残っておらず、それ以外の詳細な規模は不明。溝の東肩部については、1 溝を遮るように、ほぼ直角に折れて南西方向に張り出す箇所が認められた。張り出す長さは約 4 m である。これは墳丘の造出部にあたる可能性が高い。その屈曲部、つまり墳丘のくびれ部にあたる箇所から、須恵器とともに多くの埴輪がまとまって出土した。埋土は下層が褐灰～黒褐色の粘土で、3 区との境付近では、上層に瓦が廃棄されたような状況で堆積していた。

上層と下層とに分層して遺物を取り上げたが、時期差は認められなかった。3 区同様に古墳時代と中世の大きく 2 時期の遺物が出土している。古墳時代の遺物には、土師器、須恵器（438 ～ 444）、埴輪（445 ～ 475）がある。溝の上層からも数点出土しているが、大半は溝東裾の屈曲部付近にまとまっていた。土師器には高杯片があるが、土師器自体非常に少ない。埴輪には円筒埴輪のほか、蓋や家、人物や動物などの形象埴輪が多く含まれている。土器・埴輪ともに 5 世紀後半（TK 23 ～ TK 47 型式）の所産である。

438 ～ 440 は台付壺である。438 は頸部に波状文を施し、口縁端部は内径する面をもつ。体部外面下方にはナデ消し残った格子目タタキが、それに対応する内面下半には棒状工具の圧痕が残る。肩部の文様帯は櫛描列点文である。脚部外面には波状文を施し、下段側に三角形の、上段側に長方形の透孔を開ける。

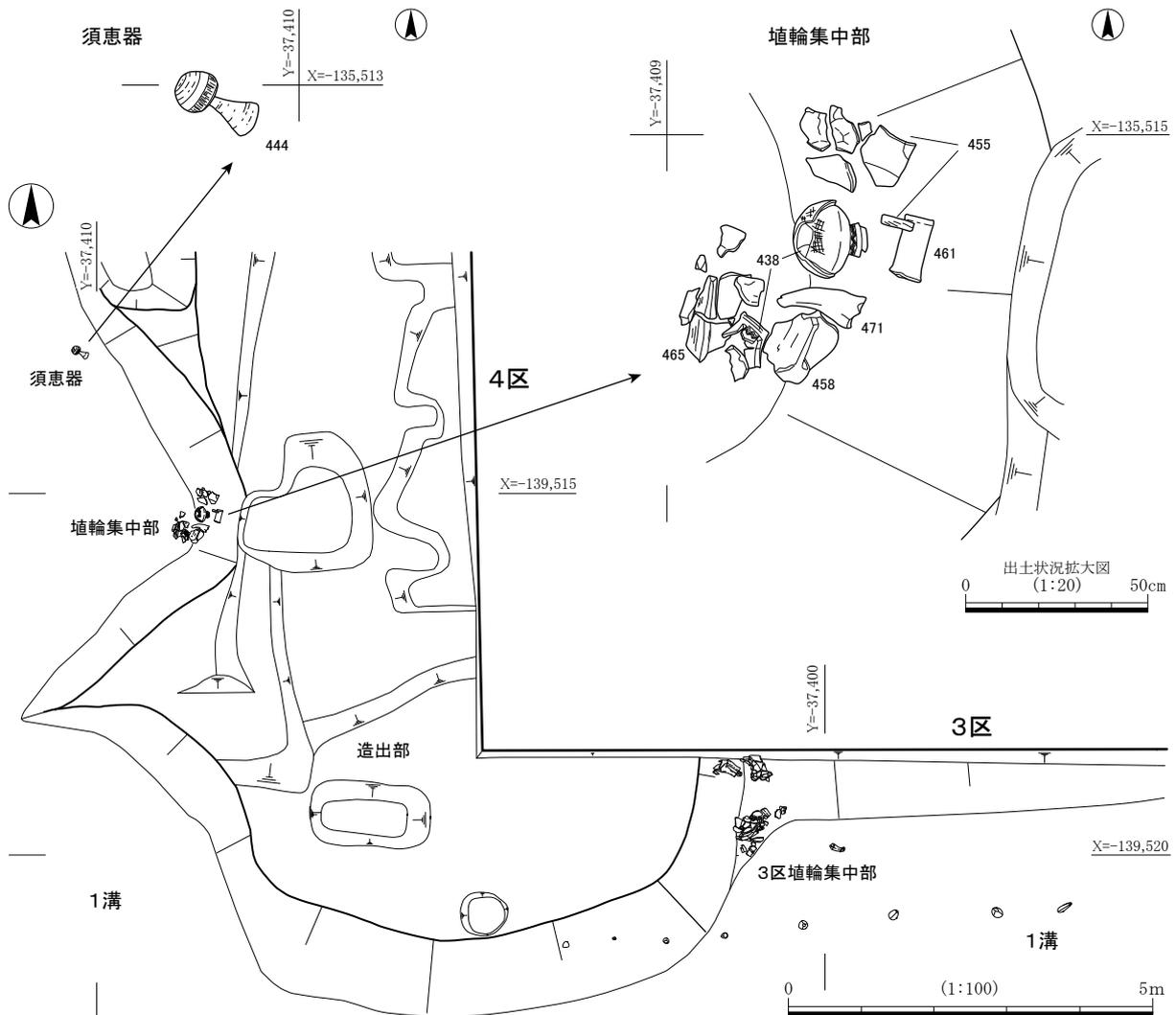
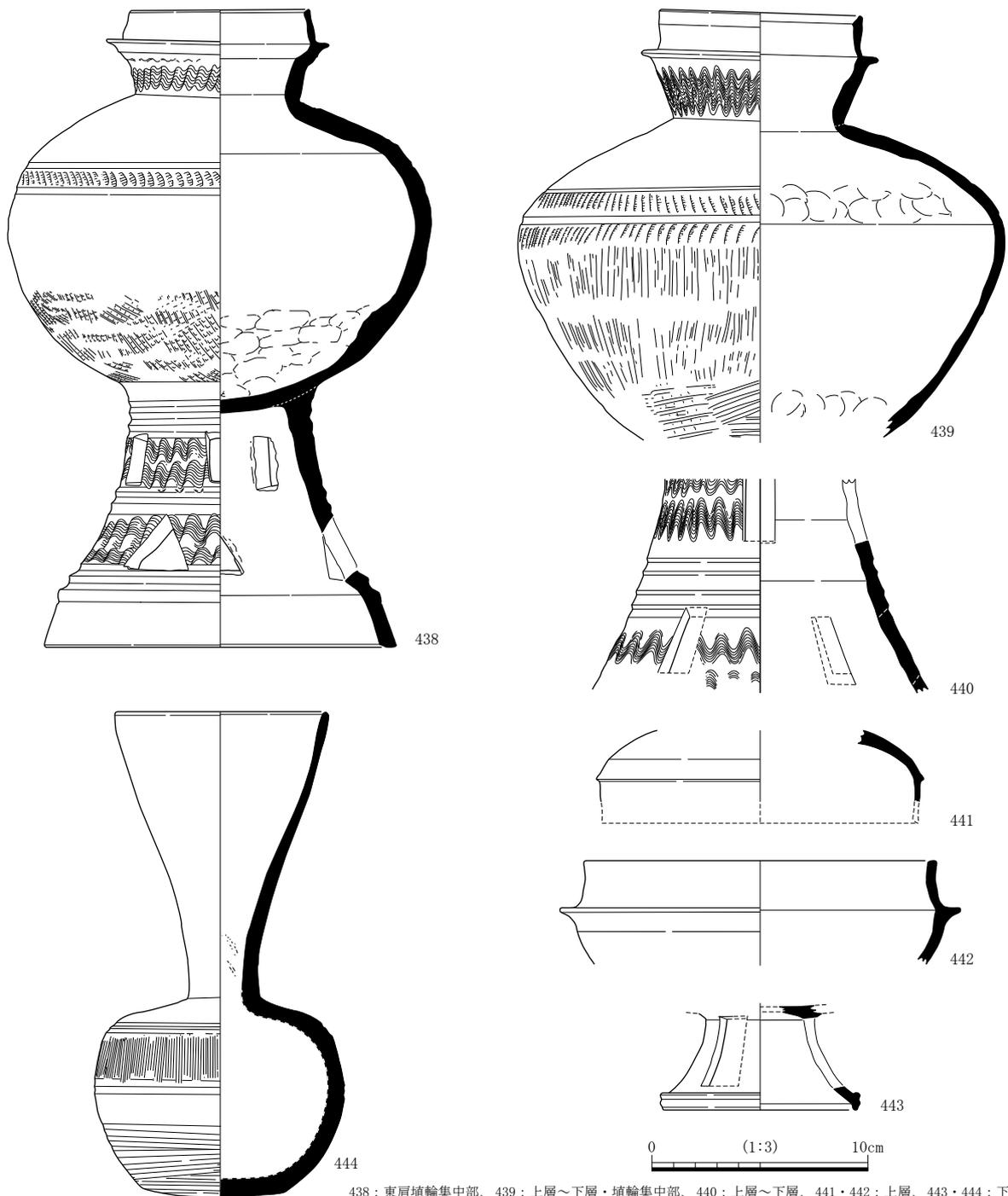


図 72 4 区 1 溝須恵器・埴輪出土状況



438：東肩埴輪集中部、439：上層～下層・埴輪集中部、440：上層～下層、441・442：上層、443・444：下層

図 73 4区 1溝出土遺物（1）

439は438と同じく頸部に波状文を施し、口縁端部は内径する面をもつ。体部外面にはナデ消し残った平行タタキが、内面下半には棒状工具の圧痕が残る。肩部の文様帯は2条の楕円列点文である。440は脚部片である。外面には波状文を施し、上段・下段ともに長方形の透孔を開ける。441は杯蓋、442は杯、443は高杯である。442の口縁端部はほぼ水平な面を成す。442・443の2点はやや古手か。444は埴輪が集中していた箇所近接する1溝の底面から出土した壺である。口縁部がラツパ状に開くやや特異な形状であるが、肩の張りは台付壺とよく似ている。底部にはカキ目を施し、体部の文様帯はタテのハケ目を文様とする。

445～448は円筒埴輪である。ただし445は形象埴輪の台部の可能性も考えられる。外面はタテハケで、断面三角形の突帯を付す。1段目には小穿孔があり、2段目には透孔を設ける。底径は11.6～12.8cm

である。446～448はいずれも3条4段の構成であったと思われる。446は外面ナナメハケ、内面はナデで、2・3段目に透孔を設ける。口縁部はやや外反気味で、端部をヨコナデする。突帯は台形で、上から2条目の突帯部で直径17.4cmを測る。447は2～3段目の破片であろう。外面はナナメハケで、断面台形の突帯を付す。両段に透孔を設ける。448は表面の摩滅が著しいが、外面に僅かにタテハケが観察できる。突帯は断面台形で、3段目に透孔を設ける。449～453は朝顔形埴輪。449は口縁部が直線的に開く。外面をナナメハケで、内面をヨコハケで調整し、低い台形の突帯を付す。450と同一個体の可能性が高い。450は外面ナナメハケで、内面はナデ。頸部には断面三角形の、円筒部には台形の突帯を付す。452は口縁部としては開きが弱いことから、ほかの埴輪の可能性も考えたが、内面にヨコハケが認められることから朝顔形埴輪の口縁部と判断した。外面はタテハケで、突出した蒲鉾状の突帯を付す。451・453は肩部片。表面の摩滅が著しいが、453には外面にタテハケが認められる。ともに断面台形の突帯を付し、451は透孔を設ける。454は円筒埴輪、あるいは形象埴輪の基底部片である。外面のハケ調整は認められない。底径は17.6cmに復原できる。

455は家形埴輪の屋根部。壁体部はない。器壁は8mm程度で薄く、外面に施すハケはタテ・ヨコ一定ではない。寄棟造の屋根で、屋頂には障泥板と妻隠板を線刻で表現する。大棟には2条の押縁突帯を並べ、その上に堅魚木をのせる。その堅魚木外面にもハケ目が残る。456・457も家形埴輪と思われる。よく似たものが3溝からも出土している(503)。基部付近の破片で、裾廻りの突帯がみられる。突帯より上には浅い段がみられる。柱の表現であろうか。器壁は厚く、灰白色を呈する。458・459は蓋形埴輪の立飾部で、460は笠部である。458は軸部を欠損するが、直径は9cm強であったと復原できる。ちょうど460の軸受部に収まる大きさである。飾板受部は椀形で、飾板には鱗を表現した切込みがみられる。458・459ともに飾板には線刻文様は認められない。460は円筒台部内面にヨコハケが認められる。軸受部の口縁部外側には突帯をめぐらす。笠部外面には線刻文様は認められない。

461・462は動物形埴輪の脚部と思われる。円筒で、蹄の表現はない。下端部の直径は461が6.7～7.1cm、462が7.2cmである。463は鶏形埴輪の頭部片で、嘴・目・鶏冠を表現する。464は鳥形埴輪。形象部は横長の粘土板を重ねて成形する。外面はハケ調整で、円筒台部と形象部との境に断面台形の細い突帯をめぐらす。突帯部の直径は12.6cmで、突帯直下には両側面に透孔を設ける。線刻による翼の表現があるが、頭部を欠損するため、鳥の種類は特定できない。

465・466については石見型埴輪の可能性も考えたが、5世紀後半の石見型とは形状が異なっており、形象部の文様も直弧文のような一連のものではなく、鱗部が独立した文様構成となっている。線刻も雑で、定型期の石見型埴輪とは言い難い。鞍形埴輪の一部と考えた方がよいかもしい。両者ともに矢筒部は円筒形で、465の矢筒部はタテハケ、飾板はヨコハケで、466の飾板にはナナメハケとヨコハケがみられる。467は盾形埴輪か。表には綾杉文の線刻文様がある。同様の文様は平成12年の普賢寺古墳の調査で出土した盾持人埴輪の盾周縁部にもみられる⁸⁾。468は飾馬を飾った馬鈴と思われる。直径は4.0cm。469・470は飾馬の一部と思われる。469には幅1.0cmの、470には幅1.2cmの湾曲する低い突帯が付く。三繫のいずれかを表現したものと考えている。470は外面にハケ目が観察できる。471・472は人物形埴輪の左腕である。471の手首の直径は3.6～3.8cmである。472は肩部片で、扁平に潰れている。473～475は人物形埴輪の下半部片である。473・474には帯を表現したと思われる竹管文風の文様がみられる。473は斜めに垂れ下がる部分かもしれない。同じ表現は184・185にもみられる。帯を表現したものだとすれば、473の帯幅は約3.5cm、474は約5cmとなる。接合しないが、474には円筒台部の基部片がある。

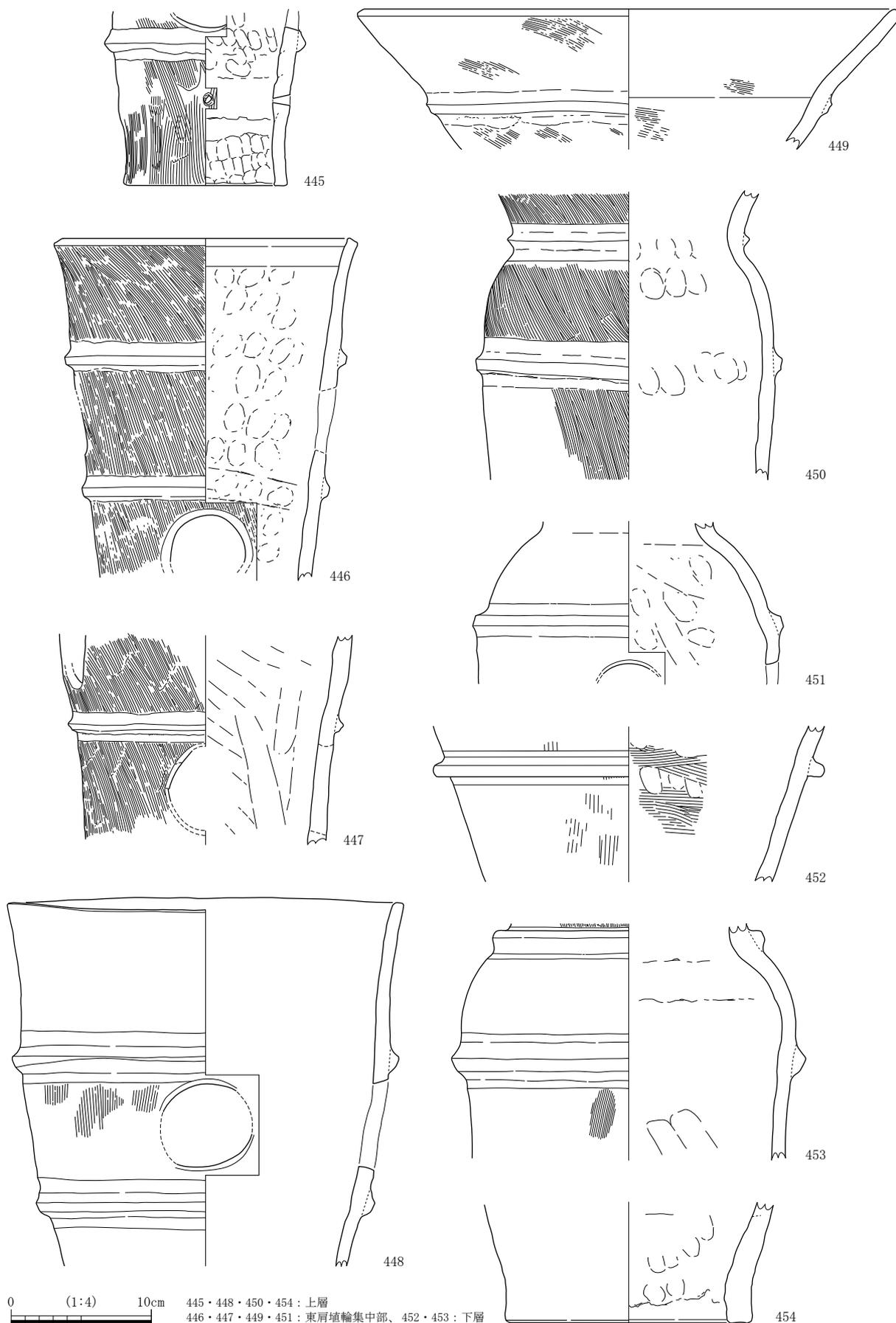


图 74 4区 1溝出土遺物 (2)

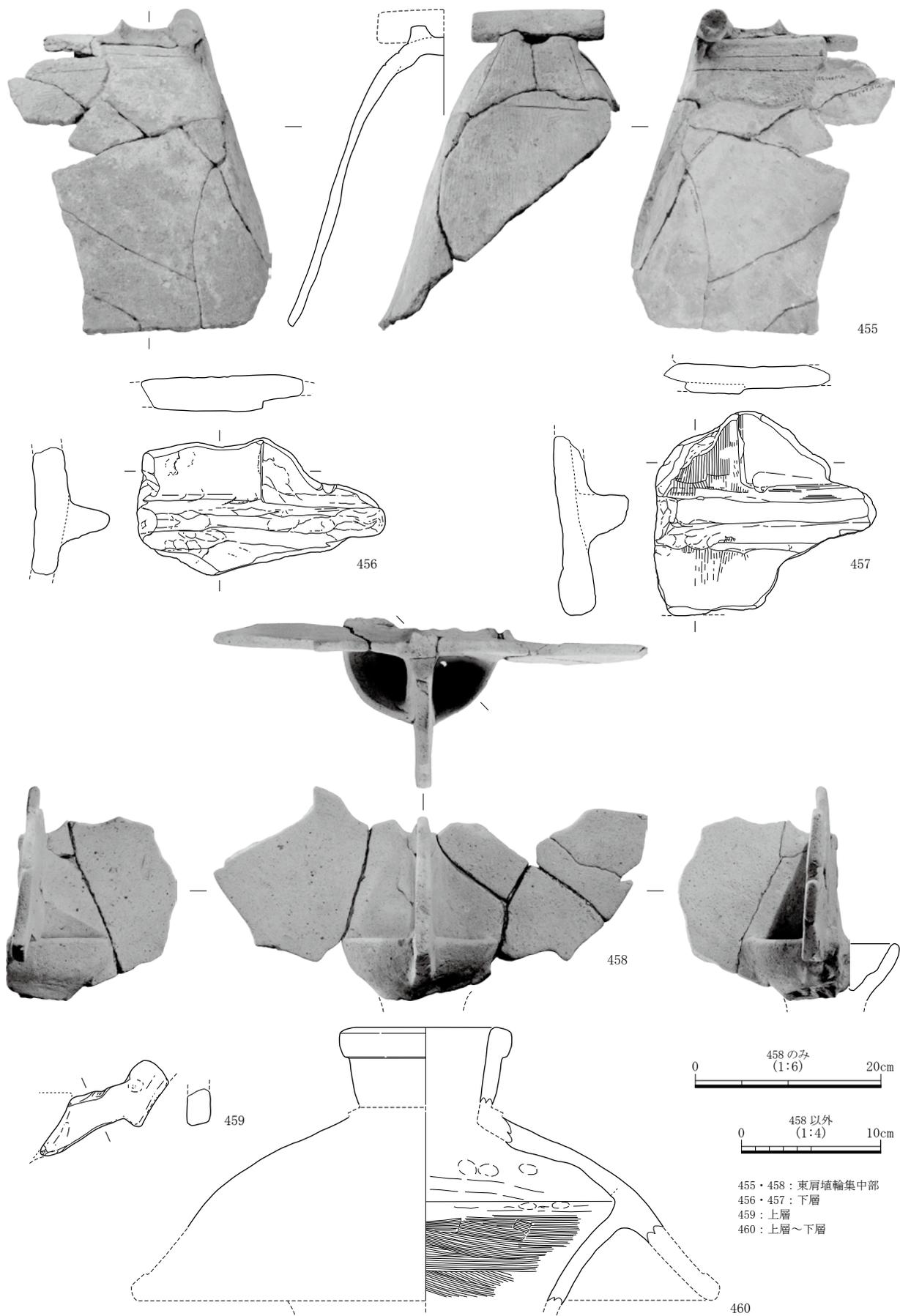


図75 4区1溝出土遺物(3)

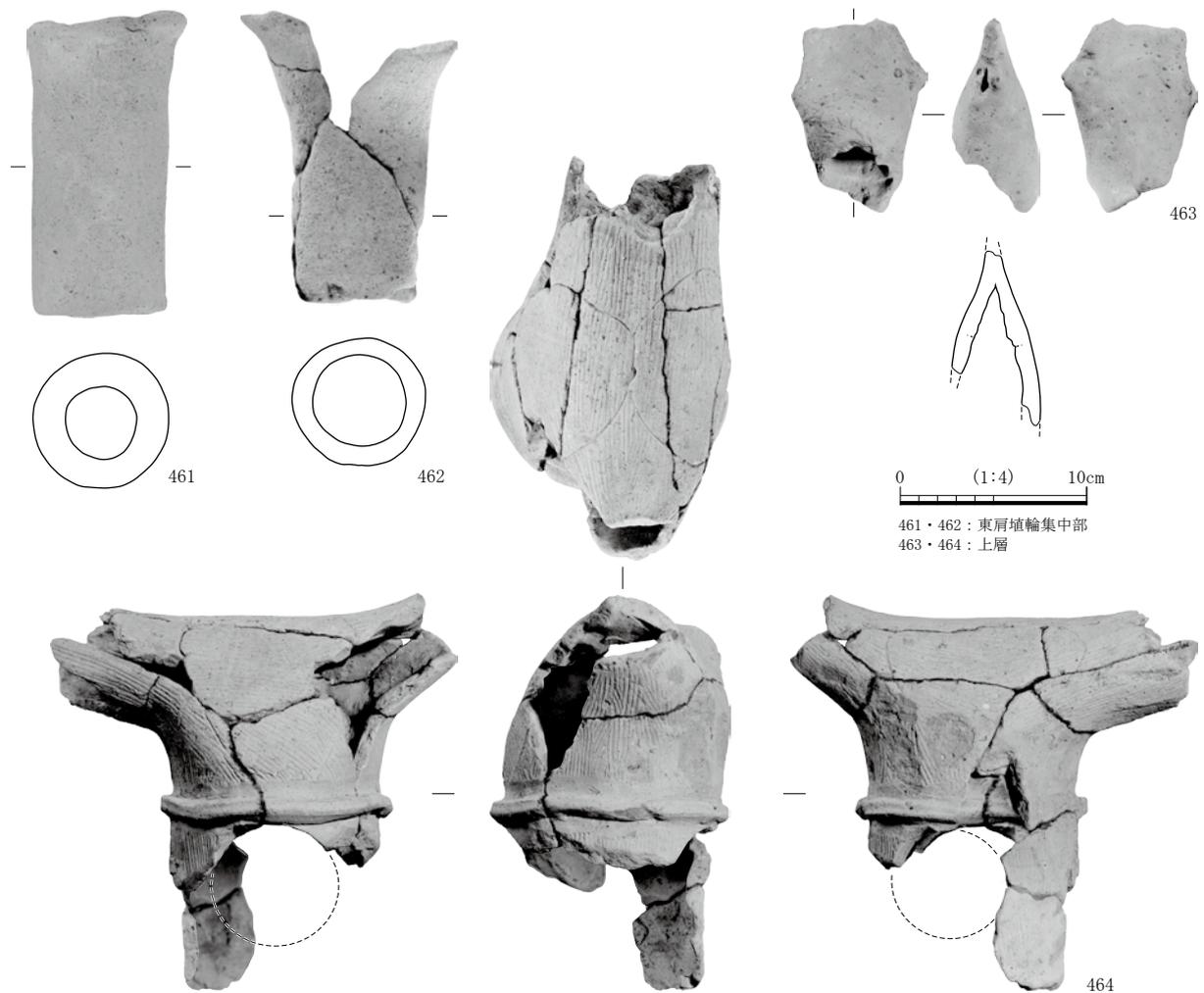


図76 4区1溝出土遺物(4)

下端には突帯がめぐる。外面調整はタテハケで、粘土の接合面にも観察できる。475は474と同じ部位だが、腰部に竹管文はなく、帯を表現したと思われる幅約1.7cmの低い突帯がめぐる。その突帯部での直径は17.3cmを測る。

中世の遺物には、土師器皿(483～486・493～495・498～500)・羽釜、瓦器椀(490～492・497・501・502)・皿(487～489・496)、瓦質土器足釜・鍋、東播系須恵器片口鉢、輸入磁器(480～482)、瓦(477～479)、硯(476)などがある。12世紀後半のものから13世紀のものが中心で、14・15世紀のものは比較的少ない。連続する3区の1溝や140溝からは多くの瓦が出土しているが、それに比べ4区側は少ない。477・478は12世紀後半から13世紀前半の剣頭文軒平瓦で、同範である。顎は折り曲げ技法による。479は242・300と同範の連珠文軒平瓦。14世紀。480は白磁の壺、481は白磁の碗である。12世紀から13世紀。482は12世紀後半の青磁碗。同安窯系で、内面に櫛描の花文、外面に縦の櫛目文を施す。外面高台内には墨書があるが判読できない。土師器皿はどれもが12世紀後半のものである。493は台付の皿で、見込みに穿孔がみられる。瓦器椀には491・497・501・502のような12世紀中葉のものから、492のような13世紀前葉のもの、490のような14世紀前半のものまで時期幅がみられる。このうち490・497は和泉型で、497の見込みの暗文はジグザグ状である。492・501・502は大和型と思われる。492・501の見込みの暗文は螺旋状である。491は12世紀中葉の楠葉型。内面に密の、外面には4分割のヘラミガキを施す。見込みの暗文はジグザグ状である。487・488・496の皿には、

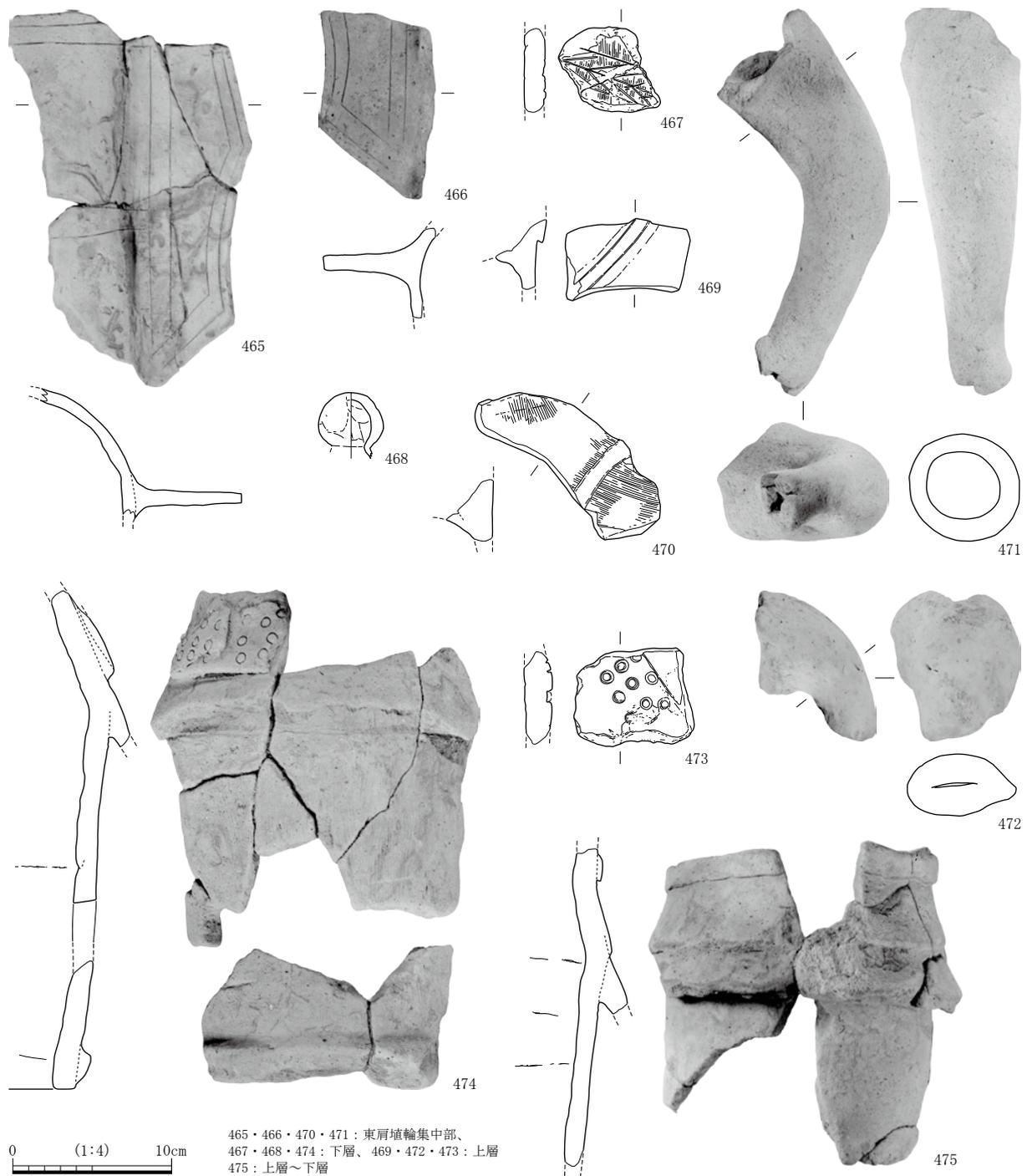


図77 4区1溝出土遺物(5)

見込みにジグザク状暗文を施す。

3溝 1溝の東肩部に位置する。断面観察によって1溝の埋土上面から掘り込まれていることを確認した。ただし1溝の肩部に沿ってやや湾曲していることから、1溝の形状に影響されていたことがうかがえる。溝の掘り直しなどによるものであろうか。溝の長さは約10.5mで、幅は1.15mを測る。深さは0.8mで、下半は壁面がほぼ垂直の二段掘りのような構造となっている。埋土は上層が中～極粗粒砂が混じる黒褐色粘土、下層が明オリーブ灰色の細～中粒砂偽礫・黒褐色粘土偽礫・中～極粗粒砂の混合土である。

須恵器片と埴輪(503)が出土している。503は家形埴輪の基部と考えられる。裾廻りの突帯とその下に半円形の抉りの一部がみられる。突帯より上には縦・横のハケ目が認められる。器壁は厚く、灰白色を呈する。

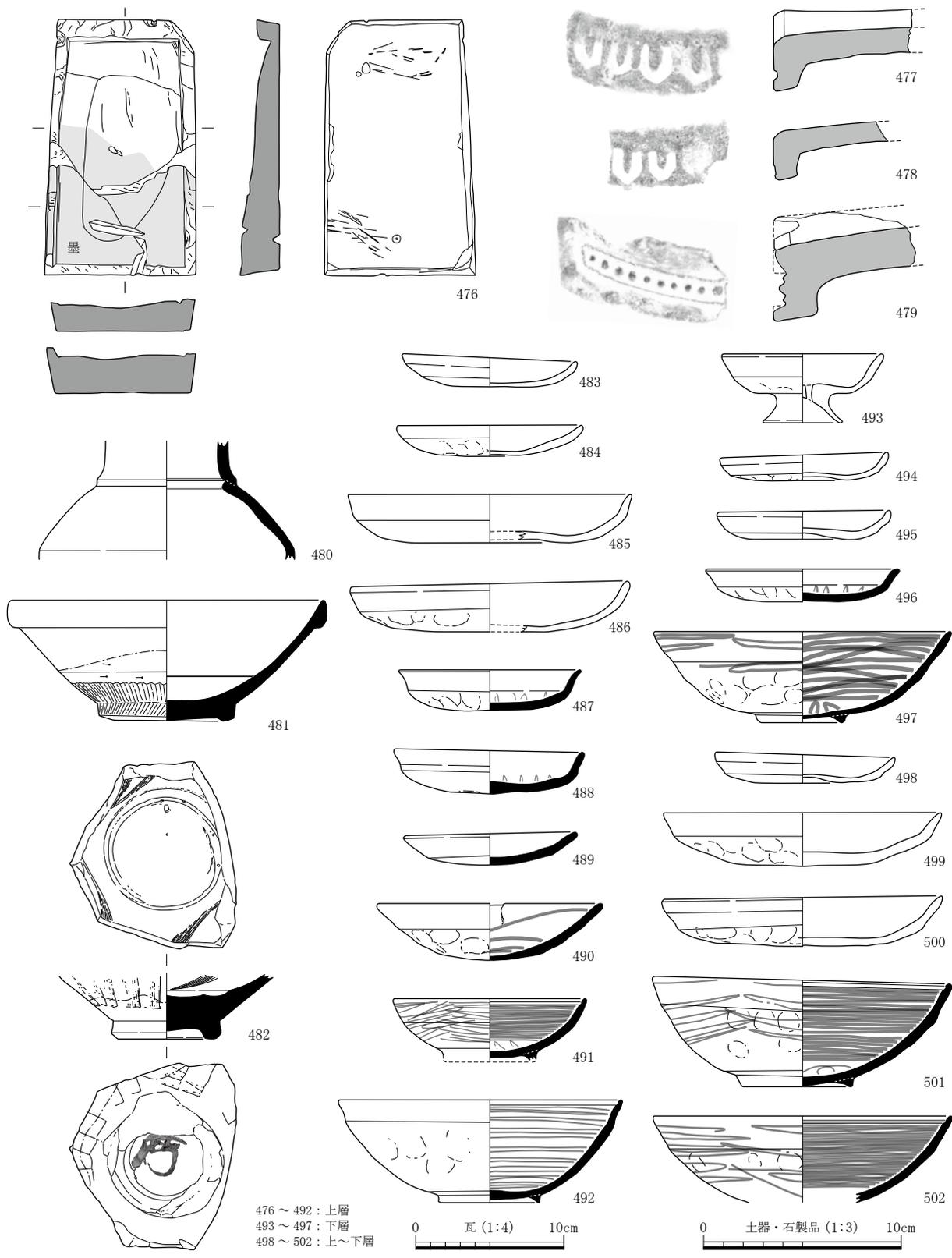


図 78 4区 1溝出土遺物 (6)

10溝 調査区南半に位置する。東西方向の溝で、8井戸と重複し、井戸に切られる。幅は狭い箇所では0.5 m程度であるが、西半部では0.9 ~ 1.0 mを測る。深さは約0.15 ~ 0.25 mで、埋土は砂礫を含む灰黄褐~暗灰黄色や褐灰色の粘土質シルトである。

土師器皿 (504 ~ 507)・羽釜、瓦器椀 (508)、瓦質土器足釜、東播系須恵器片口鉢、須恵器甕の小

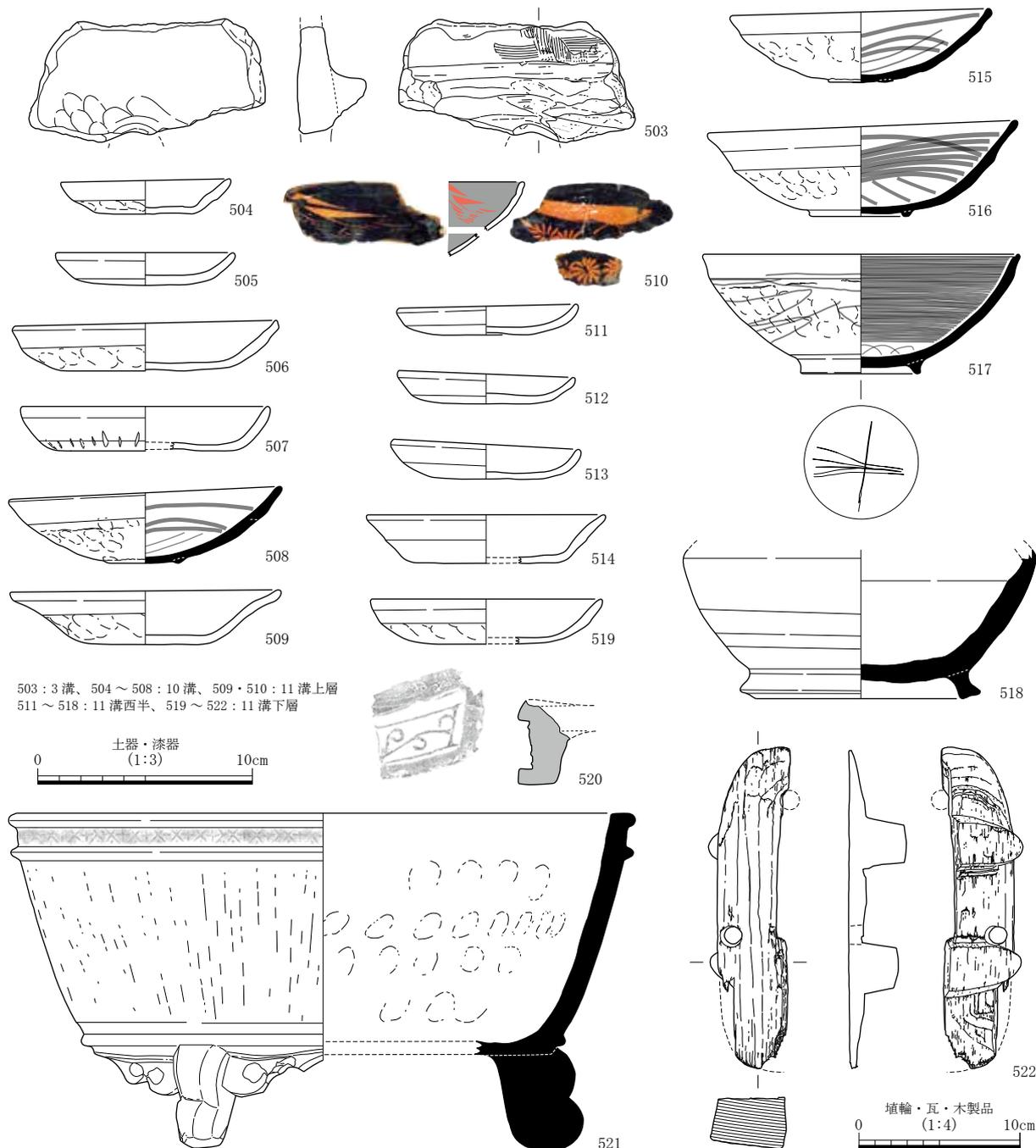


図 79 4区 溝出土遺物 (1)

片が出土している。507 は 12 世紀後半、506 は口縁端部を面取りする 13 世紀前半、505 は 13 世紀後半、504 は 14 世紀後半から 15 世紀前半のように、土師器の皿には時期幅がみられる。508 は 13 世紀後半の和泉型で、見込みの暗文は平行線である。

11 溝 調査区北東隅に位置する。1 溝と調査区東壁際で合流し、北方に向かってのびる溝であるが、この付近は旧中学校の建物基礎による攪乱が著しく、遺構の輪郭がわからないくらいまで破壊されていた。平面検出ができるような状態ではなく、攪乱の壁面や底に辛うじて残った溝埋土を頼りに掘削を進めた。したがって正確に遺構検出ができておらず、本来の規模やほかの遺構との関係など不明な点が多い。東壁際では後述する 12・13 溝とも重複するが、それらとの関係も検証できていない。北壁際で辛うじて東肩部が検出でき、幅約 14.5 m であることが確認できた。深さは 0.9 ~ 1.0 m で、深い箇所では 1.25 m であった。また溝底

には土坑状の大きな凹凸がみられる。北壁の断面観察によって、掘り直されたような溝の切り合いが確認できるが、平面検出時には、上記のとおりその輪郭は確認できていない。おそらく溝を維持するための掘り直しや、付け替えなどによるものと考えられる。

攪乱により平面規模が不明で、溝が重複している可能性があったことから、西肩付近の遺物を「西半」として分けて取り上げている。11 溝の上層からは土師器皿（509）・羽釜、瓦器椀、瓦質土器羽釜・播鉢・火鉢、東播系須恵器片口鉢、須恵器甕、漆器椀（510）、瓦、埴輪などが出土している。509 は 15 世紀のものである。510 は内外面を黒漆で仕上げ、赤漆で草花文を絵付けする。

下層からは土師器皿（519）、瓦器椀、瓦質土器火鉢（521）、瓦（520）、下駄（522）などが出土している。519 は 12 世紀後半のものである。520 は 13 世紀後半から 14 世紀前半の蓮華唐草文軒平瓦。瓦当は瓦当貼り付け技法により接合する。72 と同範である。521 は 14 世紀後半から 15 世紀前半のもので、残りが非常に良い。外面を丁寧にヘラミガキして光沢をもたせるが、その単位は観察できない。内面には指の圧痕が残る。522 は一木の連歯下駄。台は楕円形を呈する。長さは 20.1cm 以上で、前歯は中軸線上に開ける。歯の出は前歯がやや長く 2.5cm、後歯が 2.1cm である。

溝の西半からは、土師器皿（511～514）、瓦器椀（515～517）・皿、瓦質土器足釜・鉢、東播系須恵器片口鉢、須恵器壺（518）・甕、陶器甕、白磁四耳壺、瓦、埴輪などが出土している。土師器皿のうち 511～513 は 12 世紀後半から 13 世紀前半頃、514 は 14 世紀のものである。瓦器椀にも時期幅がみられる。517 はほとんど隙間なくヘラミガキを施す 12 世紀前半のものであるが、516 は 13 世紀前半、515 はヘラミガキが雑な 13 世紀後半のものである。517 は大和型で、見込みの暗文は螺旋状である。外面高台内には×状の線刻がある。515・516 は和泉型で、見込みの暗文は平行線である。518 は 8 世紀の壺。瓦には凸面に縄タタキや格子目タタキが残る平瓦が含まれているが、その数は少ない。陶器甕は 15 世紀の信楽焼である。

12 溝 調査区の北半、東壁際に位置する。1 溝の北側に近接し、11 溝と重複するが、上部を攪乱によって大きく削られていたため、1 溝や 11 溝との関係については検証できていない。攪乱の底や壁面で辛うじて検出でき、幅約 1.2～1.5 m で、コの字状に屈曲していることが確認できたが、本来の規模や末端がほかの溝とどのようにつながっていたのかなどについては明らかでない。

土師器皿、瓦器椀（524・525）、東播系須恵器片口鉢（523）、瓦（526）、木製品（527・528）のほか、埴輪の小片が出土している。523～525 は 13 世紀後葉のものである。526 は面戸瓦。凸面には縄タタキ、凹面には糸切りの痕跡が明瞭に残る。527・528 は毬杖の木毬である。

13 溝 12 溝の北側の調査区東壁際に位置する。11 溝から東方に向かってのびていたと考えられるが、11・12 溝と同じく上部を攪乱によって大きく削られていたため、周辺の溝との関係については検証できていない。調査区東壁面の観察によって、幅 3.2 m 以上、深さ 0.5 m 以上であったことが確認できたが、そのほかの規模の詳細は明らかでない。底面には粘土偽礫を多く含む細～中粒砂が堆積し、その上が褐灰色の粘土やシルト質粘土となる。

土師器皿（529）と瓦の小片が出土している。529 は 12 世紀後半のものである。

19 溝 調査区北半中央、11 溝の西裾部に位置する。11 溝の埋土上面では検出できず、埋土掘削後の面で検出していることから、11 溝に切られていたと考えている。北と南の両端が攪乱によって失われており、どこまでのびていたのかは明らかでない。幅は約 0.7～0.9 m で、深さは約 0.35 m を測る。埋土は下層が灰白色の粘土質シルトで、上層が細粒砂混じりの黄灰色粘土質シルトなどである。北端部には一段深くなる長

方形の窪みがある。

土師器皿 (530)、瓦器椀 (531)、瓦質土器火鉢の小片が出土している。530は15世紀、531は14世紀前半のものである。

25 溝 調査区南西隅に位置する。南東—北西方向に斜行する溝で、幅約0.4 m、深さ約0.15 mを測る。埋土は粗粒砂が混じる褐灰～灰黄褐色粘土である。

瓦器椀の小片が1点出土している。

32 溝 調査区北端部の、11 溝の西肩部に位置する。溝幅は一定しないが広い箇所では0.95 mを測る。深さは0.07 m程度で浅い。埋土は中粒砂や炭化物が混じる灰黄褐色の粘土質シルトである。

土師器皿 (532)、瓦器椀 (533)、瓦の小片が出土している。532・533ともに12世紀代のもので、533は中葉の和泉型。見込みの暗文は斜格子状である。

86 溝 調査区南半の、1 溝の西肩部に位置する。92 土坑・1 溝と重複し、両者を切る。溝というよりは浅い土坑状の遺構である。幅は0.65 m、深さ0.05 mを測る。埋土は中粒砂～小礫を多く含む黒褐色のシルト質粘土である。

土師器皿、瓦器椀、瓦質土器足釜、須恵器甕の小片が出土している。瓦器椀は13世紀代のものである。

77・105 溝 調査区の南半中央、1 溝の西側に位置する。古墳時代の溝で、8 井戸や95 土坑と重複し、それらに切られる。1 溝の西肩に沿って弧を描くようにのびていることから、1 溝と関わる一連の溝であったと考えている。幅0.4～0.45、深さ0.05 m前後で、1 溝とは約4 m隔てる。埋土は砂礫混じりの灰褐～暗褐色の粘土質シルト、あるいはシルト質粘土である。

77 溝からは埴輪の小片が9点出土している。中世の遺物は含まれていない。

108 溝 調査区中央やや東寄りの、1 溝の西肩部に位置する。やや斜行する東西方向の溝である。幅は約0.2 m、深さ約0.08 mで、埋土は中粒砂～細礫を多く含む褐灰～灰黄褐色のシルト質粘土である。東端が4 土坑につながっており、一連の遺構であった可能性が高い。

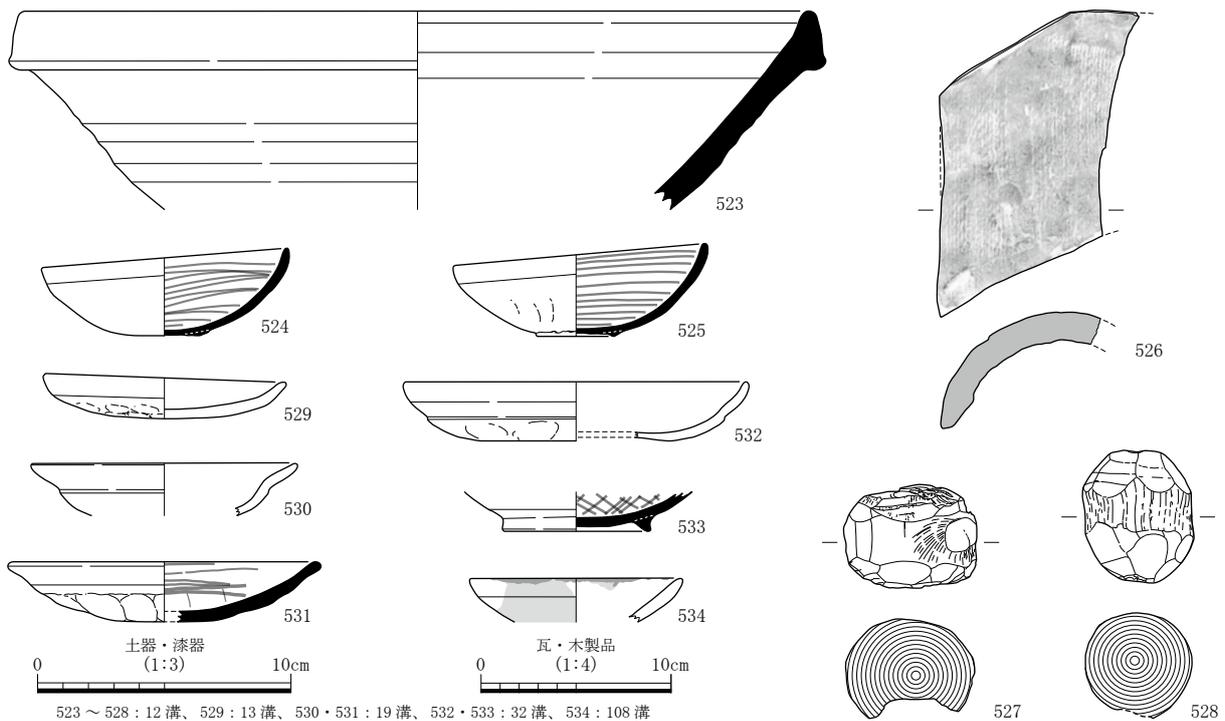


図 80 4 区 溝出土遺物 (2)

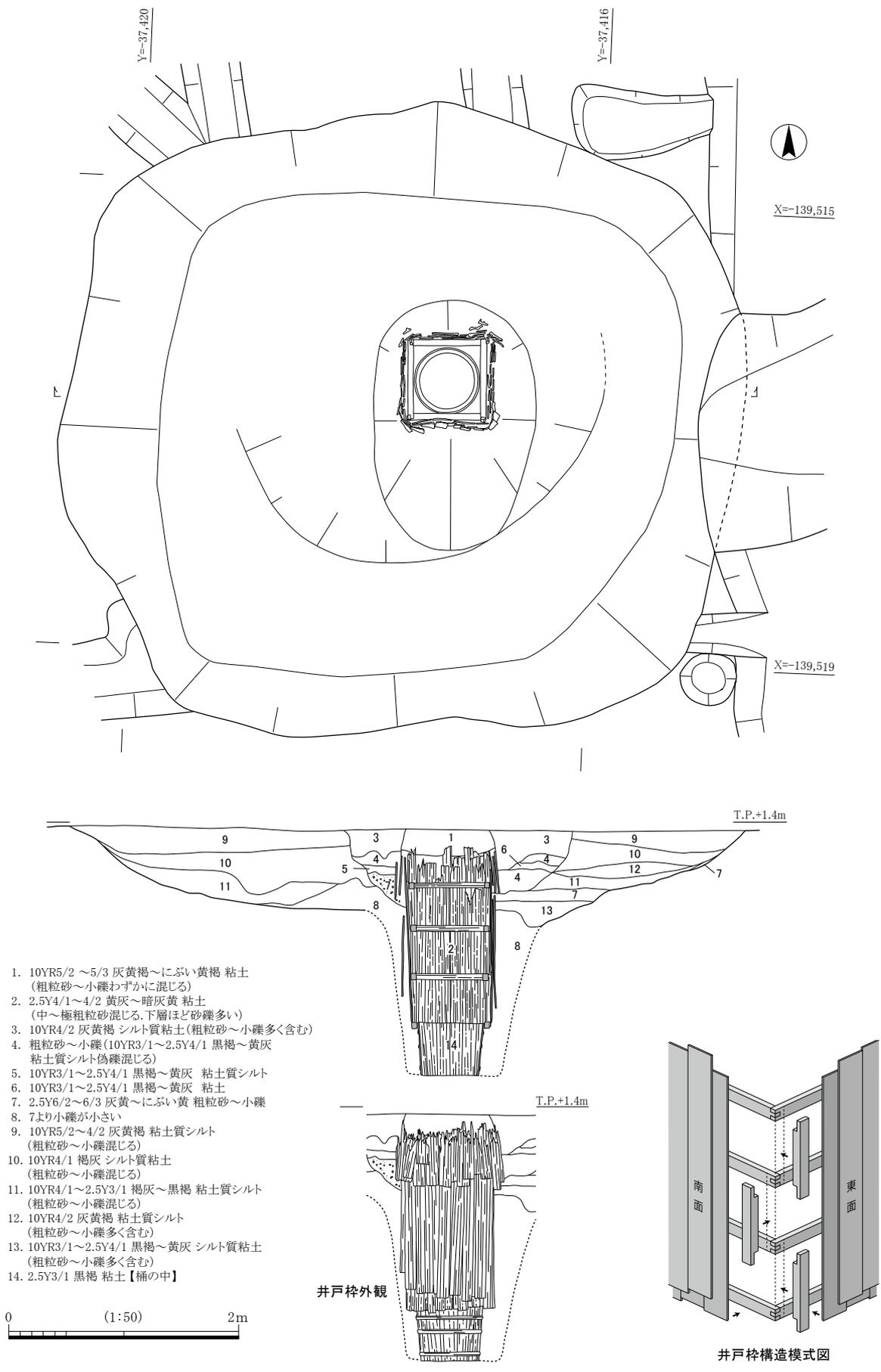


図 81 4区 8井戸平面・断面

土師器皿(534)と瓦質土器の小片が出土している。534は燈明皿として使われたものである。13世紀後半から14世紀前半頃のものであろうか。

8井戸 調査区南半中央に位置する。1溝の西肩部にあり、いくつかの遺構と重複し、すべての遺構を切る。検出した遺構の中ではもっとも新しい時期の遺構である。掘方の平面形は南北約5.3m、東西約5.9mの方形で、その中央やや北東寄りに井戸枠を設ける。井戸枠の掘方は枠を据えられる程度の狭いもので、2.15mの深さがあるが、それ以外の周囲は深さ0.7m程度で浅い。井戸枠は木組みで、両端を凹形と凸形に細工した角材を交互に組んで内法約0.6mの方形にし、その方形の枠を上下に4段重ねる。各段の間には、間隔が約0.36mになるように端部をL字状に切り欠いた縦材をはめ込み、総高約1.3mの井戸枠の骨格を組む。その骨組みの外側に幅約0.1m、長さ1.4～1.5mの薄板を2重から3重に貼り付けて井戸枠としたものである(図81 模式図参照)。外側の薄板を貼り付ける際には釘を用いていないことから、板材の貼り付けと掘方の裏込めが同時に行なわれたことがうかがえる。さらにこの枠の下に集水用の桶を埋設する。桶上端の直径は0.57mで、深さは0.47mである。

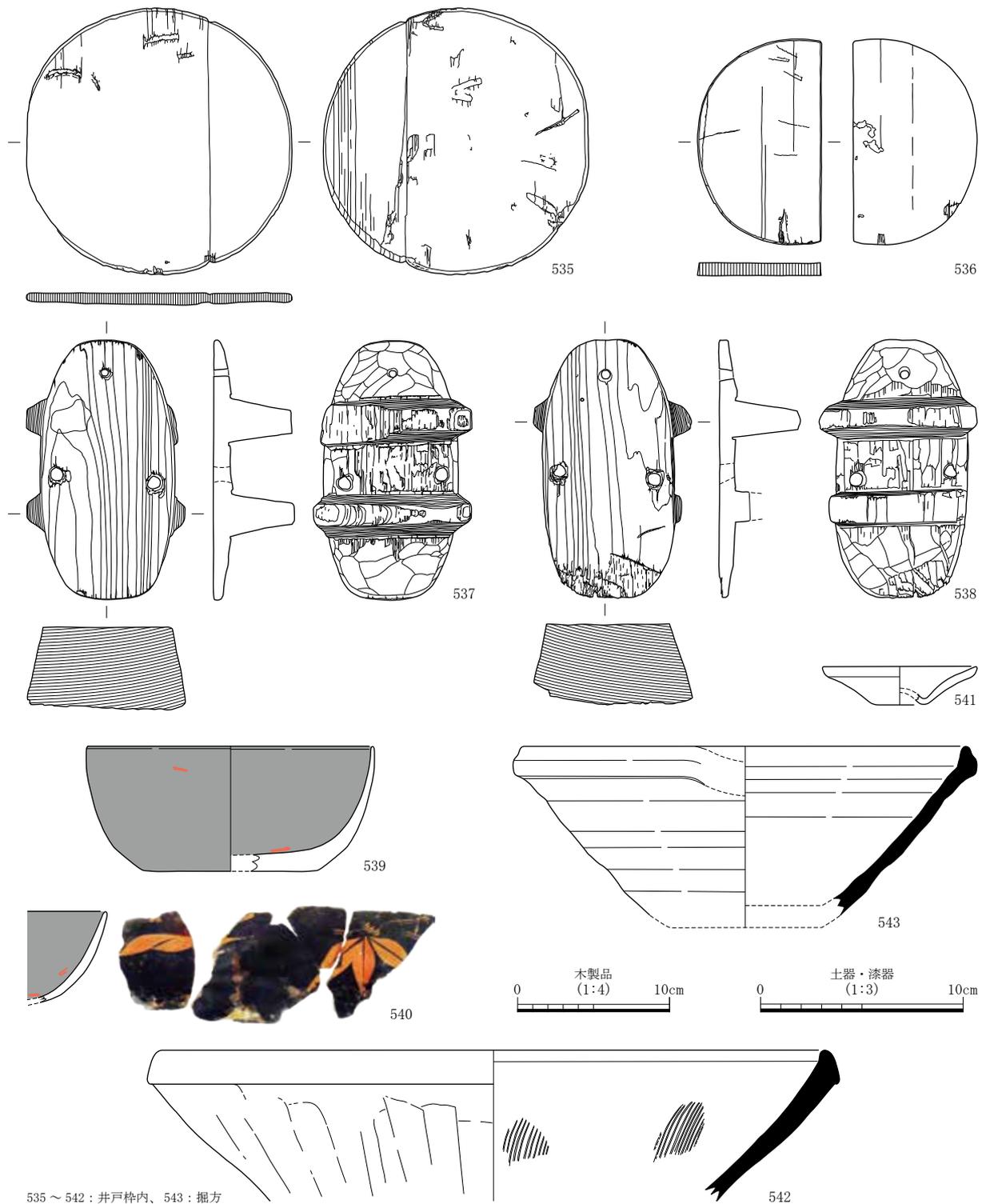
井戸枠内からは土師器皿(541)、瓦質土器播鉢(542)、東播系須恵器片口鉢、漆器椀(539・540)、瓦、木製品(535～538)が、掘方からは土師器皿、瓦器椀、東播系須恵器片口鉢(543)、瓦、埴輪が出土している。541は15世紀後半、542は15世紀前半のものである。542は外面へラケズリの後、縦方向に粗いナデ。543は13世紀後半の所産。やや小ぶりである。535・536は小型曲物の底板。537・538は一木の連歯下駄である。台は楕円形で、537は長さ17.2cm、幅8.9cm、538は長さ17.0cm、幅8.7cmを測る。歯は長く2点ともに4.2cmである。大きさがほぼ同じであることから、この2点で一足と思われる。子供用か。前壺は中軸線上にあり、横緒孔は後歯より前に開ける。539・540は両者ともに内外面を黒漆で仕上げ、赤漆で絵付けするが、539は表面が擦れて傷んでおり、文様は不明。540は外面に南天と思われる三葉を描く。これら以外に、幅約2cm、厚さ約2mmの薄板を交互に組んだ籠の一部と思われる木製品も出土していたが、取り上げや整理作業の段階で完全に分解してしまい、図化できなかった。

14井戸 調査区中央やや北西寄りに位置する。下記16井戸と重複するが、当初一つの遺構として掘削してしまったため、重複関係は検証できていない。周囲が攪乱によって削られているが、掘方の平面形は最大径2.45mの円形に復原できる。深さは周縁部が0.3m程度と浅いが、二段掘りとなっており、中央部が深い。人力掘削で遺構面下1.7mまで掘削したが、危険なため底まで確認することができなかった。埋戻しの際に重機で底の高さを確認し、深さ2.55mであることを確認した。井戸枠は完全に破壊されており、一部が井戸の中に廃棄されたような状態で出土した。その部材の中には、薄い板材や両端に凹形や凸形の切り欠きを作る角材が含まれていることから、前記8井戸と同じ構造の井戸枠であったこと、また両端を加工した角材の寸法から、方形に組まれた井戸枠の内法が約0.64mであったことが復原できる。

土師器皿(545～547)、瓦器椀(548)、瓦質土器足釜、東播系須恵器片口鉢、木製品(544)が出土している。土師器皿は口縁端部をつまみ上げ気味にヨコナデする12世紀後葉から13世紀前半頃のもものが中心であるが、瓦器椀は13世紀後半の所産である。和泉型で、見込みの暗文は平行線である。544は小型曲物の底板である。幅3.5cm程度の薄板をつなぎ合わせたものである。

16井戸 上記14井戸の北東側に重複する。上記のとおり重複関係は不明。平面形は直径約1.8mに復原できる。深さは周縁部が浅く、中央部がやや深い。中心部で0.7mを測る。遺構の形状は14井戸によく似るが、浅く、湧水層まで達していない。井戸として掘削している途中で放棄したものではないかと考えている。

土師器皿と凸面縄タタキの平瓦の小片が2点出土している。



535 ~ 542 : 井戸枠内、543 : 掘方

図82 4区8井戸出土遺物

24井戸 調査区南西部に位置する。平面形は一部が若干張り出しているが、本来は一辺約0.9mの方形であったと復原できる。深さは0.82mしかないが、下部に井戸枠を埋設する。掘方底の東辺と西辺に角材を置き、その上に両端を凹形と凸形に細工した角材を交互に組んだ内法約0.6mの方形枠を据える。その外側に幅0.1m前後の薄板を貼り付けたものである。方形の枠と枠とを上下につなぐ縦材が四隅に残っていたが、上段の方形枠はなく、最下段しか残っていない。ほかの井戸に比べ掘方が浅いことから、井戸枠は8井戸のような数段も重ねるものではなく、おそらく2段までであったと考えられる。四隅の縦材は0.05m

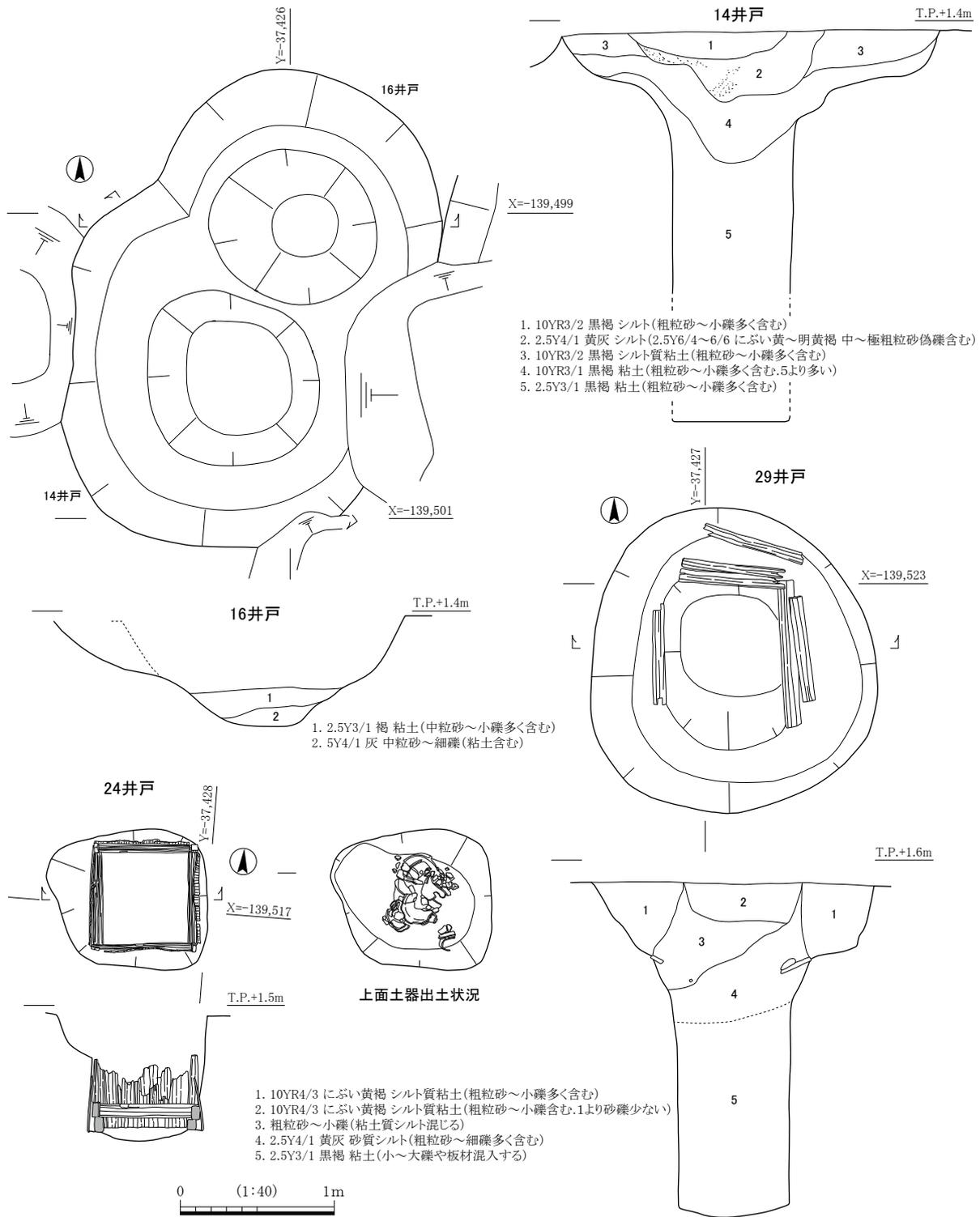


図 83 4区 井戸平面・断面

角で、長さ 0.3 ～ 0.32 m である。方形枠に使われている材は、ほかの井戸のものに比べて太く、一部に柄穴も認められた。建築部材の転用であろうか。

掘方の上面から、土師器皿 (549)、瓦器椀 (550・551)、瓦質土器足釜 (553)、東播系須恵器片口鉢、陶器皿 (552)、瓦などがまとまって出土している。552 以外は 13 世紀後半の所産である。550・551 は和泉型で、見込みの暗文は平行線である。552 は 12 世紀後葉の山茶碗小皿。底部は厚く、見込みはほぼ水平となる。体部は外側に膨らみ、口縁部を外反させる。内面には僅かに自然釉が付着し、見込みには

赤色顔料が薄く残る。

29 井戸 調査区南端、やや西寄りに位置する。平面形は長径 2.0 m、短径 1.85 m の歪んだ楕円形を呈する。深さは周縁部が 0.45 m 程度と浅いが、二段掘りとなっており、中央部が深い。人力掘削で遺構面下 1.5 m まで掘削したが、危険なため底まで確認することができなかった。埋戻しの際に重機で底の高さを確認し、深さ 2.2 m であることを確認した。井戸枠は完全に破壊されており、一部が掘方の傾斜変換点に据えられたような状態で出土した。その部材の中には、両端に凹形や凸形の切り欠きを作る角材が含まれていることから、前記 8 井戸と同じ構造の井戸枠が据えられていたこと、またその材の寸法から、枠の内法が約 0.6 m であったことが復原できる。

土師器皿 (554)・羽釜、瓦器椀、瓦質土器鉢 (555)、東播系須恵器片口鉢、瓦などが出土している。すべて小片で図化できるものは少ない。554 は口縁部を面取りする 13 世紀後半のものである。555 は外面ヘラケズリで、上端部に雑なヘラミガキを加える。内面はハケ目状の細かい筋が残るナデ。一部に縦方向の雑なヘラミガキがみられるが、意図して付したのか疑問。13 世紀代か。

2 土坑 1 溝東側の墳丘と考えている部分に位置する。1 溝の東側で検出した唯一の遺構である。平面形は直径 1.2 m の整った円形で、深さは 0.6 m を測る。壁面は上半には傾斜があるが、下半はほぼ垂直となる。

土師器の小片が出土している。

4 土坑 1 溝の北端、西肩部に位置する。平面形は直径約 1.7 m の方形に近い円形を呈する。深さは 0.45 m である。前述のとおり、この土坑から西に向かって 108 溝がのびる。

土師器皿、瓦器椀とともに埴輪の小片が出土している。瓦器椀は 13 世紀代のものである。

6 土坑 調査区の中央やや東寄りに位置する。1 溝の西肩部と重複し、溝を切る。平面形は長径約 1.8 m、

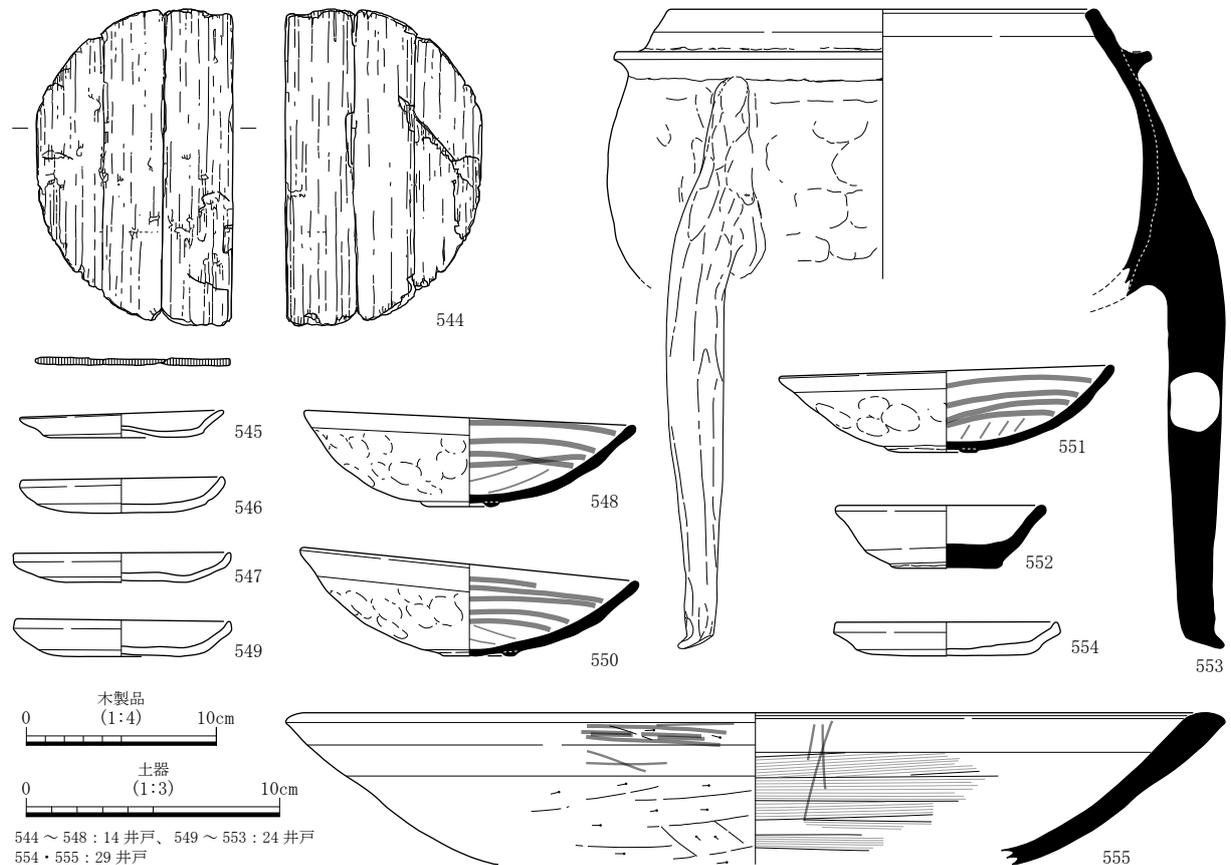


図 84 4 区 井戸出土遺物

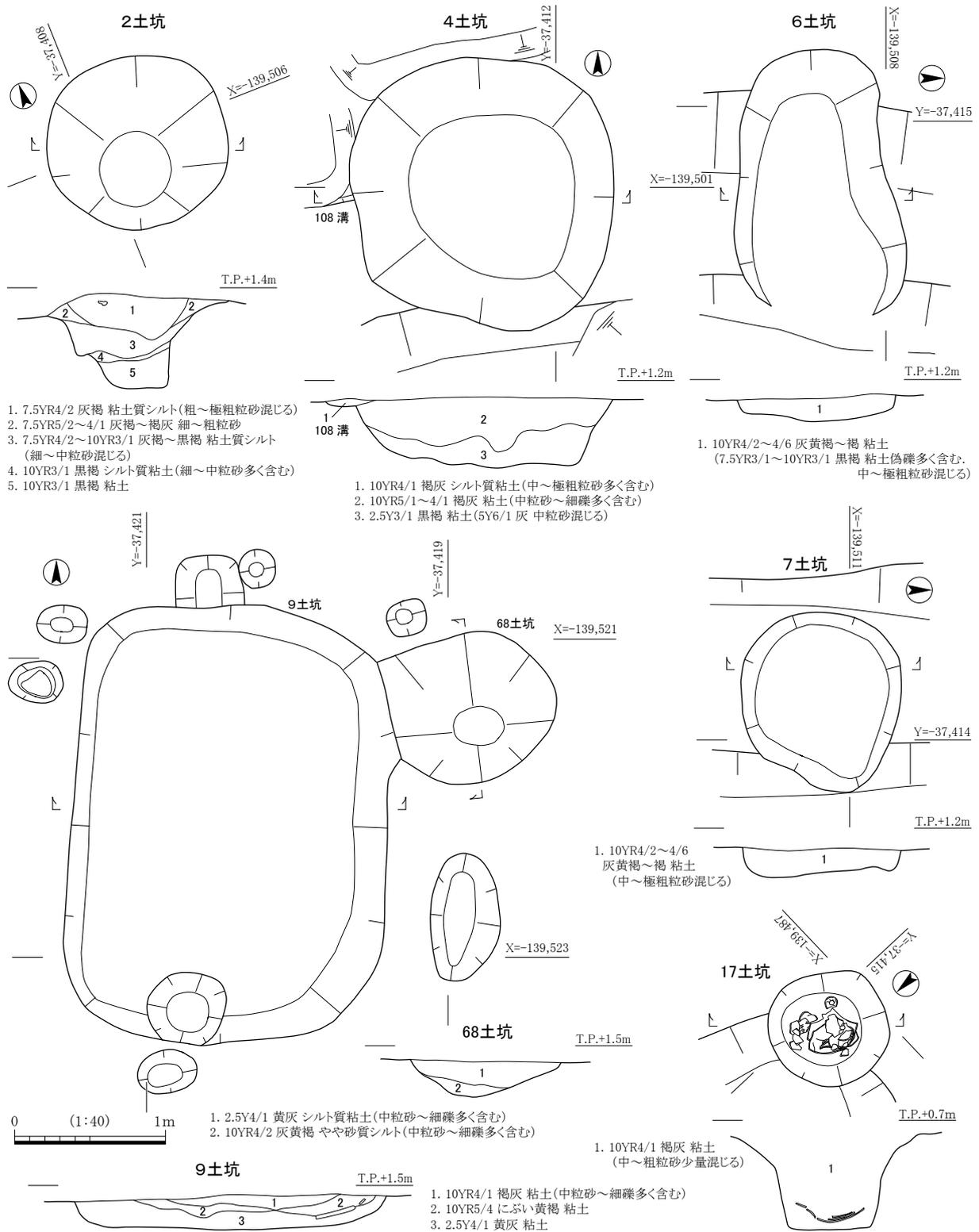


図 85 4区 土坑平面・断面(1)

短径約 0.9 ～ 1.1 m の東西に長いナスビ形を呈する。深さは 1 溝掘削後の面から 0.15 m を測る。

土師器皿と須恵器杯(556)が出土している。556 は 8 世紀。

7土坑 調査区の中央やや東寄り、6土坑の南側に位置する。1溝の西肩部と重複し、溝を切る。平面形は直径約 1.05 m の一部が歪んだ円形を呈する。深さは 1 溝掘削後の面から 0.18 m を測る。

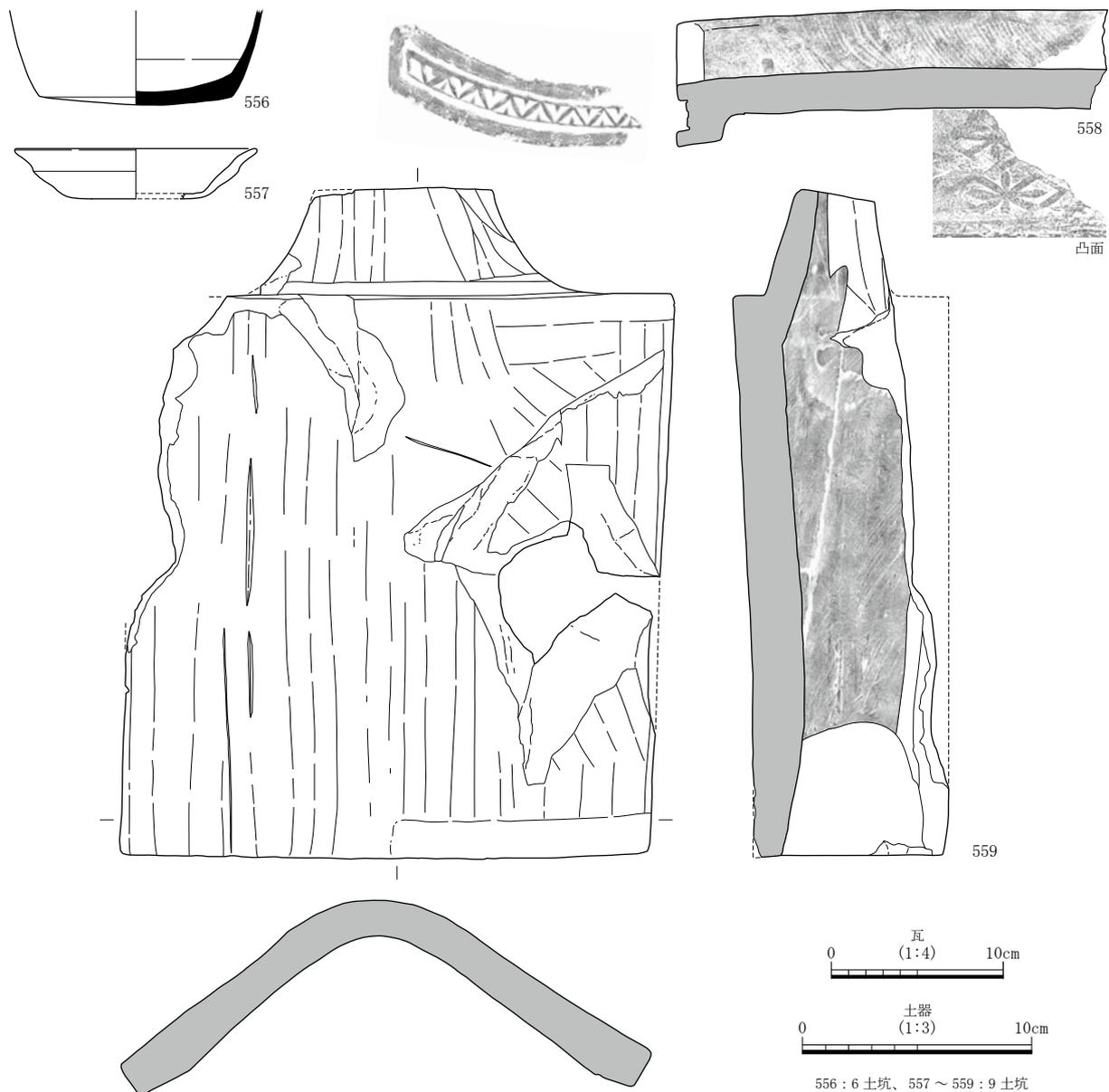


図 86 4区土坑出土遺物(1)

9土坑 調査区の南端部、8井戸の南側に位置する。土坑やピットと重複し、それらすべてを切る。8井戸同様に、周辺に広がる遺構の中ではもっとも新しい時期の遺構である。平面形は長辺 2.9 m、短辺 2.05 m の南北に長い長方形を呈する。深さは約 0.2 m である。

土師器皿(557)・羽釜、瓦器椀、瓦質土器足釜、須恵器甕、東播系須恵器片口鉢、白磁、瓦(558・559)などが出土している。557は15世紀、瓦器椀や東播系須恵器片口鉢は13世紀後半のものである。558は14世紀の幾何学文軒平瓦で、1溝出土の243・244と同範。凸面は顎裏面まで続くタテナデで仕上げるが、一部に菱形のタタキ痕が残る。また顎部には凹型台の痕跡が認められる。顎下面はヨコナデで、凹面は糸切りの痕跡が残る。559は雁振瓦。凸面は丁寧なナデで仕上げる。凹面には糸切りの痕跡が残る、玉縁と重なる部分は大きく面取りする。

17土坑 調査区北半の11溝内に位置する。11溝の底面で検出した。古墳時代のものであることが確実な遺構の一つである。平面形は直径約 0.8 m の円形で、深さは 0.65 m を測る。

土師器の甕(560)・高杯(561)、須恵器甕が出土した。1溝出土の須恵器や埴輪と同時期である。560

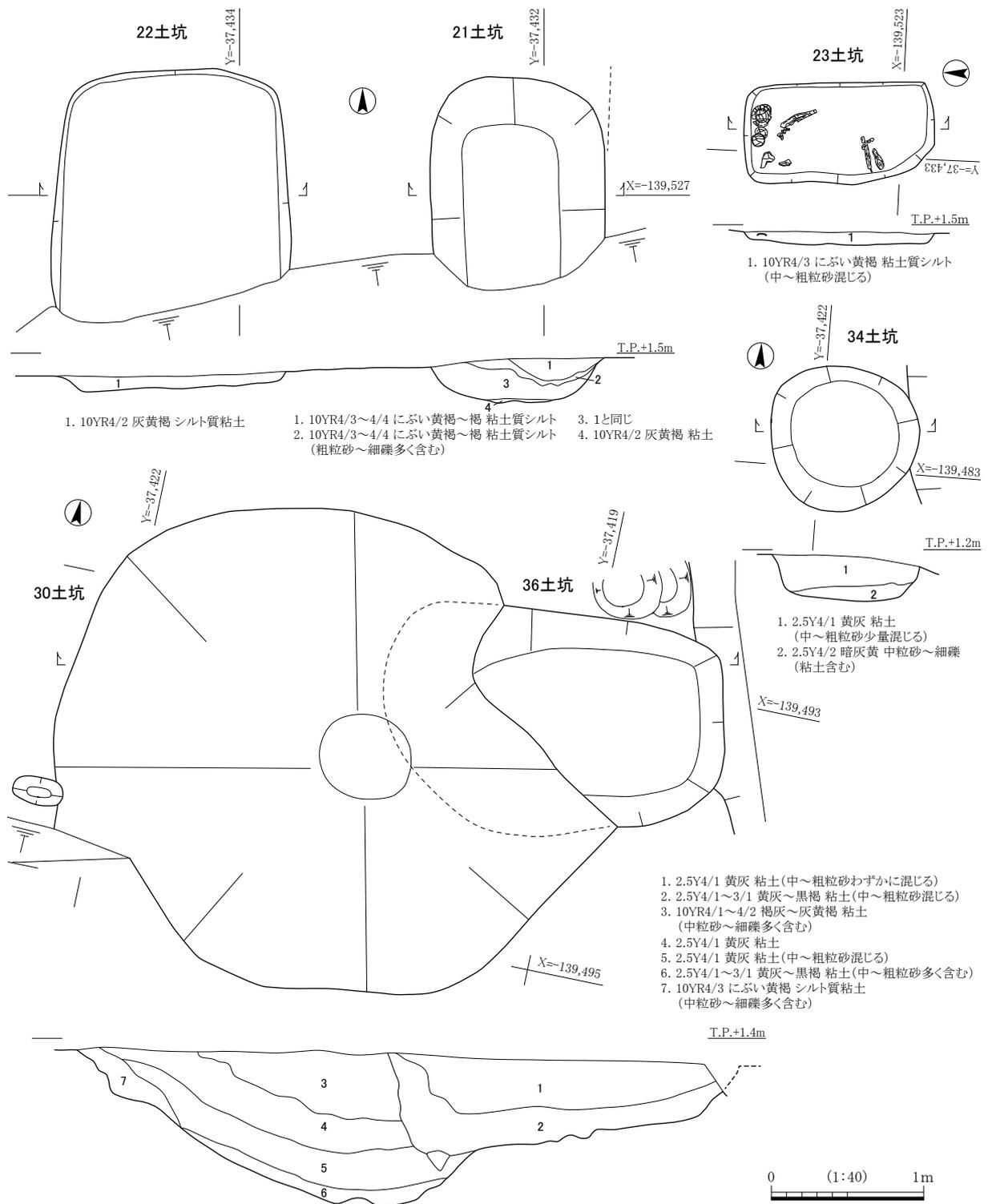


図87 4区土坑平面・断面(2)

は外面がタテ方向のハケで、内面には粘土の接合痕が明瞭に残る。口縁部はヨコナデにより外反し、端部が僅かに上を向く。高さ34.7cm、胴部最大径24.5cmを測る。561の外面にはナデの下に横位のハケ目が認められる。須恵器甕は体部片で、内面の当て具痕にはハケ目状の細かい刻みが認められる。

21土坑 調査区南西隅に位置する。南側が攪乱により失われているため全体規模は不明。長径1.4m以上、短径1.15mの南北に長い長方形気味の楕円形に復原できる。深さは0.3mを測る。

22土坑 調査区南西隅、上記21土坑の西側に近接する。21土坑と同じく南側が攪乱により失われている

ため全体規模は不明。長辺 1.6 m 以上、短辺 1.5 m の長方形に復原できる。深さは 0.1 m を測る。

23 土坑 調査区南西隅に位置する。平面形は長辺 1.25 m、短辺 0.65 m の南北に長い長方形を呈する。深さは浅く 0.08 m 程度である。人骨の一部と、北端にまとまって土師器皿が 6 枚出土している。居住域の中にあることから、いわゆる「屋敷墓」と呼ばれるような墓であったと考えている。

土師器皿（562～567）のほか、瓦器碗が 1 点出土している。その瓦器碗は内面のヘラミガキを密に施す 12 世紀後半のものである。土師器皿も同時期のもので、口縁端部を上方に細くつまみ気味にヨコナデする。なお、人骨は粉状に脆くなっており、取り上げることができなかった。

30 土坑 調査区北半中央に位置し、東半が 36 土坑と重複する。平面図ではこの 30 土坑が切っているような表現となっているが、実際には 36 土坑に切られている。平面形は直径 3.2 m 前後のやや歪んだ円形で、深さは 1.0 m を測る。

土師器皿（568）と瓦器碗の小片が出土している。568 は 13 世紀代のものである。

34 土坑 調査区北端中央、11 溝の西肩部に位置する。平面形は直径 0.97 m の円形で、深さは 0.3 m を測る。

36 土坑 上記 30 土坑の東側に重複し、30 土坑を切る。平面形は楕円形で、長径は約 2.3 m に復原できる。短径 1.3 m で、深さは 0.65 m を測る。

土師器と瓦の小片が出土している。

37 土坑 調査区南端部、10 溝の南側に位置する。北端の一部が 10 溝と重複し、溝に切られる。平面形

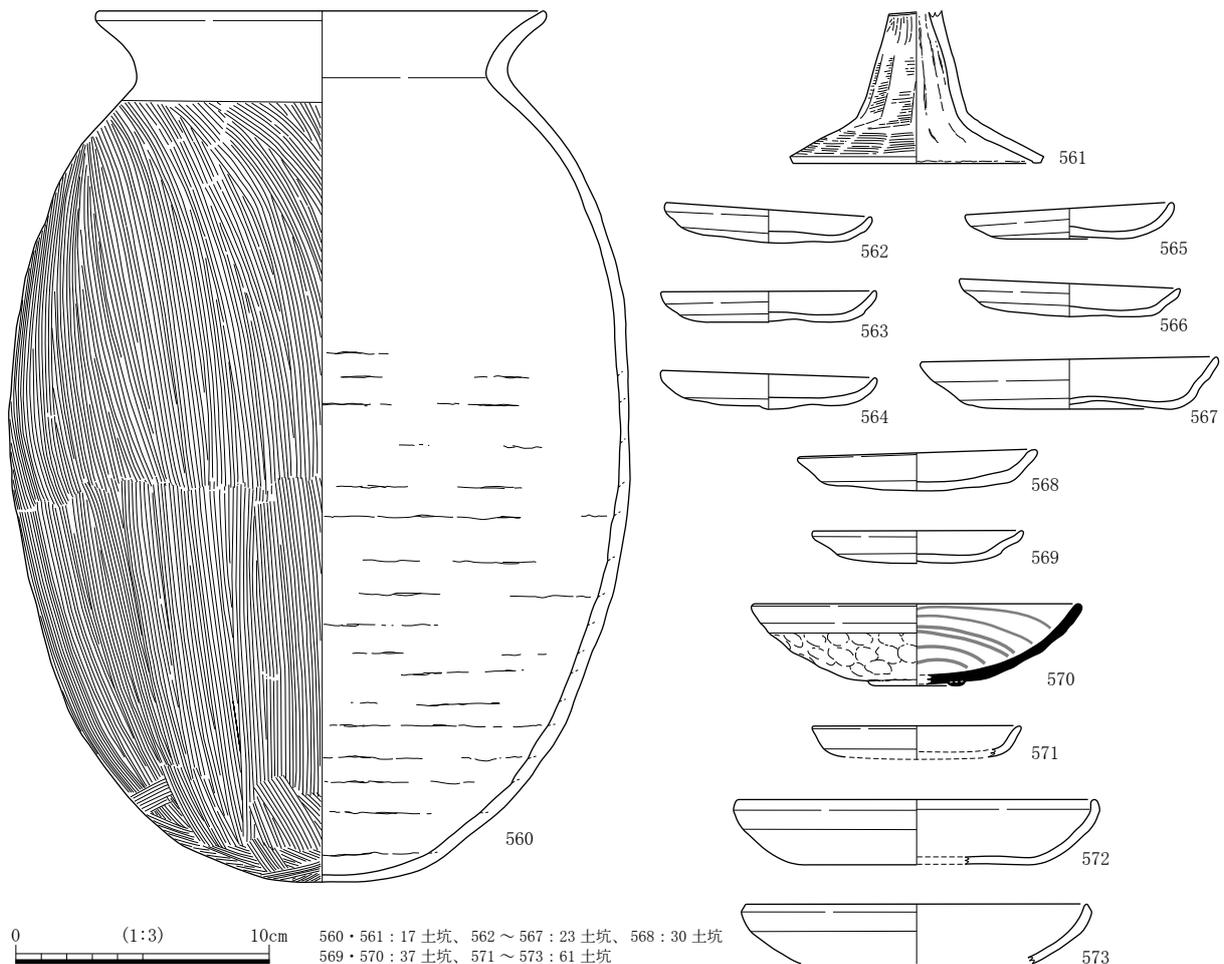
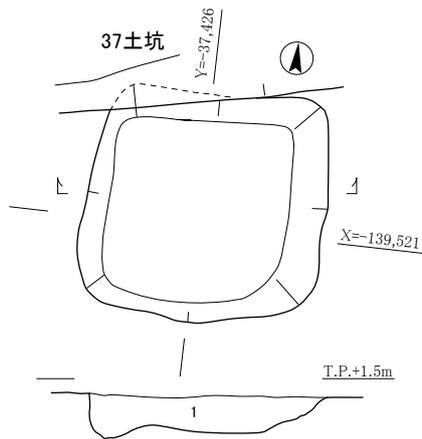
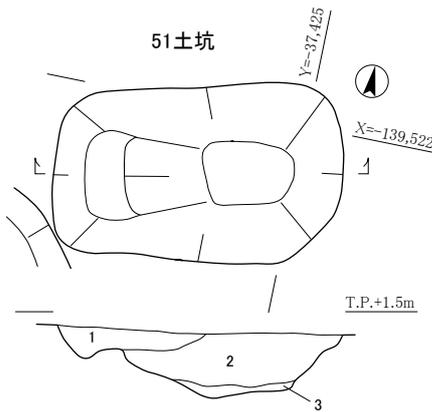


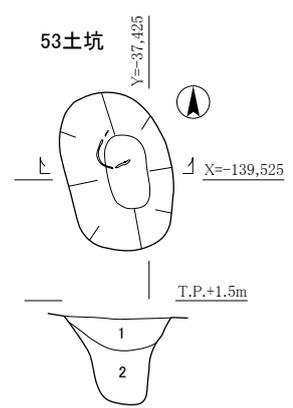
図 88 4 区 土坑出土遺物（2）



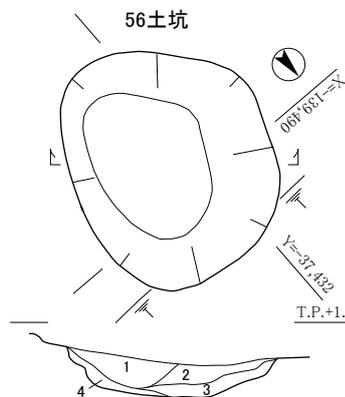
1. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質粘土(粗粒砂～細礫多く含む)



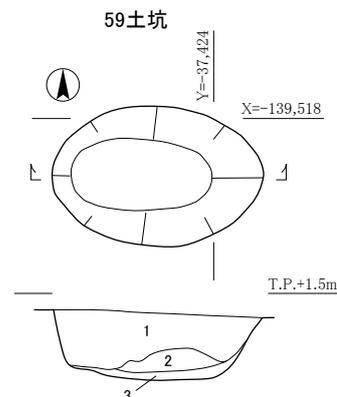
1. 10YR3/2 黒褐 粘土
2. 10YR4/2 灰黄褐 粘土(中粒砂～細礫多く含む)
3. 10YR3/1 黒褐 粘土



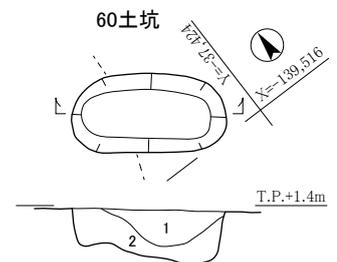
1. 10YR3/2 黒褐 粘土(粗粒砂～細礫少し混じる)
2. 10YR3/2 黒褐 粘土(粗粒砂～細礫多く含む)



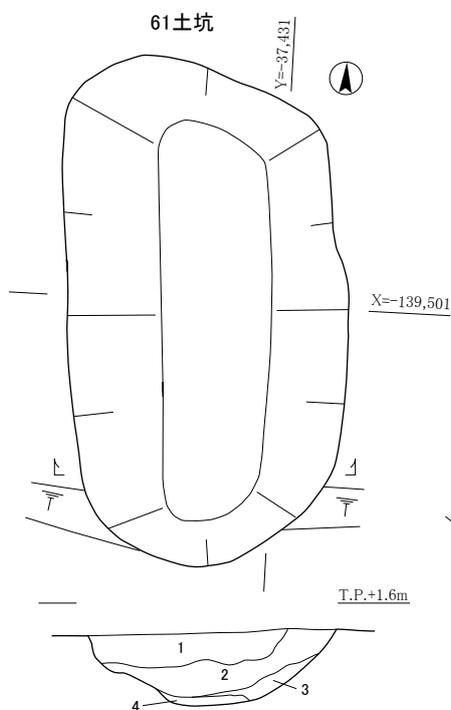
1. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト質粘土(中粒砂～細礫多く含む)
2. 2.5Y5/1 黄灰 粘土(中粒砂～細礫多く含む)
3. 2.5Y4/1 黄灰 粘土(中粒砂～細礫多く含む)
4. 中粒砂～細礫



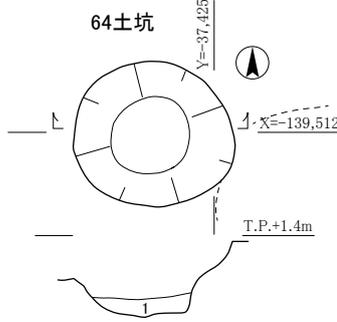
1. 2.5Y5/1～5/2 黄灰～暗灰黄 粘土
2. 10YR4/4 褐 粘土(中粒砂混じる)
3. 10YR3/1 黒褐 粘土(中粒砂～細礫多く含む)



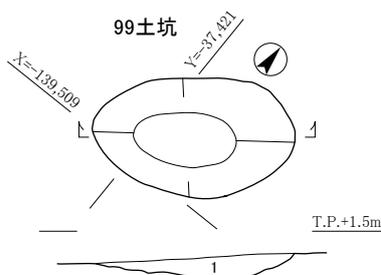
1. 2.5Y5/1～5/2 黄灰～暗灰黄 粘土
2. 10YR3/1 黒褐 粘土(中粒砂～細礫多く含む)



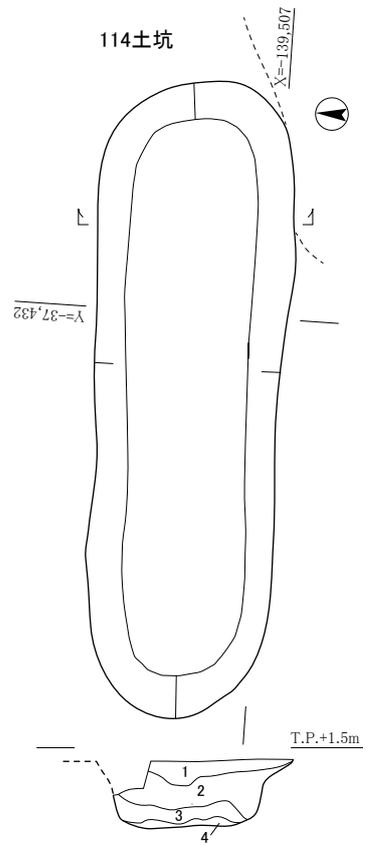
1. 10YR4/3 にぶい黄褐 粘土(中粒砂～小礫多く含む)
2. 10YR5/2 灰黄褐 粘土
3. 中粒砂～細礫
4. 10YR4/1 褐灰 粘土



1. 10YR4/2 灰黄褐 粘土(粗粒砂～小礫多く含む)



1. 10YR4/2～4/3 灰黄褐～にぶい黄褐 シルト質粘土(中粒砂～小礫多く含む,炭混じる)



1. 10YR5/6 黄褐 シルト質粘土(中～極粗粒砂混じる)
2. 10YR3/2 黒褐 粘土(中～極粗粒砂混じる)
3. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質粘土(中粒砂～細礫多く含む)
4. 中粒砂～小礫(2.5Y4/1 黄灰 シルト混じる)

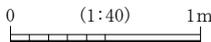


図 89 4区土坑平面・断面(3)

は一辺 1.2 ～ 1.25 m の方形を呈する。深さは 0.2 m である。

土師器皿 (569)・羽釜、瓦器椀 (570)、瓦質土器足釜、東播系須恵器甕・片口鉢などが出土しているが、瓦は含まれていない。569・570 はともに 13 世紀後半のものである。570 は和泉型。

51 土坑 調査区南端部、上記 37 土坑の南側に近接する。平面形は長辺 1.5 m、短辺 0.85 ～ 0.95 m の東西に長い長方形を呈する。深さは東側が一段深くなり、0.35 m を測る。

土師器皿、瓦器椀の小片が出土している。

53 土坑 調査区南端部、上記 51 土坑の南側に近接する。平面形は長径 0.85 m、短径 0.55 m の南北に長い楕円形を呈する。深さは 0.45 m である。

56 土坑 調査区北西隅に位置する。平面形は台形気味の歪んだ楕円形を呈する。最大径は 1.3 m、短径 1.05 m を測る。深さは 0.2 m である。

59 土坑 調査区南半中央、8 井戸の西側に位置する。平面形は長径 1.1 m、短径 0.73 m の東西に長い楕円形を呈する。深さは 0.35 m である。

60 土坑 調査区南半中央、上記 59 土坑の北側に近接する。平面形は長径 0.8 m、短径 0.4 m の南東—北西方向に長い楕円形を呈する。深さは 0.3 m である。

土師器皿、瓦器椀、東播系須恵器片口鉢の小片が出土している。瓦器椀は 13 世紀後半以降のものである。

61 土坑 調査区西端中央に位置する。平面形は南北に長い長方形気味の楕円形で、長径 2.7 m、短径 1.4 ～ 1.5 m を測る。深さは 0.4 m である。

土師器皿 (571 ～ 573) が出土している。572 のように上方へつまみ上げ気味にココナデする 12 世紀後半のものと、573 のように口縁端部外面を面取りする 13 世紀前半のものが混在する。

64 土坑 調査区の南半中央、やや南西寄りに位置する。平面形は直径 0.75 ～ 0.85 m の円形を呈する。深さは 0.4 m である。

68 土坑 調査区の南端中央に位置する。9 土坑の東側に一部重複し、9 土坑に切られる。平面形は長径 1.1 m 以上、短辺 1.0 m の東西に僅かに長い楕円形を呈する。深さは 0.23 m である。

土師器皿・羽釜、瓦器椀、須恵器、瓦の小片が出土している。瓦器椀は 12 世紀後半のものであるが、土師器皿は 14 世紀以降のものである。

92 土坑 調査区の南東部、8 井戸の南側に位置する。一部が 95 土坑と重複し、95 土坑に切られる。平面形は南北約 2.6 m、東西約 1.8 m のナスビ形を呈する。深さは平面規模の割に浅く 0.1 m 弱である。

土師器皿、瓦器椀の小片が出土している。瓦器椀は 13 世紀のものである。

95 土坑 調査区の南東部、上記 92 土坑の南東側に位置する。一部が 92 土坑と重複し、92 土坑を切る。平面形は長辺約 2.2 m、短辺約 1.2 m の南北に長い長方形を呈するが、北辺はやや丸くなる。深さは 0.4 m で、壁面はほぼ垂直である。

土師器皿・羽釜、瓦器椀、須恵器の小片のほか、円筒埴輪片も出土している。瓦器椀は 13 世紀前半のものである。

99 土坑 調査区中央に位置する。この周辺は南端部に比べ遺構が稀薄である。平面形は長径 1.05 m、短径 0.64 m の楕円形を呈する。深さは 0.1 m 強である。

114 土坑 調査区西端中央、61 土坑の南側に位置する。平面形は東西に長い楕円形で、長径 3.35 m、短径 0.95 ～ 1.05 m を測る。深さは 0.35 m である。

1 溝や 11 溝の西側からは井戸や土坑とともに多くのピットを検出している。特に北半部と、南半部の 10

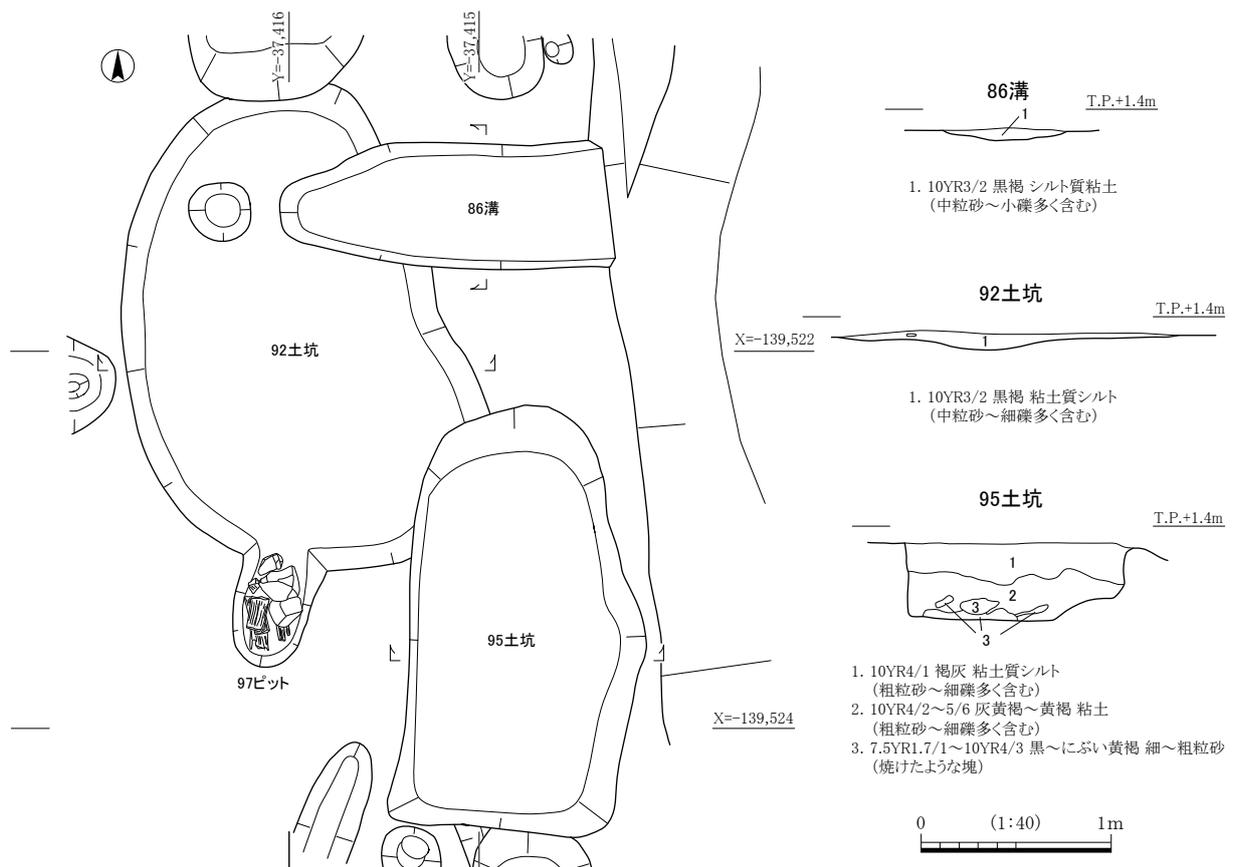


図 90 4区 溝・土坑平面・断面

溝よりも南側に集中しており、中央部はやや少ない。柱穴底に柱の沈みを防ぐための礎石や礎板を据えているものもあることから、簡易な掘立柱建物が建っていたと思われるが、3区からのびる塀2の北端柱穴以外は、建物としてまとまるような並びになっていなかった。以下に遺存状態のよいものについて報告する。

62ピット 調査区南端中央に位置する。平面形は長径 0.35 m、短径 0.3 mの楕円形で、深さは 0.18 mを測る。底に礎石を据える。

78ピット 調査区南端中央、62ピットの北側に位置する。平面形は長径 0.5 m、短径 0.4 mの楕円形で、深さは 0.27 mを測る。底に礎板を据える。

土師器皿、瓦器碗(582)の小片が出土している。582は13世紀前半の大和型である。

89ピット 調査区南端やや東寄りに位置する。95土坑の南側に接し、77溝と重複する。溝の中に完全に収まっていたことから、遺構に気付かず溝として掘削してしまった。このため、溝上面での重複関係は検証できていないが、77溝が古墳時代の遺構であることから、溝を切っていたと思われる。平面形は直径 0.6 mの円形で、深さは 0.32 mを測る。

土師器皿と埴輪の小片が出土している。

91ピット 調査区南端中央、92土坑の西側に位置する。平面形は長径 0.53 m、短径 0.35 mの長方形気味の楕円形で、深さは 0.18 mを測る。底に礎板を据える。

土師器皿、瓦器碗の小片が出土している。

97ピット 調査区南端やや東寄りに位置する。92土坑の南側に重複し、土坑に切られる。平面形は長径約 0.7 mの楕円形に復原できる。短径は 0.4 mで、深さは 0.22 mを測る。数点の板材や石が廃棄されたような状態で出土した。柱が据えられていたような状況ではなく、礎板や礎石とは考え難い。

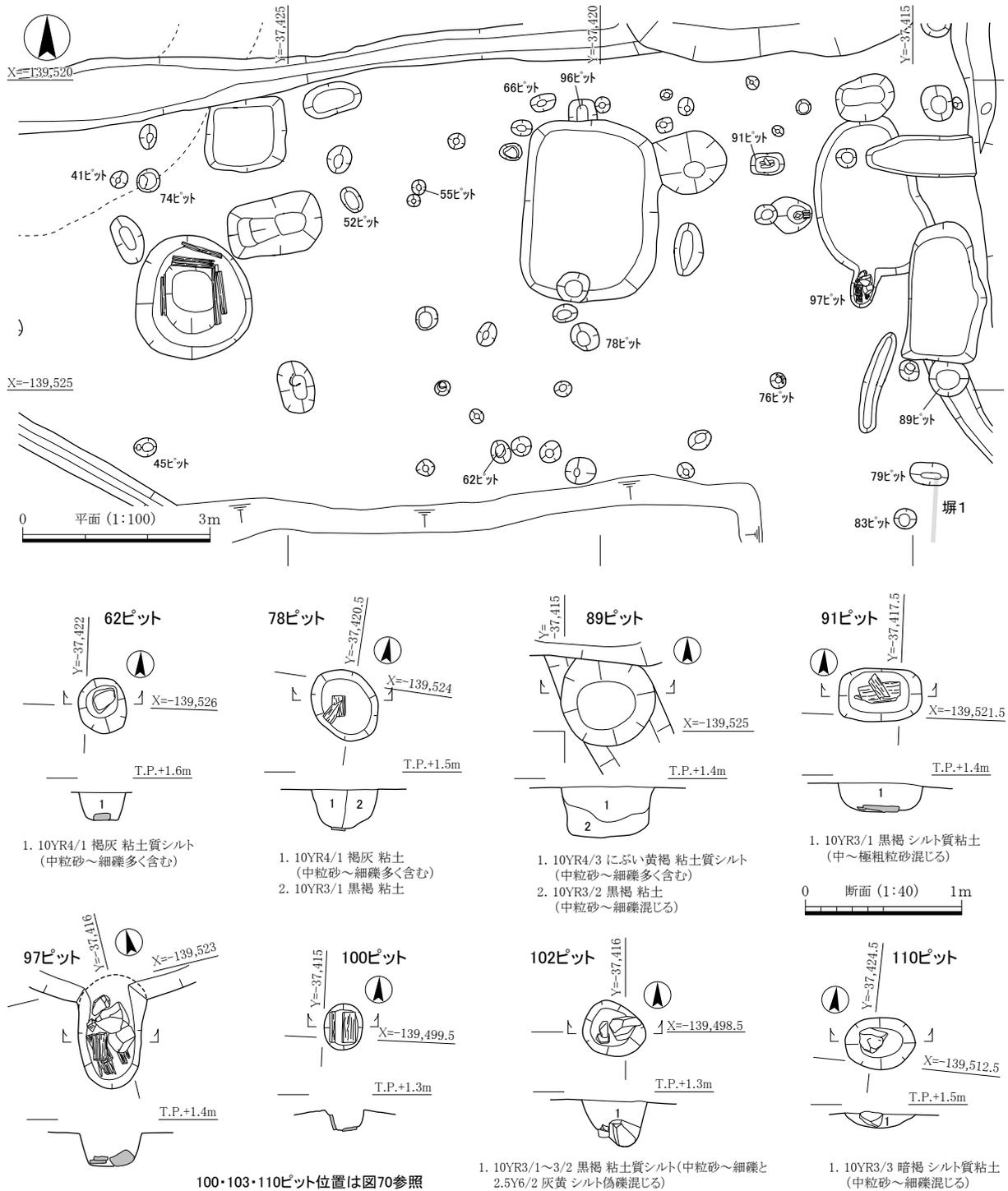


図91 4区ピット平面・断面

13世紀の瓦質土器鉢(587)が出土している。外面は横位のナデ。

100ピット 調査区中央やや東寄りに位置する。平面形は長径0.3m、短径0.25mの楕円形で、深さは0.13mを測る。底に礎板を据えるが、壁面にも板を立てかけるように据えている。

102ピット 調査区中央やや東寄り、100ピットの北西側に位置する。平面形は長径0.4m、短径0.34mの楕円形で、深さは0.3mを測る。底に礎石を据えるが、石の上面は水平にはなっておらず、この上に柱がのっていたのかは疑問である。

102ピットから遺物は出土していないが、西側に近接する103ピットからは、13世紀の土師器皿(586)

が出土している。口縁端部外面を面取りする。

110ピット 調査区のほぼ中央、64土坑の東側に近接する。平面形は長径0.45m、短径0.33mの楕円形で、深さは0.1mを測る。底に礎石を据える。

土師器の小片が3点出土している。

このほか遺構図を載せていないが、調査区南端部に位置する41ピットからは瓦質土器鉢(588)が出土している。内外面は横位のヘラミガキで仕上げる。13世紀後半。45・52・66・74・83ピットからは土師器皿(574～577・583)が出土している。いずれも12世紀後半から13世紀前半のものである。55ピットからは土師器皿(578・579)と瓦器椀(580)が出土している。580は楠葉型で、内面のヘラミガキは粗いが、外面上半にもヘラミガキが認められる。13世紀前葉か。土師器皿は若干古いか。96ピットからも土師器皿(584)と瓦器椀(585)が出土しているが、こちらは13世紀前半のものである。585は和泉型。76ピットからは12世紀後半の瓦器椀(581)が出土している。和泉型で、外面にもヘラミガキを施す。

基盤層 遺構の基盤となる層は、砂礫層であったり、粘土質の地層であったり、また同じ粘土質の地層であっても土色に違いが認められたりと、調査区の場所によってその状況が大きく異なっていた。特に調査区西半部では複雑に地層が堆積しており、土質・土色の違いが溝状に平面検出できる箇所があった(図70破線部)。例えば西壁に沿った箇所や、南半部の24井戸を方形に囲むようにして検出した箇所などである。今回の調査では、9分割した調査区のうちこの4区を最初に調査したため、この時にはまだ遺構面以下の地層の状況を完全に把握できておらず、この溝状の部分を遺構と誤認して掘削してしまった。特に後者の方形にめ

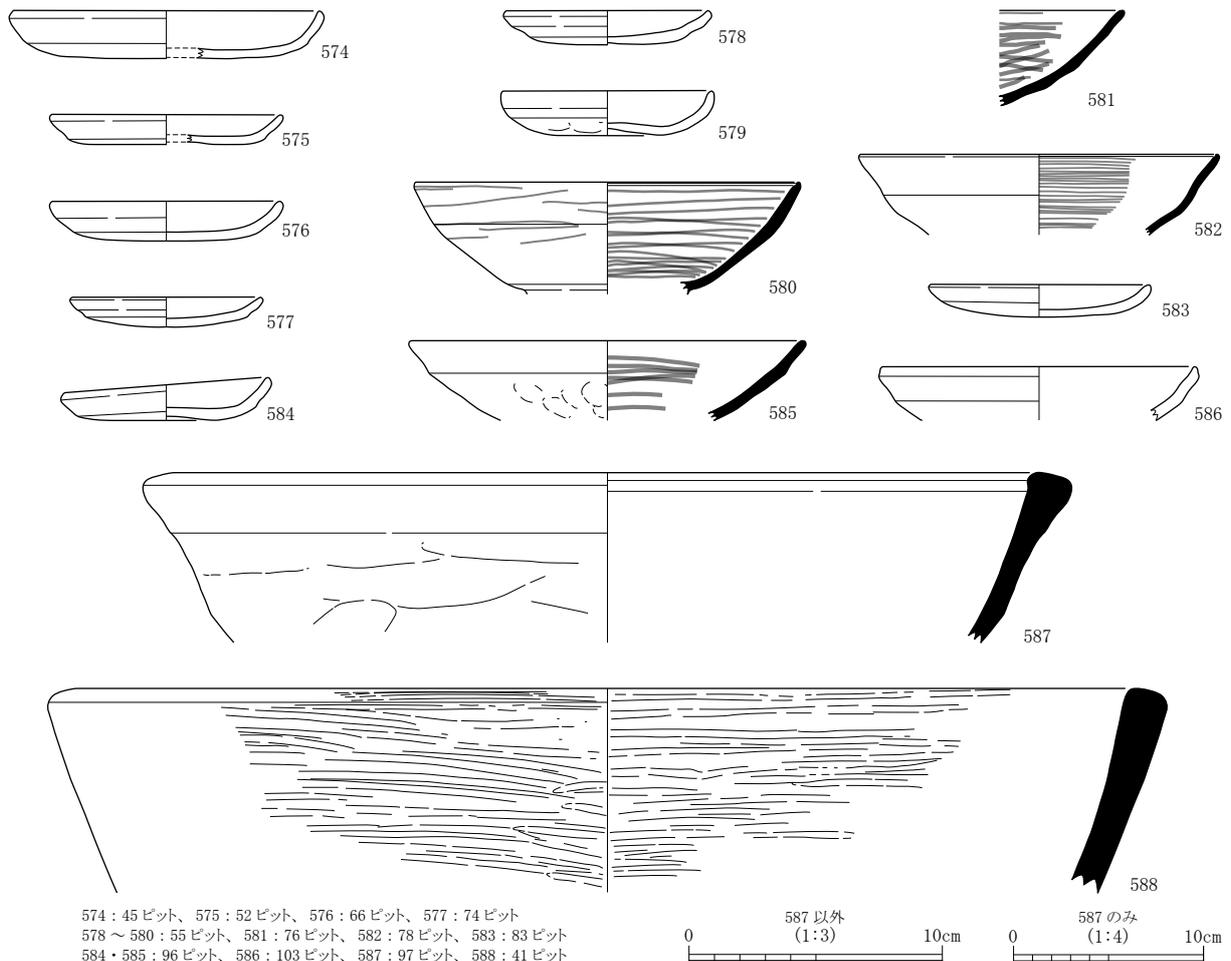


図92 4区ピット出土遺物

ぐる箇所については、通常の遺構埋土のような乱れた堆積ではなかったことから、検出した段階から遺構とするのかを躊躇したが、方形にめぐっているその形状が古墳や方形周溝墓のようにみえたことから、誤って溝として掘削し、空中写真測量や全景写真撮影も行なっていた。またこの北側でも、東西方向の溝と誤認して掘削してしまった箇所が数条ある。ただし北側に位置する5区の調査では同様の溝状にのびる土質の違いを検出したが、こちらはその輪郭が途中から不明瞭となり、完全に520溝などの遺構が掘り込まれた基盤層となっていることが確認できた。これにより、4区西半の溝としていた箇所についても、後になって実際には遺構ではなかったと判明した。

空中写真測量や写真撮影の段階では白線を引き遺構としているが、調査段階での誤認であり、遺構ではないことを明記しておく。

第6節 5区の成果

4区の北側に位置する。当初計画では2区から5・6区まで連続する調査区であったが、調査区境に使用中のガス管が埋設されていることが判明したため、急遽4・6区とは隔てた独立した調査区となった。調査面積は481㎡である。

溝、井戸、土坑、ピットなどを検出した。

511 溝 調査区北半に位置する。幅が広い東西方向の溝で、「流路」あるいは「水路」と呼ぶべき遺構である。幅は東端部で6.8mを測るが、西に向かって徐々に広がり、7.5m以上となる。これは2条の溝が重なっているためであり、南裾部の溝と北裾部の溝に分けることができる。南裾部の溝は、調査区東半部が平面長方形にさらに一段深く掘り込まれている。横断面の形状は逆台形で、その部分の溝幅は、溝底で約1.4～1.5mを測る。深さは方形の掘り込み部以外は0.6m前後であるが、掘り込み部は約0.85mとなる。この溝底と、後述する520溝の底面が同じ高さで続いており、一連の溝として機能していたことがうかがえる。埋土は砂礫や植物遺体が混じる黒褐色粘土や灰黄褐～にぶい黄褐色の粘土質シルトである。

北裾部の溝は、傾斜がなだらかなU字状の溝で、調査区中心付近では幅約2.6m、深さ0.9m前後であるが、東半部は底がさらに一段深く掘り込まれている。6区ではこの延長部を552溝としている。その掘り込み部分の幅は0.5～1.2m程度で、深さは深い箇所では約1.1mになる。この最下部の埋土は黒褐色の粘土である。両者の重複関係は、中央付近の断面観察によって、北側の溝が南側の溝埋土を切っていることが確認できた。

土師器皿(590～596)・羽釜、瓦器椀(602～607)・皿、瓦質土器足釜・羽釜(608・609)・播鉢(611)・火鉢、東播系須恵器片口鉢、須恵器甕・壺、陶器碗(600)・播鉢(610)・甕、青磁皿(589)、瓦(613～616)、木製品など多くの遺物が出土している。瓦器椀など12世紀代のものもみられるが、14・15世紀代のものまで含んでおり、時期幅がある。589は12世紀後半の所産。同安窯系のもので、底面に「七」の墨書がある。土師器皿は594・592のような13・14世紀代と思われる古手のものも僅かに含むが、大半は15世紀代のものである。600は14世紀前半頃の天目茶碗。黒褐色の釉の下に、茶褐色の化粧掛けが認められる。高台裏には釉は垂れ、多くの砂粒が付着する。瓦器椀は土師器皿ほど新しくなく、どれも12世紀中葉から後葉に収まる。604・606は口縁端部に内傾する面をもち、604には浅い沈線が認められるが、ともにヘラミガキは和泉型のように太く雑で、見込みの暗文は平行線である。602・603は大和型、605・607は和泉型で、603は外面のヘラミガキが高台付近まで及ぶ。610は15世紀前半の備前焼。611は14世紀末から15世紀前半の所産。613・614は72と同范の蓮華唐草文軒平瓦。13世紀後半か

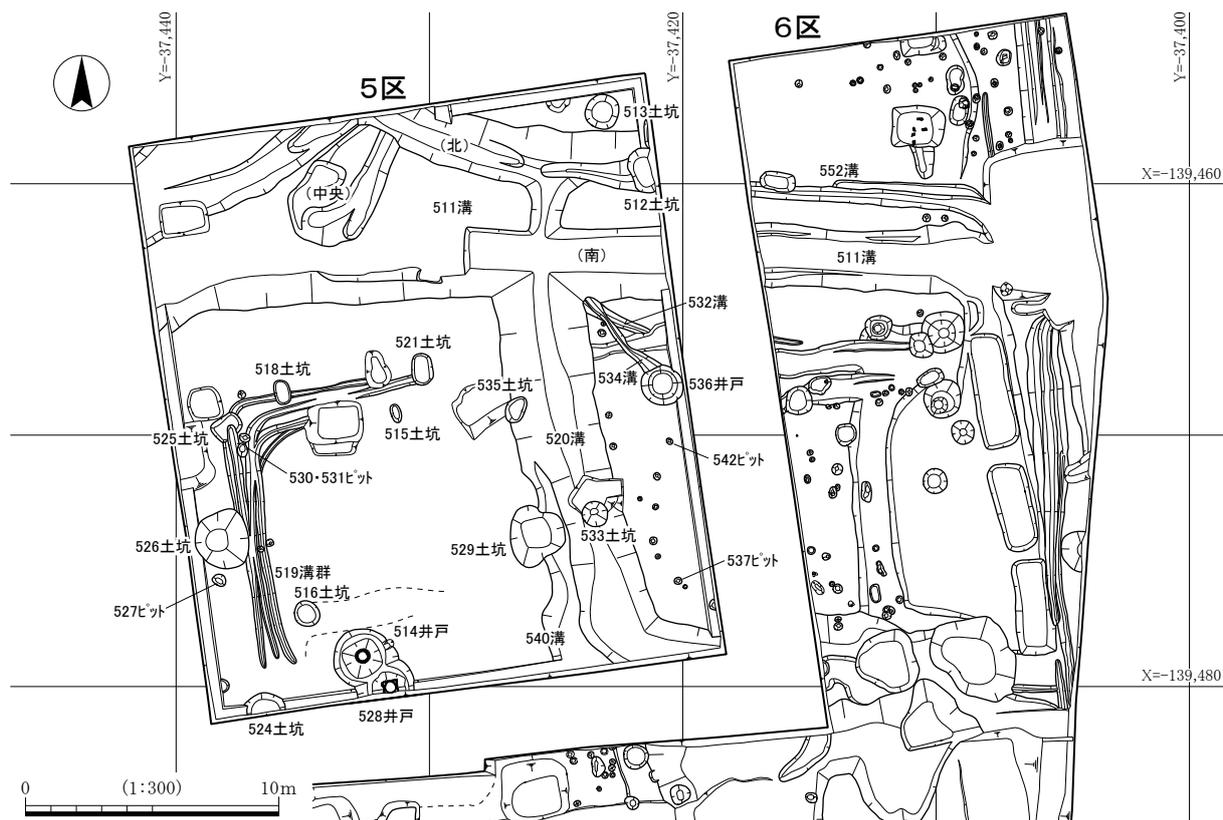


図93 5区 検出遺構全体平面

ら14世紀前半。瓦当は、瓦当貼り付け技法により接合。615は15世紀代のもので、中心飾りを半截菊花文とする。616は鬼瓦である。

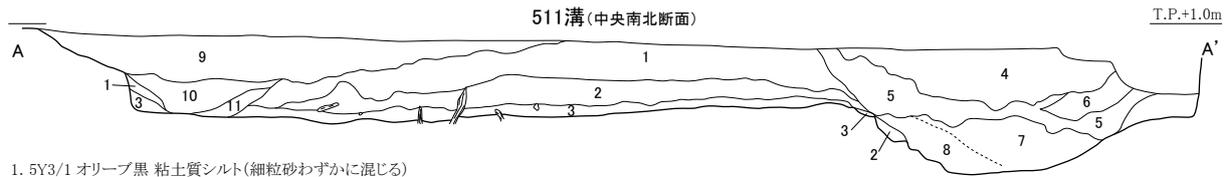
北裾の溝からは土師器皿(597・598)、瓦器椀、瓦質土器羽釜・鍋(612)、陶器壺(599)、瓦、木製品(617)などが、南裾の溝からは土師器皿、瓦器椀、瓦質土器羽釜・播鉢・火鉢、陶器播鉢、青磁皿(601)、瓦、五輪塔(618)、鹿角などが出土しているが、両者ともに15世紀代のものが含まれており、特に時期差は認められない。597・598は共に15世紀代。599は13世紀代の瀬戸美濃系灰釉陶器の小壺。601は12世紀後半の所産。617は小型の曲物の底板。618は五輪塔の水輪で、下面には地輪と組むための枘を設ける。直径は26.7～27.3cmである。

519 溝群 調査区の南西部に位置する。幅0.2～0.4m程度の細い溝が4条ほどまとまったもので、調査区西壁際では南北方向にのび、511溝の南側で東へ直角に屈曲する。深さは0.05m足らずのものから0.15程度のものでまちまちである。埋土は中粒砂～中礫を多く含む灰黄褐色粘土質シルトである。重複する土坑やピットに切られる。

土師器皿・羽釜、瓦器椀が出土している。瓦器椀は13世紀前半のものである。

520 溝 調査区東半に位置する。4・6区から続く溝で、これも「流路」あるいは「水路」と呼ぶべき規模の大きな遺構である。4区と6区との調査区境で西に屈曲した11溝が、5区南東隅で再び南北方向に向きを変えて、前記511溝に直角に合流する。5区調査時点では、11溝との関係が明らかでなかったため、520溝に番号を振り替えたが、この溝が11溝の本流であったと考えられる。幅は約3.5m、深さは約0.6～0.7mで、南半の西肩部には後述する540溝が重複する。埋土は砂粒が混じる褐灰～灰黄褐色などの粘土や粘土質シルトである。

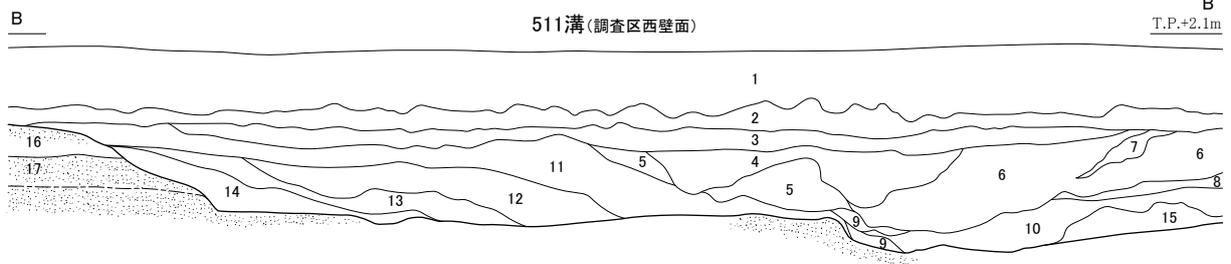
土師器皿(624・626)・羽釜(633・634・636)・鍋・播鉢、瓦器椀(623)、瓦質土器足釜・羽釜



1. 5Y3/1 オリーブ黒 粘土質シルト(細粒砂わずかに混じる)
2. 7.5YR3/1 黒褐 粘土
3. 10YR3/1 黒褐 粘土質シルト(中～粗粒砂多く含む)
4. 5Y5/2～4/2 灰オリーブ 粘土(しまりあり)
5. 10YR3/1 黒褐 シルト質粘土(細～中粒砂多く含む・植物遺体混じる)
6. 2.5Y3/1 黒褐 粘土(細～中粒砂わずかに混じる)
7. 6に同じ

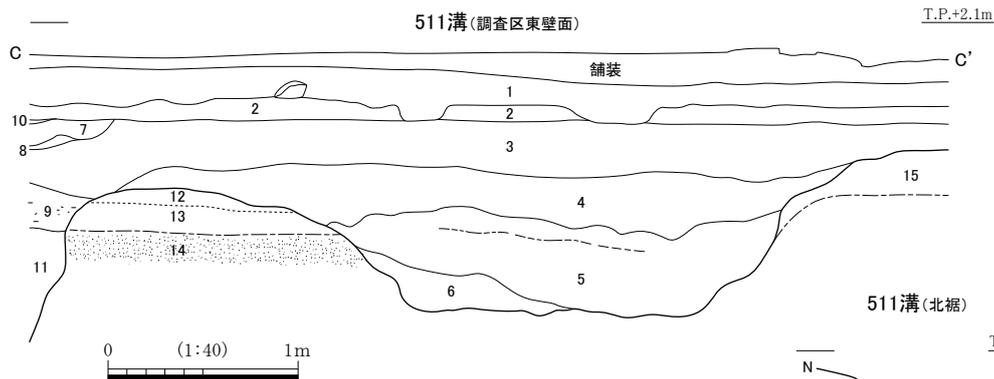
8. 2.5Y3/1 黒褐 粘土(細～中粒砂わずかに混じる・植物遺体混じる)
9. 10YR3/1～2.5Y3/1 黒褐 シルト(中～粗粒砂多く含む)
10. 10YR3/2 黒褐 粘土質シルト(植物遺体多く含む)
11. 10YR3/1 黒褐 シルト質粘土(植物遺体混じる)

511溝(中央南北断面)のみ
0 (1:50) 1m

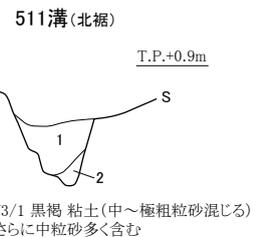


1. 現代盛土
2. 2.5Y4/2 暗灰黄 砂質シルト(細～粗粒砂多く含む)【旧表土】
3. 10YR4/3～5/3 にぶい黄褐 粘土質シルト(細～中粒砂混じる)
4. 2.5Y4/2～5Y4/1 暗灰黄～灰 粘土質シルト(細～粗粒砂混じる)
5. 10YR4/2 灰黄褐 シルト(中粒砂～細礫非常に多く含む)
6. 2.5Y5/3～5Y5/2 黄褐～灰オリーブ シルト質粘土
7. 2.5Y4/3 オリーブ褐 粘土質シルト(細～中粒砂多く含む)
8. 2.5Y5/2～4/2 暗灰黄 粘土質シルト(中粒砂～中礫多く含む)
9. 中粒砂～細礫

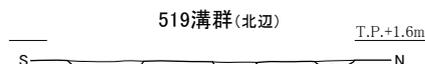
10. 2.5Y4/1～4/2 黄灰～暗灰黄 シルト質粘土(下面は粘土・細～中粒砂混じる)
11. 2.5Y4/2～5Y4/2 暗灰黄～灰オリーブ 粘土質シルト(中粒砂～細礫混じる)
12. 2.5Y4/2 暗灰黄 粘土質シルト(中粒砂～細礫多く含む)
13. 2.5Y4/2～4/3 暗灰黄～オリーブ褐 粘土質シルト(中粒砂～細礫混じる)
14. 2.5Y4/2～3/2 暗灰黄～黒褐 シルト質粘土(中粒砂～細礫多く含む)
15. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト質粘土
16. 10YR4/3～3/3 にぶい黄褐～暗褐 シルト(細～粗粒砂多く含む)【基盤層】
17. 中粒砂～中礫【基盤層】



1. 現代盛土
2. 2.5Y4/2 暗灰黄 砂質シルト(中粒砂～細礫多く含む)【旧表土】
3. 10YR4/2～4/3 灰黄褐～にぶい黄褐 シルト(中粒砂～細礫多く含む)【1層】
4. 10YR4/2～4/3 灰黄褐～にぶい黄褐 粘土質シルト(中粒砂～細礫と2.5Y6/2 灰黄 粘土偽混じる。3よりも粘性強い)【511溝】
5. 10YR3/1 黒褐 粘土(中粒砂と植物遺体混じる。上部は10YR3/2 黒褐)【511溝】
6. 2.5Y3/2 黒褐 粘土(5Y6/2 灰オリーブ 粘土偽礫と中粒砂・植物遺体混じる)【511溝】
7. 10YR6/3 にぶい黄橙 粘土(細～中粒砂混じる。上層には中粒砂～中礫)
8. 10YR5/2 灰黄褐 シルト(中粒砂～細礫非常に多く含む)
9. 4に同じ(北寄りには中粒砂～細礫多く含む)【512土坑】
10. 2.5Y4/2～4/3 暗灰黄～オリーブ褐 粘土質シルト(中～粗粒砂混じる)
11. 2.5Y4/1～3/1 黄灰～黒褐 粘土(中粒砂～中礫と植物遺体多く含む)【512土坑】
12. 10YR5/4 にぶい黄褐 粘土(13が酸化したためか)【基盤層】
13. 7.5YR4/1 褐灰 粘土【基盤層】
14. 2.5GY6/1 オリーブ灰 細粒砂～細礫【基盤層】
15. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト質粘土(しまりあり・細～中粒砂わずかに混じる)【基盤層】



1. 2.5Y3/1 黒褐 粘土(中～極粗粒砂混じる)
2. 1にさらに中粒砂多く含む



- 【519溝群】
1. 10YR5/2～4/2 灰黄褐 粘土質シルト(中粒砂～中礫多く含む)

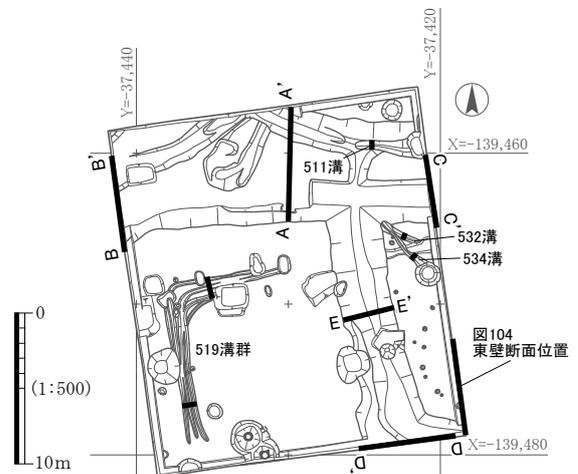


図94 5区溝断面(1)

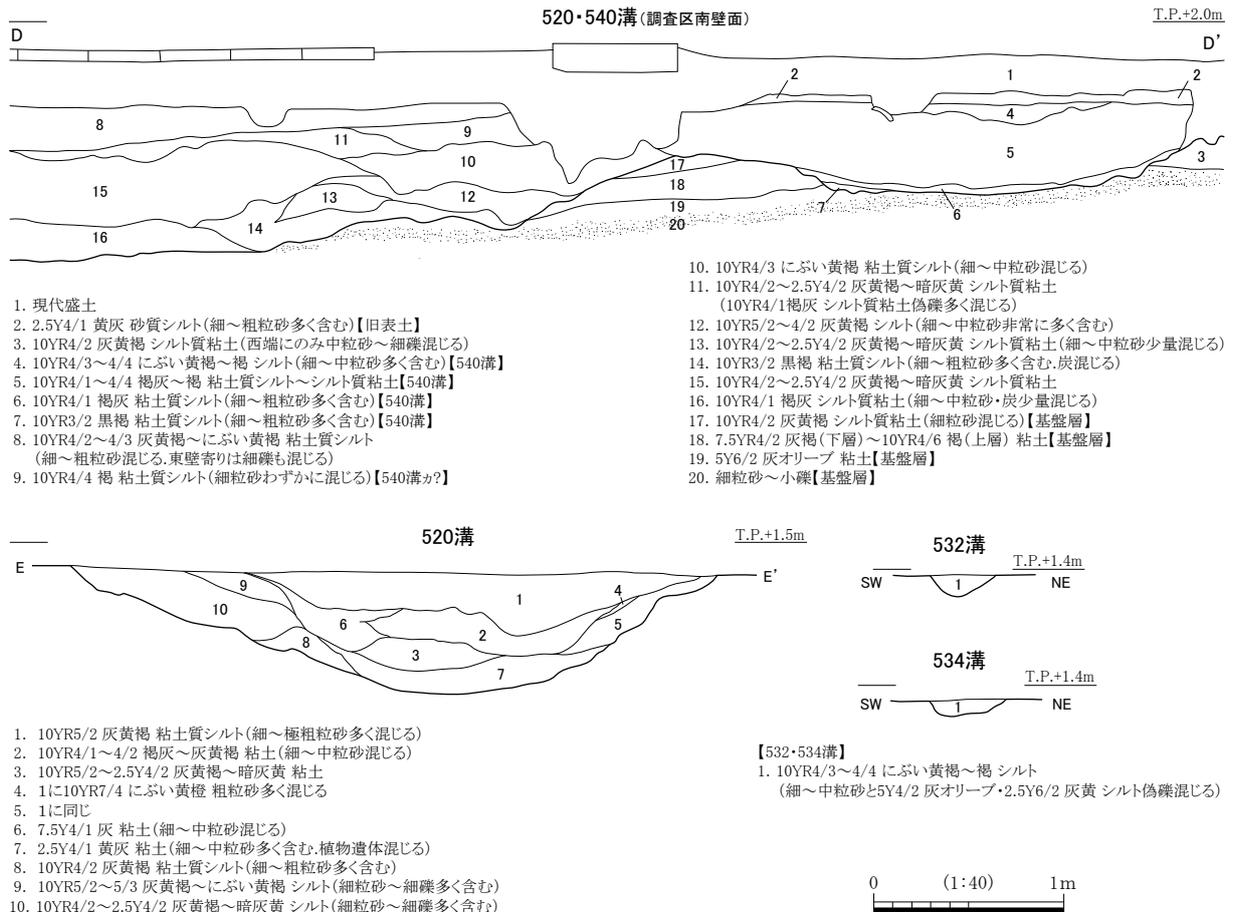
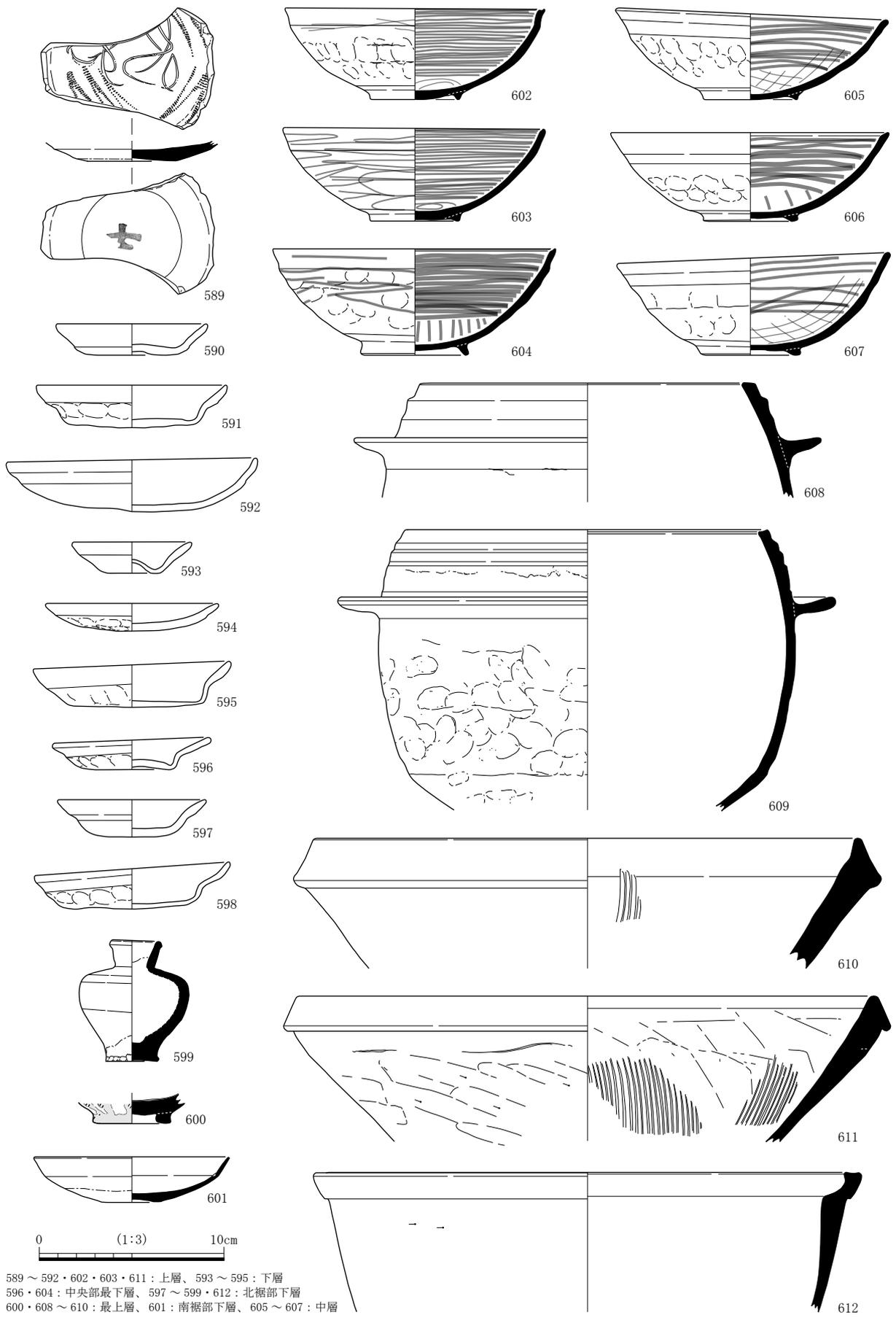


図 95 5区 溝断面 (2)

(635)・播鉢 (637)・火鉢 (632)、須恵器壺・甕、陶器皿 (629)・壺 (625)・甕・播鉢、輸入磁器、漆器椀 (628・630)、瓦 (627・631)、木製品など 14～15 世紀を中心とした遺物が多く出土している。また溝の上面からは瓦 (619) や五輪塔 (620・621)、不明石製品 (622) がまとまって出土している。619・631 は雁振瓦である。620 は空風輪で、621 は火輪であるが、両者を組むとバランスが悪い。一緒に出土しているが別個体である。620 の風輪部径は 16.1～16.4cm、621 の一辺は 24.9～25.1cm を測る。621 については 511 溝出土の水輪 (618) とともにサイズが合わない。上面には風輪と組むための柄穴を設ける。622 は凝灰岩製の石製品。両面に組み合わせのための浅い柄穴があることから、ほかの部材と重ねて用いられていたことがうかがえる。五輪塔とともに出土していることから、石塔の一部とも思われるが詳細不明。最大厚は 6.4cm である。623 は 13 世紀前半の大和型と判断したが、楠葉型との判別が難しい。見込みの暗文は螺旋状である。土師器皿・羽釜はいずれも 14 世紀代のものである。634 は口縁部外面の凹凸を細い沈線で表現する。625 は 15 世紀の備前焼壺。627 は 14 世紀前半の菱形唐草文軒平瓦。298 と同範。628 は溝底面から出土した。内外面を赤漆で仕上げるが、高台内は黒漆のままとする。630 は体部が直線的に大きく開く。内外面を黒漆で仕上げる。629 は瀬戸美濃系灰釉陶器の端反皿。15 世紀末頃のものと思われる。635 は 13 世紀代のものか。内面はハケ、外面はヘラケズリとする。637 は 14 世紀末から 15 世紀前半の所産。刷り目は 17 条以上で、外面はヘラケズリのまま。木製品は小型の曲物の底板片で、2 点出土している。

532・534 溝 520 溝の東側、511 溝の南肩部に位置する。南東－北西方向に斜行する溝で、511 溝と重複し、511 溝に切られる。またお互いも重複しており、534 溝が切る。532 溝は幅約 0.35～0.6 m、深



589 ~ 592 • 602 • 603 • 611 : 上層、593 ~ 595 : 下層
 596 • 604 : 中央部最下層、597 ~ 599 • 612 : 北裾部下層
 600 • 608 ~ 610 : 最上層、601 : 南裾部下層、605 ~ 607 : 中層

图 96 5区511溝出土遺物(1)

さ約 0.1 mを測る。534 溝は幅約 0.3 ～ 0.65 mで、深さは 532 溝と重複する箇所については、532 溝の底の高さよりも深く掘り込まれているが、南半は 0.1 m 足りずで浅い。南端部は 536 井戸とも重複し、井戸に切られる。埋土は両者ともに細～中粒砂やシルト偽礫が混じるにぶい黄褐～褐色シルトである。

土師器皿、瓦器椀、瓦質土器羽釜の小片が出土している。瓦器椀は 12 世紀後半や 13 世紀前半のものである。

540 溝 調査区の南東部の、520 溝の西肩部に重複する。4 区では 11 溝西肩部で検出できるはずであるが、攪乱の影響もあり輪郭を把握できていない。520 溝との重複関係は平面的には明らかにできなかったが、断面観察によって 520 溝より新しいことが確認できた。溝東肩が 520 溝と重複するため全体規模は明らかでないが、調査区南壁面の観察から、幅は 3.5 m 程度であったと復原できる。深さは 0.48 m である。埋土は褐灰～褐色の粘土質シルトやシルト質粘土である。

掘削当初は 520 溝と重複しているとの認識がなかったことから、540 溝のみを分離して遺物取り上げができていない。

514 井戸 調査区南壁際に位置する。平面形は直径約 2.35 m の円形であるが、中央部は方形の掘方になり、さらに一段深く掘り込まれている。周囲の浅い部分は深さ約 0.6 m で、中心部は 1.8 m を測る。井戸枠は検出できなかったが、底から集水用の曲物が出土した。曲物の直径は 0.53 m、高さは 0.26 m で、内側にさらにひと回り小さな曲物が重なっていた。本来は曲物の上部に井戸枠が組まれていたのではないかと考えたが、断面観察では井戸枠を抜き取ったような痕跡は認められなかった。

土師器皿・鍋、瓦器椀、瓦質土器足釜・甕・鉢、東播系須恵器片口鉢、陶器甕、瓦など多くの遺物が出土したが、小片のため図化できなかった。12 世紀中葉から 13 世紀中葉頃のものを中心であるが、14 世紀代のものまで含んでいる。

528 井戸 調査区南壁際に位置する。上記 514 井戸と重複するが、ちょうど重複する箇所が攪乱によって削られていたため、重複関係は検証できなかった。平面形は直径 2.2 m の円形で、深さは 1.1 m を測る。その中央には木組みの井戸枠が生まれ、下端には集水用の曲物が据えられている。枠は端部を凹形と凸形に細工した角材を交互に組んで内法約 0.52 m の方形にし、その外側に幅約 0.12 m の薄板を貼り付けたもの

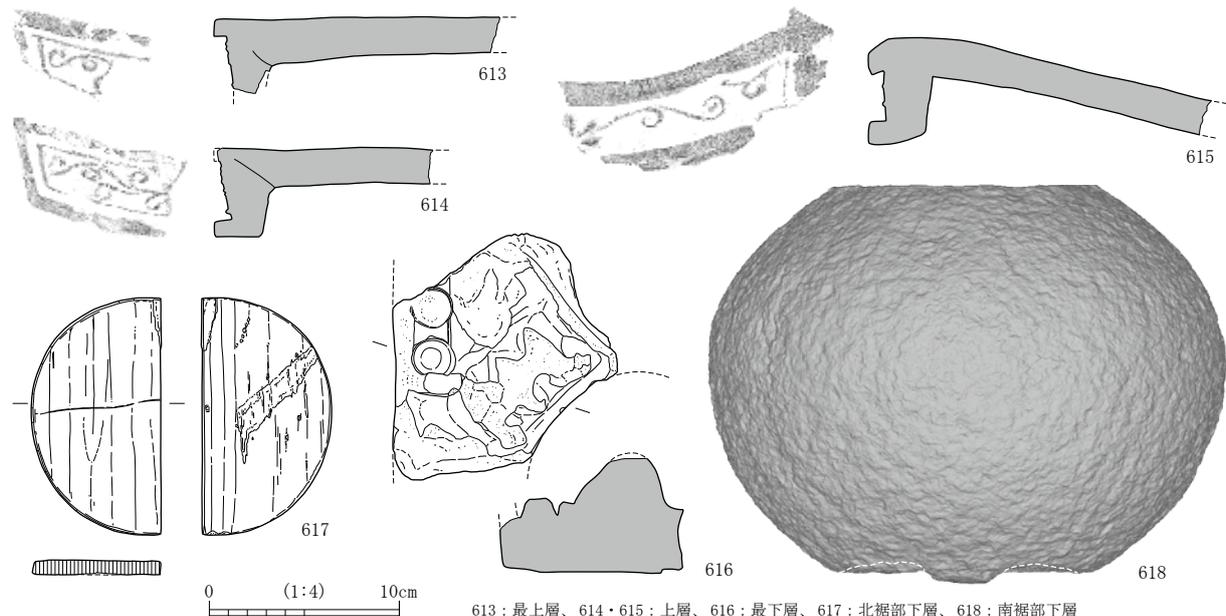


図 97 5 区 511 溝出土遺物 (2)

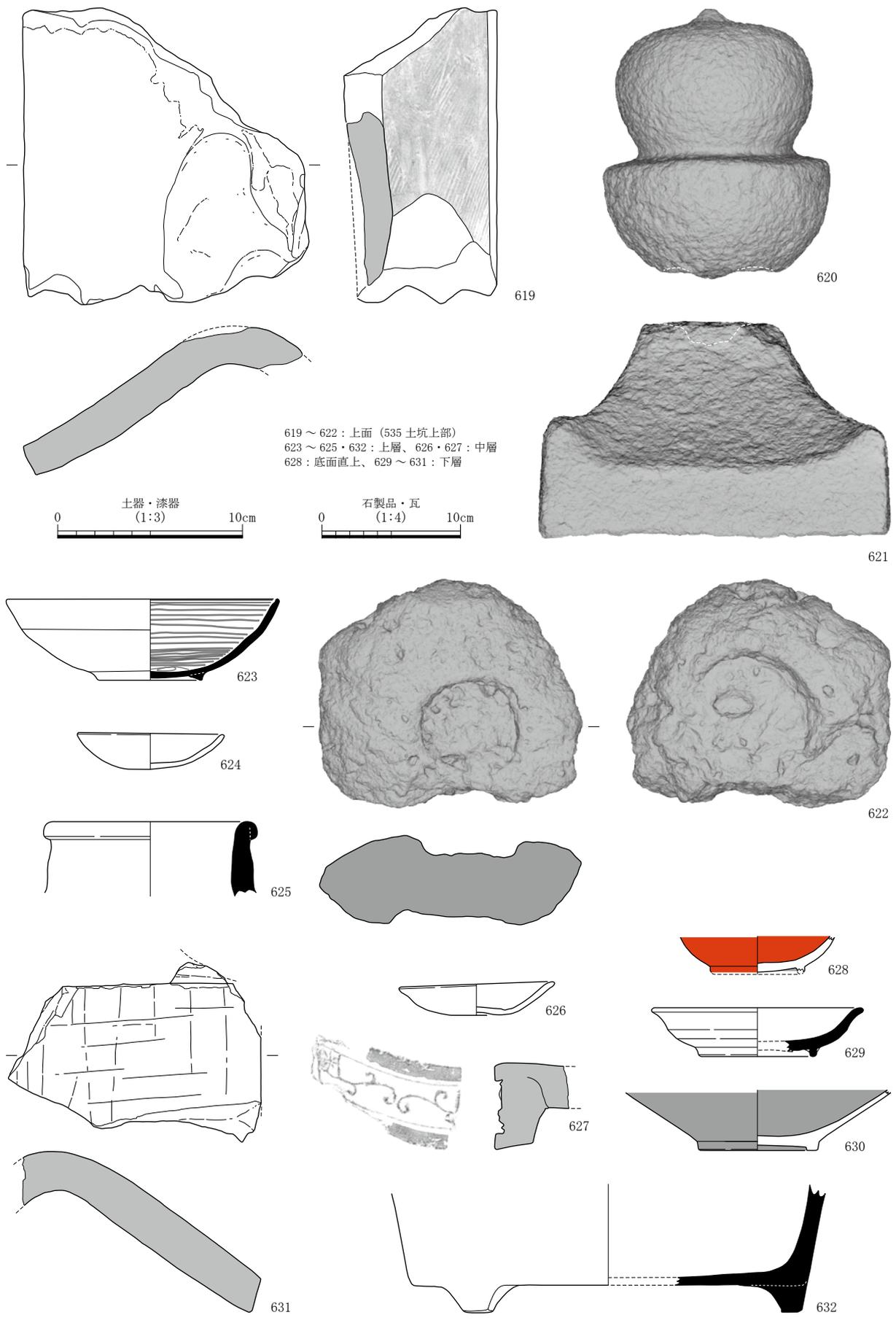
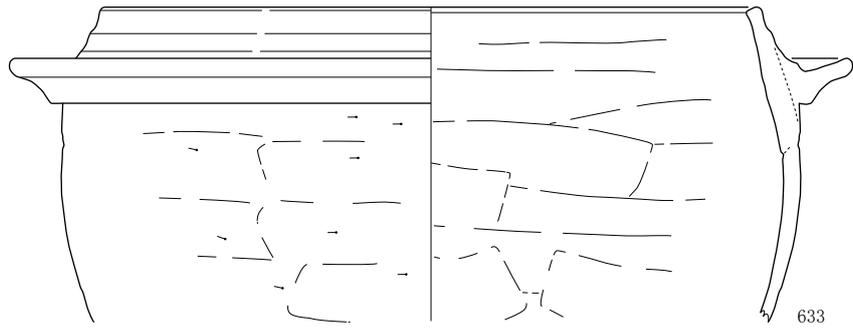
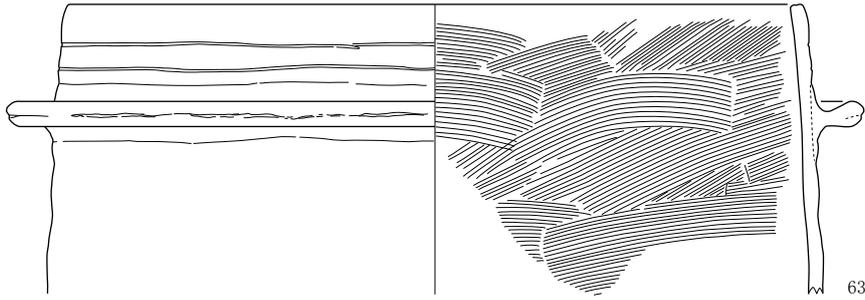


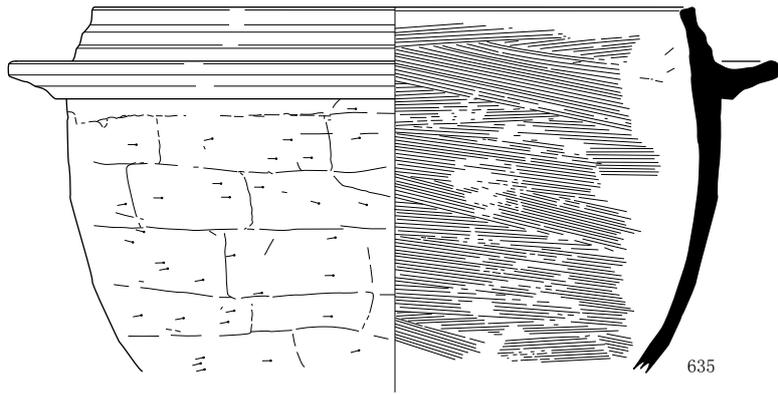
图 98 5区520溝出土遺物(1)



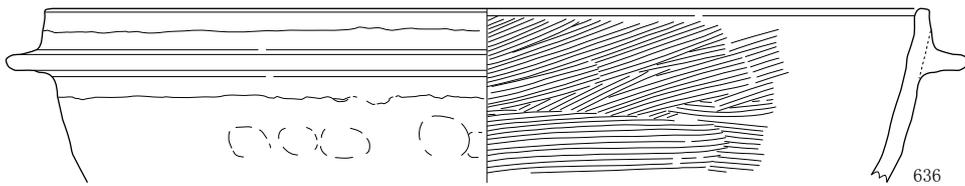
633



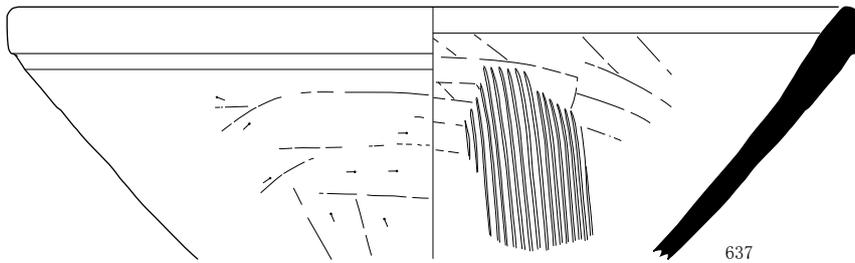
634



635



636

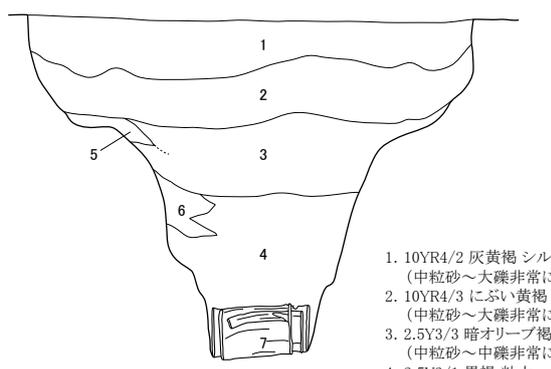
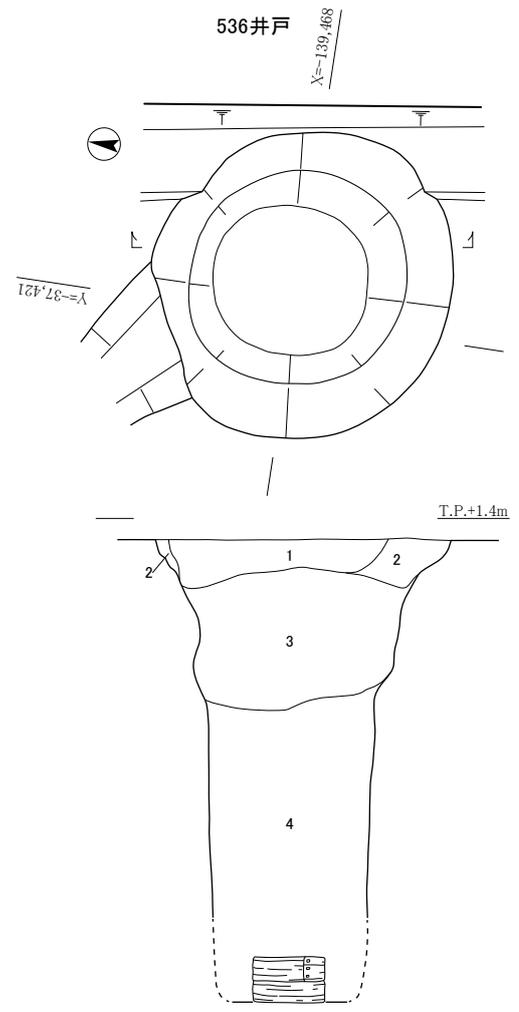
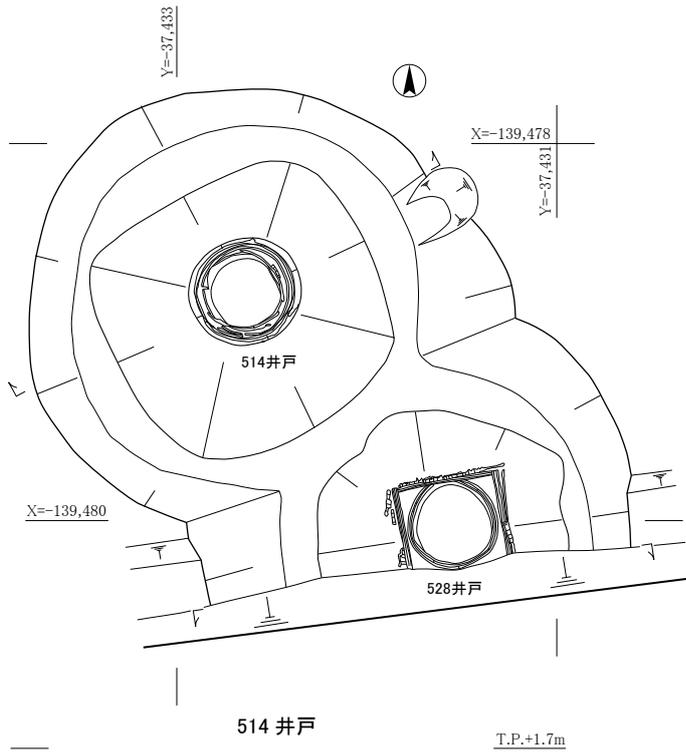


637

0 (1:3) 10cm

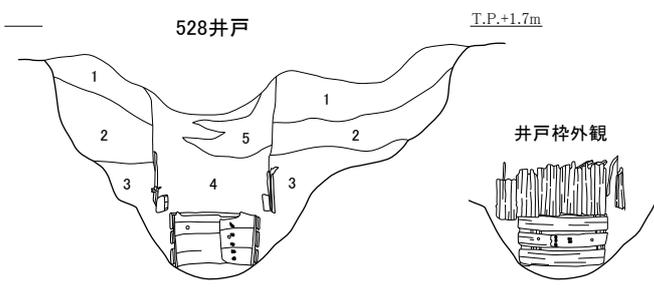
633 ~ 635 : 上層、636 : 中層、637 : 下層

图 99 5区 520 溝出土遺物 (2)

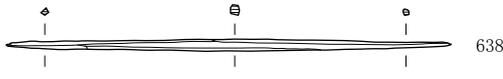


1. 10YR4/2 灰黄褐 シルト
(中粒砂～大礫非常に多く含む。土器細片多く含む)
2. 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト
(中粒砂～大礫非常に多く含む)
3. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 粘土質シルト
(中粒砂～中礫非常に多く含む)
4. 2.5Y3/1 黒褐 粘土
(中粒砂～中礫非常に多く含む)
5. 2.5Y6/2 灰黄 細～粗粒砂
6. 10YR4/4～4/6 褐 鉄分沈着した細粒砂～細礫
7. 細粒砂～細礫
(10YR4/1 褐灰 粘土混じる)【曲物内】

1. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト
(中粒砂～細礫多く含む)
2. 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト
(5Y5/2 灰オリーブ シルト偽礫混じる。中～粗粒砂多く含む)
3. 2.5Y4/1 黄灰 粘土
(5Y6/2 灰オリーブ シルト偽礫混じる。細～粗粒砂多く含む)
4. 2.5Y3/1 黒褐 粘土
(細～粗粒砂多く含む。植物遺体混じる)



1. 10YR4/2～4/3 灰黄褐～にぶい黄褐 シルト
(中粒砂～中礫多く含む)
2. 2.5Y4/1～3/2 黄灰～黒褐 粘土質シルト
(中粒砂～中礫非常に多く含む)
3. 細～粗粒砂
(2.5Y6/2 灰黄 中礫混じる。下部は2.5Y4/2 暗灰黄)
4. 10YR4/1～4/2 褐灰～灰黄褐 粘土質シルト
(中粒砂～中礫非常に多く含む)
5. 2.5Y5/2 暗灰黄 細粒砂～中礫



638 : 528 井戸、639 : 536 井戸

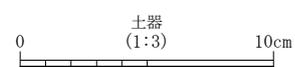
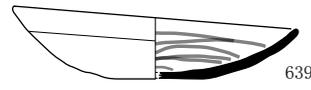


図 100 5区井戸平面・断面及び出土遺物

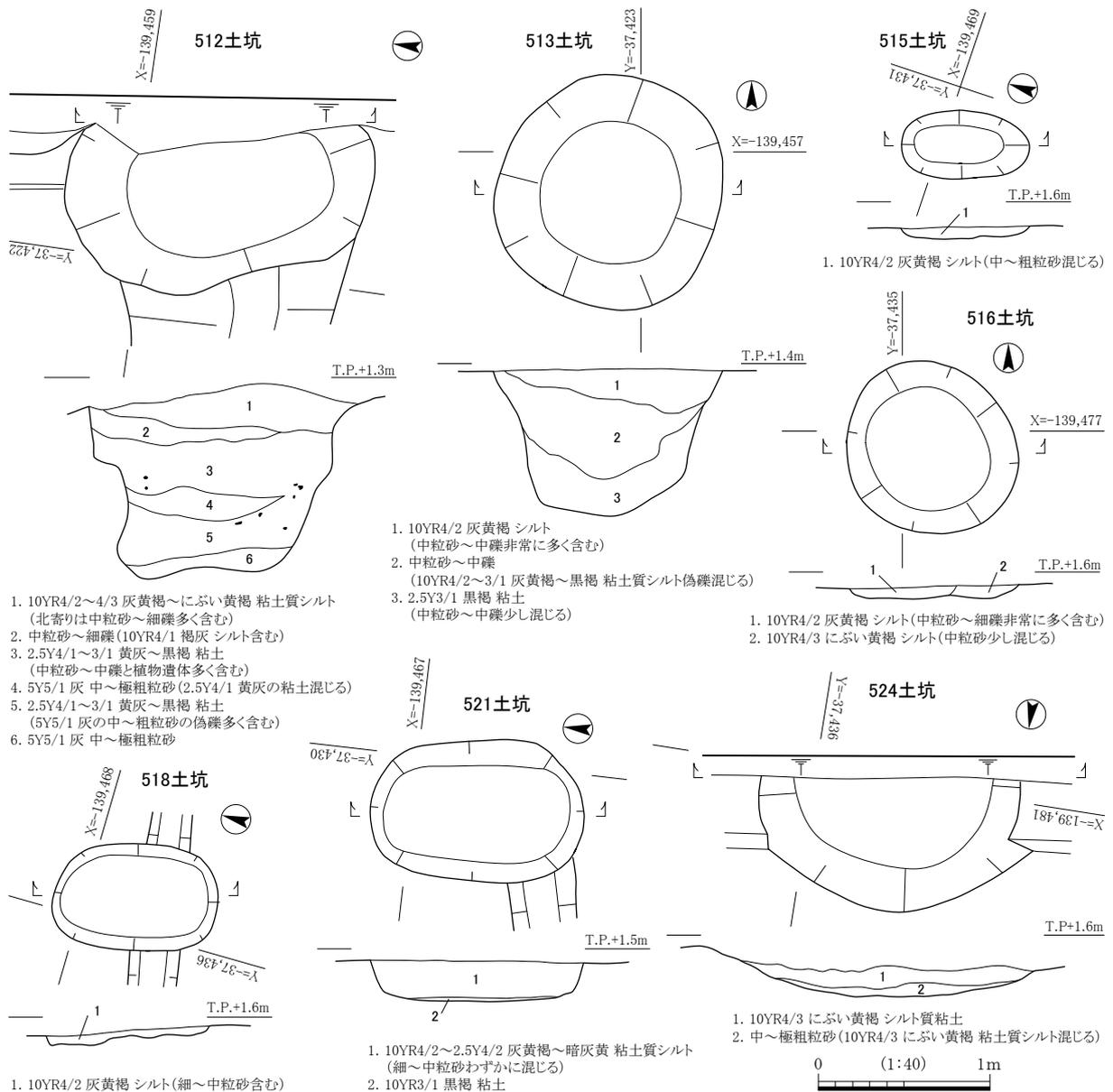


図 101 5区 土坑平面・断面 (1)

である。掘方が浅いことから、4区の8井戸のような方形枠を数段も重ねるような構造ではないが、24井戸のように2段程度は組まれていたと考えている。曲物の直径は0.47mで、高さは0.26mである。

土師器皿、瓦器椀、須恵器の小片のほか、箸(638)が出土している。箸は1本のみで、長さ23.4cm、直径0.6cmを測る。瓦器椀は12世紀後半の大和型である。

536井戸 調査区東壁際中央に位置する。平面形は直径1.6mの円形を呈する。深さは人力掘削で遺構面下2.0mまで掘削したが、危険なため底まで確認することができなかった。埋戻しの際に重機で底の高さを確認し、2.45mの深さであることを確認し、底面から最下段に埋設されていた曲物を検出した。曲物の直径は0.38mで、高さは0.25mである。上部の井戸枠は検出できなかった。

土師器皿、瓦器椀(639)、瓦質土器羽釜、須恵器、瓦などが出土している。639は14世紀前半の和泉型である。

512土坑 調査区の北東隅、調査区東壁際に位置する。511溝内にあり、511溝下層の掘削途中に検出した。当初は溝に切られていると思われたが、断面観察の結果、511溝を切っていることが判明した。東半

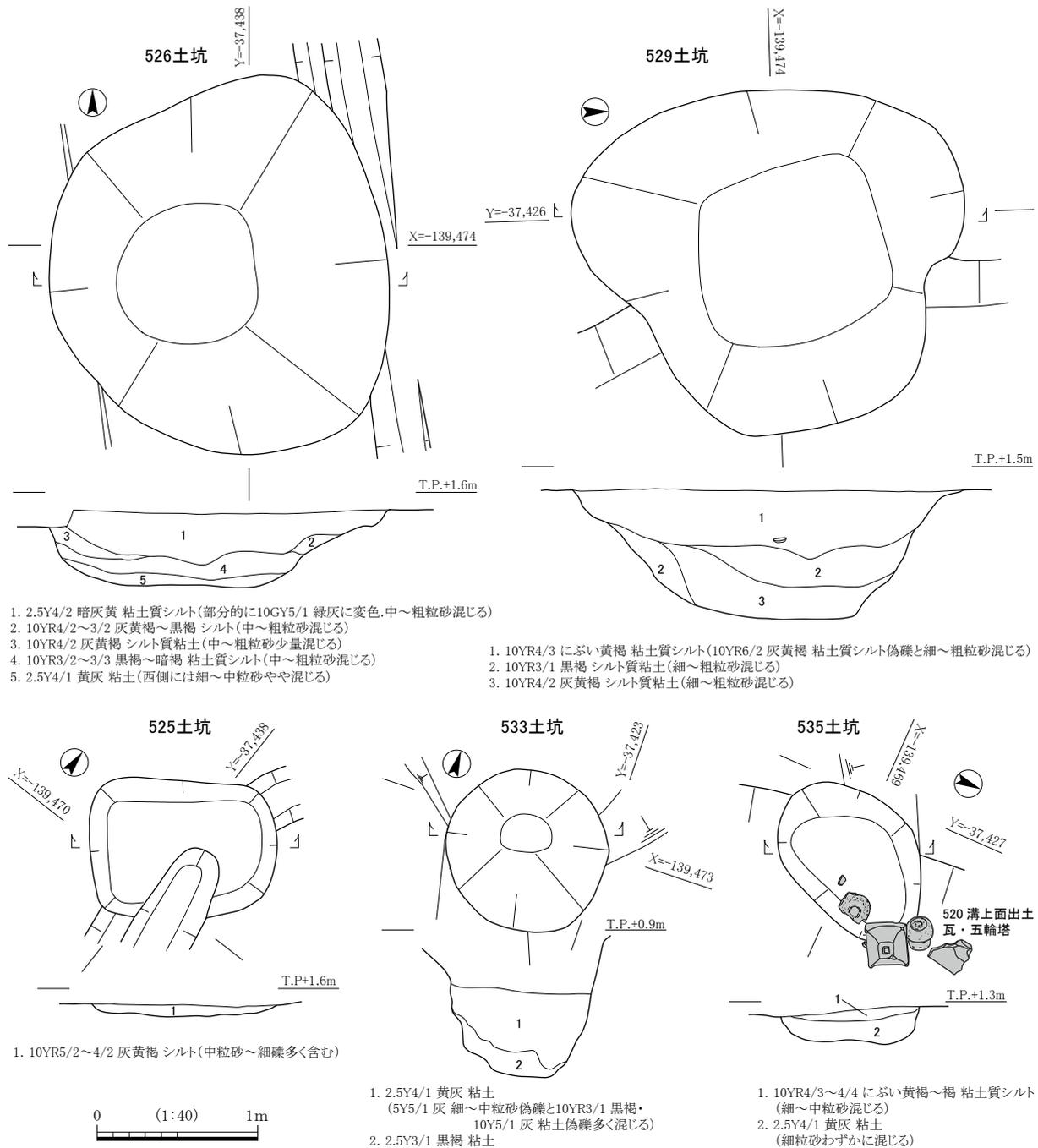


図 102 5区土坑平面・断面(2)

部が調査区外のため全体の規模は不明であったが、偶然空中写真測量前に壁面が崩落し、長径約 1.8 m、短径約 1.1 mに復原できる南北に長い楕円形を呈することが明らかとなった。深さは約 1 mを測る。

土師器皿(640)、瓦器椀、瓦質土器煮炊具などの小片とともに、漆器椀(641)や鹿の骨が出土している。640は15世紀、瓦器椀は13世紀中葉のものである。641は内面を赤漆とし、外面は黒漆の上に赤漆で巴文を描く。

513土坑 調査区の北東隅、511溝の北肩部に位置する。平面形は直径1.3～1.35mの円形で、深さは0.85mを測る。

土師器皿、瓦器椀・皿(644)が出土している。瓦器椀は12世紀中葉のもので、皿も同時期と思われる。見込みはジグザグ状暗文である。

515 土坑 調査区中央に位置する。平面形は長径 0.75 m、短径 0.4 mの南北に長い楕円形を呈する。深さは浅く、0.07 mである。

516 土坑 調査区南西隅に位置する。平面形は直径 1 m前後の円形を呈する。深さは 0.07 mである。

518 土坑 調査区西半中央に位置する。519 溝群と重複し、溝を切る。平面形は長径 0.95 m、短径 0.62 mの南北に長い楕円形を呈する。深さは 0.05 mと浅い。

土師器皿、瓦器椀、土師器煮炊具の小片が出土している。

521 土坑 調査区中央に位置する。平面形は長径 1.25 m、短径 0.85 mの南北に長い楕円形を呈する。深さは 0.23 mを測る。

土師器皿・羽釜、瓦器椀の小片が出土している。

524 土坑 調査区南西隅の南壁際に位置する。大部分が調査区外のため全体規模は明らかでないが、最大径 1.9 m程度の円形、ないしは楕円形に復原できる。深さは約 0.2 mである。

525 土坑 調査区西端部中央に位置し、519 溝群の屈曲部に重複する。図面上は溝が切っている表現となっているが、実際には溝を切っている。平面形は長辺 1.15 m、短辺 0.9 mの長方形を呈する。深さは 0.07 mと浅い。

土師器皿、瓦器椀、須恵器が出土しているが、すべて小片のため時期は不明。

526 土坑 調査区西壁際に位置する。519 溝群と一部重複し、溝を切る。平面形は台形に近い歪んだ円形で、南北 2.3 m、東西は復原で 2.2 mを測る。深さは 0.45 mである。

土師器皿、瓦器椀、瓦質土器羽釜の小片と、瓦が出土している。瓦器椀は 12 世紀後半のものである。

529 土坑 調査区の南半、540 溝の西肩部に位置する。540 溝と重複していたため、土坑の輪郭の検出に努めたが、540 溝上面では検出できず、溝を完掘した面でなければ、確実な土坑の輪郭をおさえることができなかった。このことから土坑が 540 溝に切られていたと判断した。平面形は長径 2.43 m、短径 2.15 mの潰れたナスビ形を呈するが、これは 540 溝に削られたためであり、底面の形状のように本来は方形を呈していたと推測できる。深さは 0.8 mを測る。

土師器皿、瓦器椀 (642・643)、白磁のほか、瓦や箸 (645) が出土している。瓦器椀は 13 世紀末から 14 世紀前半のもので、圏線ヘラミガキは細い。箸は 1 本のみで、長さ 21cm、直径 0.56cm を測る。

533 土坑 529 土坑の東側に近接する。520 溝の底面で検出したが、520 溝との重複関係は、ちょうど攪乱が重なっていたため検証できていない。平面形は直径 1.0 mの円形を呈する。深さは 520 溝の底面から 0.85 mを測る。

土師器皿、瓦器椀の小片が出土している。土師器皿は 13 世紀代のものである。

535 土坑 調査区中央、520 溝の西肩部に位置する。520 溝との重複関係は、ちょうど攪乱が重なっていたため不明瞭で検証できていない。平面形は長径 1.1 m、短径 0.75 mの歪んだ楕円形を呈し、深さは 0.23 mを測る。520 溝上面で出土した五輪塔は、ちょうどこの土坑の上部に位置しており、この土坑に伴う

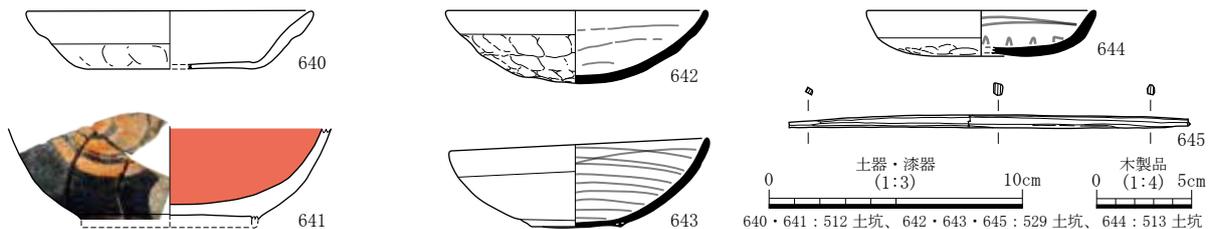


図 103 5 区 土坑出土遺物

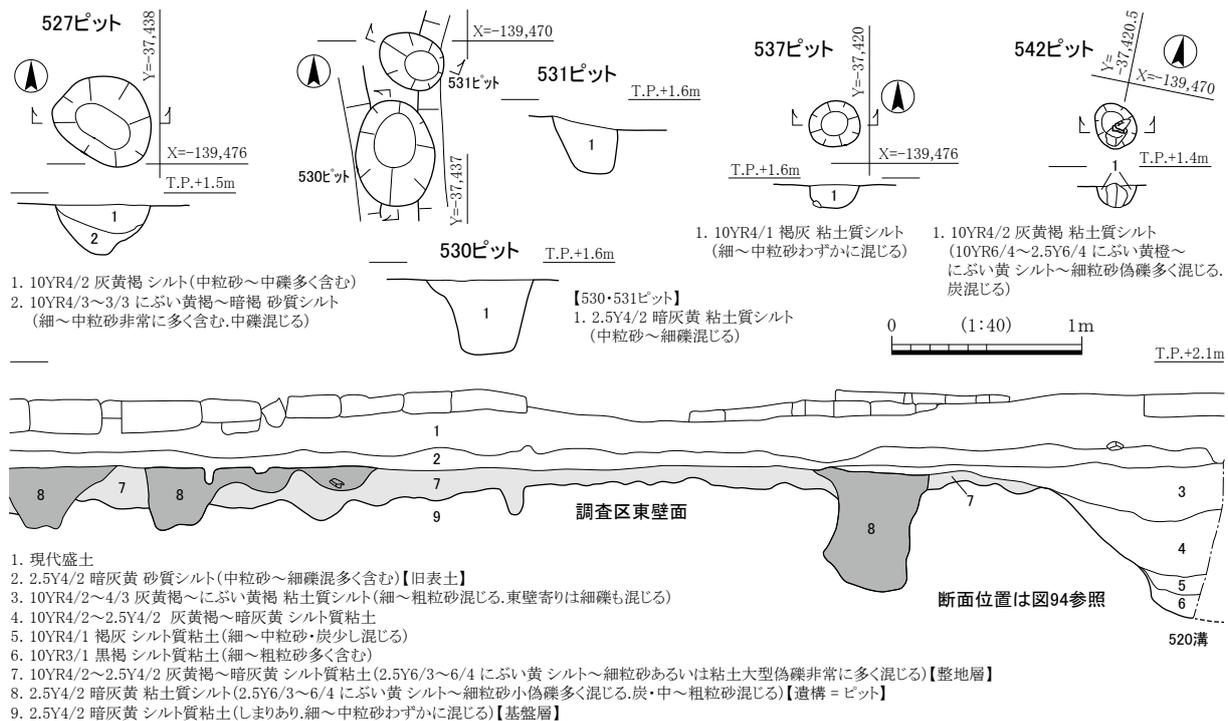


図 104 5区ピット平面・断面

ものであった可能性も考えられる。埋土の下半は黄灰色粘土であり、人骨などは出土していない。

ほかの調査区に比べ、ピットの分布は非常に稀薄である。520溝の西側には、519溝周辺に数基検出できる程度で、ほとんど広がっていない。520溝の東側に僅かに検出できる程度であるが、いずれも建物を構成する柱穴ではない。以下に遺存状態のよいものについて報告する。

527ピット 調査区西壁際に位置する。平面形は長径0.5m、短径0.4mのやや歪んだ楕円形で、深さは0.25mを測る。

土師器皿、瓦器椀の小片のほか、瓦が出土している。土師器皿は13世紀代のものと思われる。

530・531ピット 519溝の屈曲部に位置する。両者ともに519溝と重複し、溝を切る。530ピットは、平面形が長径0.55m、短径0.42mの楕円形で、深さは0.4mを測る。531ピットは長径0.35m、短径0.28mの楕円形で、深さは0.25mである。

530ピットから、土師器皿、瓦器椀の小片が出土している。

520溝の東側には、基盤層の上に細粒砂や粘土の大型偽礫が非常に多く混じる灰黄褐～暗灰黄色のシルト質粘土が、厚い箇所約0.2～0.3m堆積する。この地層は溝などの遺構を掘削した排土を整地のために転用したものと考えている。ピットはすべてこの整地層上面で検出している。

537ピット 調査区南東隅に位置する。平面形は直径約0.25mの円形で、深さは0.12mである。

土師器の小片が出土している。

542ピット 536井戸の南側に位置する。平面形は直径0.25m、短径0.2mの楕円形で、深さは0.11mを測る。底に礎石を据えるが、石の上面は水平にはなっておらず、この上に柱がのっていたのかは疑問。

瓦質土器甕片が出土している。

このほか東壁寄りのピットからは、土師器皿や瓦器椀の小片が出土している。

基盤層 南端部の514井戸北側では、基盤層上面で溝状にのびる土質が異なる部分を検出した(図93破線部)。514井戸の北端部に接するように東西方向にのび、516土坑付近で僅かに南に折れ曲がっていた。

幅は約 1.2 mを測る。この周辺では、遺構の基盤層は中粒砂～中礫、または細～粗粒砂を多く含むにぶい黄褐～暗褐色のシルトであったが、この変質部は中～粗粒砂が混じる褐～暗褐色の粘土質シルトであった。何度も丹念に精査し、溝であるのかを検討したが、この変質部の上面で確実に 516 土坑が検出でき、東側では途中から輪郭が不明瞭となり、完全に 529 土坑や 520 溝などの遺構が掘り込まれた基盤層へと徐々に変化していることが確認できた。よって、遺構ではないと判断した。前節でも報告したとおり、これによって 4 区西半の溝としていた変質箇所についても、実際には遺構ではなかったと判明した。

第 7 節 6 区の結果

4 区の北側、5 区の東側に位置する。当初計画では 5 区と一連の調査区であったが、前述のとおりガス管の影響により 5 区を切り離したため、狭い調査区となった。調査面積は 341 m²である。

溝、井戸、土坑、ピットなどを検出した。

11 溝 調査区南半中央に位置する。4 区から続く幅の広い溝で、調査区南端で分岐して一方は西に折れて 5 区へと伸びる。こちらを 520 溝とした。また一方はそのまま北へのびる。調査区北側から調査を開始したため、北へ直進するこちら側を 11 溝としたが、南端の分岐部で極端に浅くなっており、実際には 4 区の 11 溝との連続性は認められない。前節で報告したとおり、11 溝の本流は 5 区側へのびる 520 溝であったと考えられるが、本書では現地調査時の名称のとおり 11 溝として報告する。

溝の幅は 520 溝との分岐部で約 6 mであるが、やや北側では東側に広がり約 7 mとなる。調査区中央付近では西肩が東に屈曲して極端に狭くなり、最終的には東寄りの幅約 1.6～2.4 mの部分のみが北流して、北側に位置する 511 溝に合流することとなる。この狭まった部分から南側、つまり東へ拡幅した部分には、長方形の土坑状の窪みが南北一列に 3 基（最南を 610 土坑とした）並んでいることが溝底で確認できた。

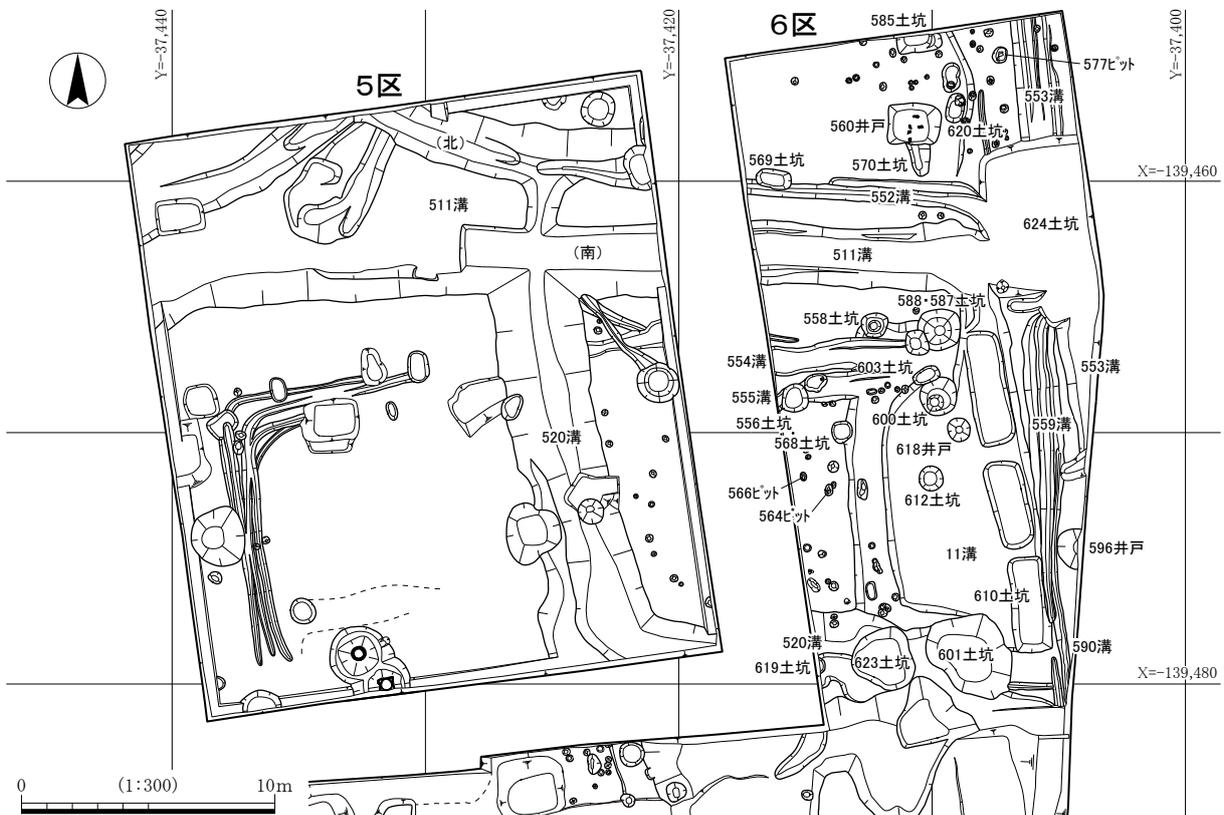
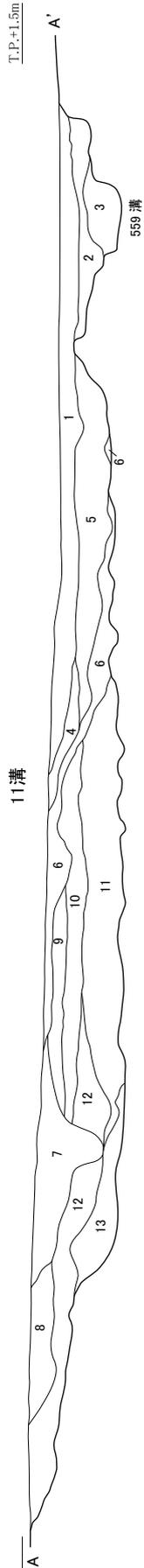
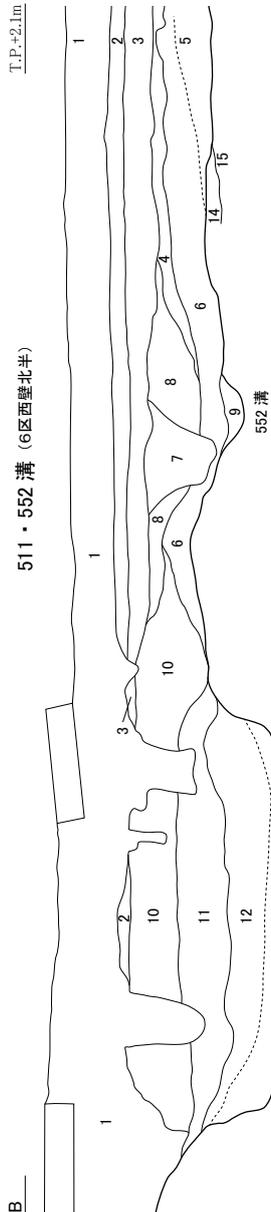


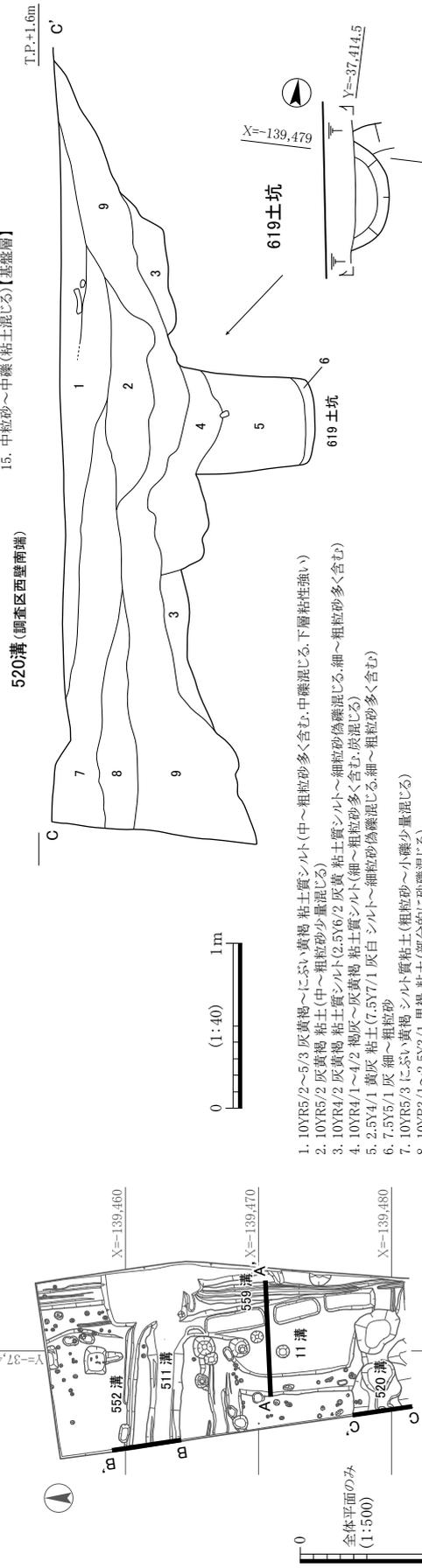
図 105 6 区 検出遺構全体平面



1. 現代盛土
2. 2.5Y4/2 暗灰黄 砂質シルト(中粒砂～細礫多く含む)【田表土】
3. 2.5Y4/2～4/3 暗灰黄～オリーブ褐 粘土質シルト(中～粗粒砂混じる)
4. 10YR4/2 灰黄褐 粘土質シルト
5. 2.5Y4/1～4/2 黄灰～暗灰黄 シルト質粘土(中粒砂偽礫と中～粗粒砂混じる)
6. 2.5Y4/1～4/2 黄灰～暗灰黄 シルト質粘土(しまりあり、細～粗粒砂多く含む)
7. 5Y5/2 灰オリーブ 粘土
8. 2.5Y4/1 黄灰 砂質シルト(中粒砂～中礫多く含む)
9. 10YR4/1 褐灰 粘土(中～粗粒砂混じる)
10. 10YR4/2～4/3 灰黄褐～にぶい、黄褐 シルト(中粒砂～細礫多く含む)【1層】
11. 10YR4/1 褐灰 粘土(中粒砂と植物遺体混じる、10より粘性強い)
12. 10YR4/1 褐灰 粘土(中粒砂と植物遺体混じる)
13. 10YR3/1 黒褐 粘土(中粒砂と植物遺体混じる、溝裾部に5Y6/2 灰オリーブ 粘土偽礫混じる)



511・552 溝 (6区西壁北半)



1. 10YR5/2～5/3 灰黄褐～にぶい、黄褐 粘土質シルト(中～粗粒砂多く含む、中礫混じる、下層粘性強い)
2. 10YR5/2 灰黄褐 粘土(中～粗粒砂少量混じる)
3. 10YR4/2 灰黄褐 粘土質シルト(2.5Y6/3～5/3 オリーブ黄～灰オリーブ 細～中粒砂偽礫と細～粗粒砂混じる)【552溝】
4. 10YR4/1 黄灰 粘土質シルト(5Y5/3 灰オリーブ 細～中粒砂偽礫混じる、細～粗粒砂混じる)【559溝】
5. 2.5Y4/1 黄灰 粘土(7.5Y7/1 灰白 シルト～細粒砂偽礫混じる、細～粗粒砂多く含む)
6. 7.5Y5/1 灰 細～粗粒砂
7. 10YR5/3 にぶい、黄褐 シルト質粘土(粗粒砂～小礫少量混じる)
8. 10YR3/1～2.5Y3/1 黒褐 粘土(部分的に砂礫混じる)
9. 10YR4/2～3/2 灰黄褐～黒褐 粘土(粗粒砂～小礫多く含む、一部明確に粘土と分かれる箇所あり)

図 106 6区溝・土坑平面・断面

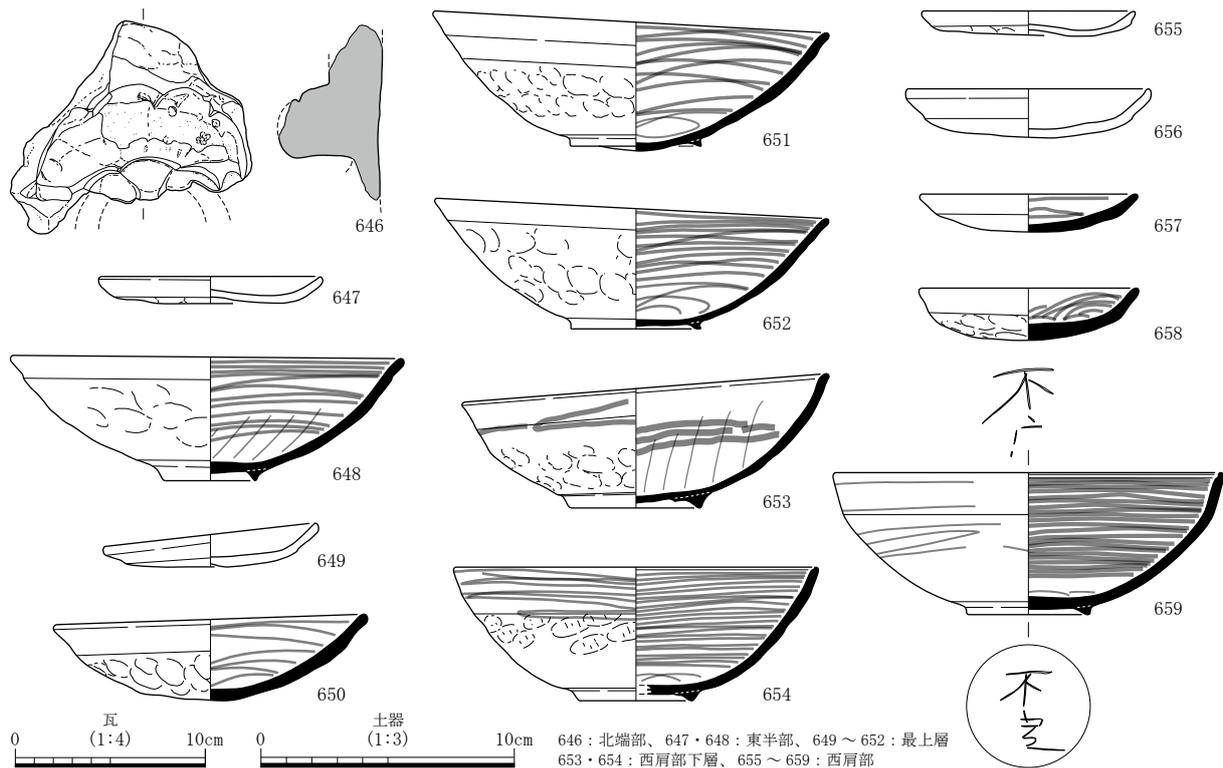
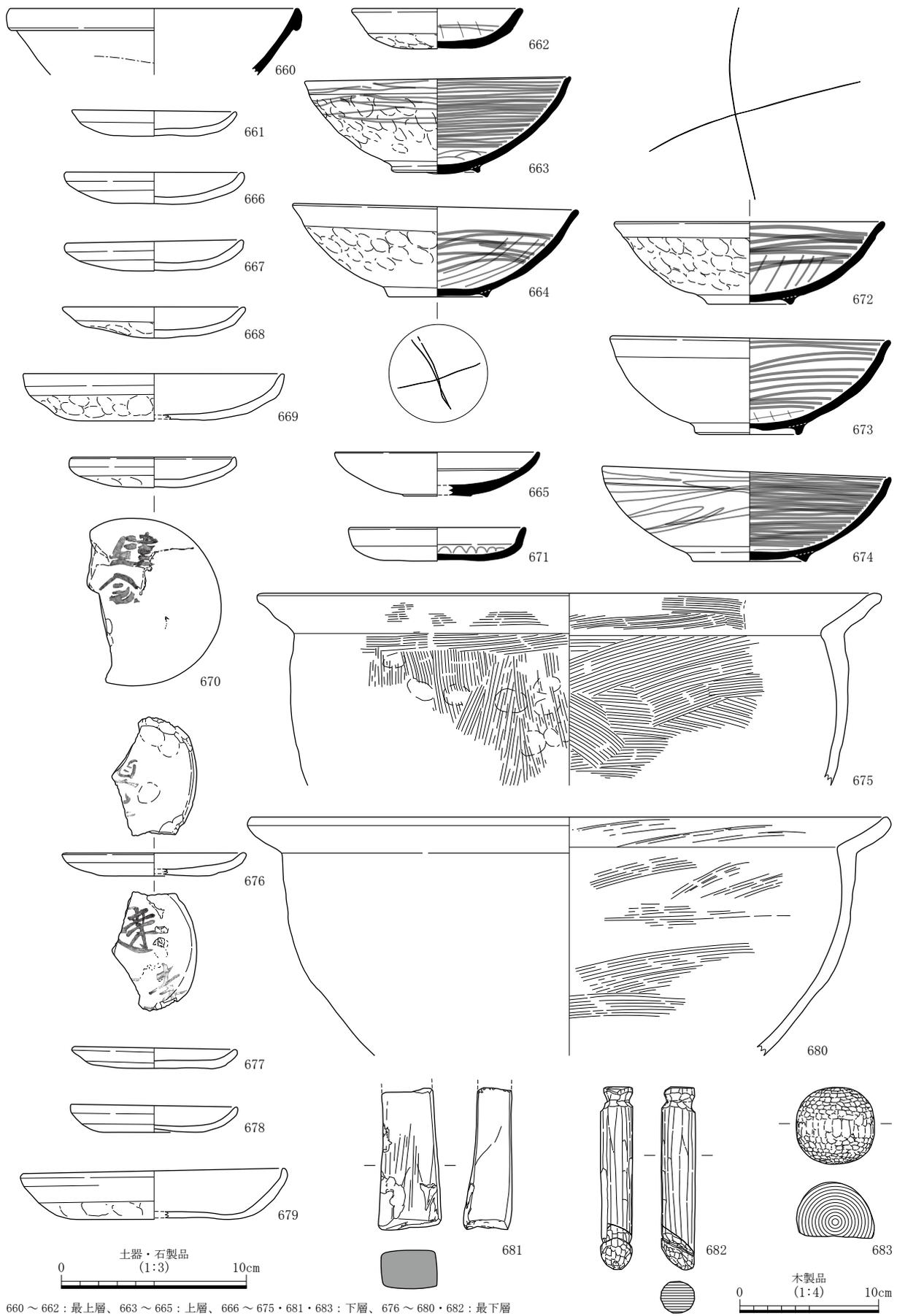


図 107 6区 11 溝出土遺物

調査当初には 11 溝として一括りにしていたが、実際には幅の広い池状の溜まりに土坑状の溝が重複しており、埋土上面の精査段階でも、北側の 511 溝から続く埋土の輪郭が、南側の広い箇所埋土を切るように一部のびていることが確認できた。また断面の観察でもその切り合いを検証できた。この土坑が連続する箇所については、土坑が溝状につながったものなのか、あるいは土坑状に掘削した溝だったのかは明らかでないが、北側の 511 溝に伴う遺構であったことは間違いない。11 溝の深さは約 0.5 m であるが、西肩部については、ステップ状の平坦面を一段つくる。段の幅は約 1.1 m で、深さは 0.15 ~ 0.25 m である。狭まった北側の 511 溝との合流部付近では深さ約 0.25 m である。埋土は砂礫が混じる褐灰色シルト質粘土や灰黄褐～にぶい黄褐色粘土質シルト、シルト偽礫や細～粗粒砂が混じる褐灰～灰黄褐色粘土などである。

溝全体の最上層からは土師器皿 (649)・羽釜、瓦器椀 (650 ~ 652)、瓦質土器足釜・火鉢、東播系須恵器片口鉢、陶器甕・播鉢、輸入磁器、瓦などが出土している。649・651・652 のような 13 世紀前半頃のものもあるが、650 のような 14 世紀前半のものまで含んでいる。650 ~ 652 は 3 点ともに和泉型。見込みの暗文は螺旋状で、650 は体部の圈線へラミガキと連続する。狭まった北端部からは土師器皿、瓦器椀、東播系須恵器片口鉢、陶器甕、埴輪などが出土している。646 は鬼瓦の眉の部分と思われる。溝東半部からは土師器皿 (647)、瓦器椀 (648)、東播系須恵器片口鉢、須恵器甕、埴輪などが出土している。648 は 13 世紀前半の和泉型で、見込みの暗文は平行線。647 も 13 世紀。溝西肩部からは土師器皿 (655・656)・羽釜、瓦器椀 (653・654・659)・皿 (657・658)、瓦質土器足釜、東播系須恵器片口鉢、白磁碗、瓦などが出土している。土師器皿はともに 13 世紀代のものである。瓦器椀のうち 653 は和泉型、654・659 は大和型で、見込みの暗文は、653 が平行線、654・659 が螺旋状である。653 の内面へラミガキは非常に雑で、数条確認できる程度であるが、外面にも僅かではあるがへラミガキがみられる。653 は 13 世紀前半、654 は 12 世紀後半、659 は 12 世紀中葉頃か。659 は内面見込みと外面の高台内に「不口」の線刻を施す。



660 ~ 662 : 最上層、663 ~ 665 : 上層、666 ~ 675・681・683 : 下層、676 ~ 680・682 : 最下層

图 108 6区511溝出土遺物

511 溝 調査区北半に位置する。東西方向の幅の広い溝で、5区で検出した511溝のうち、南裾の方形に掘り込まれた部分の延長部にあたる。幅は約2.5mを測る。深さは南肩部から約0.75mで、底面は東へ向かって緩やかに浅くなっている。溝の東端部には染付を含む近世の624土坑が重複しているため、調査区東辺までのびていたのかは確認できなかったが、上記11溝上面の精査段階では、11溝の埋土が511溝と連続するように西に曲がっていることが観察できた。これにより11溝と511溝とが連続する一連の溝であったことがうかがえる。埋土は上層が砂礫や粘土偽礫が混じる灰黄褐～にぶい黄褐色粘土質シルト、下層が中粒砂や植物遺体が混じる褐灰～黒褐色の粘土である。

最上層・上層からは土師器皿(661)、瓦器椀(663・664)・皿(662)、瓦質土器足釜、白磁碗(660)・皿(665)、瓦などが、下層・最下層からは土師器皿(666～670・676～679)・鍋(675・680)、瓦器椀(672～674)・皿(671)、須恵器甕、白磁碗、砥石(681)、木製品(682・683)などが出土しており、ほぼ完形の土師器皿や瓦器椀が多い。5区側の511溝では15世紀代のものが主であったが、6区ではそこまで下るものは少なく、12世紀から13世紀のものが中心である。土師器皿は端部をつまみ上げ気味にヨコナデする12世紀後半のものがほとんどである。670は外面に、676は内外面に墨書が残るが、判読できない。図示した瓦器椀のうち、663と674は12世紀中葉から後葉の大和型で、見込みの暗文は螺旋状である。664・672・673は和泉型で、見込みの暗文は664・672が平行線、673が斜格子である。外面にはヘラミガキが施されておらず、13世紀前半に収まる。664には高台内に、672は内面に「×」の線刻がみられる。660・665はともに11世紀後半から12世紀前半の所産。675・680は13世紀代の鍋。680外面は煤の付着が著しい。682は男根形木製品である。直径2.3×2.5cm、長さ13.3cmで、頭部先端に浅い孔を表現する。頂部とは逆側の端にくびれを作ることから、紐を結んで頭部が下になるようにしてぶら下げていたと考えられる。683は毬杖の木毬。今回の調査で出土した木毬の中ではもっとも丁寧な作りで、表面に角が残らないように細かく加工して球形にしている。

520 溝 調査区の南端で一部を検出した。南側の4区では11溝としていたが、大きく西に屈曲して5区の520溝へ続くことが明らかになったことから、11溝ではなく6区では520溝とした。この屈曲部には、溝底に601・623土坑とした大きな土坑状の窪みがあり、底面の起伏が激しい。また西壁際では溝底で619土坑も検出している。遺構の詳細については前節で報告したとおりである。

上層からは土師器皿(685・686)、瓦器椀、瓦質土器羽釜・鉢(687)、須恵器甕などが出土している。687は応永18年(1411)の銘をもつ福島県都々古別神社に伝わる銅製の鉢⁹⁾によく似た形であり、その頃のものと考えられる。体部外面は縦方向のヘラミガキで、口縁部は内外面ともに横方向のヘラミガキで仕上げる。中層からは土師器皿(688)・羽釜、瓦器椀、瓦質土器羽釜、青磁、須恵器甕、瓦(693)などが出土している。693は14世紀前半の巴文軒丸瓦。46と同範である。下層からは土師器皿(684)、瓦器椀、瓦質土器羽釜(691)・火鉢、陶器播鉢(692)、青磁碗(690)、須恵器高杯・甕、瓦などが出土している。690は14世紀代の所産。692は15世紀の備前焼で、9条1単位の刷り目を9単位施す。最下層からは土師器皿(689)や瓦器椀片が出土している。瓦器椀は13世紀代のものも含んでいる。各層出土の土師器皿は、685が若干古手の14世紀前半、それ以外は14世紀後半から15世紀前半頃のものである。また溝底の601土坑からは、土師器皿、瓦質土器火鉢、白磁皿(720)、瓦などが出土している。720は13世紀後半から14世紀前半の所産で、底部外面の釉は刷毛状の工具で塗られている。

552 溝 511溝の北側に位置する。511溝に並行する東西方向の溝で、5区で検出した511溝のうち、北裾側の溝の延長部にあたる。西壁際で569土坑と重複しており、溝が切っていたと判断しているが、これに

については569土坑の項で報告する。溝の幅は約0.55～0.8mであるが、途中から2条の溝が重複するように北側に0.3～0.35mほど広がる。深さは約0.2～0.25mであるが、北側の広がった部分は浅く0.05m前後である。埋土は上層が砂礫を多く含む黄灰色粘土質シルトで、下層は僅かに細～中粒砂が混じる褐灰色粘土である。東端は南に向かって屈曲しはじめているが、ちょうどその部分が近世の624土坑と重複しているため、ほかの溝との関係は明らかでない。

土師器皿(695・696)、瓦器椀(697)、瓦質土器足釜・火鉢、東播系須恵器片口鉢、青磁碗(694)、瓦などが出土している。土師器皿はともに13世紀代のもの。697は13世紀前半の和泉型。内面のヘラミガキの後に見込みの平行線暗文を施している。694は12世紀後半の所産。内面に劃花文を刻む。

553溝 調査区北半の東壁際に位置する。溝の東肩が調査区外のため全体規模は不明である。幅は2.6m以上で、深さは約0.35～0.4mである。埋土下層は砂礫混じりの黄灰色シルト質粘土や灰～オリーブ黒色のシルト質粘土などである。北端部では溝底に数条の浅い溝が検出できることから、1条の溝ではなく、後述する559溝のように、幾筋もの溝が重複していたものかもしれない。なお、前述のとおり511・552溝との合流部が近世の624土坑と重複しているため、それぞれの関係は明らかでない。

土師器皿、瓦器椀(699・700)、瓦質土器足釜・火鉢、東播系須恵器片口鉢、陶器播鉢、瓦(698)などが出土している。700は12世紀後半の大和型で、見込みの暗文は螺旋状。699もおそらく同時期の大和型と思われる。698は14世紀前半の巴文軒丸瓦。46と同範である。

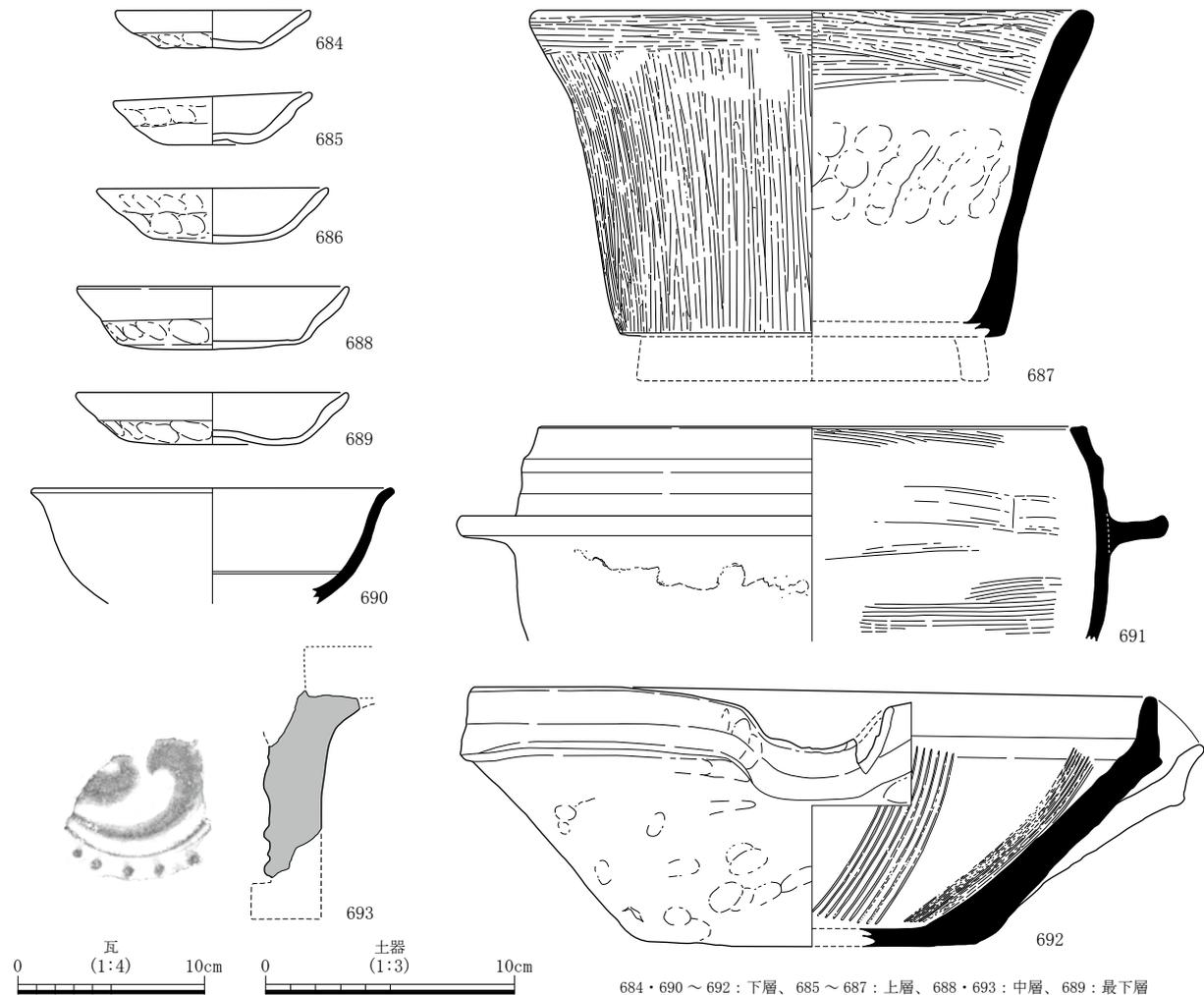


図109 6区520溝出土遺物

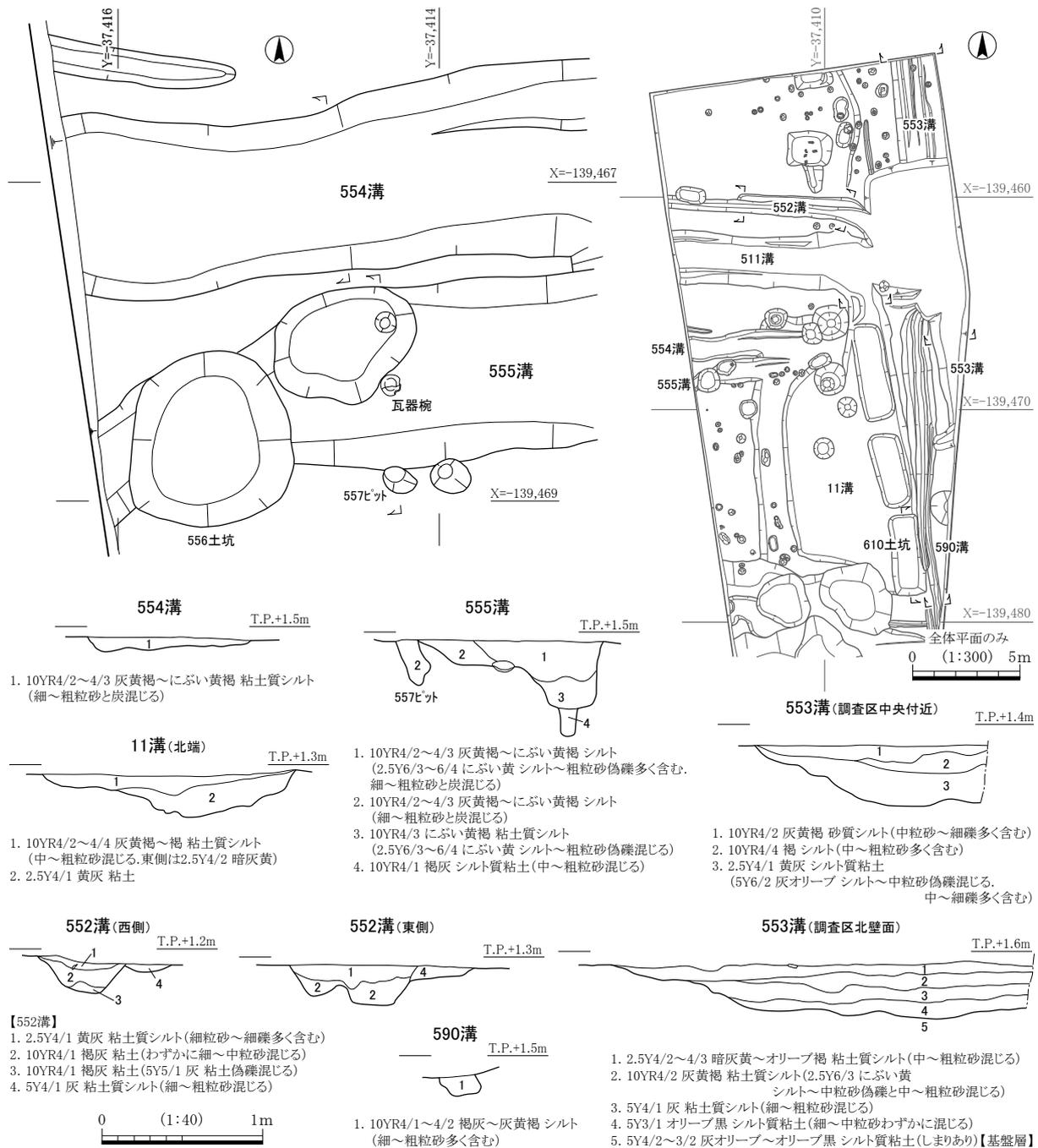


図 110 6区 溝平面・断面

554 溝 調査区西半中央、511 溝の南側に位置する。東西方向の溝で、11 溝の西肩につながる。幅は約 1 m で、深さは 0.1 m 程度と浅い。埋土は細〜粗粒砂と炭が混じる灰黄褐〜にぶい黄褐色の粘土質シルトである。溝底の状況から、2 条の溝が一つになったものであったことがうかがえる。

土師器皿、瓦器碗の小片が出土している。瓦器碗は 13 世紀代のものである。

555 溝 調査区西半中央、554 溝の南側に並行する。東西方向の溝で、11 溝の西肩につながる。556 土坑などと重複し、土坑に切られる。幅は 1.1 m 前後であるが、西壁際では 0.6 m 程度に狭くなる。深さは約 0.15 m で、埋土は細〜粗粒砂と炭が混じる灰黄褐〜にぶい黄褐色のシルトである。554 溝と同じく溝底の状況から、2 条の溝が一つになったものであったことがうかがえる。

土師器皿 (701・702)・羽釜、瓦器碗 (703・704)、須恵器片が出土している。土師器皿は両者とも

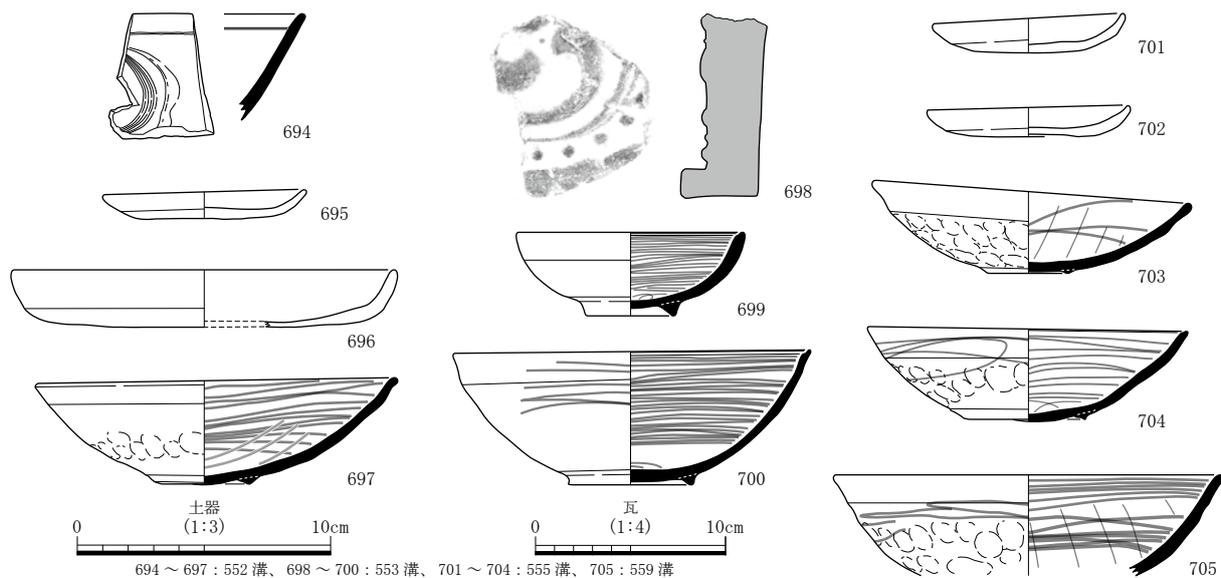


図 111 6区溝出土遺物

に13世紀代の所産。瓦器碗のうち703は和泉型で、見込みの暗文は平行線。704は大和型で、見込みの暗文は螺旋状である。両者ともに13世紀後半のものである。

559溝 調査区南半の11溝の東側に隣接する。11溝と553溝との間の南北方向の溝で、南半部は11溝と一部重複するが、その切り合い関係は検証できていない。北半部は幅1.35mで、その中心が0.45mほどの幅で一段深くなる二段掘りのような状況である。埋土は砂粒や偽礫が混じる暗灰黄色シルトや黄灰色粘土質シルトである。深さは中心の深い箇所が約0.35m、両側の浅い部分が0.18m前後であるが、南半部では東側の浅い部分が溝になっており、中心部よりもさらに南へのびていることが確認できた。北半部では1条の溝として掘削していたが、別々の溝であることが判明した時点から、東側の溝のみを590溝として調査を進めることとした。

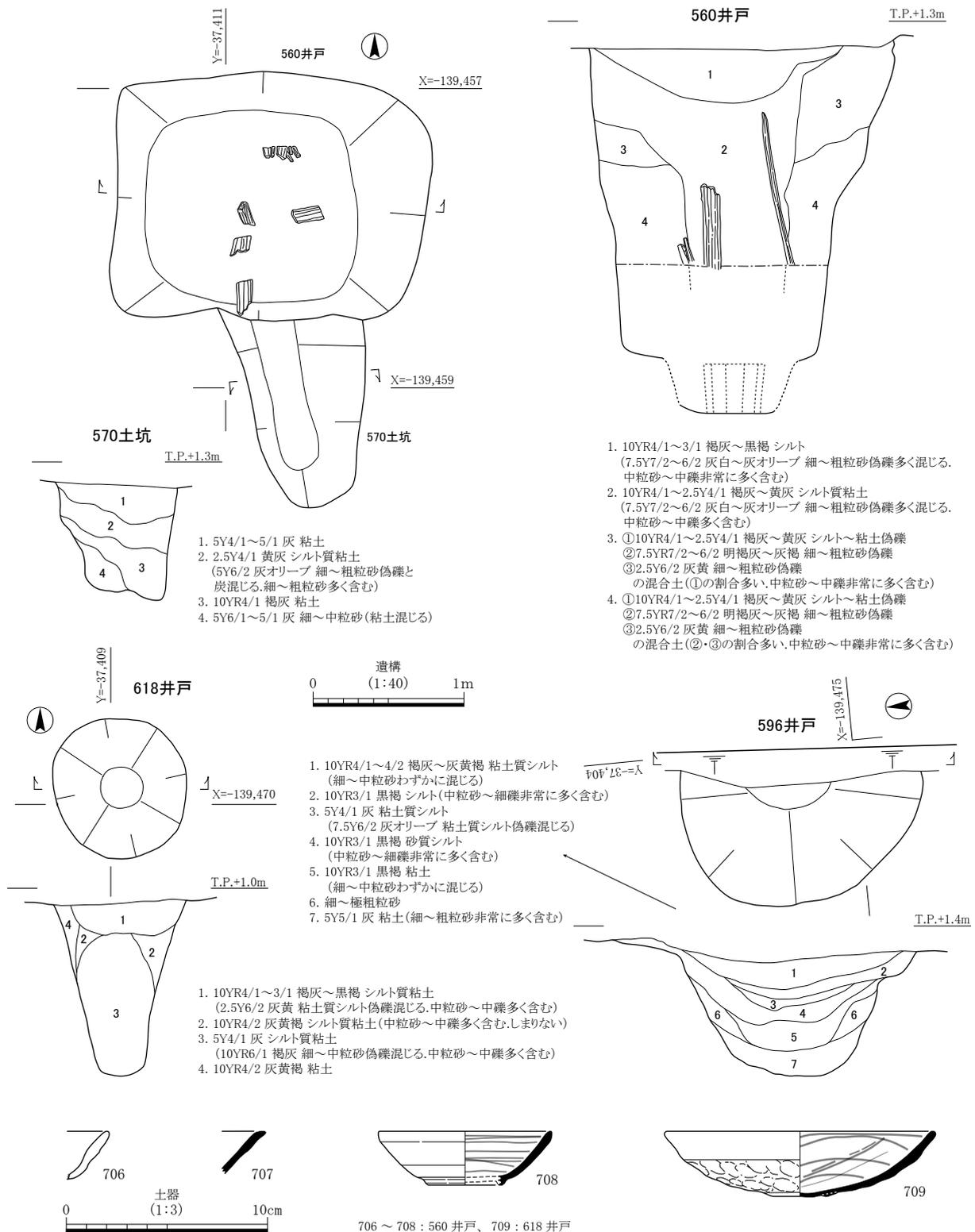
土師器皿、瓦器碗(705)、陶器壺・播鉢などの小片が出土している。705は12世紀末頃の和泉型。見込みの暗文は平行線である。

590溝 上記のとおり559溝の南端部東側に沿う溝である。幅約0.2m、深さ約0.12mである。埋土は細～粗粒砂を多く含む褐灰～灰黄褐色シルトである。

土師器皿、瓦器碗、瓦質土器の小片が出土している。

560井戸 調査区北端に位置する。平面形は長辺2.05m、短辺1.6mの東西にやや長い長方形を呈する。深さは人力掘削で遺構面下1.45mまで掘削したが、危険なため底まで確認することができなかった。埋戻しの際に重機で底の高さを確認し、2.45mの深さであることを確認した。掘方の中心が若干窪んでおり、その底から最下段に埋設されていた集水用の桶が出土した。桶の高さは0.33mであるが、完全に分解しており、直径は明らかでない。井戸枠はすべて抜き取られていたが、その抜き取り穴の中からは枠の外側に貼り付けられていた板材や枠材が数点出土しており、4区8井戸と同様の井戸枠が据えられていたことがうかがえる。その材の寸法から、方形に組まれた枠の内法が約0.65mで、方形枠同士の間隔が約0.45mであったことが復原できる。

土師器皿(706)、瓦器碗(708)、瓦質土器羽釜、東播系須恵器片口鉢、白磁碗(707)、瓦、軽石などが出土している。706は14世紀後半から15世紀前半、707は12世紀後半の所産。708は12世紀末から13世紀前半頃の小型の碗である。



1. 5Y4/1~5/1 灰 粘土
2. 2.5Y4/1 黄灰 シルト質粘土 (5Y6/2 灰オリブ 細~粗粒砂偽礫と炭混じる.細~粗粒砂多く含む)
3. 10YR4/1 褐灰 粘土
4. 5Y6/1~5/1 灰 細~中粒砂(粘土混じる)

1. 10YR4/1~3/1 褐灰~黒褐 シルト (7.5Y7/2~6/2 灰白~灰オリブ 細~粗粒砂偽礫多く混じる.中粒砂~中礫非常に多く含む)
2. 10YR4/1~2.5Y4/1 褐灰~黄灰 シルト質粘土 (7.5Y7/2~6/2 灰白~灰オリブ 細~粗粒砂偽礫多く混じる.中粒砂~中礫多く含む)
3. ①10YR4/1~2.5Y4/1 褐灰~黄灰 シルト~粘土偽礫
②7.5YR7/2~6/2 明褐灰~灰褐 細~粗粒砂偽礫
③2.5Y6/2 灰黄 細~粗粒砂偽礫の混合土(①の割合多い.中粒砂~中礫非常に多く含む)
4. ①10YR4/1~2.5Y4/1 褐灰~黄灰 シルト~粘土偽礫
②7.5YR7/2~6/2 明褐灰~灰褐 細~粗粒砂偽礫
③2.5Y6/2 灰黄 細~粗粒砂偽礫の混合土(②・③の割合多い.中粒砂~中礫非常に多く含む)

1. 10YR4/1~3/1 褐灰~黒褐 シルト質粘土 (2.5Y6/2 灰黄 粘土質シルト偽礫混じる.中粒砂~中礫多く含む)
2. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質粘土(中粒砂~中礫多く含む.しりまない)
3. 5Y4/1 灰 シルト質粘土 (10YR6/1 褐灰 細~中粒砂偽礫混じる.中粒砂~中礫多く含む)
4. 10YR4/2 灰黄褐 粘土

図 112 6区 井戸・土坑平面・断面 及び 出土遺物

596 井戸 調査区南半の東壁際に位置する。東半が調査区外であるが、平面形は直径約 1.6 mの円形であったと復原できる。深さは 0.8 mを測る。

618 井戸 調査区中央やや南寄りに位置する。11 溝埋土掘削後の溝底面で検出した。平面形は直径 0.85 ~ 0.9 mの円形で、深さは 1.15 mを測る。

土師器皿、瓦器椀 (709)、東播系須恵器片口鉢などが出土している。709は 13 世紀後半の和泉型で、

見込みの暗文は平行線である。

556 土坑 調査区中央西壁際に位置する。555 溝と重複し、溝を切る。平面形は直径 1.0 ～ 1.1 m の方形に近い円形を呈する。深さは 0.75 m である。

558 土坑 調査区中央やや西寄りに位置する。11 溝の肩部に重複し、溝を切る。平面形は直径約 1 m の方形に近い円形を呈する。底の中央が一段深い二段掘りとなっており、深さは 0.95 m を測る。

土師器皿、瓦器椀（717）、東播系須恵器片口鉢（718）などが出土している。717 は 13 世紀末から 14 世紀前半、718 は 12 世紀後半から 13 世紀前半頃のもの。

568 土坑 調査区中央西寄りの、11 溝西肩部に位置する。遺構の輪郭は 11 溝の埋土上面で検出できた。平面形は直径 0.8 ～ 0.85 m の方形に近い円形を呈する。深さは 0.15 m である。

土師器皿、瓦器椀の小片が出土している。瓦器椀は 12 世紀末頃のもの。

569 土坑 調査区北半の西壁際に位置する。552 溝の一部が張り出したように検出できたことから、溝が土坑が重複していると認識できたが、埋土が非常によく似ていたため遺構の輪郭は不明瞭で、どちらが切っているのか判断が難しかった。溝を少しずつ掘り下げても土坑の輪郭が現れてこなかったことや、検出時の状況から、溝に切られていたと考えている。平面形は長径 1.4 m、短径 0.77 m の東西に長い楕円形で、深さは 0.6 m を測る。壁面はややオーバーハング気味である。

土師器皿（714）、瓦器椀、須恵器、瓦、木製品などが出土している。土師器皿と瓦器椀はともに 13 世紀代のものである。木製品は小型の曲物の底板片である。

570 土坑 560 井戸の南側に位置する。井戸と重複し、北端部が井戸に切られる。長径 1.4 m 以上、短径 0.8 m 前後の南北に長い楕円形で、深さは深く 0.75 m を測る。

土師器皿（721・722）、瓦器椀の小片のほか、瓦、砥石（723）、軽石が出土している。721 は 12 世紀後半から 13 世紀前半、722 は 15 世紀前半の所産。瓦器椀は 12 世紀中葉頃のものである。

585 土坑 調査区北壁際に位置する。北辺が調査区外のため全体規模は不明であるが、平面形はおそらく

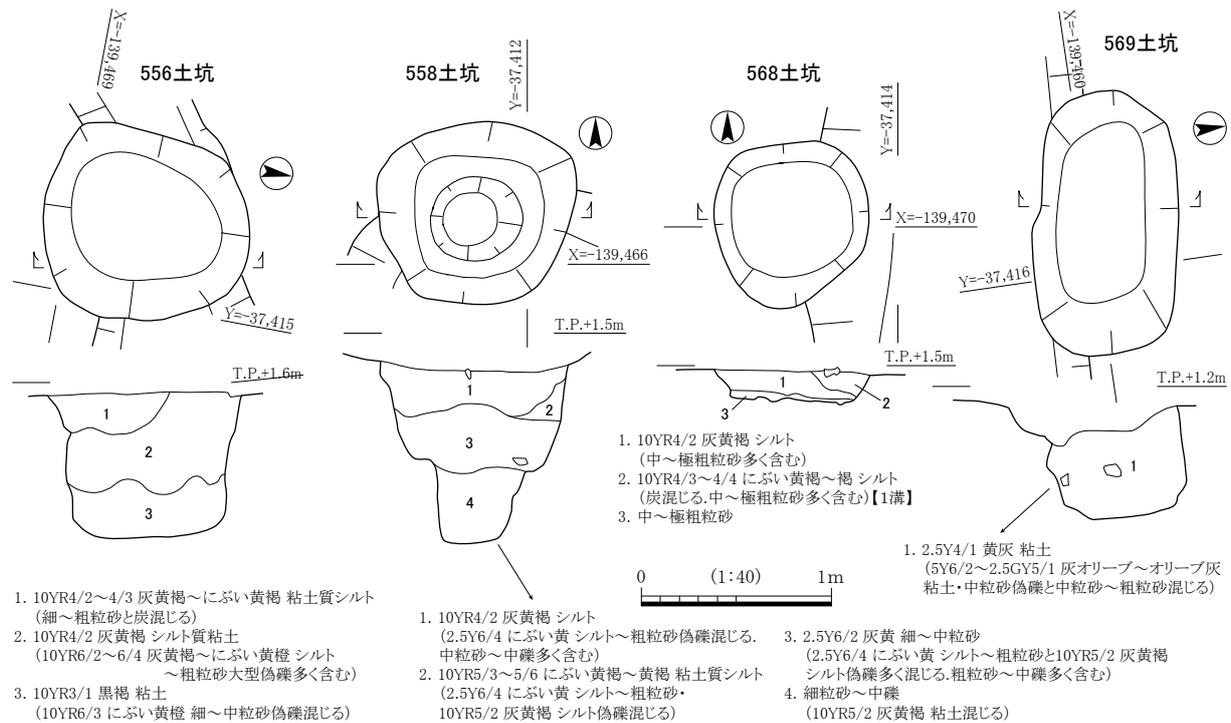


図 113 6 区 土坑平面・断面 (1)

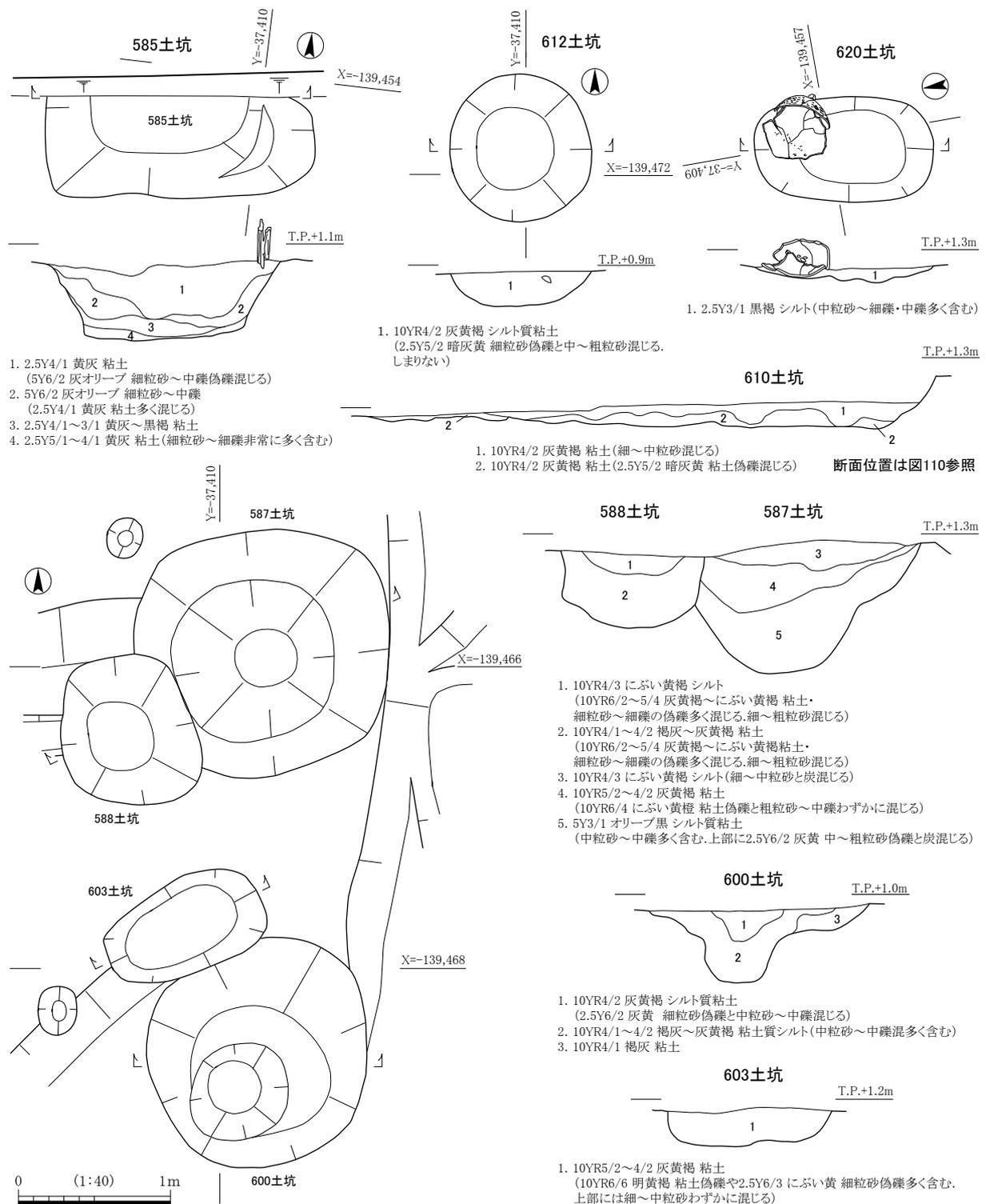


図 114 6区土坑平面・断面(2)

東西に長い長方形であったと推測できる。南北は0.7 m以上、東西は1.78 mを測る。深さは0.5 mである。

土師器皿、瓦器碗の小片が出土している。

587 土坑 調査区の中央、11 溝の肩部に位置する。遺構北辺の輪郭は土色の淡い違いによりかすかに認識できたが、11 溝と重複する南側は不明瞭で、輪郭を検出することができず、溝埋土掘削後に確定した。よって、11 溝に切られていたと判断した。次に報告する 588 土坑と重複し、切られる。平面形は直径約 1.6 ～ 1.7 m の方形に近い円形を呈する。深さは中心が一段深く 0.85 m を測る。

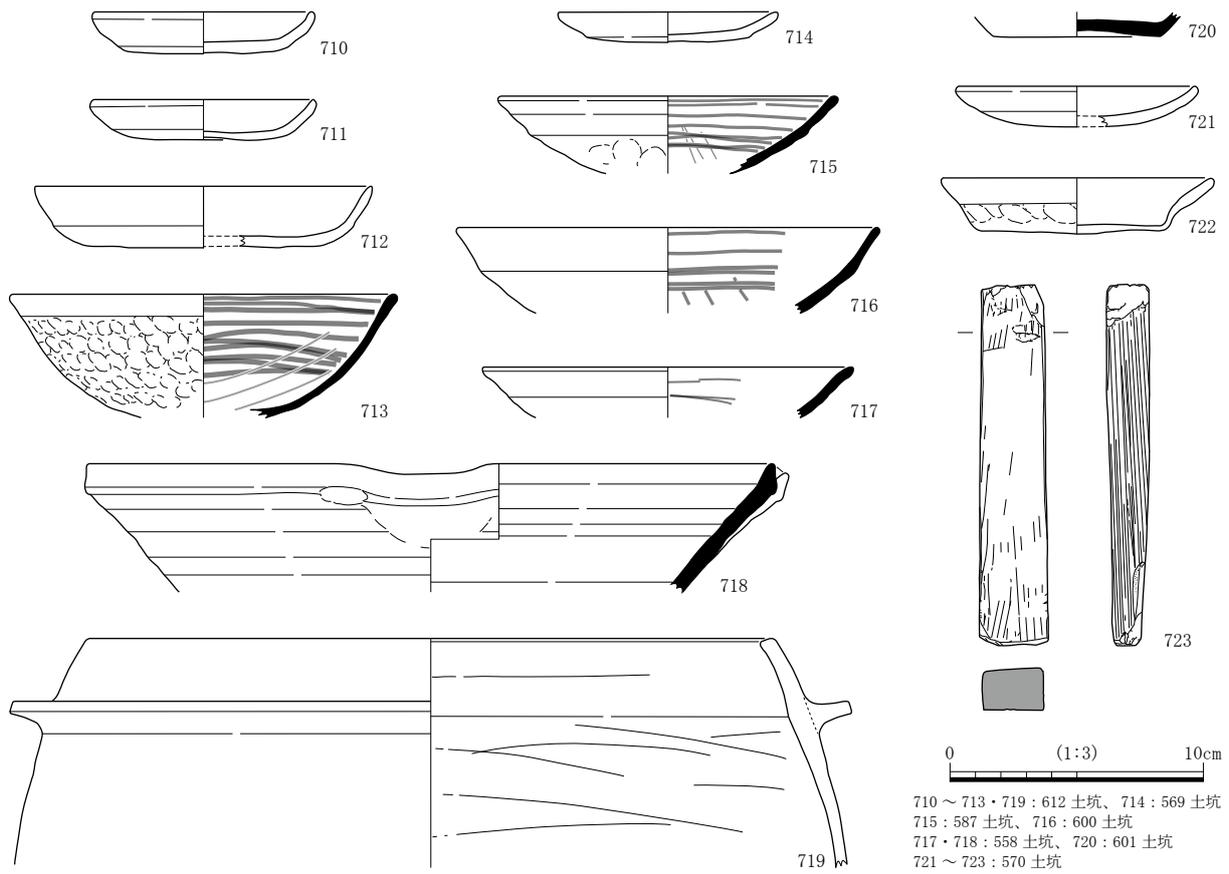


図 115 6区土坑出土遺物

土師器皿片、瓦器碗（715）が出土している。715 は 13 世紀後半の和泉型であるが、12 世紀後半の大和型も含まれている。

588 土坑 調査区の中央に位置する。587 土坑の西側に僅かに重複し、587 土坑を切る。平面形は長辺 1.0 m、短辺 0.88 m のやや歪んだ長方形を呈する。深さは 0.5 m である。587 土坑と同じく、11 溝の埋土掘削後の面で検出している。

土師器皿、瓦器碗、瓦質土器羽釜の小片が出土している。

600 土坑 調査区の中央、587 土坑の南側に位置する。11 溝埋土掘削後の溝底面で検出した。平面形は直径 1.45 ~ 1.5 m の円形を呈する。底部は周囲が浅く、南西寄りがさらに一段窪む。深さは周囲の浅い箇所が 0.15 m、中心の深い箇所が 0.48 m である。

土師器皿・羽釜、瓦器碗（716）、須恵器、瓦などの小片が出土している。716 は 13 世紀前半の和泉型。

603 土坑 調査区の中央、600 土坑の北側に接する。平面形は長径 1.07 m、短径 0.62 m の東西に長い長方形気味の楕円形を呈する。深さは 0.2 m である。

610 土坑 11 溝の東裾部に位置する。11 溝の項で報告したとおり、11 溝の東裾で検出した長方形の土坑状の窪み 3 基のうちもっとも南側を 610 土坑とした。平面規模は、最も北側が長さ 4.6 m、幅 1.5 m、中央が長さ 3.55 m、幅 1.4 m で、南側の 610 土坑が長さ 3.8 m、幅 1.4 m である。非常に浅く、11 溝底から僅かに窪む程度であった。

612 土坑 調査区の中央、600 土坑の南側に位置する。11 溝埋土掘削後の溝底面で検出した。平面形は直径約 0.9 m の円形で、深さは 0.23 m を測る。

土師器皿（710 ~ 712）・羽釜（719）、瓦器碗（713）が出土している。いずれも 12 世紀後半から 13

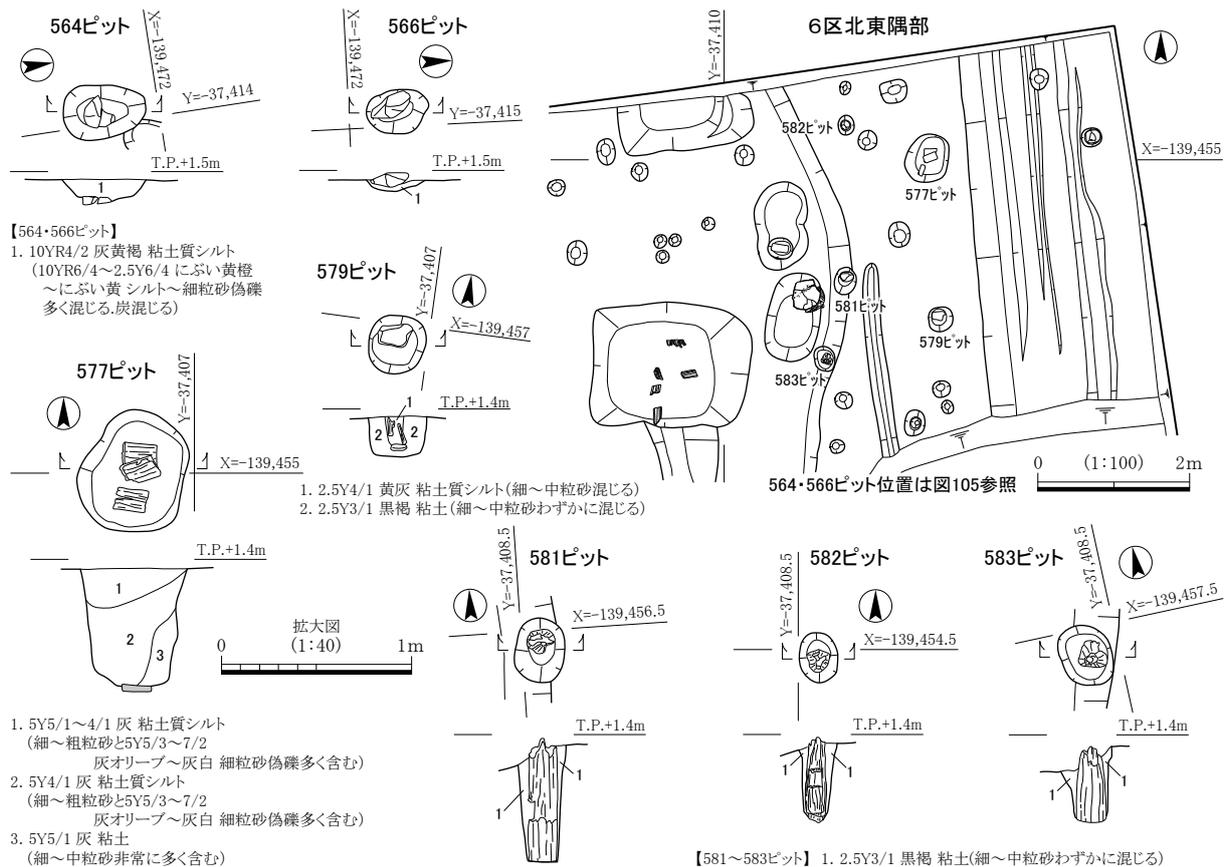


図 116 6区ピット平面・断面

世紀前半頃のものである。瓦器碗は和泉型で、内面のヘラミガキの後に見込みの平行線暗文を施す。

619 土坑 調査区南端の西壁際に位置する。520 溝の底部で検出した土坑で、西半は調査区外となる。平面形は直径 0.65 m 強の円形に復原できる。深さは 0.8 m を測る。

620 土坑 調査区の北半、560 井戸の東側に近接する。平面形は長径 1.15 m、短径 0.7 m の南北に長い楕円形を呈する。深さは 0.1 m と浅いが、北半部から須恵器甕の大型片が出土した。

東播系須恵器の甕である。12 世紀後半頃のものと考えているが、底部片であり詳細は不明。器壁は薄く、外面は平行線タタキを矢羽根状に重ねる。内面にはナデ消し残った当て具痕がみられる。

ピットは調査区北東隅部と西壁際に集中する。西壁際には 5 区と同様に、基盤層の上ににぶい黄色のシルト～細粒砂、あるいは粘土の大型偽礫が多く混じる灰黄褐～暗灰黄色のシルト質粘土の整地層があり、ピットはその上面から掘り込まれていた。なお西壁際のピットのうち、11 溝の西肩部と重複するピットについては、溝埋土掘削後の面で検出している。北東隅部のピットについては柱根が残るものや、柱底に敷く礎石や礎板が検出できるものが多く認められた。次節で報告する掘立柱建物 2 のような小規模な建物が建っていたと考えられるが、建物として復原できるものはない。以下に遺存状態のよいものについて報告する。

564 ピット 11 溝の西側に位置する。平面形は長径 0.43 m、短径 0.28 m の楕円形を呈する。深さは 0.12 m で、底に礎石を据える。

土師器皿の小片が出土している。

566 ピット 11 溝の西側、564 ピットの西側に位置する。平面形は長径 0.32 m、短径 0.22 m の楕円形で、深さは 0.05 m を測る。底に礎石を据える。

土師器皿と瓦器碗の小片が出土している。

577ピット 調査区北東隅に位置する。平面形は長径 0.65 m、短径 0.55 m のやや大型の歪んだ楕円形を呈する。深さは 0.65 m と深く、底に礎板を据える。礎板は 2 箇所に分かれており、柱の建て替えがあったことがうかがわれる。掘方が大型なのはその時の掘り直しによるためであろうか。

土師器皿と瓦器碗の小片が出土している。瓦器碗は 12 世紀後半のものである。

579ピット 調査区北東隅、577ピットの南側に位置する。平面形は直径 0.3 m の円形で、深さは 0.2 m を測る。底に礎石を据える。木片を多く含む柱痕跡が明瞭に残っていた。

土師器皿の小片が出土している。

581ピット 調査区北東隅、577ピットの南西側に位置する。平面形は長径 0.33 m、短径 0.25 m の楕円形を呈する。深さは 0.65 m で、柱根が残っていた。柱根は直径 0.14 m、長さ 0.63 m で、側面にほかの部材と組み合わせた切り欠きがみられる。転用材か。

582ピット 調査区北東隅、577ピットの南側に位置する。平面形は長径 0.25 m、短径 0.2 m の楕円形を呈する。深さは 0.42 m で、柱根が残っていた。柱根は直径 0.1 m、長さ 0.45 m で、側面にほかの部材と組み合わせた切り欠きがみられる。転用材か。3区 272ピット出土の柱根と比較するため、この柱根も加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。結果、11世紀中葉から12世紀中葉以降の伐採であるという分析結果を得た。この成果については第5章で報告している。

土師器皿の小片が1点出土している。

583ピット 調査区北東隅、577ピットの南側に位置する。平面形は長径 0.35 m、短径 0.25 m の楕円形を呈する。深さは 0.4 m で、柱根が残っていた。柱根は直径 0.15 m、長さ 0.4 m を測る。

第8節 7～9区の成果

第一中学校跡地の北辺を通る東西方向の道路を隔てて5・6区の北側に位置する。もっとも普賢寺古墳に近い場所にあたる。7～9区はL字状の狭い調査区で、面積は3調査区あわせて465㎡である。本来な

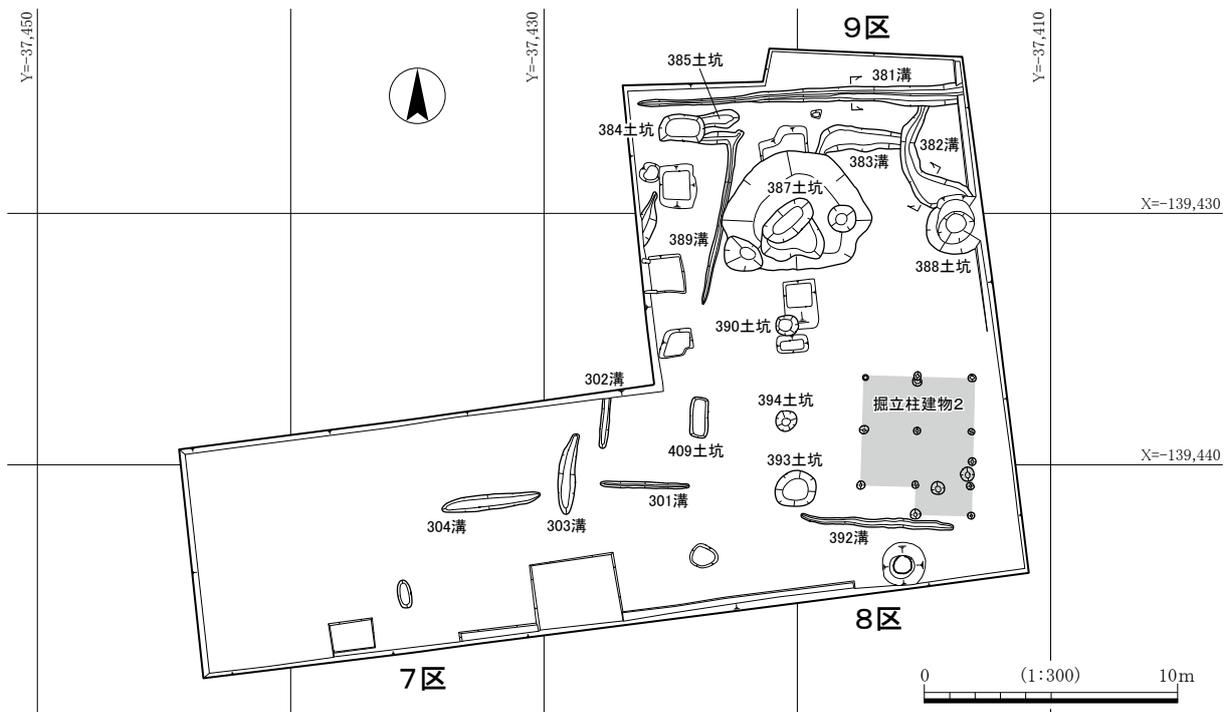


図 117 7～9区 検出遺構全体平面

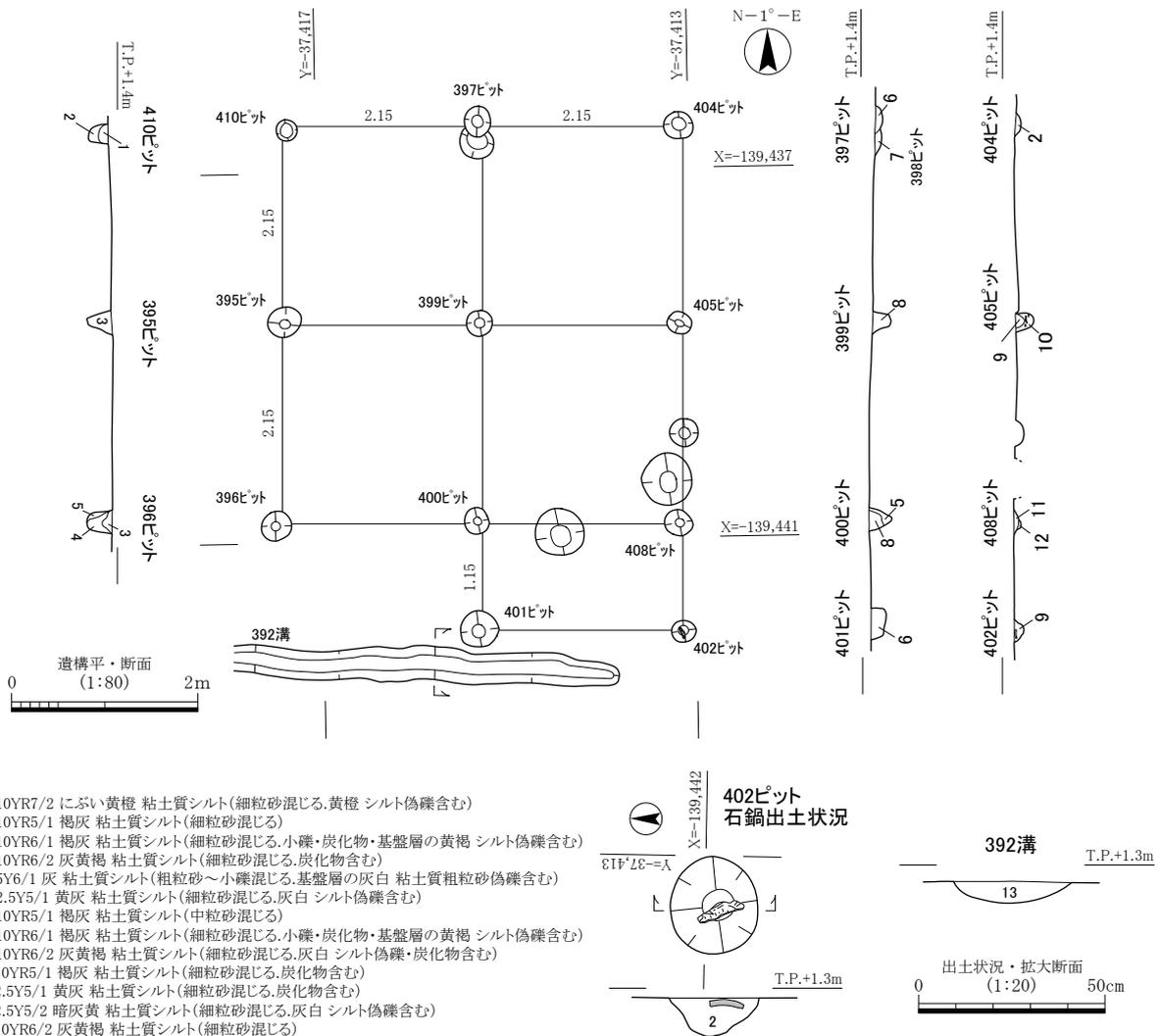


図 118 掘立柱建物 2 ・溝平面・断面

らば分割せずに調査するところであるが、排土を場外へ搬出することができず、場内に仮置きする必要があったため、3分割せざるを得なかった。7区はこのうちの西端に位置し、調査面積は175㎡。8区は7区の東側で、調査面積は125㎡。9区は8区の北側で、調査面積は165㎡である。

上記のとおり狭い調査区で、連続する遺構もあることから、三つの調査区をまとめて報告する。

検出した主な遺構は、掘立柱建物1棟のほか、溝、土坑などである。その多くは8・9区に分布しており、7区は小規模な溝が数条みられる程度で、8・9区に比べ遺構は稀薄である。

掘立柱建物 2 8区に位置する。東西2間(4.3m)、南北2間(4.3m)の小規模な総柱建物で、建物の軸は僅かに1度東偏する。柱間寸法は東西・南北ともに2.15m等間で、東寄り1間目の南面にはさらに1.15mの張り出しがみられる。建物への入口にあたる施設と考えられる。柱穴の平面形は直径0.2～0.3m程度のほぼ円形で、深さは0.05m程度の浅いものから0.25m程度のものまでまちまちである。

395ピットからは土師器皿、瓦器碗の小片が、405ピットからは土師器皿(724)、瓦器碗のほか土師器煮炊具片が出土している。どちらのピットからも12世紀後半の大和型瓦器碗が出土しているが、405ピットには和泉型も含まれている。こちらはやや新しく13世紀前半頃のものか。724も13世紀代に収まる。南張り出し部の402ピットからは石鍋片(725)が出土している。上記ピット出土の土器と同時期のものであろう。

381 溝 9区の北辺に位置する。掘立柱建物と振れを揃える東西方向の溝である。幅は西半部では0.2～

0.25 mであるが、東半部では南肩部が二段掘りのような状態で広がっており、0.8 m程度となる。深さは約0.1 mで、埋土は中粒砂や炭化物が混じる暗灰黄色粘土質シルトである。

土師器皿（726・727）や瓦器椀（729～733）・皿（728）の完形品が複数個体出土している。730はやや古手だが、いずれも12世紀後半のもので、瓦器椀には大和型と和泉型が混在する。729～731は大和型と判断したが、729は楠葉型かもしれない。729・730の見込みの暗文は螺旋状。732・733は和泉型で、見込みの暗文は平行線である。

382 溝 9区の北東隅に位置する。「し」字状に湾曲する溝で、北端部は上記381溝と重複する。図面上は381溝が切っているように表現しているが、実際には381溝を切っていた。南端部は388土坑と重複するが、重複する部分がちょうど攪乱と重なっており、重複関係は明らかでない。幅は北半部では0.35～0.65 m程度であるが、388土坑と重なる付近では1.25 mほどに広がる。深さは約0.15 mで、埋土は上層が細～中粒砂が混じる灰黄褐色粘土質シルト、下層が細粒砂や明黄褐色のシルト偽礫が混じる灰黄色粘土質シルトである。

土師器皿、瓦器椀、瓦質土器羽釜などの小片が出土している。

383 溝 9区の北半部、381溝の南側に位置する。381溝に並行する東西方向の溝で、東端が382溝と重複し、382溝に切られる。幅は0.6～1.0 m、深さは0.1 m強で、埋土は中粒砂やシルト偽礫・炭化物などを含む黄褐色粘土質シルトである。

青磁碗（735）のほか、土師器皿、瓦器椀の小片が出土している。瓦器椀は12世紀後半頃のものである。735もほぼ同時期のもので、外面に櫛目文、内面に櫛目文とヘラ状工具による施文がみられる。同安窯系。

389 溝 9区西半部に位置する。南北方向の溝で、約10度東偏する。幅は0.25 m前後で、深さは0.05 mと浅い。北端は385土坑の南側に並列する土坑状の窪みに接合する。埋土は中粒砂やシルト偽礫を含む灰オリーブ色粘土質細粒砂である。

土師器皿片や瓦器椀（734）が出土している。734は12世紀中葉の所産。楠葉型か。

392 溝 8区の掘立柱建物2の南側に位置する。掘立柱建物と振れを揃える東西方向の溝で、幅は0.2～

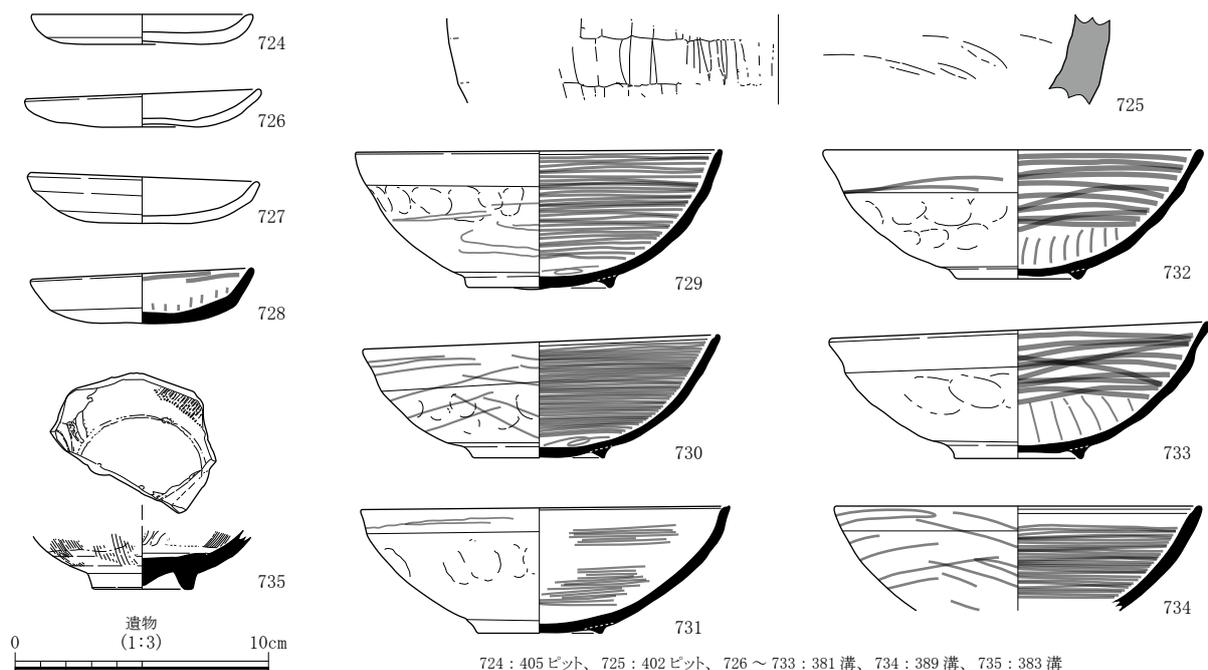


図119 8・9区溝・ピット出土遺物

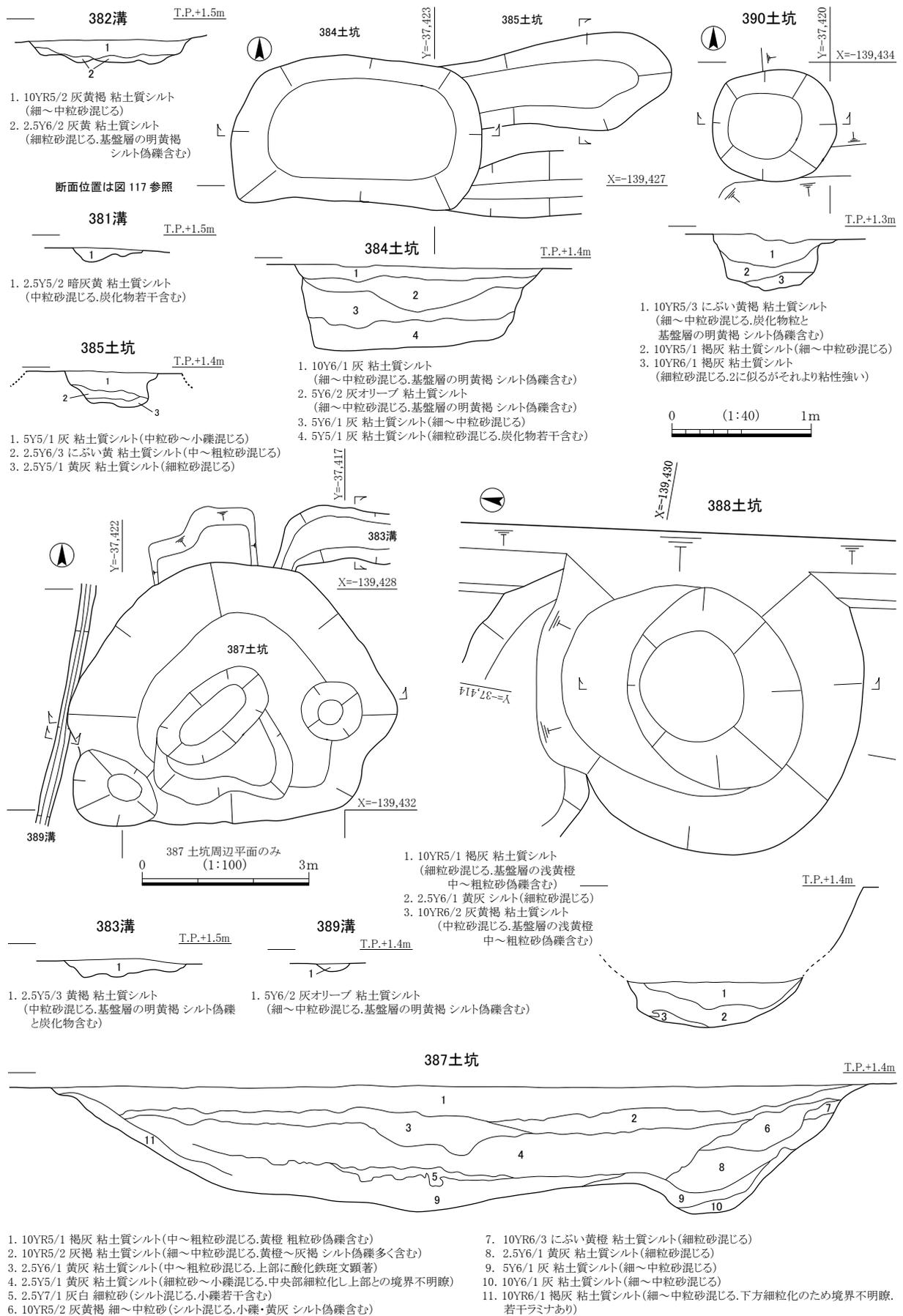


図 120 9区 溝・土坑平面・断面

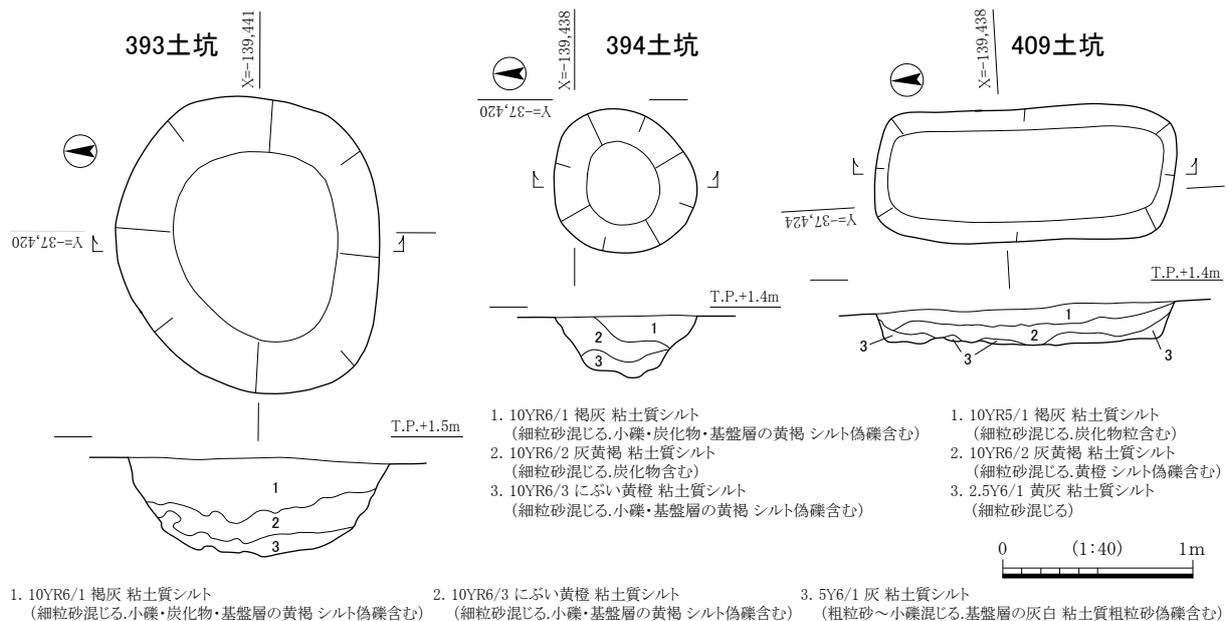


図 121 8区 土坑平面・断面

0.3 mを測る。深さは 0.05 m程度で浅い。埋土は細粒砂が混じる灰黄褐色粘土質シルトである。

7区の 301～304 溝からも、土師器皿、瓦器椀、瓦などの小片が出土している。瓦器椀には高台がしっかりした 12 世紀後半のものもあるが、13 世紀前半頃のものも含まれている。

以上の溝は、大きく 2 種に分類できる。一つは 8 区の 392 溝や 9 区の 381 溝、また 7 区検出の数条の溝のように直線的で、東西・南北方向にのびるもの。もう一つは 9 区の 382 溝のように明確な方向性をもたない曲線的なものである。出土遺物や遺構の重複関係から、前者の溝が後者より古いことが明らかである。また前者は掘立柱建物 2 の周囲に、建物と軸を揃えるように分布していることから、建物に関連する区画溝のような性格の遺構であった可能性が考えられる。

384 土坑 9 区の北西隅に位置する。385 土坑と重複し、385 土坑を切る。平面形は長辺 1.8 m、短辺 1.05 m の東西に長い長方形を呈する。深さは 0.6 m である。

土師器皿、瓦器椀の小片が出土している。瓦器椀は 12 世紀後半のものである。

385 土坑 上記 384 土坑の東側に接し、384 土坑に切られる。平面形は長径 1.6 m 以上、短径 0.5～0.7 m の東西に長い楕円形を呈する。深さは 0.25 m である。

土師器皿、瓦器椀、土師器鍋の小片が出土している。瓦器椀は 12 世紀後半のものである。

387 土坑 9 区の中央に位置する。大型の土坑で、平面形は東西 5.9 m、南北 4.7 m の歪んだ楕円形を呈する。深さは 0.9 m を測る。

土師器皿 (736・737)・羽釜、瓦器椀 (741～743)・皿 (738～740) のほか、瓦質土器足釜 (746)・鉢、東播系須恵器片口鉢 (747)、白磁碗 (744・745) など多くの土器が出土しているが、瓦は含んでいない。743 はやや古く、密なヘラミガキ調整を施す 12 世紀中葉のものであるが、それ以外は 12 世紀後半から 13 世紀前半に収まるものである。瓦器皿は 3 点ともに和泉型であるが、椀には楠葉型と和泉型が混在する。741 は和泉型で、742・743 は楠葉型。見込みの暗文は和泉型が平行線、楠葉型が螺旋状で、743 の見込みには、ヘラミガキ・暗文に先行するハケ目が認められる。745 は体部が直線的に開く 12 世紀後半の碗。内面見込みの釉を環状に剥ぎ取る。

388 土坑 9 区の東壁際に位置する。大部分が攪乱により失われているが、平面形は直径 2.3 m 程度の円

形に復原できる。深さは 1.0 m である。

土師器皿 (749)、瓦器椀 (750)、瓦質土器足釜、東播系須恵器片口鉢 (748) など、387 土坑とはほぼ同時期の土器が出土している。

390 土坑 9区 387 土坑の南側に位置する。平面形は直径 0.8 ~ 0.9 m の円形で、深さは 0.4 m を測る。

土師器皿片や瓦器椀 (751) が出土している。751 は 12 世紀中葉の大和型である。

393 土坑 8区の掘立柱建物 2 の西側に位置する。平面形は長径 1.55 m、短径 1.4 m の歪んだ楕円形を呈する。深さは 0.5 m である。

瓦器椀片 1 点と土師器皿 (752) が多く出土している。752 や瓦器椀は 12 世紀後半のものである。

394 土坑 8区 393 土坑の北側に位置する。平面形は直径 0.75 ~ 0.8 m の円形で、深さは 0.33 m を測る。

409 土坑 8区 394 土坑の西側に位置する。平面形は長辺 1.55 m、短辺 0.7 m の南北に長い長方形を呈する。深さは 0.2 m である。

13 世紀代の土師器皿 (753・754) が多く出土している。

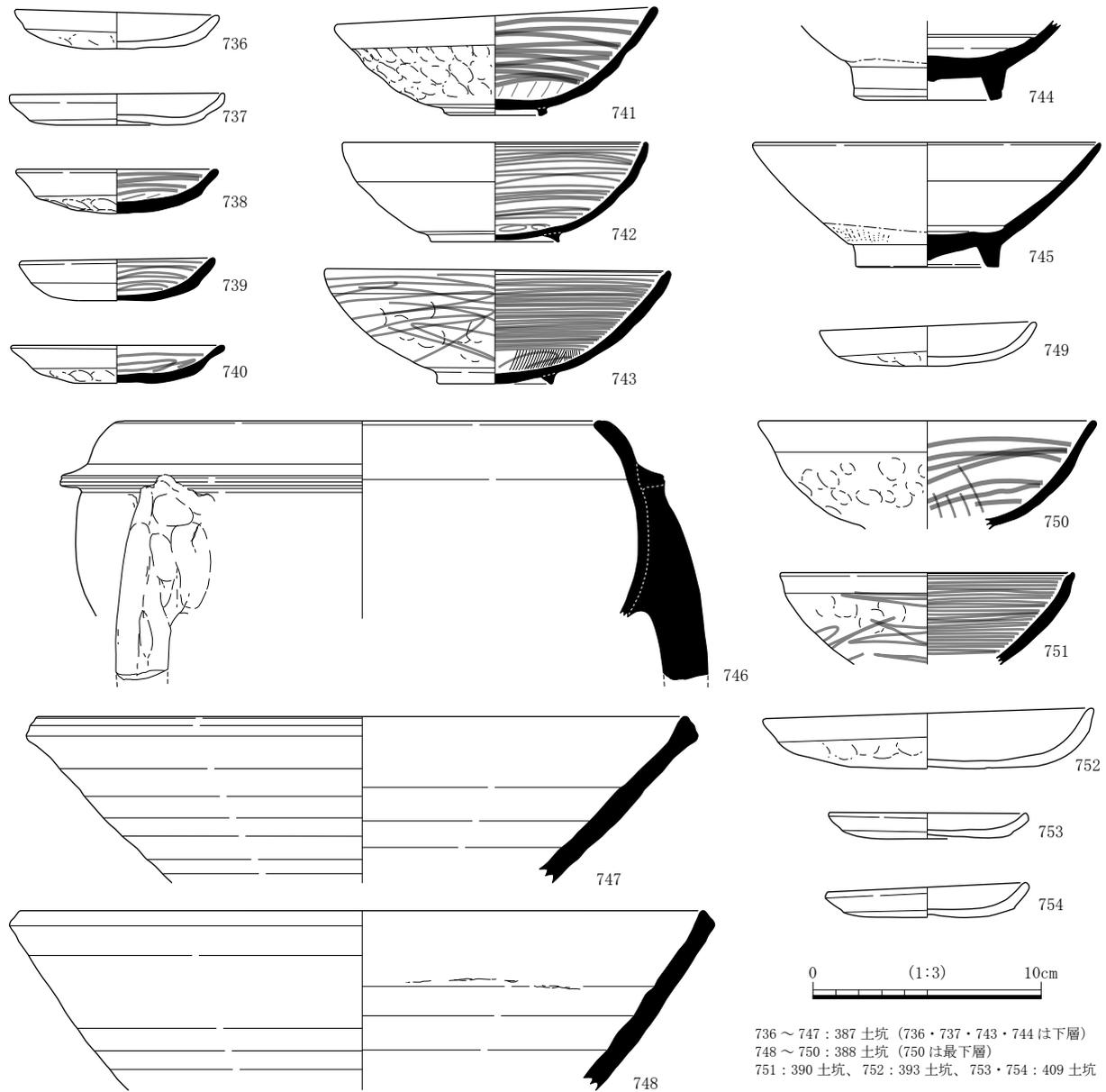


図 122 8・9区土坑出土遺物

参考文献

出土した土器・瓦の時期区分と器種分類については、主に以下の文献を参考に記述した。

- ・田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
- ・小森俊寛 2005 『京から出土する土器の編年の研究』 京都編集工房
- ・中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- ・太宰府市教育委員会 2000 『大宰府条坊跡 XV 一陶磁器分類編一』 太宰府市の文化財 第 49 集
- ・中世土器研究会編 2014 『第 33 回 中世土器研究会 東播系須恵器（2）一編年と分布から考える一』
- ・藤澤良祐 2008 『中世瀬戸窯の研究』 高志書院
- ・乗岡 実 2000 「備前焼播鉢の編年について」『第 3 回 中近世備前焼研究会資料』
- ・山崎信二 2000 『中世瓦の研究』 奈良国立文化財研究所学報 第 59 冊 奈良国立文化財研究所

註

- 1) 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991 『京都府遺跡調査報告書』第 15 冊
なお、古墳時代の遺物については、京都橘大学 一瀬和夫氏に実見していただき、個々について細かくご指導いただいた。
- 2) 京都府 1925 「京都市 第一 法勝寺遺跡」『京都府史蹟勝地調査会報告』第六冊
報告された拓影の中にも、酷似した五輪塔文が縦に 3 段（以上）並ぶ平瓦がみられる。上段側の地輪と下段側の空輪との隙間がほとんどない点もよく似ている。
- 3) 羽曳野市教育委員会 1992 『羽曳野市駒ヶ谷地区埋蔵文化財試掘調査報告書』
- 4) 羽曳野市教育委員会 井原 稔氏を通じ、市保管の瓦を実見させていただいた。
- 5) 尾上 実 1999 「資料紹介―門真市普賢寺跡出土の密教法具」『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報』2 大阪府教育委員会
- 6) 瓦器碗のうち、口縁部を丸く収め、ヘラミガキが 2～3 mm 程度と太く雑なものについては、和泉型との判別が容易であったが、それ以外のヘラミガキが 0.5～1.5mm 程度の細いものについては、大和型か楠葉型か厳密に分類できていない。13 世紀前半頃までの、口縁端部に段状の沈線がめぐり、ヨコナデによって口縁部が外反するものについては大和型と判断したが、口縁部の外反が弱いものや、それらの特徴がない新しい時期のものについては両者の判別が難しく、誤認があるかもしれない。資料を扱う際には、再度慎重な検討が必要と思われる。
- 7) 元興寺文化財研究所 1982 『中・近世瓦の研究 一元興寺篇一』
- 8) 門真市教育委員会 2000 『普賢寺古墳』
- 9) 毎日新聞社 1998 『国宝・重要文化財大全』5 工芸品（上巻）文化庁監修



発掘作業風景（3区1溝掘削中）

第5章 自然科学分析

第1節 分析の目的

今回の調査では、銅製密教法具の蓋や、五輪塔・宝篋印塔、鬼瓦を含む瓦など、寺院の存在をうかがわせる遺物が多数出土し、遺構では南北2面に廂をもつ東西9間以上の大型掘立柱建物をはじめ、周辺からは柱根を残す柱穴や、柱穴底に礎板や礎石を敷くものも多くみつかった。大型掘立柱建物は「普賢寺」の成立過程を考える上で非常に重要な施設であるが、柱穴からは遺物がほとんど出土しておらず、その存続時期の特定ができていない。

そこで、大型掘立柱建物と重複する掘立柱建物の柱穴に残っていた柱根とともに、やや隔てた北方6区検出の柱根、また大型掘立柱建物に近接する溝から出土した木榿を分析することにより、大型掘立柱建物の存続時期を推定することとした。なお、これらの柱根や木榿には辺材が残っておらず、年輪年代測定には不向きであったため、今回は加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施することとし、株式会社パレオ・ラボに分析を委託した。



試料 No.1 2区 454 溝出土木榿



試料 No.2 6区 582 ピット 出土柱根



試料 No.3 3区 272 ピット 出土柱根



図 123 分析試料と出土位置

第2節 試料の測定と分析方法

分析する試料は、2区454溝出土の木毬（試料No.1）、6区582ピット出土の柱根（試料No.2）、4区272ピット出土の柱根（試料No.3）の合計3点で、それぞれの情報・調製データは表2のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定し、得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表3には、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行なって暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を、図124には暦年較正結果をそれぞれ示した。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行なうために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示すものである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730 \pm 40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示している。

第3節 測定結果

測定結果（以下の較正年代は 2σ の値）は、2区454溝出土の木毬（試料No.1）の¹⁴C年代が1570 \pm 15BP、較正年代が433～552calADであった。岸本（2011）による古墳時代から飛鳥時代の土器型式及び時期区分と暦年代の関係にもとづくと、木毬の年代値は、古墳時代中期～後期に対比される。

表2 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-43885	試料No.1 調査区：2区 遺構：454溝	種類：生材（散孔材） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L、水酸化ナトリウム：1.0mol/L、塩酸：1.2mol/L）
PLD-43886	試料No.2 調査区：6区 遺構：582ピット	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L、水酸化ナトリウム：1.0mol/L、塩酸：1.2mol/L）
PLD-43887	試料No.3 調査区：3区 遺構：272ピット	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L、水酸化ナトリウム：1.0mol/L、塩酸：1.2mol/L）

柱材である6区582ピット出土の柱根（試料 No.2）と、3区272ピット出土の柱根（試料 No.3）については、試料 No.2 の ^{14}C 年代が 935 ± 15 BP、較正年代が 1039～1158 cal AD、試料 No.3 の ^{14}C 年代が 615 ± 15 BP、較正年代が 1303～1397 cal AD であった。児玉編（2018）の古墳時代以降の時期区分をふまえると、試料 No.2 は平安時代中期～後期、試料 No.3 は鎌倉時代～室町時代前期に対比される。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回試料は、すべて最終形成年輪が確認できない部位不明の木片であり、測定結果は古木効果の影響を受けている可能性がある。その場合、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは測定結果よりもやや新しい年代と考えられる。

（本章は、株式会社 パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ 伊藤茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・辻康男により作成された分析結果報告書を、本書に合わせて編集したものである。）

表 3 放射性炭素年代測定 及び 暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (0/00)	暦年較正年代 (y r BP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (y r BP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-43885 試料 No.1	-22.28 \pm 0.15	1569 \pm 16	1570 \pm 15	437-463 cal AD (26.97%) 476-498 cal AD (25.66%) 512-513 cal AD (0.72%) 532-546 cal AD (14.92%)	433-470 cal AD (32.35%) 472-552 cal AD (63.10%)
PLD-43886 試料 No.2	-25.56 \pm 0.16	937 \pm 16	935 \pm 15	1045-1053 cal AD (7.21%) 1061-1086 cal AD (18.57%) 1093-1105 cal AD (10.08%) 1119-1156 cal AD (32.41%)	1039-1111 cal AD (55.17%) 1112-1158 cal AD (40.28%)
PLD-43887 試料 No.3	-25.42 \pm 0.16	613 \pm 17	615 \pm 15	1306-1326 cal AD (32.50%) 1351-1364 cal AD (19.68%) 1384-1395 cal AD (16.09%)	1303-1367 cal AD (74.95%) 1380-1397 cal AD (20.50%)

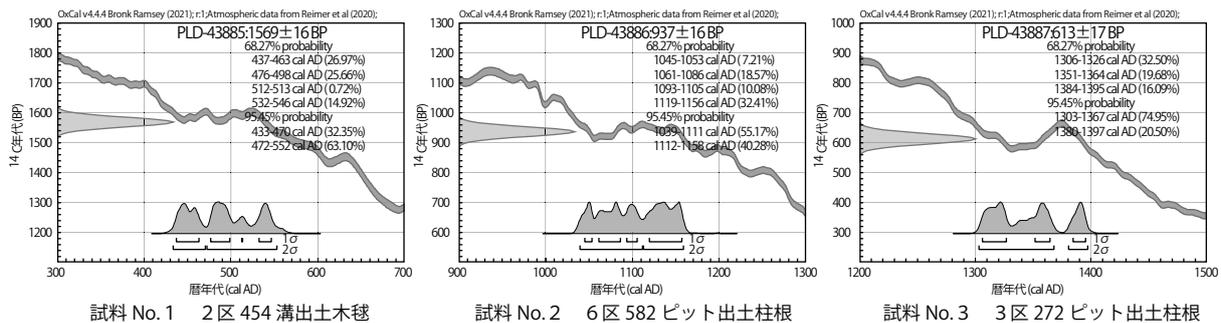


図 124 暦年較正結果

引用・参考文献

- ・ Bronk Ramsey, C. 2009 「Bayesian Analysis of Radiocarbon dates」 『Radiocarbon』 51 (1)
- ・ 岸本直文 2011 「古墳編年と時期区分」 『古墳時代の考古学1 古墳時代の史の枠組み』 一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編 同成社
- ・ 児玉幸多 2018 『標準日本史年表』 吉川弘文館
- ・ 中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」 『日本先史時代の ^{14}C 年代』 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編

日本第四紀学会

第6章 総括

京阪古川橋駅北側で実施されたこれまでの調査では、多くの瓦とともに金銅僧形坐像や密教法具、柿経や絵馬など中世寺院の存在を示すさまざまな遺物が出土しており、今回の調査対象地となった市立第一中学校跡地を中心とした範囲が、諸史料に登場する中世寺院「普賢寺」の中心部だったのではないかと考えられていた。また調査地の北東部に市内唯一の古墳である普賢寺古墳が近接しており、中学校跡地で実施された事前の試掘調査でも埴輪片が多く出土していたことから、今回の調査地内から新たな古墳が発見される可能性も指摘されていた。このように今回の調査では、古墳から中世寺院までの非常に重要、且つ貴重な遺構が発見されることが期待された。

調査の結果、大きく2時期の遺構を確認した。5世紀後半から6世紀後半（古墳時代中期後半から後期後半）の遺構と、12世紀中頃から15世紀（平安時代末期から室町時代）の遺構である（図127）。古墳時代の遺構は2区から4区の範囲に分布する。

古墳 3区北端から4区南東部にかけて弧を描くようにめぐる1溝を検出した。15世紀までの遺物を多く包含していることから、中世後半まで機能していたことは確実であるが、須恵器や埴輪など5世紀後半の遺物がまとまって出土していることから、もともとは古墳の周溝だったと考えている。1溝で囲まれた内側、つまり墳丘にあたる部分は、3区北壁際西端から4区に東壁際にかけて一部が島状に残っているが、大部分は調査区外であり、また後世の攪乱が著しく、埴輪が据えられているような状況でもない。このように明らかに古墳といえる痕跡が認められるわけではないが、1溝が調査区外に向かって弧を描くように回っている点や、島状に残った高まりの裾部から多くの埴輪や須恵器がまとまって出土している点、またそれがある程度の形を保ったままの状態、それほど細片化していなかった点、さらにそれ以外の埴輪についても、大半がこの1溝からの出土であり、ほかの遺構にはほとんど含まれていない点（図126）などの状況から、1溝が古墳の周溝であった蓋然性が高いと考えている。

その古墳は、1溝の形状から円墳と考えられるが、墳丘南西部には僅かな造出部が突出する。当初は後世の攪乱によって墳丘の一部が大きく削られたためにできたものと考えていたが、そのくびれ部からは須恵器や円筒埴輪・形象埴輪の大型片がまとまって出土していることから、後世の攪乱によるものではなく、古墳築造時点で意図的に突出させたものであると判断した。古墳の規模は、円丘部の直径が約21.5m、造出部は外側最大幅約10.5mで、円丘側（くびれ部）が幅約8.5m、張り出す長さは約4.5mで、造出部まで含

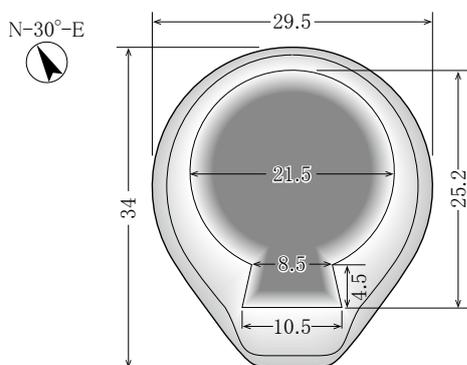


図125 古墳の規模

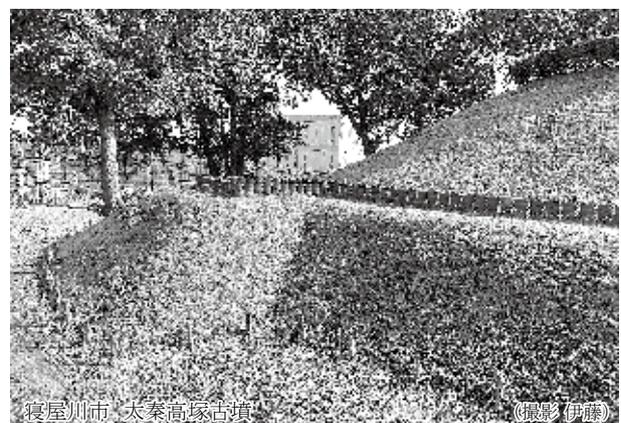


写真5 造出部参考資料

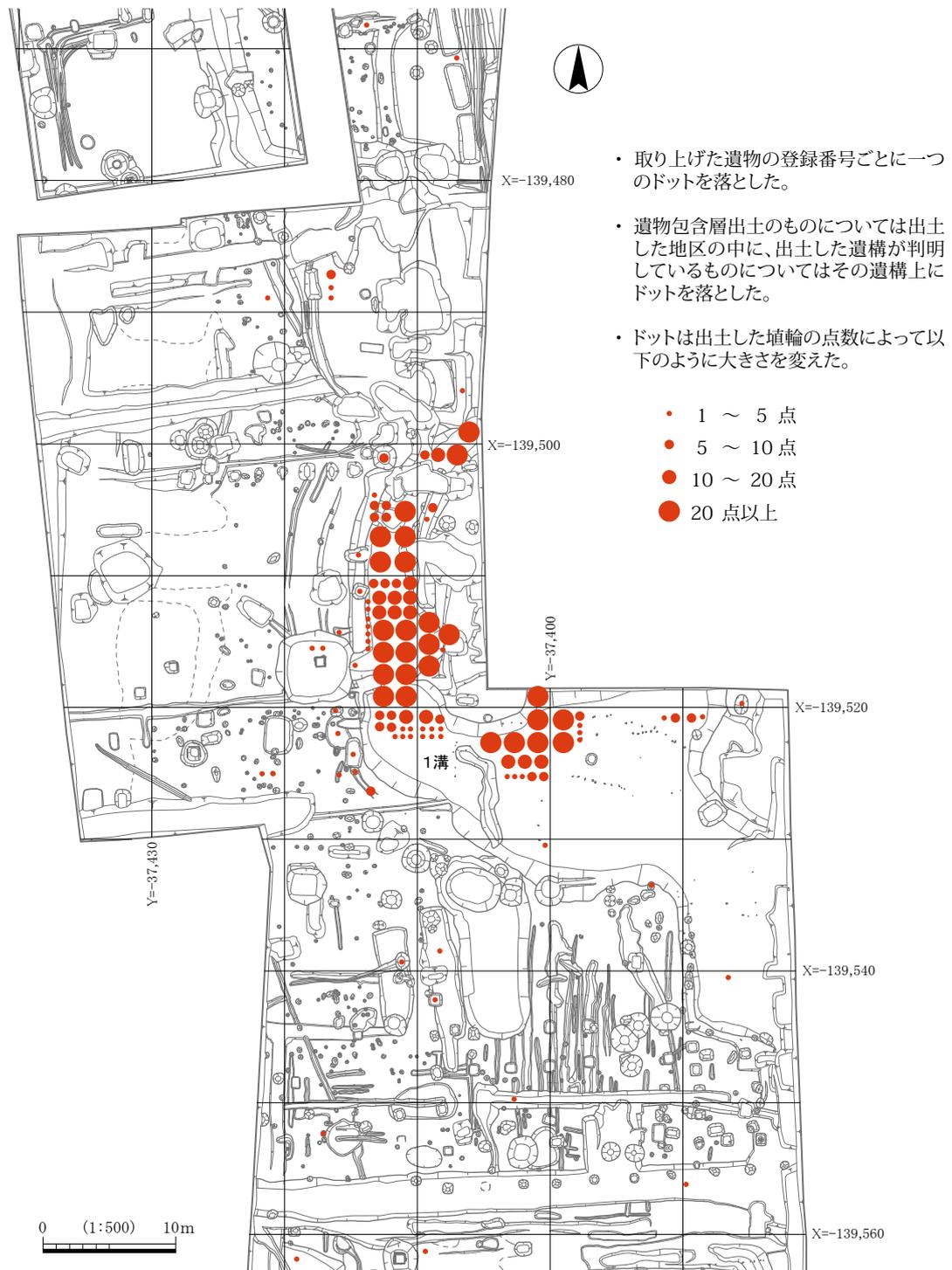


図 126 埴輪の出土分布

めた墳丘全長は 25 m 強に復原できる。周溝は造出部があるため、南西側がやや狭まった歪んだ楕円形で、長径約 34 m、短径約 29.5 m となる (図 125)。

くびれ部から形象埴輪が出土する事例は、近隣では守口市の梶 2 号墳¹⁾でみられ、寝屋川市太秦高塚古墳²⁾ (写真 5) では、僅かに突出する造出部上から家・人物・鳥などの形象埴輪がまとまって出土している。当古墳も、蓋や家、人物・馬・鳥などの形象埴輪が両くびれ部から多数出土しており、造出部が重要な役割を果たしていたことがうかがえる。

2 区では、495 落込みの南肩部から 6 世紀後半の須恵器がまとまって出土している。周溝などに伴うもの



图 127 普賢寺遺跡検出遺構全体平面

ではないが、周辺にこの時期の古墳が分布している可能性も考えておきたい。

なお、普賢寺古墳にもっとも近く、古墳が発見される可能性が高かった7～9区では、遺構はもちろん、埴輪片も出土していない。

古墳時代以降の開発 3区で、東西・南北方向の細い耕作溝を検出した。埋土には8世紀の遺物が含まれていることから、この時期に一旦開発の手が加えられ、一部が耕作地として利用されていたことがうかがえる。ただし当時の集落域は確認できなかった。耕作範囲も非常に狭く、8世紀の様相を把握することは難しいが、中世までの間に一度は土地利用されていたことは確かなようである。集落域については、おそらく後に「普賢寺」が建てられるエリアに広がっていたと考えている。

8世紀以降、本格的にこの地に再開発が及ぶのは12世紀中頃になってからのことになる。「普賢寺」が記録に登場しはじめるのもちょうどこの時期であり、交野市星田周辺に広がる荘園も、12世紀後半から開発が始まっていることが近年の発掘調査によって確認されている。⁴⁾この時期は、鳥羽法皇崩御を契機に保元の乱(1156)・平治の乱(1160)が立て続けに起こり、それ以降武家社会へと変わっていく歴史上の大きな転換期にあたる。

門真市周辺は、蓮根の栽培が盛んになるほどの低湿地であり、生産域や居住域を広げるためには、まずはこの地理的な問題を解決する必要があった。このため運河状に大きな水路を掘削し、排水・干拓を行なった。ただし前記のとおり、ちょうどこの周辺には古墳が築かれていたため、その周溝部分が窪み、開発前から運河のような状態を呈していた。これをうまく利用し、再開発を始める。その一つが前記1溝である。またそれを補うように掘られたのが、調査区北半部の140溝や511・520溝などである。なおこれらの溝は、この一帯に頻繁に起こる水害の対策、またその後処理にも有効だったと思われる。溝の存続期間は長く、15世紀までの約350年間にわたり使われていたことが出土遺物から明らかとなっている。部分的に木杭を打ち並べて流れを制御し、川浚えなど掘り直しを行ないながら、長い間水路を維持管理していた様子もうかがえる。

その水路で囲まれた狭い範囲からは、井戸や土坑、ピットなど多くの遺構を検出しており、どちらかといえば農地開発のための干拓というよりは、居住域を広げるための干拓であったように思われる。この居住域の中には、干拓が必要なほどの低湿地であったにもかかわらず、特に井戸が多く分布していることは注目される。周囲の水路から水を汲めばよさそうなものを、生活用水は井戸から採取していた様子もうかがえ興味深い。ピットも多く検出しており、柱根が残るものや、柱穴の底に柱の沈みを防ぐための礎石や礎板を据えるものも多く認められた。建物としてまとまるものは少ないが、8区の掘立柱建物2や3区の掘立柱建物4のような簡易な構造の建物がいくつも建っていたものと考えられる。またそれらの遺構に混じって、4区では23土坑のような人骨が出土する土坑もみつかっており、居住域の傍らに屋敷墓と呼ばれるような墓が築かれていたことも明らかとなった。

以上のような北半部の様相とは異なり、調査地の南半部には「普賢寺」を想起させるような遺構が展開する。2区で検出した方形区画や3区の掘立柱建物1である。

方形区画については、溝で囲まれた内側からは建物などの顕著な遺構を検出できなかったが、南北が19.5m、東西が12.5m以上の規模であり、3区検出の掘立柱建物1に匹敵するような何らかの重要な施設があったことは間違いない。3区で見られるような規模の柱穴が全く検出できないことから、掘立柱建物が建っていたとは考え難いが、礎石建ちの建物が建っていた可能性は捨てきれない。調査では礎石や基壇などの痕跡は確認できていないが、後世の開発により遺構面が大きく削平され、礎石も失われたという可能性も考えておきたい。

また、この方形区画の北側に接して、東西方向に直線的にのびる 160 溝を検出している。掘立柱建物の柱穴と重複する建物よりは一時期新しい遺構であるが、方形区画とは軸を揃え、溝の規模もよく似ていることから、両者は同時期に存在していたと考えられる。調査区北半部で検出した干拓用の溝とは異なり、施設を画する溝であったことは間違いない。この溝の延長部がどちらに曲がっているのかは、これらの施設の範囲を知る上でも非常に重要な手掛かりとなる。今後明らかになることを期待したい。

掘立柱建物 1 については、梁間 2 間、桁行 9 間以上の身舎の南北 2 面に廂が付くという都城や官衙遺跡でも稀にみる大型建物であり、門真市内や周辺地域を見渡しても、これまでみつかった中では最大規模の建物である。柱穴も方形ないしは長方形の非常に立派な掘方である。周辺の遺構との重複関係から 13 世紀代の建物と考えているが、その性格については、「普賢寺」を構成する建物の一部であったのかが問題となる。礎石建ちではなく、基壇もないことから、一般的な瓦葺の寺院建築でないことは明らかであるが、伽藍内の中心建物ではないにしても、付属的な施設であった可能性は十分考えられる。ただし「普賢寺」の調査という先入観なしにみた場合には、やはり寺院の建物とは言い難い。むしろ荘園—普賢寺庄—の維持・管理や運営を行なう館のような施設であったと考えるべきかもしれない。

出土遺物 建物の性格については今後検討していく必要があるが、遺物は寺院に関わるものが多く出土している。これまでの周辺の調査同様、瓦が非常に多い。軒丸瓦は 1 点の複弁蓮華文以外はすべて巴文で、巴の先端が尖り気味に付く 12 世紀後半から 13 世紀前半のものと、文様作成時の中心点が残る 14 世紀前半のものと同範瓦が多い。軒平瓦には 13 世紀後半から 14 世紀前半の蓮華唐草文と、中央に菱形の文様を刻む 14 世紀前半の菱形唐草文の同範瓦が多いが、顎折り曲げ技法の剣頭文瓦なども出土している。また平瓦には凸面に縄目や斜格子文のタタキが残る古手のものもみられ、南都七大寺式の鬼面文鬼瓦や、凹面に五輪塔文のスタンプを押す平瓦など 12 世紀後半の瓦も多く出土していることから、この時期には既に瓦葺建物の造営が始まっていたことがうかがえる。13 世紀や 14 世紀の瓦については、新たな堂宇の造営や修理によるものと考えている。

瓦以外に特筆すべき遺物として、3 区東壁際の 140 溝から出土した銅製の仏具蓋があげられる。これは昭和 59 年に第一中学校跡地東側で実施された調査で出土し、現在府の指定有形文化財に登録されている金銅密教法具と同種のものであり、寺院の存在を裏付けるものとして、またその性格を考えるうえでも非常に重要な資料である。このほか五輪塔や宝篋印塔などの石造物、香炉や四耳壺などの輸入磁器など、中世寺院の存在を裏付ける遺物が数多く出土している。

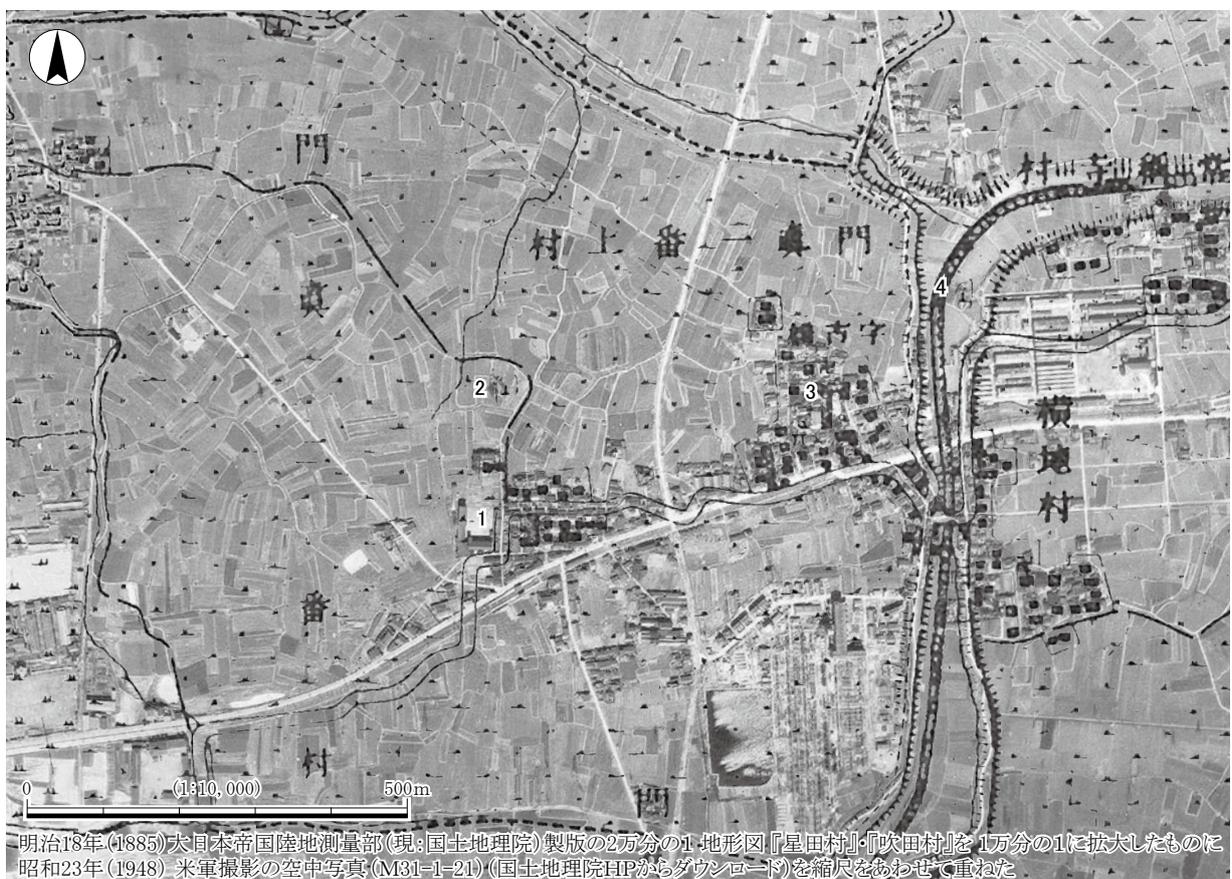
普賢寺の衰退とその後 このように周辺にはかつて中世寺院が存在していたこと、またその建物が瓦葺であったことは出土遺物からみても間違いない。しかし、もっとも遺構の発見が期待された今回の調査地内からは、その存在を直接的に示すような遺構は確認することができなかった。また「普賢寺」は、応仁の乱の兵火で焼失したと伝えられているが、それを示す焼土なども今回の調査では確認することはできなかった。

なお、この「兵火で焼失」については、『門真市史』に「平安時代末に建立され、七堂伽藍をもつ大寺院であったが、十五世紀の応仁の乱前後の兵火で焼失したと伝える⁵⁾とあるが、何に伝えられているのかその根拠はどこにも示されていない。おそらく『角川日本地名大辞典』の「普賢寺庄」の項にある「その後「雑事紀」文明 15 年 9 月 9 日条には、「古市衆少々天王之畑に陣取之、普賢寺之内ナリ」と見える⁶⁾との記載が影響しているのではないかと推察されるが、これは山城の「普賢寺（現 観音寺）」と門真の「普賢寺」とを混同したものであり、全くの間違いである。昭和 59 年の遺跡現地説明会を取り上げた各社新聞でも、「応仁の乱の戦火で焼失したとされる幻の中世大寺院「普賢寺」跡⁷⁾と大きく報道され、また平成 16 年に大阪

府立泉北考古資料館で開催された「優品展 中世密教の世界—普賢寺遺跡出土品—」の案内チラシにも、「文献にも、応仁の乱の際に、畠山氏が陣を置いたと記されていることから、兵火で焼失した可能性が考えられます。」⁸⁾と間違った紹介がされている。このため、門真市域では「普賢寺は応仁の乱で焼失」という根拠のない情報が広まってしまっていた。

今回の調査で出土した遺物は、どれも15世紀に収まるものであり、中世の集落、また「普賢寺」が15世紀末までには廃絶していたことが確認された。15世紀後半といえばちょうど応仁の乱の時期にあたるが、廃絶の原因が本当にこの乱の兵火によるものなのかは明らかでない。応仁の乱に限らず、この15世紀は河内ではいたるところで頻繁に戦が繰り返されている。畠山氏らによる小競り合いが応仁の乱後の15世紀末まで続いており、文明15年(1483)には畠山義就により淀川の堤が切れ、普賢寺庄を含む「十七ヶ所」と呼ばれる一帯が大水となるという事件も起こっている。⁹⁾「普賢寺」はそうした15世紀中に起こった度重なる戦や災害のなかで次第に復旧が難しくなり、徐々に衰退していったのではないだろうか。廃絶した原因は、応仁の乱一つに限定できないのではないかと考えている。

その後16世紀になり、新たに「普賢寺」の跡を継ぐように建てられたのが、調査地の東方の古川沿いに位置する願得寺である(図128)。この寺の門徒(古橋惣仏講)に伝えられる阿弥陀如来絵像の裏書には、「永正六年己巳十一月廿八日 河州 茨田十七ヶ所普賢寺庄 古橋惣道場物也」¹⁰⁾とあることから、永正6年(1509)の時点で既に「普賢寺」に代わって願得寺の前身となる惣道場が古橋の地に設けられていたことがわかる。これは遺構・遺物からみた「普賢寺」の衰退時期とも矛盾しない。その後、浄土真宗である願得寺の周辺は寺内町を形成し、16世紀後半には「古橋城」として城郭化が進む。元亀元年(1570)の三好



明治18年(1885)大日本帝国陸地測量部(現:国土地理院)製版の2万分の1地形図『星田村』『吹田村』を1万分の1に拡大したものに昭和23年(1948)米軍撮影の空中写真(M31-1-21)(国土地理院HPからダウンロード)を縮尺をあわせて重ねた

1. 市立第一中学校(今回の調査地) 2. 普賢寺古墳 3. 願得寺(古橋城か) 4. 古川

図128 普賢寺遺跡と願得寺

三人衆と織田信長らによる野田・福島¹¹⁾の戦いの前哨戦とされる「古橋城の戦い」は、ここが舞台といわれている。

普賢寺の位置 では「普賢寺」の中心伽藍はどこにあったのか。出土瓦には破片が多く、完形のもものがほとんどないことから、期待されていた第一中学校跡地内に瓦葺建物が建っていたとは考え難い。また5・6区以北は瓦の出土が少ないことから、北方は考えられない。方形区画や掘立柱建物などの施設が中学校跡地の東寄りで見つかっていること、また銅製仏具が見つかったのも調査区の東壁際であり、大阪府指定文化財となっている金銅僧形坐像や密教法具が発見されたのも、調査地の東側に隣接する一画であること、さらに「普賢寺」の跡を継ぐ願得寺が調査地東方の古川沿いに位置していることなどから、中学校跡地の東側エリアが中世寺院「普賢寺」の中心部であった可能性が高いと考えている。今後の調査に期待したい。

註

- 1) 守口市教育委員会 1991『梶遺跡』
- 2) 濱田延充 2002「太秦高塚古墳の発掘調査成果」『太秦高塚古墳とその時代～北河内の古墳時代を考える～』寝屋川市・寝屋川市教育委員会
- 3) 「勸進奉加帳事 錢分（中略）三貫文普賢寺住人廣久、百文同住人忠弘、五百文同住人安部氏女、三百文同住人藤井氏女、百文星田郷住人智道、引馬分（中略）一疋普賢寺住人印心 保延 五年三月 日」
「修二月會勤行事（中略）奉寄附諸郷・・・大和田 岸和田 大庭 普賢寺 小高瀬 稗嶋・・・ 久安元年二月 日」
『河内國小松寺縁起』（『統群書類従』第二十七号下）
- 4) 交野市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター 2020『平池遺跡・堀之内遺跡』
- 5) 門真市 1992『門真市史』第二巻 p 235 - 236
- 6) 「角川日本地名大辞典」編纂委員会 竹内埋三 1983『角川日本地名大辞典』角川書店
- 7) 読売新聞 1984.8.20 掲載記事
- 8) 大阪府立泉北考古資料館 2004『優品展 中世密教の世界—普賢寺遺跡出土品—』案内チラシ
- 9) 「廿八（中略）千町の鼻より五十町西ヲ二町計大場切之間、大水入河内國難義也、カケノ郡同迷惑云々、隨而千町の鼻二構城、是十七个所ノ内也、大將攝州之三アケ、吹田、池田次郎、十七个所之内下ハ成水了」文明十五年八月廿二日・廿八日『大乘院寺社雜事紀』第百二（『増補 續史料大成』大乘院寺社雜事紀八）、文明十五年八月廿二日『大乘院日記目録』第三（『増補 續史料大成』大乘院寺社雜事紀十二）
- 10) 門真市 1992『門真市史』第二巻 口絵 及び p 378
- 11) 「同十七日に河内古橋と云處に畠山殿衆高屋城より百五十人計。三好左京大夫殿衆若江の城より百五十人計。合三百楯籠。此由四國衆聞付。野田福嶋の人数打出。押せよ責入。首數二百拾八討取。其内實檢の首九ッ有。又生捕三十計有之といへども被免候由。」元龜元年八月十七日『細川兩家記』（『群書類従』第二十輯 合戦部）
「第三〇章（第一部七八章）（前略）ある日のこと、彼は河内の国の古橋というところで、大量の米を徴収する仕事に従事していた。（中略）その場所はやや高いところにあり、ジョルジ弥平治の家臣、およびそこにいた他の人たちは総じて四百名以上であったろう。敵は、彼らがその場所でなんの心配もなく、米を収納し計量していることを聞くと、突如として二千五百名ばかりの兵士（でもって）その場を襲撃した。そこに登って行くには、二つの階段しかなかった。ジョルジは彼らを寄せつけまいとしてその一段に立ったが、（中略）敵はもう一方から登って来て、上の方で見つけた者をほとんど抵抗を受けることもなくすべて殺してしまった。」（『フロイス 日本史 4』五畿内篇Ⅱ 1978 中央公論社） など

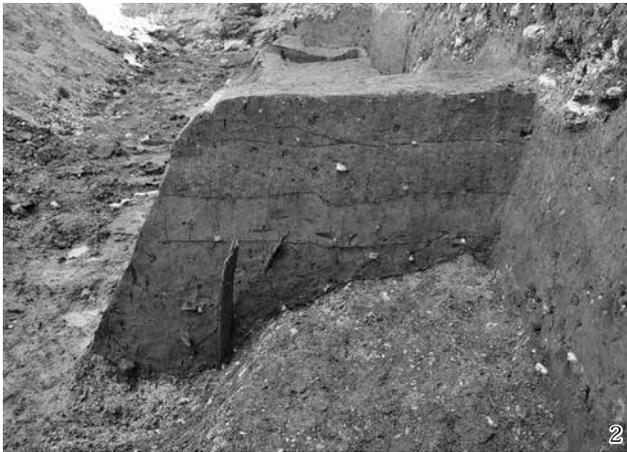
写真図版



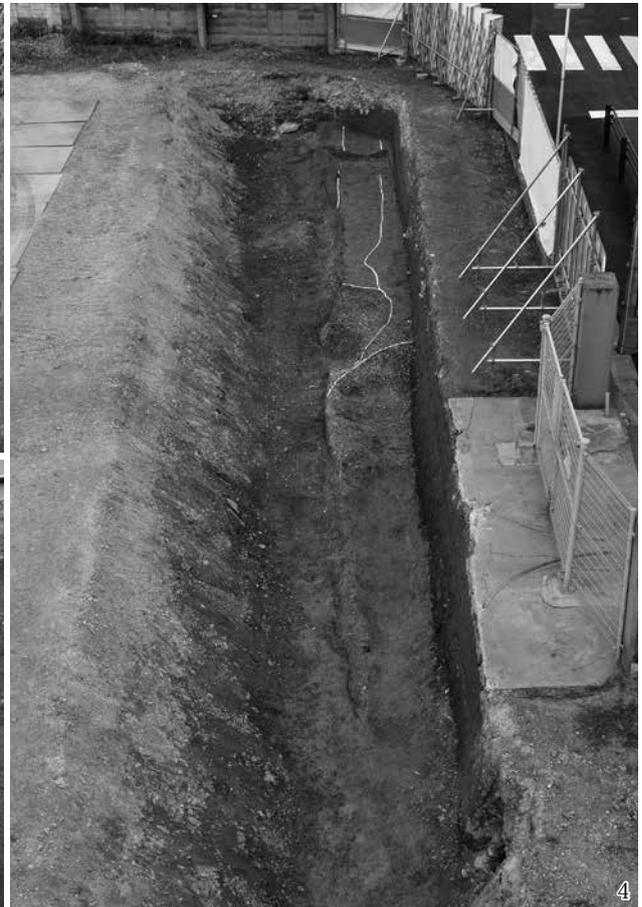
調査地上空から東方を望む〔2・3区調査中〕



1. 1区 全景〔西から〕



2. 501溝 西端部横断面
3. 502溝 縦断面



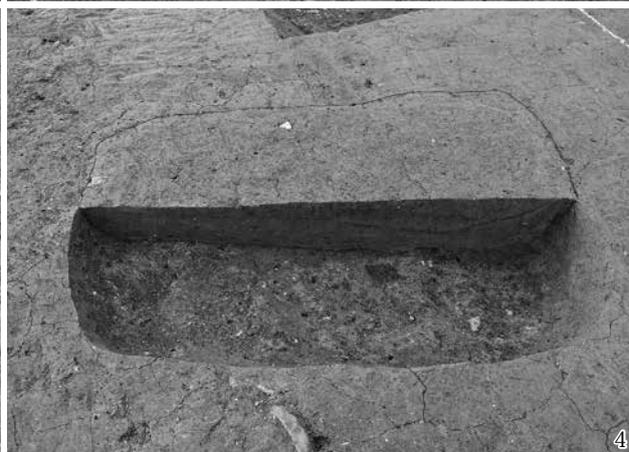
4. 501溝(奥)・502溝(手前)



1. 2区 全景〔北西から〕

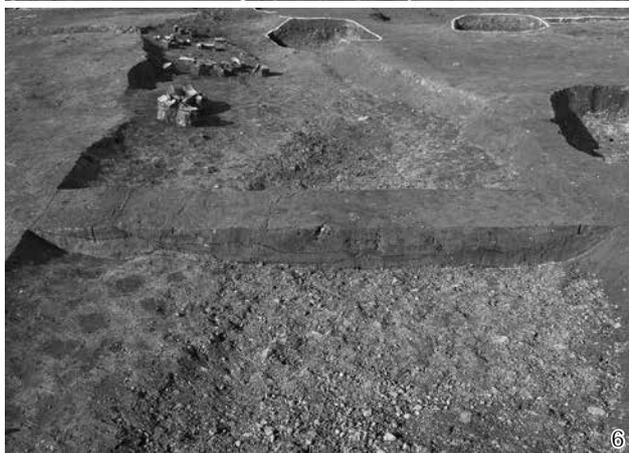


2. 2区 東半部方形区画〔北東から〕



1. 415 土坑
2. 418 溝

3. 419 土坑
4. 429 土坑



5. 414 溝
6. 414 溝

7. 414 溝 南肩部土器出土狀況



1. 420 井戸〔南から〕



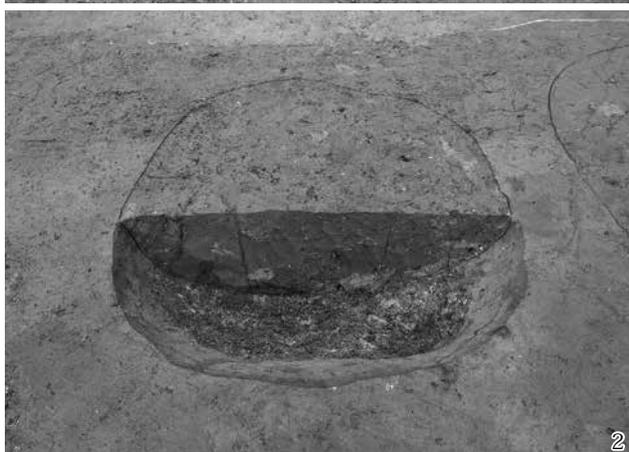
2. 420 井戸 井戸枠検出状況



3. 420 井戸 漆器出土状況

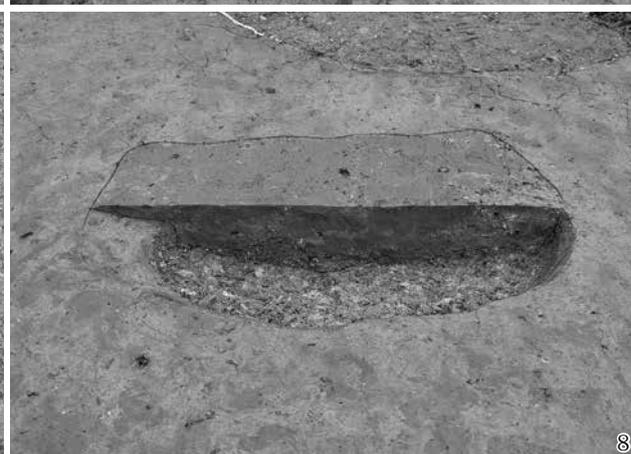
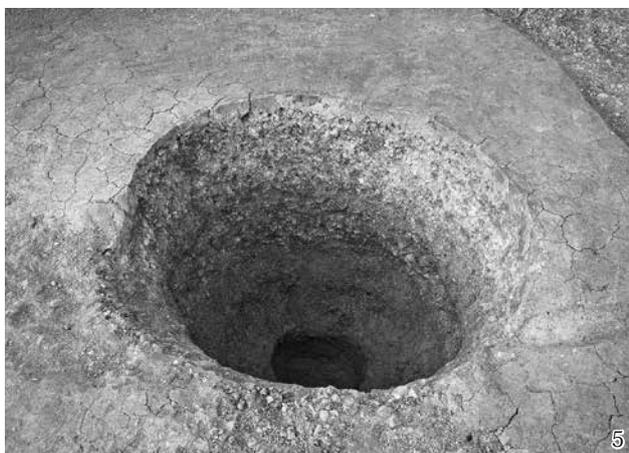


4. 431 土坑



1. 432 土坑
2. 436 土坑

3. 437 土坑
4. 442 溝 (中)・444 溝 (右)・445 溝 (左)



5. 448 井戸
6. 449 井戸

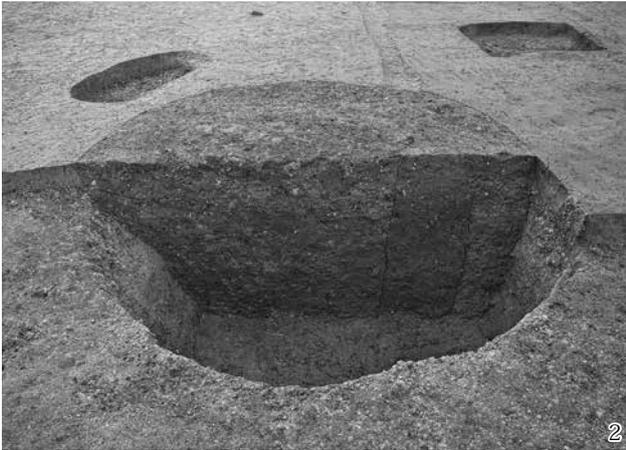
7. 450 土坑 (左)・445 溝 (右)
8. 451 土坑



1



3



2



4

1. 452 土坑
2. 453 井戸

3. 482 溝 (中央)・454 溝 (左下)
4. 482・454 溝 屈曲部杭列



5

5. 2区 北西隅部下層調査全景〔西から〕



1. 3区 全景〔南から〕



2. 3区 全景〔南西から〕



1. 1溝 (奥)・140溝 (手前) [南東から]



2. 1溝 杭列
3. 131土坑



4. 137土坑
5. 140溝



1. 1溝 埴輪出土状況〔南東から〕



2



3



4



5

2. 148 土坑
3. 155 井戸

4. 159 土坑 (奥)・161 井戸 (手前)
5. 167 土坑 (奥)・168 井戸 (手前)



1. 160 溝



2. 171 溝 東端部土器出土状況



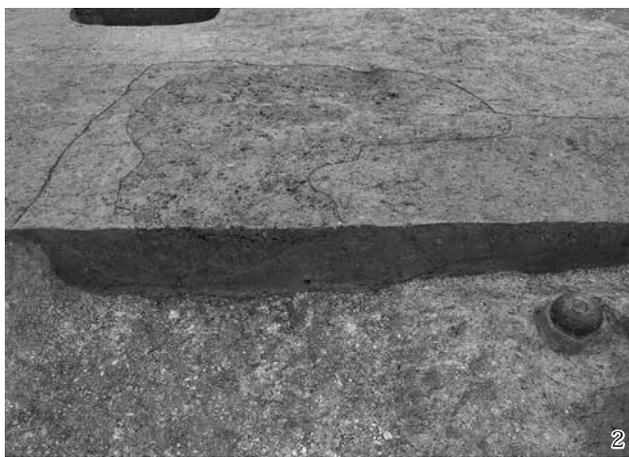
3. 201 土坑 (左)・202 土坑 (右)



4. 162 土器溜まり 土器出土状況〔南東から〕



1. 282 土坑 (手前)・177 土坑 (中)・176 土坑 (奥) [南西から]



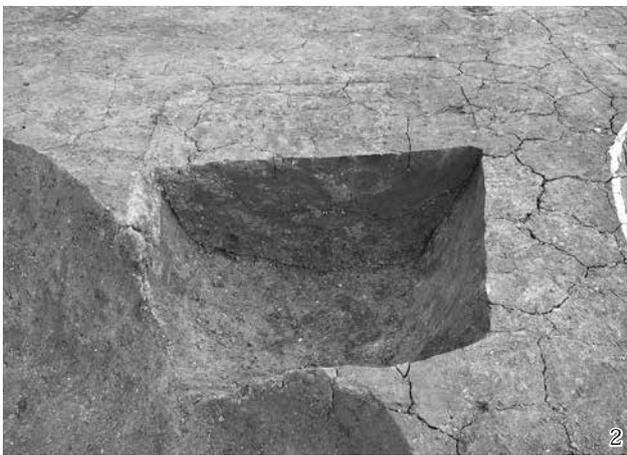
2. 163 溝・170 溝 屈曲部土器出土状況
3. 177 土坑



4. 176 土坑
5. 176 土坑北端 359 井戸



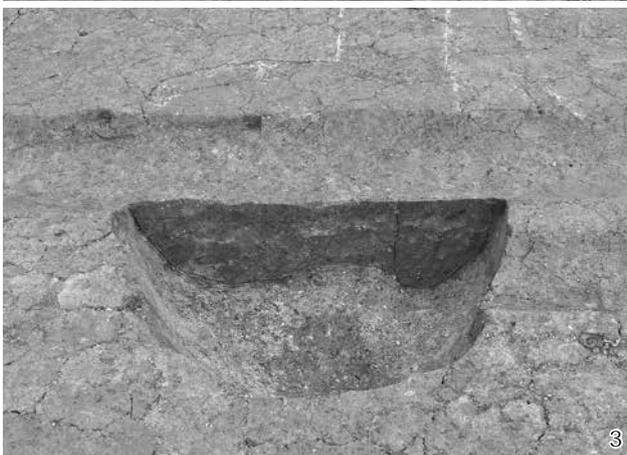
1. 掘立柱建物1〔西から〕



2. 181 ピット



4. 189 ピット



3. 186 ピット



5. 193 ピット



1



3



2



4

1. 203 ピット
2. 204 ピット

3. 220 ピット
4. 222 ピット



5



7



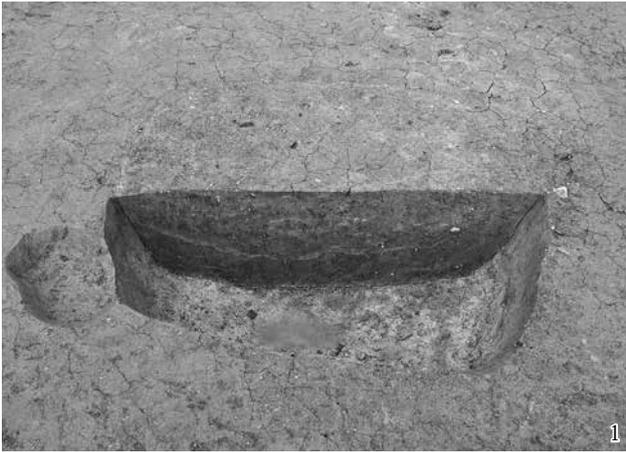
6



8

5. 254 井戸
6. 257 ピット

7. 263 ピット
8. 267 ピット



1



3



2



4

1. 271 土坑
2. 272 ピット

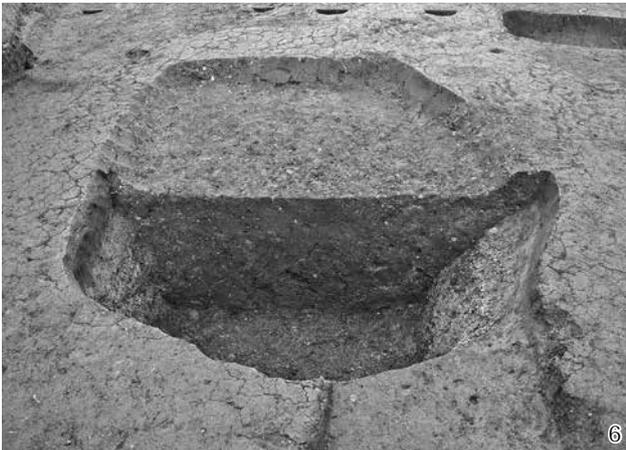
3. 273 井戸
4. 275 井戸



5



7



6



8

5. 280 ピット
6. 291 井戸

7. 315 井戸
8. 334 ピット



1. 4区 全景〔南東から〕



2. 4区 東半部全景〔南西から〕



1. 1溝
2. 1溝 土器出土状況

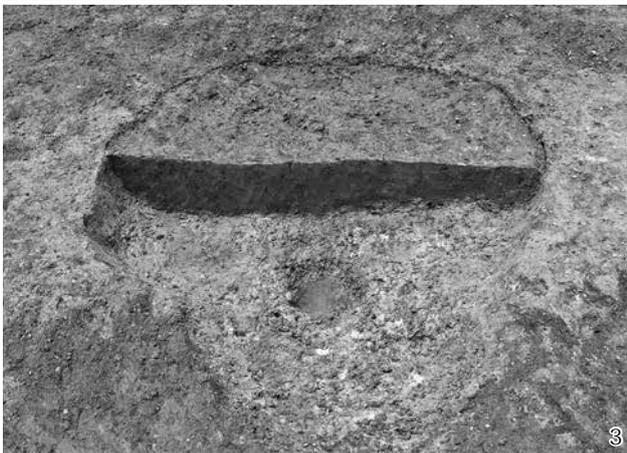
3. 2土坑
4. 4土坑



5. 1溝 埴輪・須恵器出土状況〔南西から〕



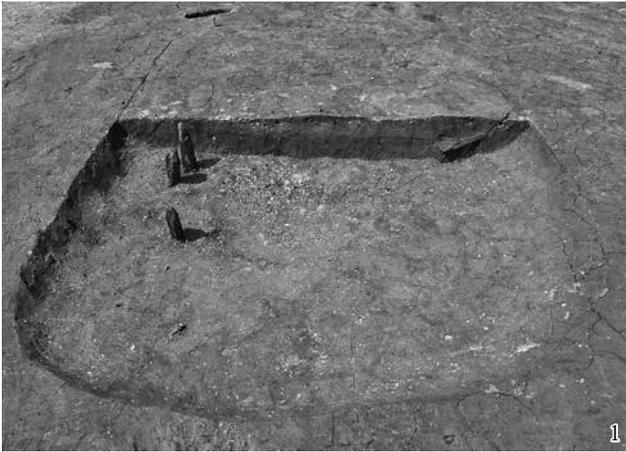
1. 8井戸 井戸枠検出状況〔南から〕



2. 6土坑
3. 7土坑



4. 8井戸 井戸枠外側検出状況
5. 8井戸 底部桶検出状況



1



3



2



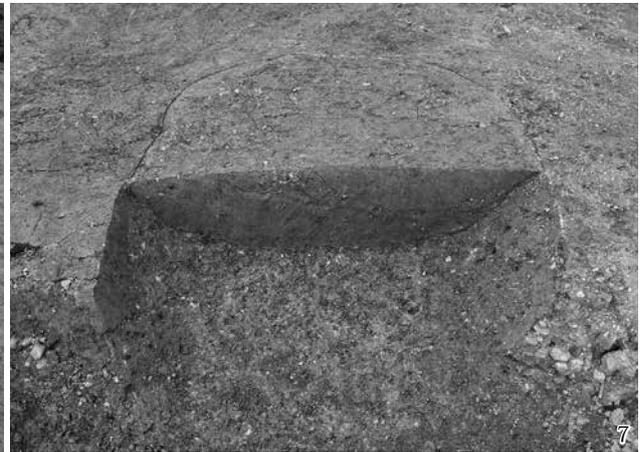
4

1. 9 土坑
2. 14 井戸

3. 16 井戸
4. 17 土坑



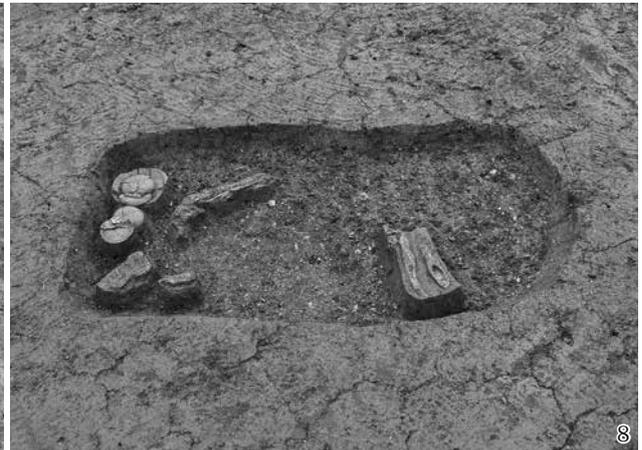
5



7



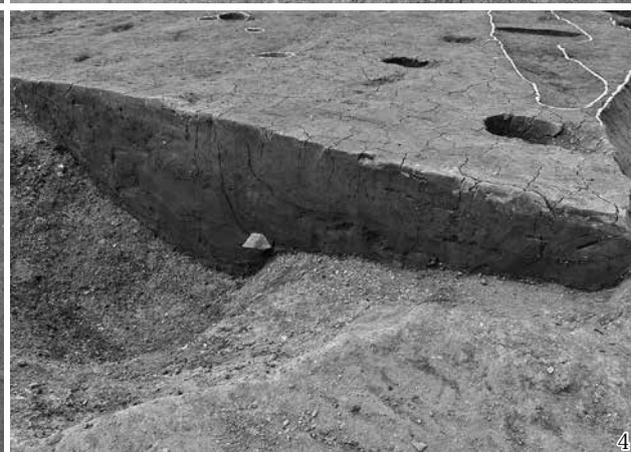
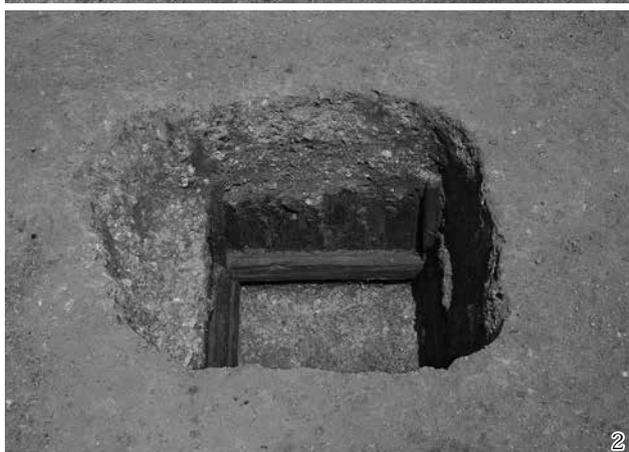
6



8

5. 19 溝
6. 19 溝

7. 21 土坑
8. 23 土坑



1. 24 井戸 上面土器出土状況
2. 24 井戸

3. 29 井戸
4. 30 土坑 (左)・36 土坑 (右)



5. 34 土坑
6. 59 土坑

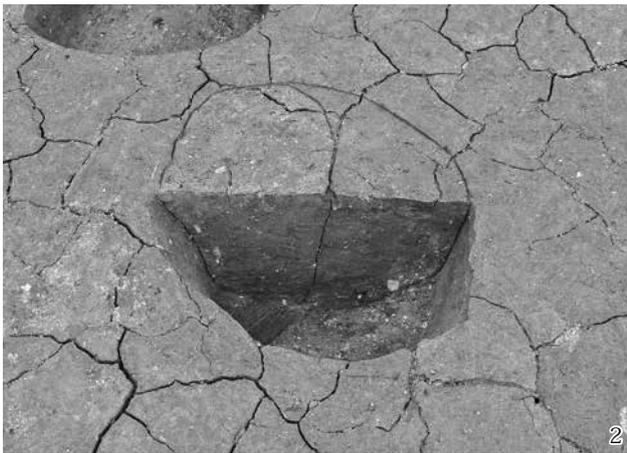
7. 60 土坑
8. 62 ピット



1



3



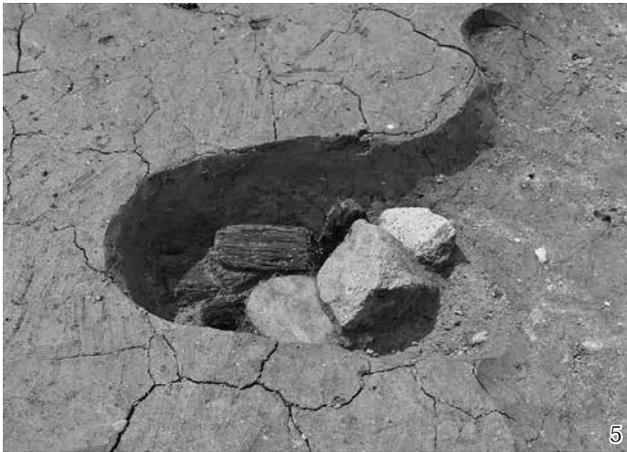
2



4

1. 68 土坑
2. 78 ピット

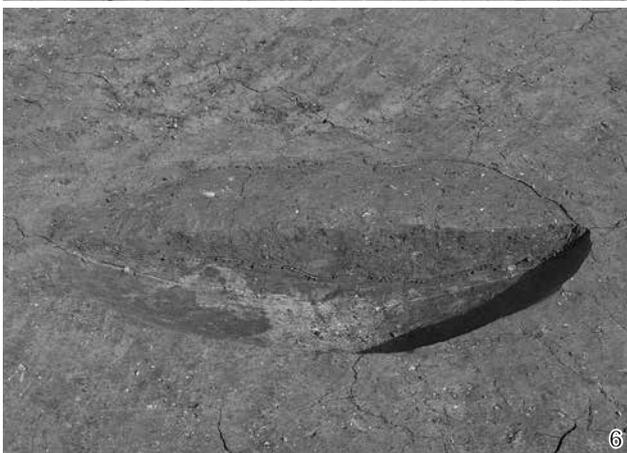
3. 91 ピット
4. 95 土坑



5



7



6



8

5. 97 ピット
6. 99 土坑

7. 100 ピット
8. 105 溝



1. 5区・6区 全景〔西から〕



2. 5区・6区 溝群〔南から〕



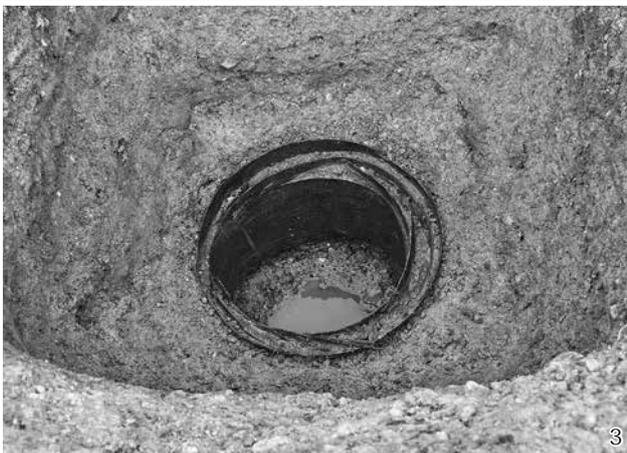
1. 511 溝 [東から]



2. 514 井戸



4. 528 井戸



3. 514 井戸 底部曲物検出状況



5. 528 井戸 底部曲物検出状況



1. 520 溝

2. 520 溝 底面漆器出土状況

3. 512 土坑 (右)・513 土坑 (左)

4. 521 土坑



5. 520 溝 [南から]



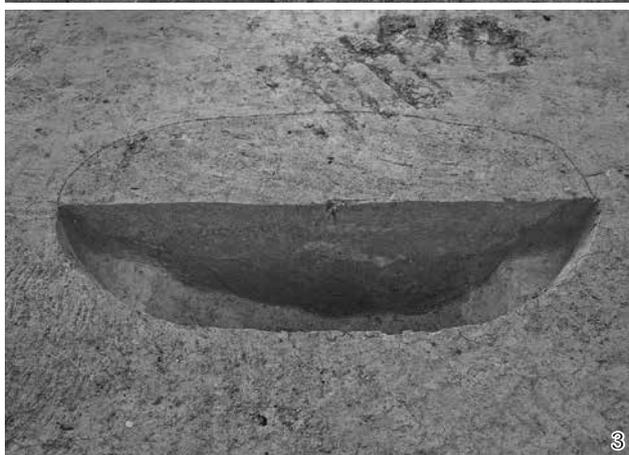
1. 520 溝 上面五輪塔出土状況〔東から〕



2. 526 土坑



4. 533 土坑



3. 529 土坑



5. 536 井戸



1. 11溝〔南から〕

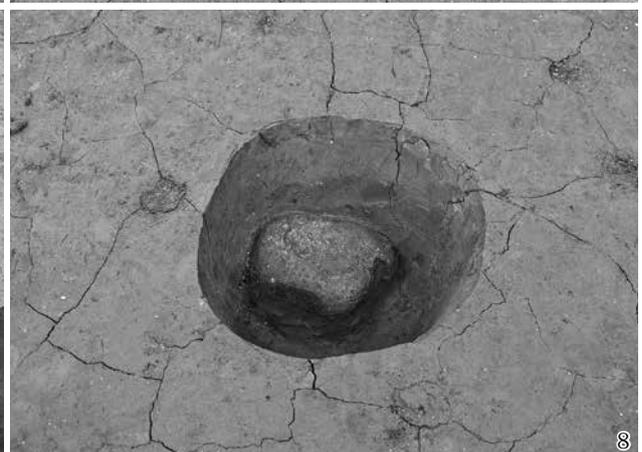


2. 511溝(左)・552溝(右)〔東から〕



1. 555 溝 土器出土状況
2. 558 土坑

3. 559 溝
4. 560 井戸



5. 569 土坑
6. 570 土坑

7. 577 ピット
8. 579 ピット



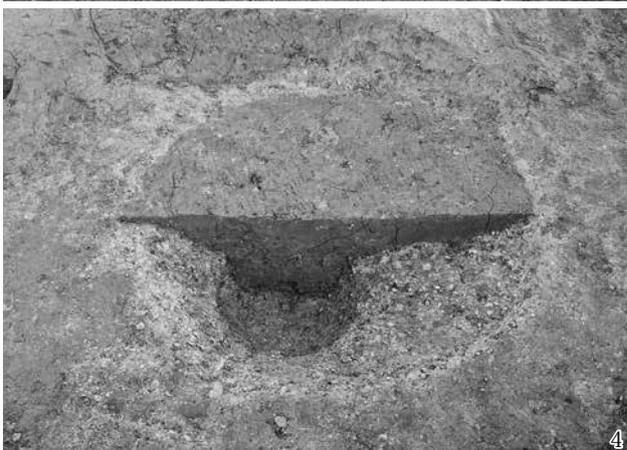
1



3



2



4

1. 585 土坑
2. 588 土坑 (左)・587 土坑 (右)

3. 596 井戸
4. 600 土坑



5



7



6



8

5. 618 井戸
6. 619 土坑

7. 581 ピット (左奥)・583 ピット (右奥)・620 土坑 (手前)
8. 調査区北東隅部 ピット群



1. 7区 全景〔東から〕



2. 8区 全景〔西から〕



1. 掘立柱建物2〔南から〕



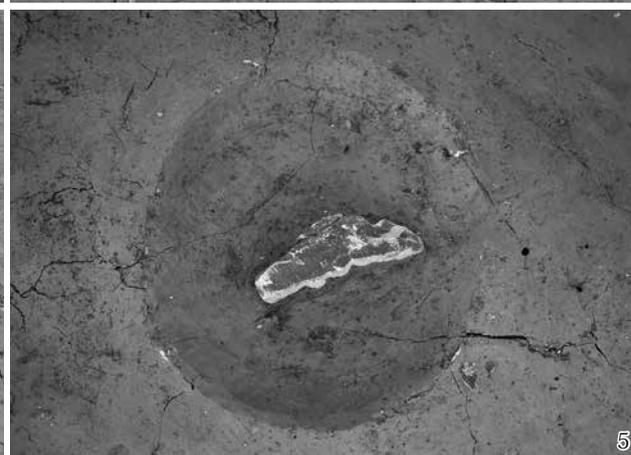
2



4



3



5

2. 301 溝
3. 393 土坑

4. 394 土坑
5. 402 ピット 石鍋出土状況



1. 9区 全景〔南から〕



2



4



3



5

2. 381 溝 土器出土状況
3. 382 溝

4. 387 土坑
5. 388 土坑



2区 1層・1層下層



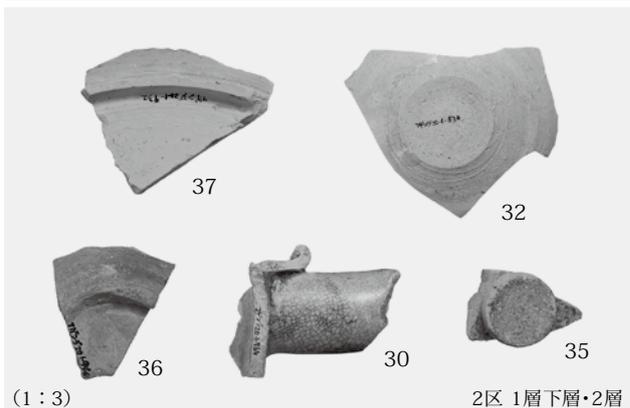
16



20



31

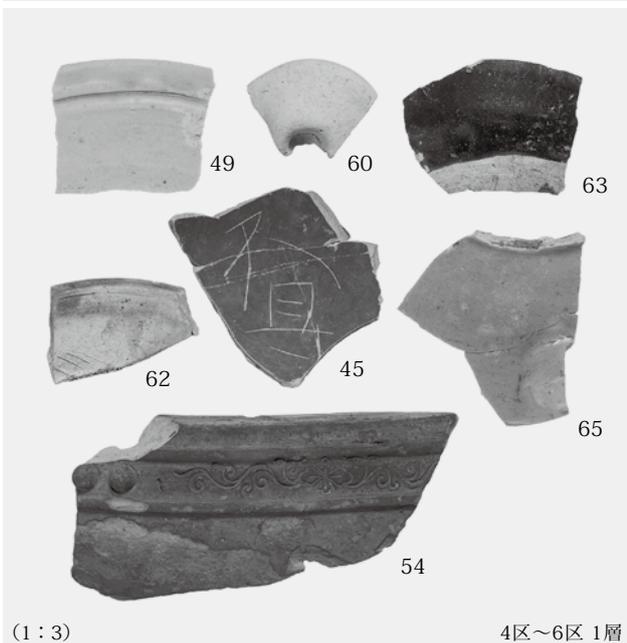


(1:3)

2区 1層下層・2層



17



(1:3)

4区~6区 1層

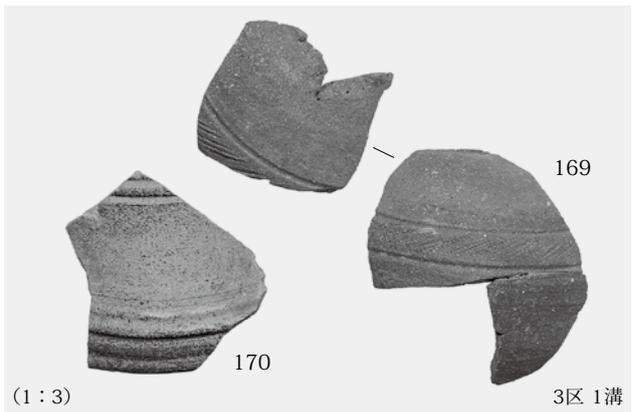
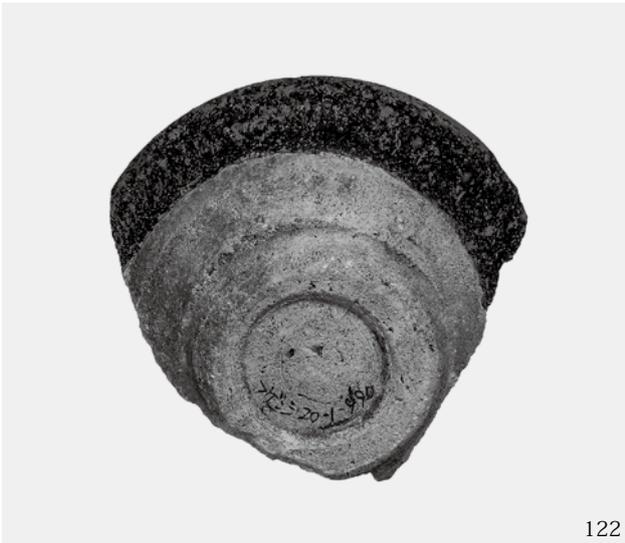
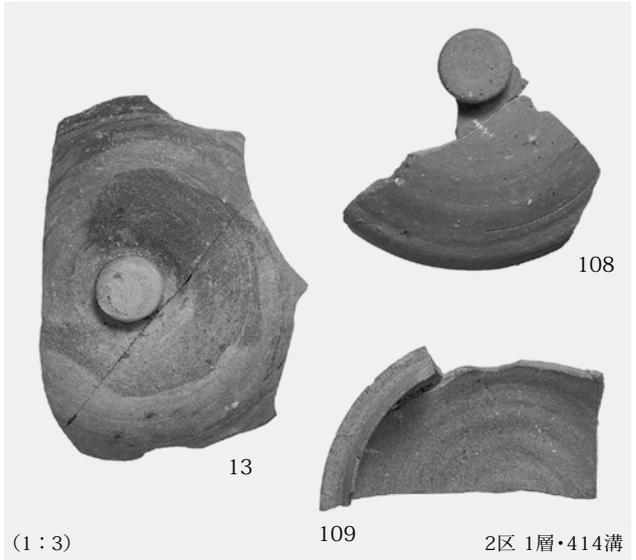
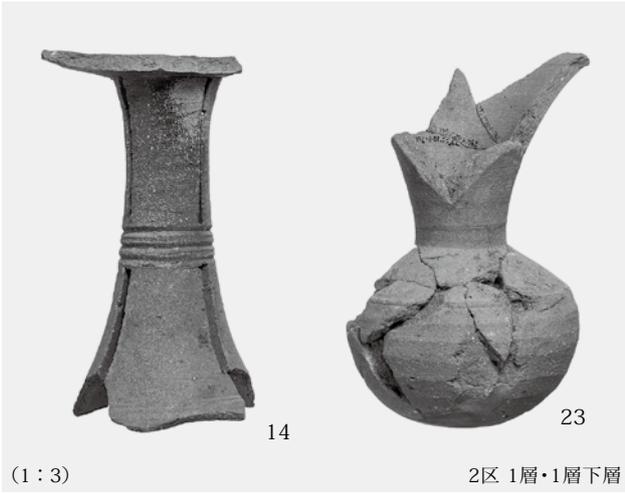


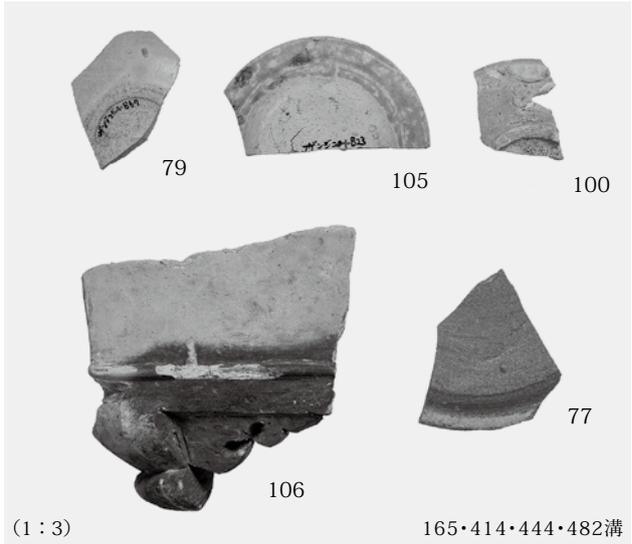
2区・4区 1層



(1:1)

56









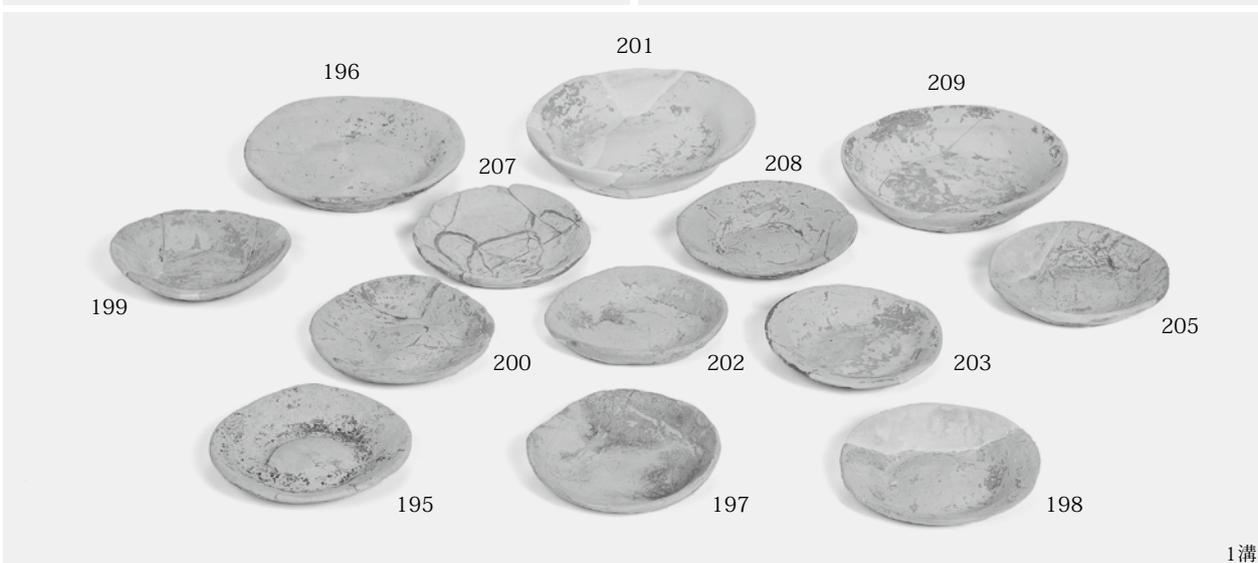
210



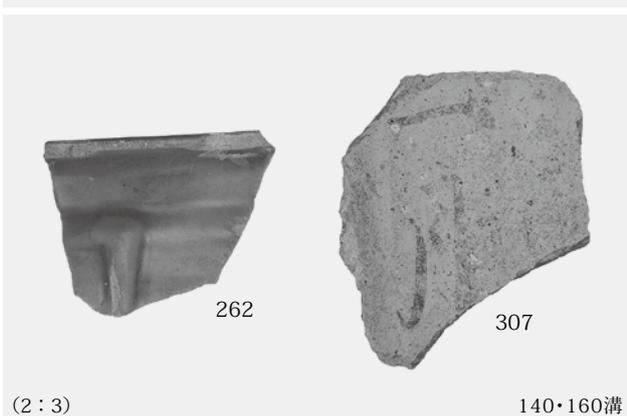
233



234



1溝

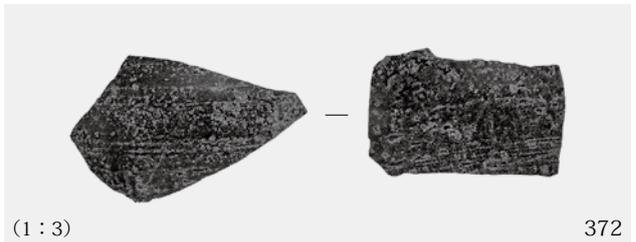
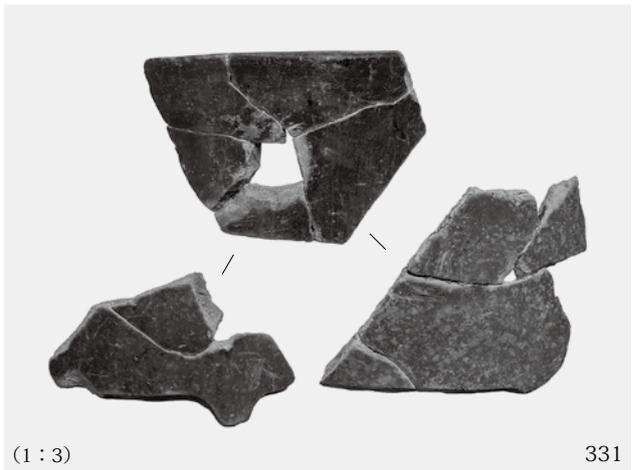
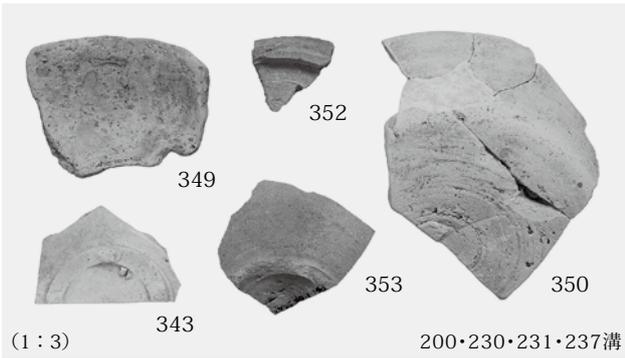


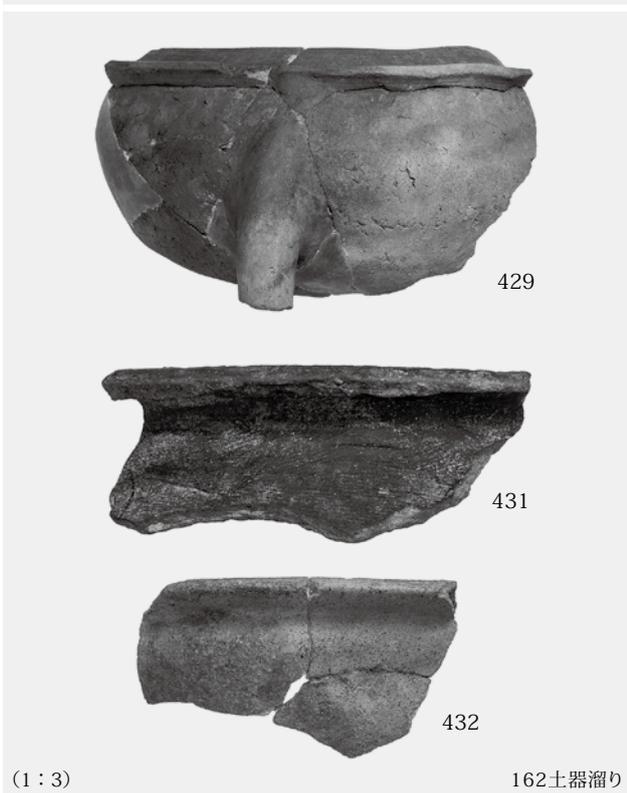
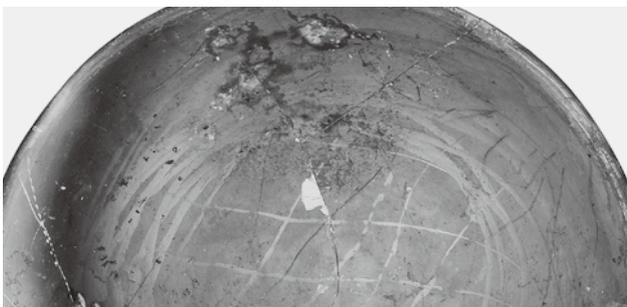
(2:3)

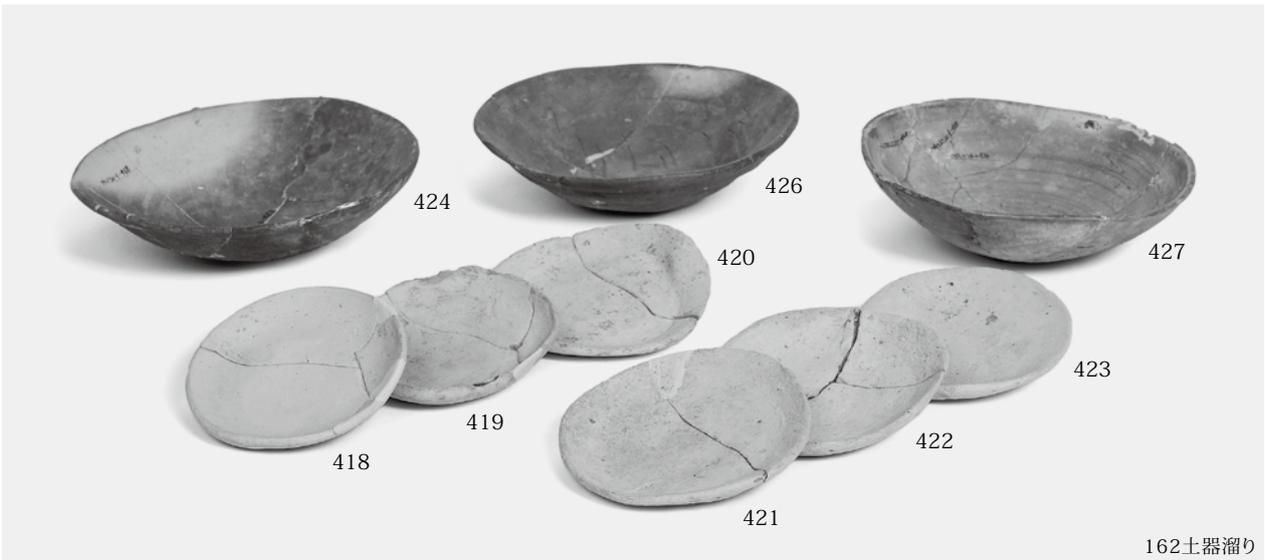
140・160溝



140溝







162土器溜り



176土坑



282土坑



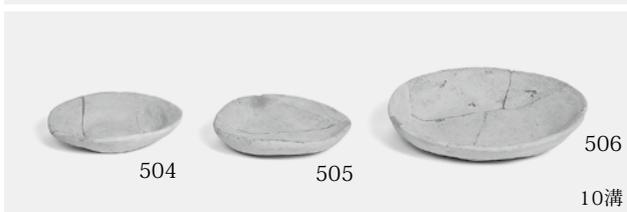
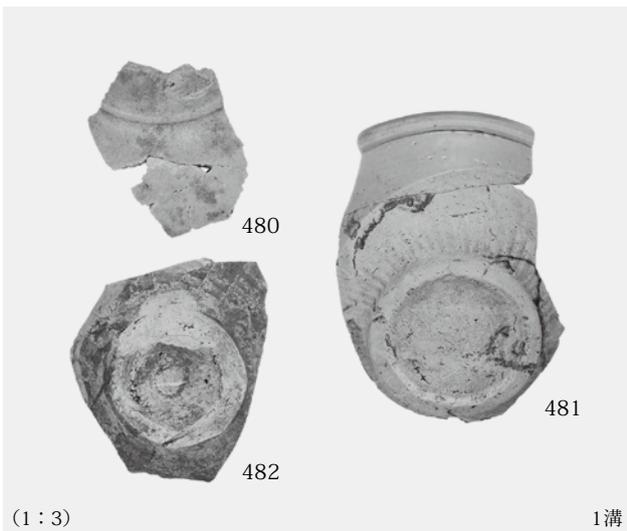
438

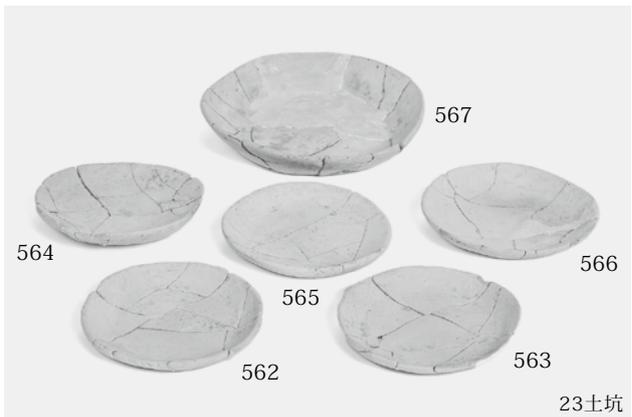
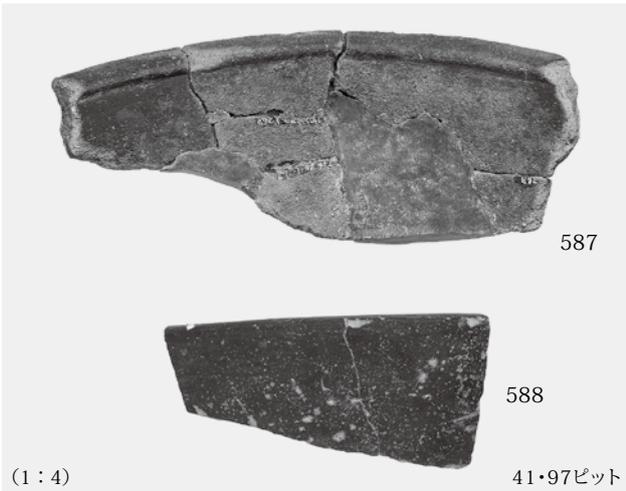
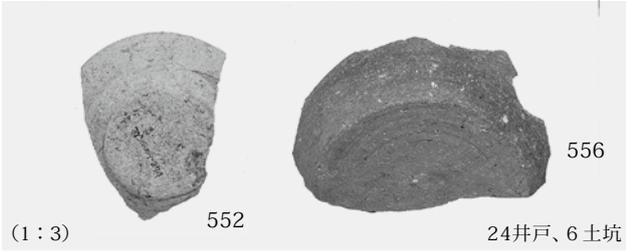


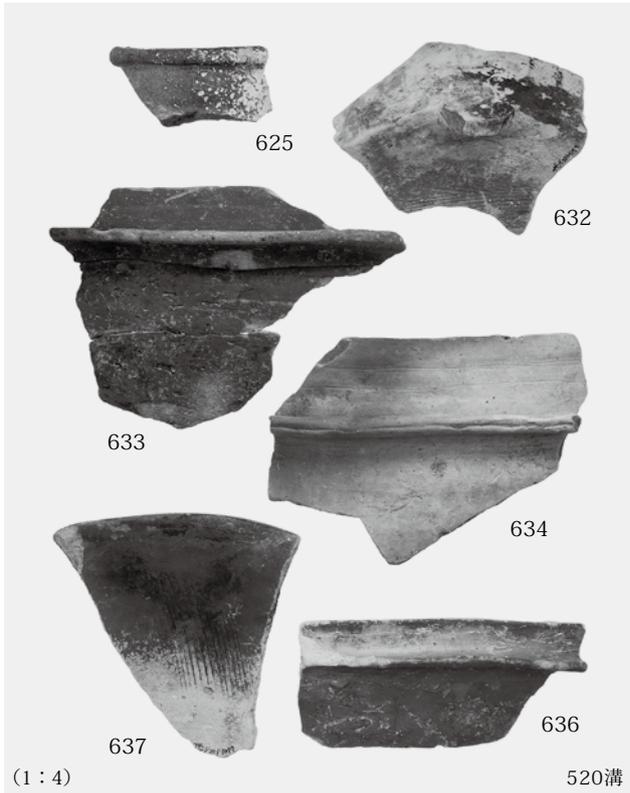
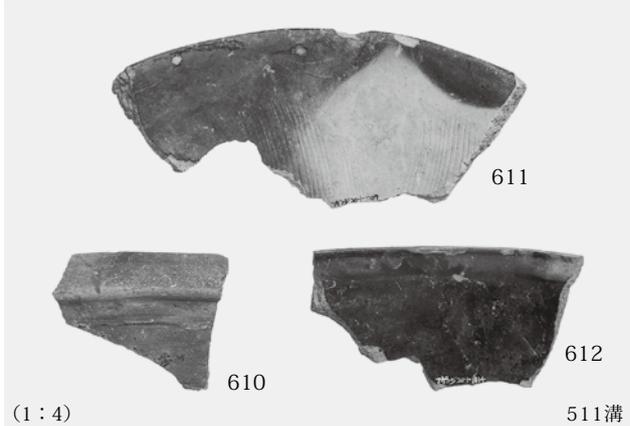
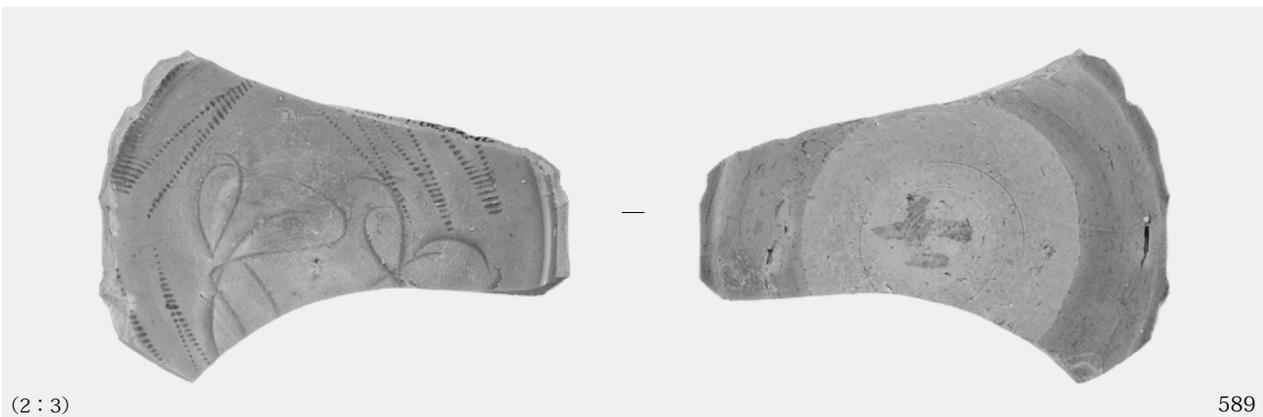
444



439











649

655

11溝



(1:3)

680



687



684

689

685

520溝



695

697

552溝

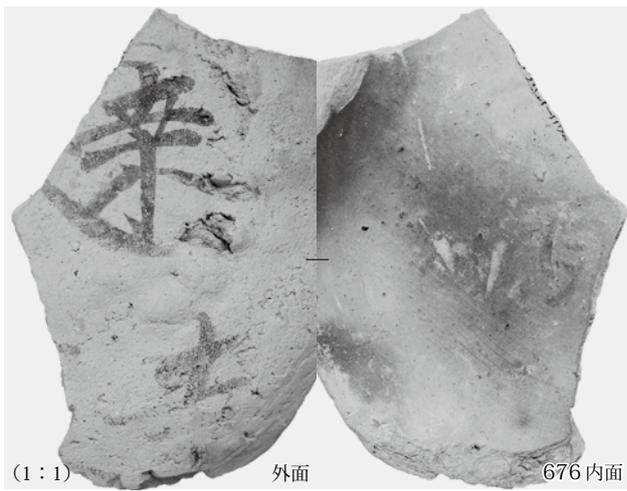


711

722

710

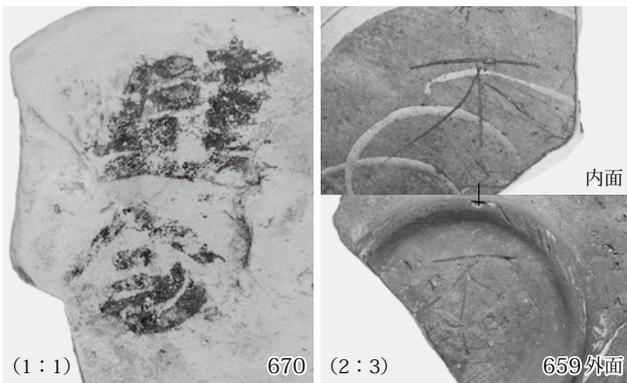
612・570土坑



(1:1)

外面

676内面



(1:1)

670

(2:3)

659外面

内面



692



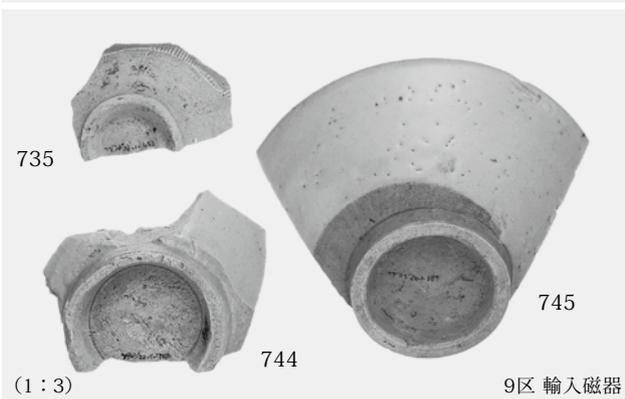
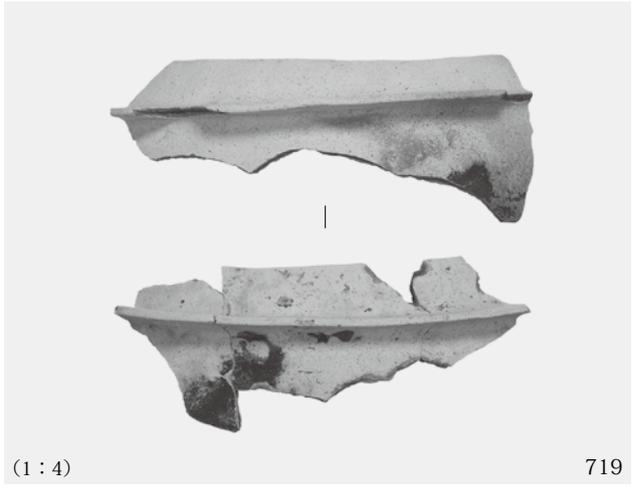
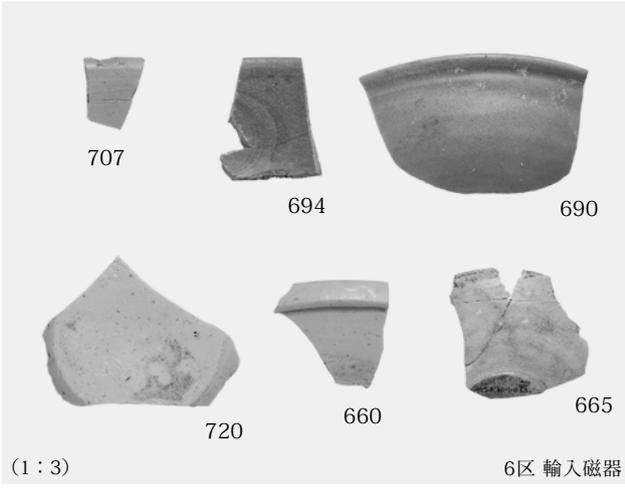
703

704

701

702

555溝





271



273



272



245



278



275



399



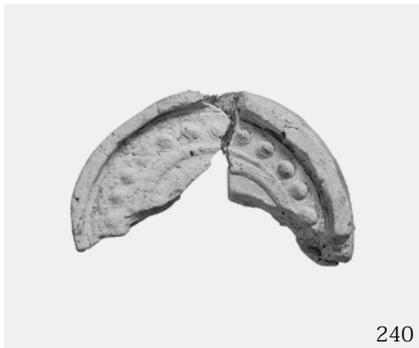
46



2



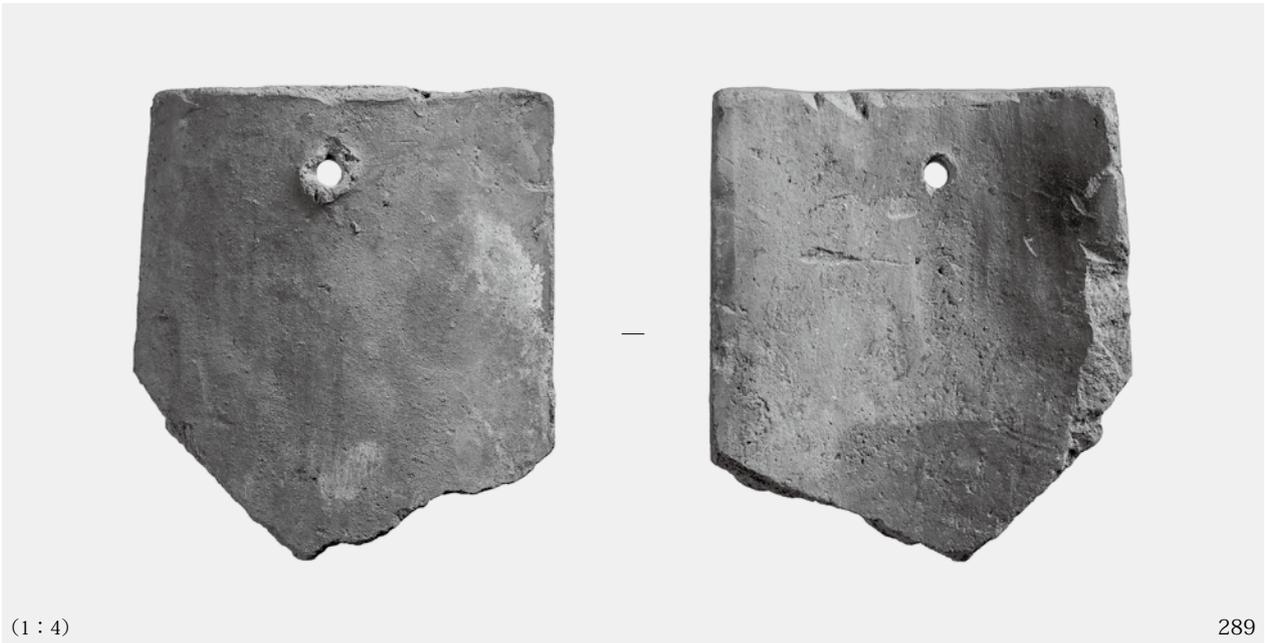
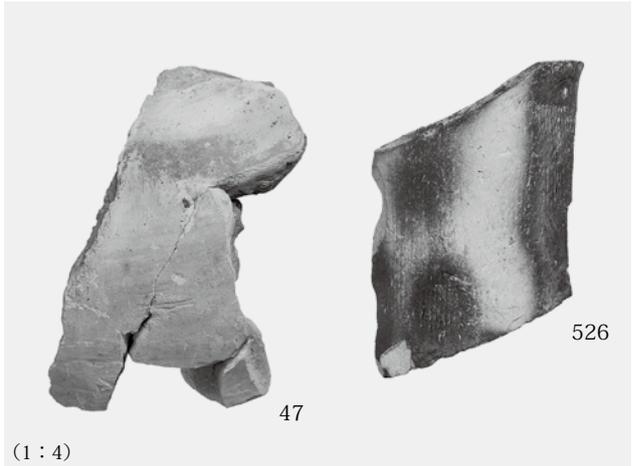
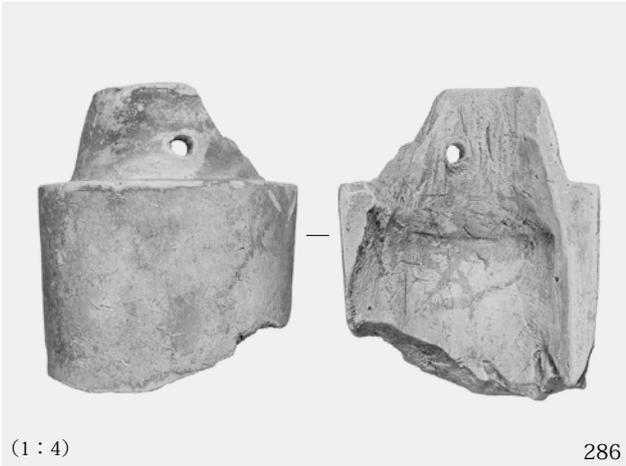
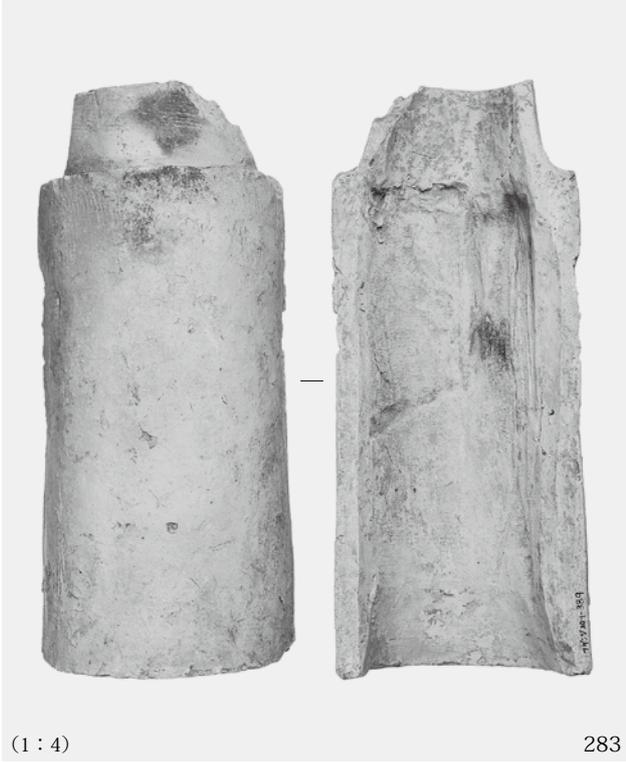
279

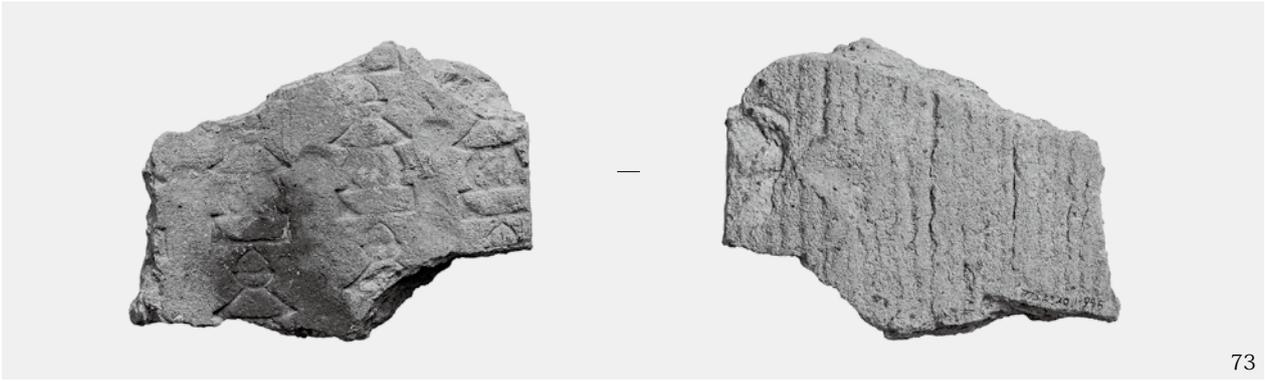


240









73



74



616

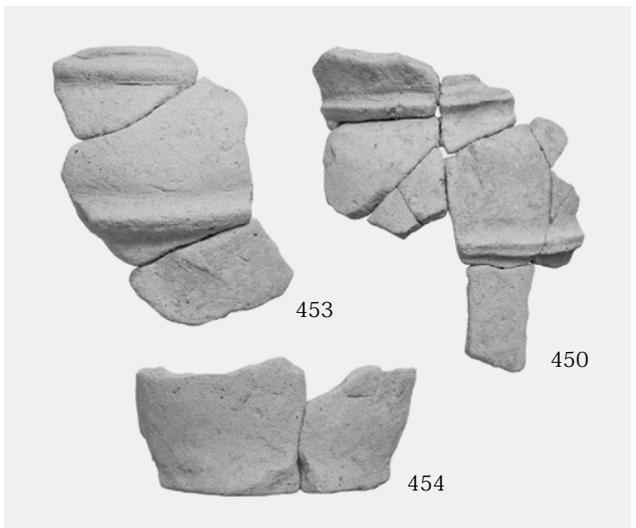
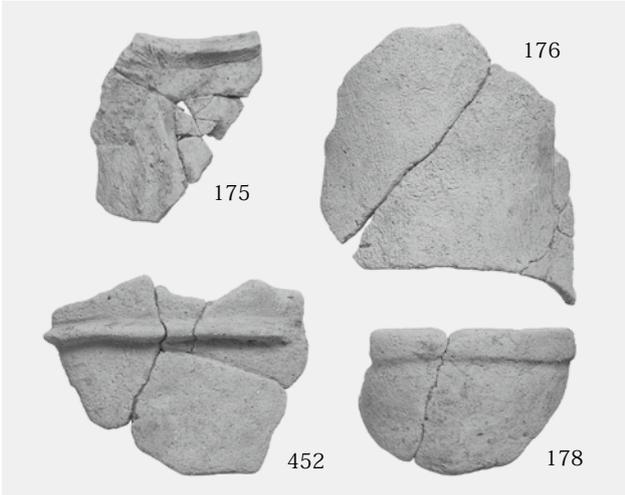
646



239



239

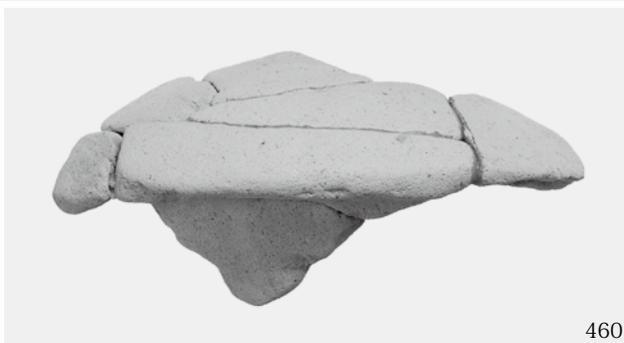




458



455

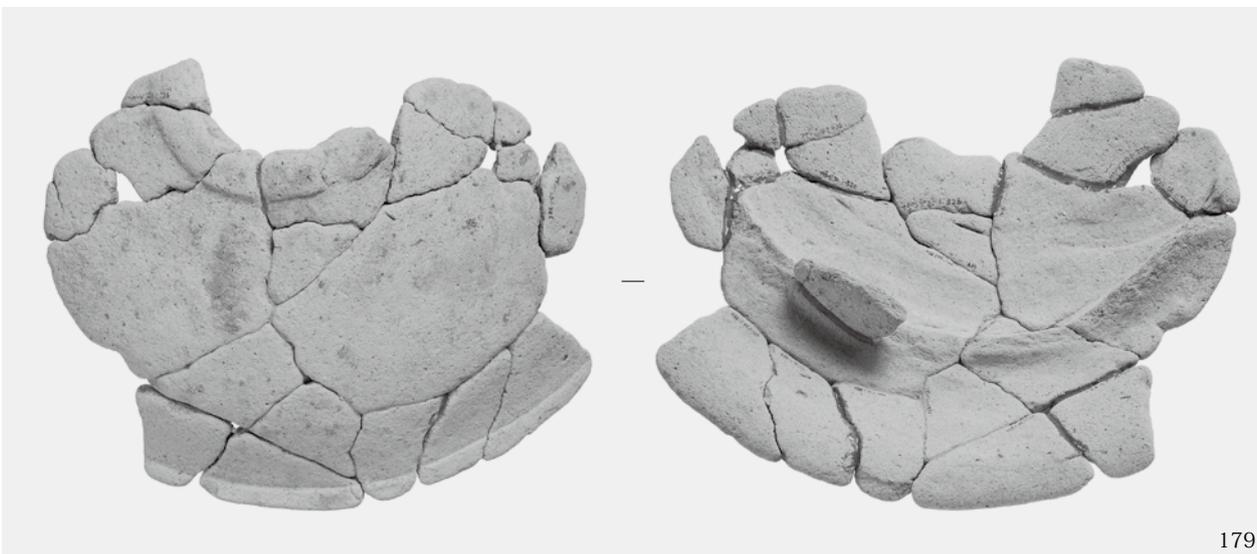


460



456

457



179



191 背



463



191 脚



464



187



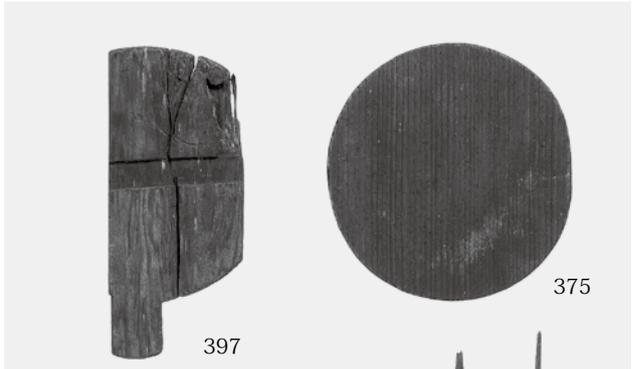
188



471



116

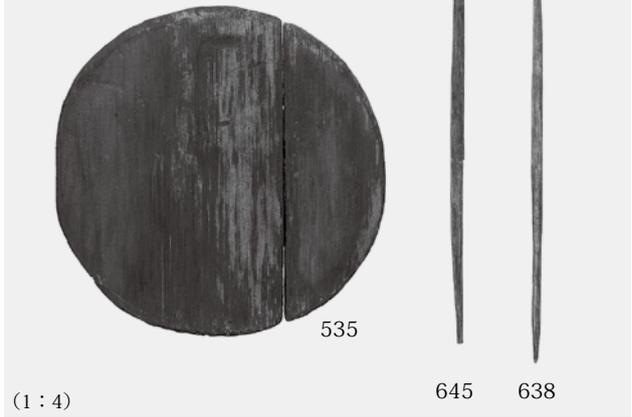


397

375



254

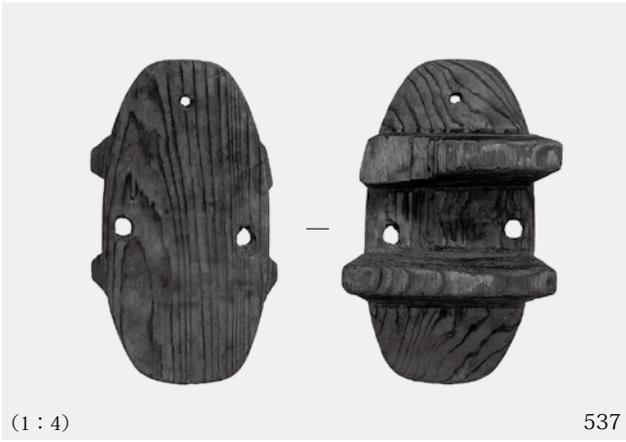


535

645

638

(1:4)



(1:4)

537



(1:4)

538



682



119

253



89

90

91

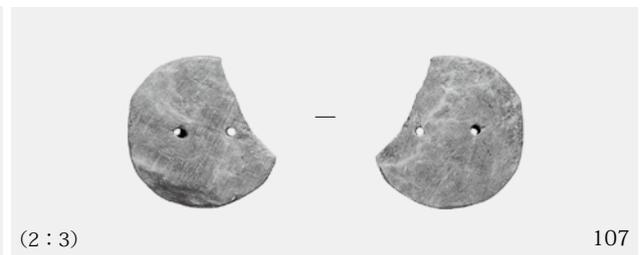
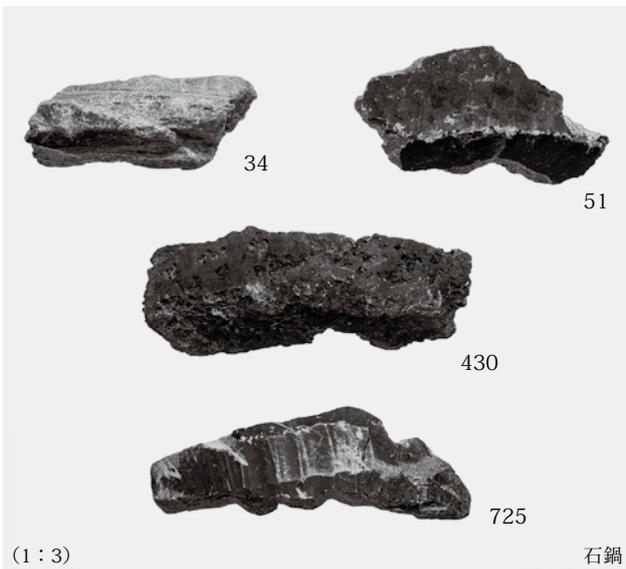
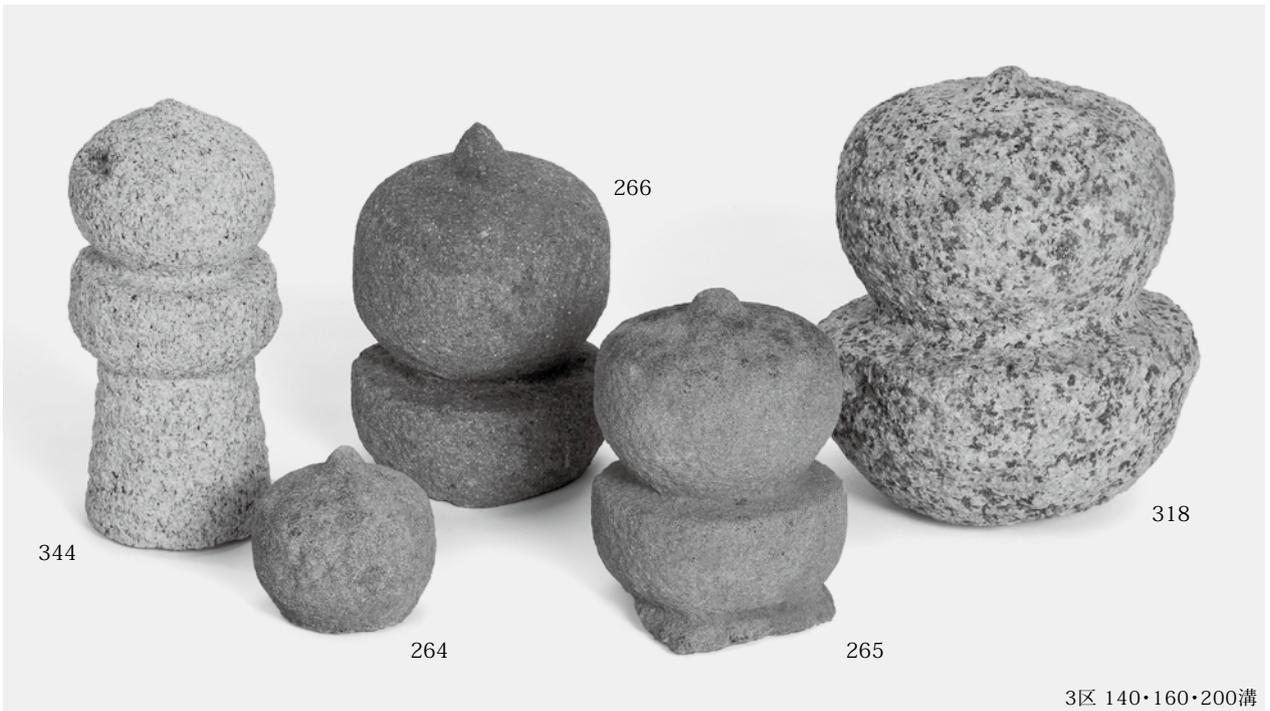
528

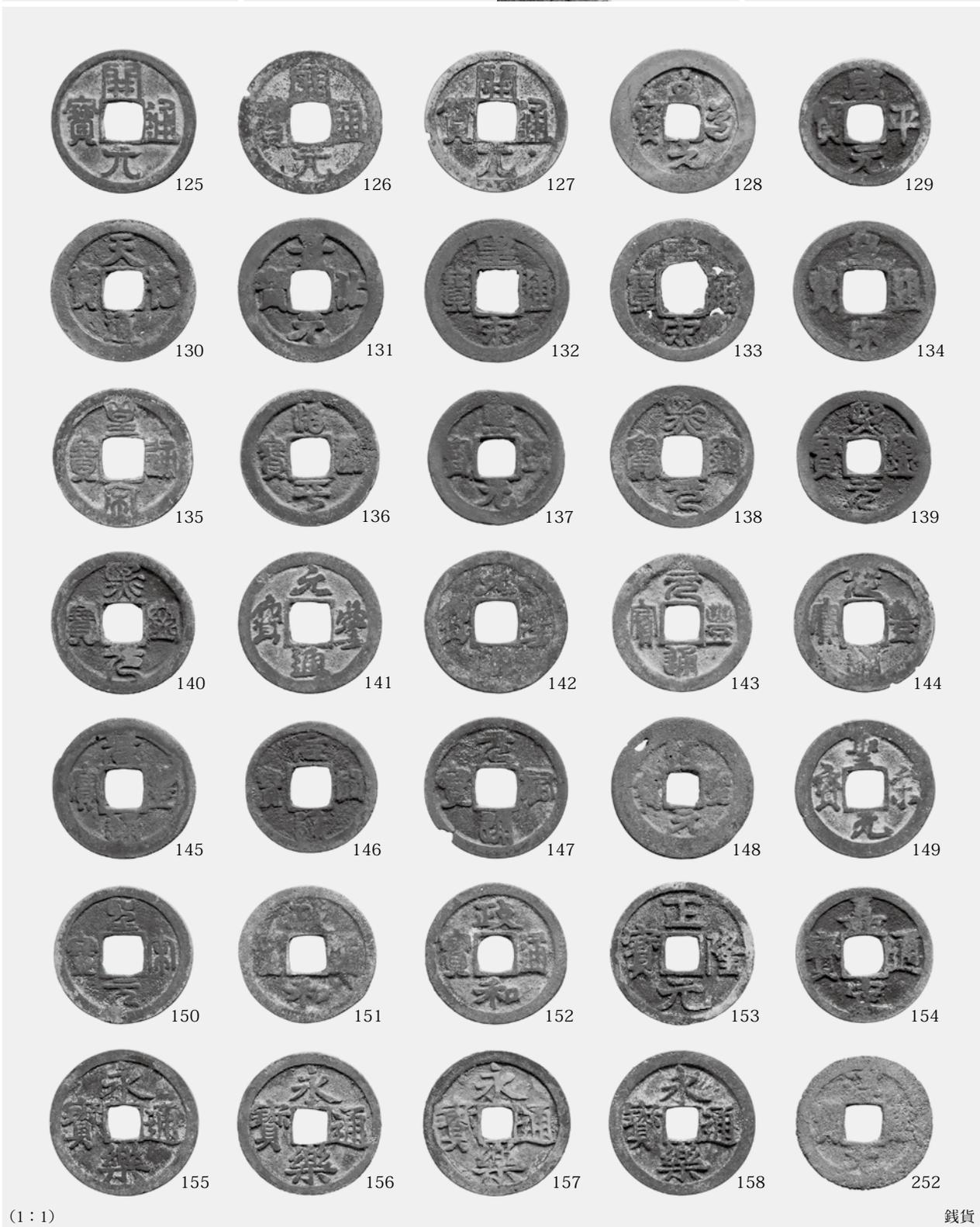
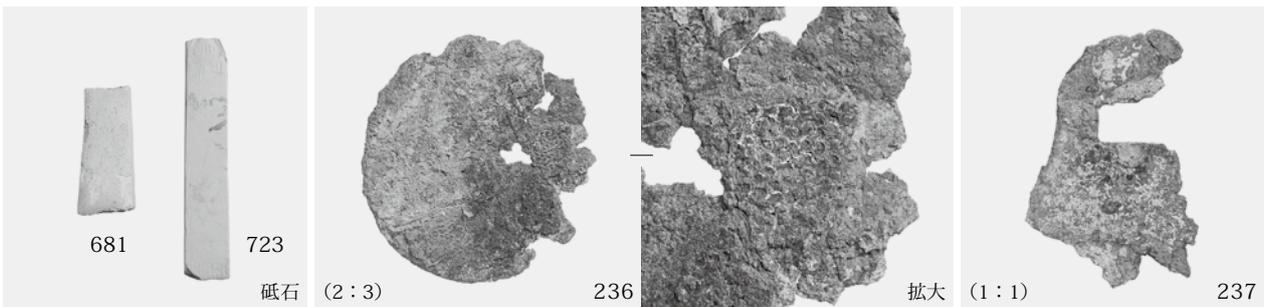
87

88

527

683





報告書抄録

ふりがな	ふげんじいせき						
書名	普賢寺遺跡						
副書名	門真市幸福東土地区画整理事業に伴う普賢寺遺跡発掘調査報告書						
シリーズ名	門真市埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	第11集						
シリーズ名	公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第320集						
編著者名	伊藤 武						
編集機関	公益財団法人大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL 072-299-8791						
発行機関	門真市						
所在地	〒571-8585 大阪府門真市中町1番1号 TEL 06-6902-1231 (代表)						
発行機関	公益財団法人大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL 072-299-8791						
発行年月日	2022年8月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡 番号				
ふげんじいせき 普賢寺遺跡	おおさかふかどまし 大阪府門真市 こうふくちょう11ばんち 幸福町11番地 ほか ちない 他 地内	27223	9	34° 74' 15" 135° 59' 16"	2020.06.01 ～ 2021.03.31	6,106	土地区画 整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
普賢寺遺跡	古墳 田畑 社寺	古墳時代 奈良時代 中世	古墳 掘立柱建物、堀、 方形区画、溝、 井戸、土坑、 ピット、落込み	土師器、須恵器、瓦器、瓦質土 器、国産陶器、輸入磁器、瓦、 埴輪、銭貨 石製品（硯・五輪塔ほか） 木製品（漆器・下駄・毬ほか） 金属製品（銅製密教法具ほか）		古墳の一部を検出。周溝 から多くの埴輪が出土。 大型掘立柱建物を検出。 近接する溝から銅製密教 法具が出土。	
要約	<p>市域唯一の古墳とされていた普賢寺古墳に近接して、5世紀後半の古墳を新たに1基検出した。南西部に造出部が付く円墳で、くびれ部から須恵器や多くの埴輪がまとまって出土した。埴輪には円筒埴輪・朝顔形埴輪のほか、蓋・家・盾・人物・鳥・馬などの形象埴輪が含まれている。</p> <p>12世紀中頃から15世紀の集落を検出した。古墳の周溝も利用した排水・干拓用の水路がめぐり、二面廂の大型掘立柱建物や溝で囲まれた方形区画が築かれている。出土遺物には瓦、五輪塔・宝篋印塔などの石製品、香炉や四耳壺などの輸入磁器のほか、銅製の密教法具蓋など、寺院に関わる遺物が多く出土している。</p>						

門真市埋蔵文化財発掘調査報告書 第 11 集
公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第 320 集

普賢寺遺跡

門真市幸福東土地区画整理事業に伴う 普賢寺遺跡発掘調査報告書

発行年月日 2022 年 8 月 31 日

編 集 公益財団法人 大阪府文化財センター

発 行 門 真 市

大阪府門真市中町 1 番 1 号

公益財団法人 大阪府文化財センター

大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号

印刷・製本 株式会社 明 新 社

奈良市南京終町 3 丁目 464 番地